

大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-3

蔀屋北遺跡 I

—なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査—

総括・分析編

大阪府教育委員会

蔀屋北遺跡 I

—なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査—

総括・分析編

大阪府教育委員会

総括・分析編 目次

総括編

第1章 薩屋北遺跡古墳時代出土土器と遺構の検討	藤田	1
第2章 古墳時代中・後期の遺物について		
第1節 墳輪	岩瀬	103
第2節 石製品・玉類	山上	103
第3節 鉄製品	岩瀬	107
第4節 鋳冶関連遺物	岩瀬	112
第5節 骨角製品	宮崎	113
第6節 木製品	岡田	124
第3章 「讃良の牧」の形成と展開	岩瀬	145
第4章 薩屋北遺跡出土のU字形板状土製品について	藤田	153

分析編

第1章 薩屋北遺跡周辺の古環境解析	辻本裕也・辻 康男	189
第2章 薩屋北遺跡にみられる弥生時代以降の遺跡形成	別所秀高	207
第3章 薩屋北遺跡出土ガラス等玉類の蛍光X線分析	パレオ・ラボ	214
第4章 薩屋北、鬼虎川遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析	三辻利一	233
第5章 薩屋北遺跡出土の動物遺体	安部みき子	249
第6章 薩屋北遺跡出土の魚類遺存体	丸山真史	325
第7章 薩屋北遺跡出土漆塗り木製品の漆塗膜自然科学分析・パリノ・サーゲイ		335

総括編図面目次

(総括編)

第 695 図 韓式系土器 壺・壺の分類	5
第 696 図 韓式系土器 平底鉢の分類	6
第 697 図 韓式系土器 潢の分類	8
第 698 図 韓式系土器 鍋の分類	10
第 699 図 韓式系土器 羽釜の分類	10
第 700 図 韓式系土器 移動式カマドの分類	12
第 701 図 U字形板状土製品の分類	14
第 702 図 土師器 高坏の分類	16
第 703 図 土師器 高坏の型式の代表例	18
第 704 図 小型製塙土器の代表例	18
第 705 図 土師器 鉢の型式の代表例	19
第 706 図 須恵器系土器の代表例	19
第 707 図 土師器 壺の分類	21
第 708 図 須恵器 時期別・器種別の出土量	30
第 709 図 陶質土器・韓式系土器平底鉢 変遷図(1/8)	39
第 710 図 潢・長胴壺 変遷図(1/10)	40
第 711 図 鍋・羽釜(1/10)・移動式カマド・U字形板状土製品 変遷図	41
第 712 図 土師器 高坏 変遷図(1/8)	42・43
第 713 図 土師器 鉢 変遷図(1/8)	44
第 714 図 須恵器系土器(1/8)・製塙土器 変遷図	45
第 715 図 居住域全体図(1/800)	47・48
第 716 図 蔵屋北1期の遺構全体図(1/800)	63・64
第 717 図 蔵屋北2・3期の遺構全体図(1/800)	65・66
第 718 図 蔵屋北4期の遺構全体図(1/800)	67・68
第 719 図 蔵屋北5期の遺構全体図(1/800)	69・70
第 720 図 北東居住域 蔵屋北5期の遺構変遷図(1/800)	72
第 721 図 木装太刀の部品組合せ模式図	114
第 722 図 鹿角各部の名称(左側の内側面)	114
第 723 図 X線写真 鹿角製品	121
第 724 図 讀良の牧関連遺跡における馬骨出土地点	150
第 725 図 讀良の牧関連遺跡における馬骨出土地点	151
第 726 図 U字形板状土製品破片出土分布図	155
第 727 図 U字形板状土製品突帯形状Iタイプ破片出土分布図	155
第 728 図 U字形板状土製品突帯形状IIタイプ破片出土分布図	156
第 729 図 U字形板状土製品突帯形状IIIタイプ破片出土分布図	156

第 730 図	U字形板状土製品突帯形状IVタイプ破片出土分布図	157
第 731 図	U字形板状土製品突帯形状Vタイプ破片出土分布図	157
第 732 図	U字形板状土製品各部名称	158
第 733 図	U字形板状土製品各型式の代表例	164
第 734 図	U字形板状土製品天井部幅と全体幅の関係	165
第 735 図	C調査区出土U字形板状土製品破片出土分布図	168
第 736 図	U字形板状土製品個体1C破片出土分布図	168
第 737 図	U字形板状土製品個体2C破片出土分布図	168
第 738 図	U字形板状土製品個体7C破片出土分布図	169
第 739 図	U字形板状土製品個体8C破片出土分布図	169
第 740 図	U字形板状土製品個体10C破片出土分布図	169
第 741 図	U字形板状土製品個体11C破片出土分布図	170
第 742 図	U字形板状土製品個体13C破片出土分布図	170
第 743 図	U字形板状土製品個体14C破片出土分布図	170
第 744 図	U字形板状土製品個体15C破片出土分布図	171
第 745 図	U字形板状土製品個体20C破片出土分布図	171
第 746 図	U字形板状土製品個体21C破片出土分布図	171

総 括 編 表 目 次

第 2 表	陶質土器一覧表	3
第 3 表	瓦質土器・黑色研磨土器一覧表	3
第 4 表	韓式系土器壺・甕 口縁部の形状と外面に残るタタキの種類の関係	5
第 5 表	韓式系土器平底鉢 全体の形状・口縁部の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	6
第 6 表	韓式系土器櫃 口縁部・底部・蒸気孔の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	8
第 7 表	韓式系土器鍋 口縁部・底部・把手の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	10
第 8 表	韓式系土器羽釜 口縁部・鍔の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	10
第 9 表	移動式カマド 掛け口・庇・焚口左右の突帯の形状と外面調整の関係	12
第10表	U字形板状土製品 突帯の形状とコーナーの曲がり方の関係	14
第11表	土師器高环の種類と接合技法の関係	16
第12表	土師器中小甕 大きさ指數別の出土個体数	23
第13表	小型製塙土器 主要遺構からのタイプ別出土量・個数集計表	25・26
第14表	陶質土器・韓式系土器・土師器・須恵器系土器・製塙土器消長表	27・28

第15表	現地調査時の大溝の遺構No・層序と茆屋北編年との関係	49
第16表	区画溝と各居住域との対応関係	49
第17表	竪穴住居一覧表	53・54
第18表	竪穴住居 時期別・居住域別棟数集計表	54
第19表	竪穴住居 建物規模別棟数集計表	54
第20表	掘立柱建物一覧表	56・57
第21表	掘立柱建物 時期別・居住域別棟数集計表	57
第22表	掘立柱建物 時期別・居住域別床面積集計表	57
第23表	掘立柱建物 建物プラン・規模別棟数集計表	58
第24表	井戸一覧表	60
第25表	茆屋北3期の各居住域の属性	74
第26表	茆屋北5期の各居住域の属性	74
第27表	茆屋北遺跡総括表	77
第28表	韓式系土器 壺・甌一覧表	78・79
第29表	韓式系土器 平底鉢一覧表	80~82
第30表	韓式系土器・土師器 瓢一覧表	83~86
第31表	韓式系土器・土師器 鍋一覧表	87
第32表	韓式系土器・土師器 羽釜・甌表	88
第33表	韓式系土器・土師器 移動式カマド	89~91
第34表	土師器 高環一覧表	92~94
第35表	土師器 鉢一覧表	95~97
第36表	土師器 大型甌・長胴甌一覧表	98・99
第37表	須恵器系土器一覧表	100~102
第38表	出土鉄製品時期別一覧	111
第39表	U字形板状土製品法量一覧表	165
第40表	U字形板状土製品観察表	174~186

分析編図面等目次

第1章

図1	遺跡位置図	189
図2	茆屋北遺跡の層序と地形	190
図3	茆屋北遺跡の耕作土の土壤微細構造	193
図4	茆屋北遺跡古環境変遷図	195
図5	茆屋北遺跡および周辺遺跡における大型植物化石（木本・草本）の時代別産状	197・198
図6	茆屋北遺跡周辺の主要花粉変遷	202
表1	大溝H-11埋土から産出した大型植物化石	201

第2章

図1 蔵屋北遺跡の位置と周辺の地形分類	207
図2 蔵屋北遺跡の堆積柱状図	209
図3 弥生時代以降の流路跡、ロウブおよびシート状堆積地形の模式分布図	210
図4 LOC.5付近の地層断面	211
図5 LOC.11にみられた弥生時代後期～古墳時代前期の開析流路断面	211
図6 LOC.3付近にみられた飛鳥時代～鎌倉時代の地層断面	212
図7 扇状地先端にみられる地形発達と耕作地および居住域の開発の関係を示す模式図	213

第3章

図1 玉類の蛍光X線分析結果（1）	221
図2 玉類の蛍光X線分析結果（2）	222
図3 玉類の蛍光X線分析結果（3）	223
図4 玉類の蛍光X線分析結果（4）	224
図5 玉類の蛍光X線分析結果（5）	225
図6 玉類の蛍光X線分析結果（6）	226
表1 分析対象資料	219
表2 半定量分析結果	220
図版1 分析対象資料写真（1）（透過光下）	227
図版2 分析対象資料写真（2）（C27,D5-2,F1は落射光下、他は透過光下）	229
図版3 分析対象資料写真（3）（H20は落射光下、他は透過光下）	231

第4章

第1図 全試料の両分布図判別図	234
第2図 判別図	235
第3図 陶邑産と推定された須恵器の両分布図	236
第4図 产地不明となった資料の両分布図	237
第5図 土器胎土分析資料（1）	239
第6図 土器胎土分析資料（2）	240
第7図 土器胎土分析資料（3）	241
第8図 土器胎土分析資料（4）	242
表1 蔵屋北遺跡、鬼虎川遺跡 出土土器の分析データ	238
表2 蔵屋北遺跡、鬼虎川遺跡 土器胎土分析資料一覧	243・244
写真1 土器胎土分析資料	245
写真2 土器胎土分析資料	247

第5章

図1 5世紀から6世紀における哺乳類・鳥類・爬虫類の出土骨片数	253
---------------------------------	-----

図 2	5世紀から6世紀における哺乳類・鳥類・爬虫類の最小個体数	254
図 3	5世紀から6世紀における動物遺体出土遺構	255 256
図 4	土坑 A940 出土の埋葬馬 骨格部位の名称	264
図 5	5世紀から6世紀におけるウマの推定年齢	269
表 1	蔚屋北遺跡出土の動物遺体の種名表	250
表 2	哺乳類の出現頻度表	251
表 3	各時期における哺乳類・鳥類・爬虫類の出土骨片数	253
表 4	各時期における哺乳類・鳥類・爬虫類の最小個体数	254
表 5	土坑 A940 出土のウマ (A-2718) の計測値と比較資料の計測値	266
表 6	ウマの推定体高	267
表 7	ウマの推定年齢	268
表 8	時期ごとのウマの推定年齢	269
表 9	頭骨の計測値 (ウマ・ウシ・イノシシ)	272 273
表 10	上肢の計測値 (ウマ・ウシ・シカ)	274
表 11	指骨の計測値 (ウマ・シカ・ウシ)	274
表 12	下肢の計測値 (ウマ)	275
表 13	イヌの下顎骨の計測値	276
表 14	イヌの頸椎・胸椎の計測値	277
表 15	イヌの腰椎・肩甲骨の計測値	278
表 16	イヌの上腕骨・桡骨・中手骨の計測値	279
表 17	イヌの寛骨・歯牙の計測値	280
表 18	イヌの大腿骨・中足骨・基節骨・末節骨、イヌ科の中節骨の計測値	281
表 19	蔚屋北遺跡 A 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	282 ~ 285
表 20	蔚屋北遺跡 B 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	286 ~ 287
表 21	蔚屋北遺跡 C 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	288 ~ 290
表 22	蔚屋北遺跡 D 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	291 ~ 293
表 23	蔚屋北遺跡 E 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	294 ~ 301
表 24	蔚屋北遺跡 F 調査区出土動物遺存体同定結果一覧	302 ~ 303
表 25	蔚屋北遺跡 H 地区出土動物遺存体同定結果一覧	304 ~ 322
写真 1	イヌのX線写真	323

第6章

図 1	H地区大溝H11出土の魚類遺存体	329
表 1	魚類遺存体種名表	325
表 2	C調査区出土魚類遺存体	329
表 3	D調査区大溝D900出土魚類遺存体	329
表 4	E調査区出土の魚類遺存体	329
表 5	H地区大溝H11出土の魚類遺存体	330

第7章

図1 漆塗膜のFT-IRスペクトル	338
図2 漆塗膜の蛍光X線分析結果	339
図3 漆塗膜のX線回折図	340
図版1 漆断面(1)	343
図版2 漆断面(2)	345

第1章 蔵屋北遺跡古墳時代の出土土器と遺構の検討

藤田 道子

蔵屋北遺跡では古墳時代中期後半から後期にかけて連続して集落遺構が検出された。同時にこれらの遺構に伴い須恵器、土師器、そして韓式系土器などの朝鮮半島からの影響を強く受けた多量の土器が出土しており、図化できた資料は5000点を超えており、一遺跡においておよそ一世紀半にわたる集落遺構と、そこで使用された土器群の変遷を観察できることは、特筆すべきことであろう。

本章では第一に、当遺跡から出土した古墳時代中・後期の土器の様相を分析し、土器群の組成の特徴を考察し編年をおこなう。第二に、編年に基づいて集落遺構を検討し、その変遷を考察する。そしてこの二つの作業を通して当遺跡に居住した人々の実態とその変化を叙述することを目的とする。

第1節 古墳時代出土土器・土製品の検討と編年

1. 土器の種類と定義

分析の対象となる土器の種類とその定義について述べる。対象となる土器の種類は、須恵器、土師器、韓式系土器（土製品も含む）、須恵器系土器、製塙土器である。

本章で検討する時代は、古墳時代中期以降の朝鮮半島からの渡来人によるさまざまな変革がもたらされた時期である。土器に関連する大きな変化は、硬質焼成の焼物が登場し、須恵器生産が始まったこと、カマドの構築により調理器具である炊飯具に変化がおこったことがあげられる。当遺跡の土器群でも古墳時代前期からつづく土師器に、あらたに須恵器、韓式系土器、さらに須恵器系土器が加わり、互いに影響しあって独自の様相をみせている。土器群を構成する土器の種類はこの4種が中心となる。このうち土師器は古墳時代前期からの系譜をひく焼物で、他は新たな技法により製作された焼物である。

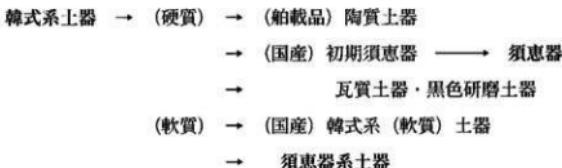
はじめに韓式系土器の定義について述べる。韓式系土器は朝鮮半島から舶載された土器、もしくは日本において朝鮮半島から渡來した技術で製作された土器を呼称する。韓式系土器には硬質（還元炎焼成）と軟質（酸化炎焼成）のものに大別できるが、硬質のものうち朝鮮半島からの舶載品は陶質土器と呼び、日本において製作された韓式系土器（硬質）には初期須恵器、及び瓦質土器、黑色研磨土器が含まれる。瓦質土器は器面に炭素を吸着させたもの、黑色研磨土器は器面を磨いて炭素を吸着させたもので、表面に光沢を持つ焼物である。初期須恵器は本報告では須恵器として陶邑編年I型式2段階以前のものとする。軟質の韓式系土器についても舶載品と日本国内で製作されたものがあるはずだが、識別は困難である。狭義の軟質韓式系土器は、外表面にタタキ痕を残しているものを呼称する。

次に須恵器系土器の定義について述べる。本章での須恵器系土器は須恵器の製作技法の影響を

うけたが、酸化炎焼成で仕上げられている土器を呼称する。初期須恵器が韓式系土器（硬質）であるから、須恵器系土器も韓式系土器の影響を受けて成立した土器の一種となる。器形は、須恵器を模倣したような形態のものから、須恵器系土器独自の形態を持つものまで存在する。いわゆる生焼け須恵器ではない。当遺跡においては古墳時代中期後半から後期にかけて継続して出土が認められることから、土器の種類とし須恵器系土器と呼称することにした。

各土器の定義を概念図にすると次のとおりになる。

土師器



次に土器群の編年をおこなう前に、韓式系土器（土製品）、土師器、須恵器系土器、製塙土器の順に、それぞれの土器の種別ごとの、器種分類を記述する。須恵器の器種分類、編年は、本文編に引き続き中村浩氏の設定した陶邑編年^(註1)に従って記述する。土師器の器種のうち、瓶、鍋、羽釜、移動式カマドは韓式系土器の影響をうけて出現したので、韓式系土器の項において同時に検討した。

2. 韩式系土器の器種分類

(1) 韩式系(硬質)土器

還元焰焼成で焼かれた硬質の韓式系土器のなかで、朝鮮半島からの舶載品は陶質土器、日本国内で製作されたものには初期須恵器、瓦質土器、黒色研磨土器が含まれるが、陶質土器と日本国内で製作された硬質の韓式系土器・初期須恵器の判別は非常に困難な部分がある。陶質土器の可能性の極めて高い資料をとりあげ一覧表にしたもののが第2表である^(註2)。資料数は14点で、器種は鉢、壺身、蓋、瓶、甕、壺の6種類が出土している。器種名の次欄に朝鮮半島での系譜をたどれる地域、国名を記載した。

当遺跡の陶質土器は百濟系と伽耶系に分かれる。新羅系の陶質土器は出土していない。百濟系でも荣山江流域に系譜がたどれるものが多く、器種は鉢、蓋、瓶、甕と4種類ある。資料No.1はカラー図版では鉢の置き方をとっているが、その後の検討の結果蓋とした。

資料No.6、7は荣山江流域に系譜がたどれる瓶で、平底の底部で胴が張り、細くしまった口頭部を持つ。国内での出土例は極めて少なく、本報告例を加えても5~6世紀の出土例はわずかに数点となる。2点とも口縁部を欠いており全体の形状は不明である。資料No.7のほうがやや底径が小さいものの共に最大腹径が体部の中ほどにあり、肩の張らないプロポーションを持つ。体部外面調整はNo.6が格子タタキをナデ消し、No.7がカキ目調整と異なっている。百濟地域の瓶形

第2表 陶質土器一覧表

資料No	器種	朝鮮半島で系譜を 求められる地域	図面 No	遺物 No	出土区域	出土遺構	遺構No	層位	口径	器高	備考	
1	蓋	百濟系 (榮山江流域)	170	5	北東 居住域	堅穴住居	C3996,3818 と3840の切り合い部	推	12 残	2.95		
2	鉢	百濟系	537	30	大溝		E090001	谷3	推	13.4 残	4.5	
3	壺身	小伽耶系 (固城地域)	526	41	大溝		E090001	中層	推	10.4 残	2	
4	壺身	小伽耶系 (固城地域)	526	44	大溝		E090001	中下層	推	10.8	4.8	
5	蓋	百濟系	537	18	大溝		E090001	谷3地山直上	推	13	3.2	
6	瓶	百濟系 (榮山江流域)	249	15	南東 居住域	井戸	A590		残	12.8	底径11.8、最 大腹径16.2	
7	瓶	百濟系 (榮山江流域)	216	25	北東 居住域	包含層		10面掘り 下げ	残	14.2	底径10.5、最 大腹径16.3	
8	瓶	百濟系 (榮山江流域)	577	25	大溝		H11	3層	8.9 残	8.15	鳥足文タタキ	
9	壺	百濟系 (榮山江流域)	329	26	南西 居住域	土坑	A1135				鳥足文タタキ	
10	壺	百濟系	466	10	西居住域	土坑	F1120		16.7 残	23.6	鳥足文タタキ	
11	壺	百濟系 (鎮川地域)	540	1	大溝		E090001	上～下層	18.9 残	38.25	平行タタキに 沈線	
12	壺	百濟系	540	2	大溝		E090001	上～下層、谷7層	推	18.5 残	33.5	斜格子タタキ に沈線
13	壺	小伽耶系 (固城地域、松鶴洞 古墳群に類似例有)	562	21	大溝		D900	2～5層	19.3	21.5		
14	壺	伽耶系 (馬山周辺)	533	26	大溝		E090001, 包含層	谷3、谷7 下	推	18.3 残	26.3	格子、波状文 等あり

第3表 瓦質土器・黑色研磨土器一覧表

資料 No		器種	図面No	遺物No	出土区域	遺構	遺構No	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	
1	黒色研磨土器	直口壺	534	34	大溝		E090001	中層～下 層直上		10.5	12.4
2	黒色研磨土器	高坏	534	33	大溝		E090001	中層		残	6.8
3	瓦質土器	壺	541	19	大溝		E090001		推	24.0	10.5
4	黒色研磨土器	高坏	558	3	大溝			大溝F	中層	推	14.0 残
5	黒色研磨土器	高坏	558	4	大溝			大溝F	中層 b		6.7
6	黒色研磨土器	高坏	558	6	大溝			大溝F	中層、中 層 b		6.1
7	黒色研磨土器	高坏	558	2	大溝			大溝F	上層混じ りの中層	推	14.8 残
8	黒色研磨土器	高坏?	558	1	大溝			大溝F	中層 b	推	15.0 残
9	黒色研磨土器	高坏	181	3	北東 居住域	溝	C2331				5.7
10	瓦質土器	短頸壺	190	21	北東 居住域	土坑	C4159		推	15.3	13.1
11	黒色研磨土器	高坏	549	2	大溝	流路		古墳墓道の類		推	11.3
12	黒色研磨土器	高坏	549	1	大溝	流路		古墳墓道の類		推	12.9
											6.3

土器は時期が下がるほど肩が張る傾向があり、寺井誠氏による胴部の形態を基準とした分類案がある^(註3)。それによるとNo 6は、なで肩の形態で最大径が体部の中ほどにあり、底部径が最大径の7割程度の大きさにあたるA類に該当し、5世紀後半以前の最も古い特徴を示す一群に位置づけられる。No 7は、外面がカキ目調整であり、底径がNo 6よりも小さいことをから、No 6よりやや時期があたらしいもののやはりA類に該当し、5世紀後半のものと思われる。

資料No 8～10は百濟系土器に特有の鳥足文タタキの残る土器で、特にNo 8と9は榮山江流域の系譜をたどれるものである。No 8と9に比べやや器壁が厚いNo 10の壺は、全体に平行タタキで成形した後、肩部に鳥足文タタキを2周巡らし、1周のみ残し他はすり消している。No 8, 9と異なり、No 10に施された鳥足文タタキは装飾的である。

小伽耶系の土器では坏身、壺がある。資料No 3、4の坏身は受部が折り曲げにより作り出されており、No 4の坏身外面底部は手持ちヘラ削りで仕上げられている。資料No 13の壺は固城地域、松鶴洞1号墳に類似の出土品がある。

瓦質土器、黒色研磨土器の一覧表は第3表で資料数は12点となる。瓦質土器は2点、黒色研磨土器は10点である。黒色研磨土器の器種は高坏が10点中8点の多数をしめ、その他に直口壺がある。

(2) 韓式系(軟質)土器(土製品)

次に軟質の韓式系土器について器種別に分類・検討する。検討する器種は壺・壺、平底鉢、甑、鍋、羽釜、さらに移動式カマド、U字形板状土製品を取り上げる。

①壺・壺

用途により分類すると、煮沸に使用する容器は壺、貯蔵に使用する容器が壺と分類できるが、使用痕跡(例えは煤の付着等)を見極め用途のみで両者を区分するのは困難である。本遺跡では口縁部のみの部分的な出土資料が多く、いっぽう壺と壺は判別が付きにくい。そこでここでは壺・壺と一括してとりあげて分類した。分類の要素は2項目で、口縁部の形状で6タイプ、体部外面に残るタタキの種類で4タイプに分類した。

・口縁部の形状の分類(第695図)

- a - 口縁部は頸部から外反し、口縁端部下に稜線が巡り、端部は丸く終わる
- b - 口縁部は頸部からくの字形に外方に屈曲し、端部は丸く終わる
- c - 口縁部は頸部からくの字形に外方に屈曲し、端部は面を成す
- d - 口縁部は頸部から上方に直立して外反し、端部は面をなす
- e - 口縁部は頸部から上方に直立して外反し、端部は幅広い面をなす
- f - 口縁部は頸部から上方に直立し、端部は面を成す

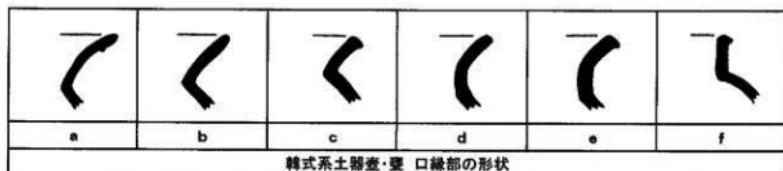
・外面に残るタタキの種類の分類

1 - 縄縫文タタキ 2 - 斜格子文タタキ 3 - 格子タタキ 4 - 平行タタキ

第4表 韓式系土器壺・甕 口縁部の形状と外面に残るタタキの種類の関係

		口縁部の形状					
		a	b	c	d	e	f
外面に 残るタ タキの 種類	1 縄蓆文タタキ	1		1		1	
	2 斜格子タタキ			1	2		
	3 格子タタキ		2 (2)	1	8 (1)	2	
	4 平行タタキ	1 (1)	1 (1)	4 (2)	2	11 (3)	1 (1)

※ () 内の数字はタタキのうえからナデやオサエをおこなっている個体数を表す



第695図 韓式系土器 壺・甕の分類

本報告に実測図を掲載した韓式系土器壺・甕を、口縁部の形状 a ~ f の順を優先し、次にタタキの種類 1 ~ 4 の順に並べ、内外面の調整、生駒西麓産の胎土を有するか等を調べて一覧にしたのが第 28 表 (78・79 頁) である。全体の形状が判明又は推定できて、煤などの煮沸の使用痕が認められる資料は器種を特定し、表に記載した。

口縁形状 a タイプは初期須恵器の甕口縁部に類似の形態があり、韓式系土器使用開始時からの形態と考えられる。2 点のみの出土である。口縁形状 b タイプの出土例は 3 点あるが、資料 No. 3 ~ 5 にみられるように口縁端部が丸い土師器の甕の口縁部を呈し、器形も土師器とほとんど変わらないので、器種欄には土師器の器形にタタキと記している。口縁形状 c ~ f タイプは全て口縁端部に面を持つタイプで、c タイプは 7 点、d タイプは 12 点、e タイプは 14 点、f タイプは 1 点で e タイプが最も多い。

タタキの種類は平行タタキの個体が最も多く 20 点、次に格子タタキが 13 点、縄蓆文タタキが 4 点、斜格子タタキが 3 点の順になる。平行タタキや格子タタキを残す個体には、タタキのあとヨコナデ、ナデをおこなっている個体がある。韓式系土器の外面タタキは最終調整時に装飾的に丁寧に施されている^(註4)とすれば、これらの個体のタタキは成形の為のタタキであり、最終調整タタキが省略されることになる。したがって、外面に丁寧に装飾的にタタキを施した個体よりも、タタキの後にヨコナデやナデを施した個体のほうが後出するものと考えられる。

口縁部の形状とタタキの種類の関係を分析する。第 4 表は、横軸に口縁部の形状、縦軸にタタキの種類を配し、出土数を記入したものである。括弧内の数字はタタキの上からナデやオサエをおこなっている資料の数である。

表をみると、dタイプは格子タタキの個体が多く、eタイプは平行タタキの個体が多いことがわかる。また格子タタキ、平行タタキの個体はタタキのうえからナデやオサエをおこなっている個体があることがわかった。

生駒西麓産の胎土を有する個体は9点あるが、すべて平行タタキの個体であった。

②平底鉢

平底鉢は韓式系土器を代表する器形で口径、器高共に14cm程度、平底の底部が器形の特徴となる。分類の要素は3項目で、全体の形状で4タイプ、口縁部の形状で3タイプ、外面調整で6タイプに分類した。

・全体の形状の分類

A—底部と体部の境にヘラケズリによる稜があり、口径が体部径より大きいもの

B—底部と体部の境にヘラケズリによる稜があり、口径より体部径が大きいもの

C—底部と体部の境にヘラケズリによる稜がなく、口径が体部径より大きいもの

D—底部と体部の境にヘラケズリによる稜がなく、口径より体部径が大きいもの

・口縁部の形状の分類（第696図）

a—頸部から屈曲して外反し、端部に面を成す。

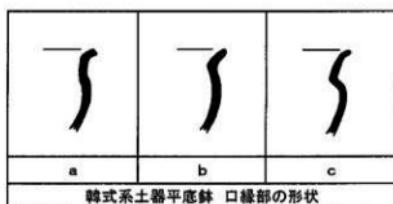
b—頸部から短く上外方に折れる

c—頸部からやや立ち上がり外反する。

第5表 韓式系土器平底鉢 全体の形状・口縁部の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係

	全体の形状	A	A	A	B	B	B	C	C	D
	口縁部の形状	a	b	c	a	b	c	a	b	a
外面に 残るタ タキの 種類・ 外面調 整	3 格子タタキ	2 (1)								
	4 平行タタキ	3 (2)	1 (1)							1 (1)
	5 ヘラナデ、ナデ	1	1	1	1	1		2		
	6 ハケ						1	2		

※ () 内の数字はタタキの上からナデやハケ調整をおこなっている個体数をあらわす



第696図 韓式系土器 平底鉢の分類

・外面に残るタタキの種類・調整の分類

- 1—鳥足文タタキ 2—縄縞文タタキ 3—格子タタキ 4—平行タタキ 5—ヘラナデ、ナデ
6—ハケ

本報告に実測図を掲載した韓式系土器平底鉢を、全体の形状A～Dの順を優先し、次に口縁部の形状a～c、外面調整の種類1～6の順に並べたのが第29表(80～82頁)である。平底鉢は内外面厚く煤が付着しているので、生駒西麓産の胎土を有すかの肉眼観察はおこなっていない。

タタキの種類をみると鳥足文タタキが1点、縄縞文タタキが3点、格子タタキが10点、平行タタキが16点、ナデ、ヘラナデが18点、ハケが3点となる。タタキ痕がなく、ナデ、ヘラナデでしあげられた個体が多いのは、タタキ痕が残りにくい底体部のみの出土資料が多いことを考慮しなければならない。

全体の形状、口縁部の形状が判明している資料をとりあげ、全体の形状、口縁部の形状とタタキの種類・外面調整の関係を調べるために、第5表を作成した。表の横軸は全体と口縁部の形状、縦軸はタタキの種類・外面調整を配し、出土数を記入している。括弧内の数字はタタキの上からナデやハケをおこなっている個体数である。

表をみるとタタキをおこなっている個体は、タタキの上からナデやハケ調整をおこなっているものが半数をこえており、全体の形状がB、C、Dタイプの資料は1点をのぞき、外面をヘラナデ・ナデ、ハケで仕上げていることがわかった。

③瓶

瓶の分類の要素は4項目で、口縁部の形状でA～Dの4タイプ、底部の形状で2タイプ、蒸気孔のタイプで4タイプ、外面調整で6タイプに分類した。

・口縁部の形状の分類(第697図)

- A 口縁端部が外反する
- B 口縁部は直立し、端部は面をなす
- C 口縁部は直立し、端部は内面に肥厚する
- D 口縁部は直立し、端部は丸く終わる

・底部の形状の分類(第697図)

- x 平底で底体部の境に稜がある
- y 平底で底体部の境に稜がない

・蒸気孔の形状の分類(第697図)

- a 底部中央に1個とその周間に直径2.5cm程度の円孔をめぐらす
- b 底部中央に1個とその周間にaよりやや大きめの円孔をめぐらす
- c 底部中央に円孔を1個と周間に4個の円弧状の孔を穿つ
- d 底部中央に円孔を1個、周間に3～4個の円弧状の孔を底体部にかけて穿つ

・外面に残るタタキの種類・外面調整の分類

1-繩席文タタキ 2-斜格子文タタキ 3-格子タタキ 4-平行タタキ 5-ナデ・工具ナデ 6-ハケ

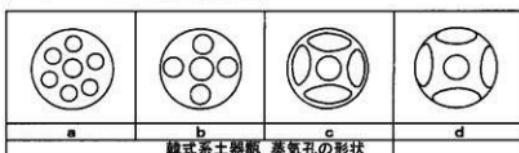
本報告書に実測図を掲載した瓶を4項目の基準にあてはめて分類し、生駒西麓産の胎土を有するか、内外面調整、法量などあわせて一覧表にしたのが第30表(83~86頁)である。表は口縁部の形状を最優先し、次に底部の形状、蒸気孔の形状、外面調整の種類の順にならべている。

口縁部の形状、底部の形状、蒸気孔の形状と外面に残るタタキの種類・外面の調整との関係を調べる為に、第6表を作成した。表の横軸に口縁部、底部、蒸気孔の形状、縦軸に外面に残るタタキの種類を並べ、各項目ごとに個体数を記入している。

第6表 韓式系土器瓶 口縁部・底部・蒸気孔の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係

	口縁部の形状	A	A	A	B	C	C	C	C	C	C	D	D
外面に残るタタキの種類・調整の分類	底部の形状	x	x	-	x	x	x	x	y	-	-	y	-
	蒸気孔の形状	a	-	-	c	a	b	c	d	d	-	d	-
1 繩席文タタキ				1		1							
2 斜格子文タタキ				2							1		
3 格子タタキ	1	1	1			1							
4 平行タタキ				2		1 (1)		1 (1)			7 (5)		
5 ナデ・工具ナデ							1						
6 ハケ					1				3	1	22	10	27

※ ()内の数字はタタキのうえからナデやオサエをおこなっている個体数を表す



第697図 韓式系土器 瓶の分類

タキの種類・外面調整の分類を配し、出土個数を記入している。

表をみると、口縁部の形状Aタイプは資料数8点、すべて外面にタタキ痕がある。その中で底部の形状が判明できる資料数は2点、共に底部xタイプの平底で、うち1点は蒸気孔の形状がaタイプである。

口縁部の形状Bタイプは端部が内面に肥厚する土師器の布留式甕の口縁部をもつ資料No.65の1点のみの出土である。底部の形状はxタイプの平底で、蒸気孔はcタイプ、外面調整はハケ調整で底部と体部の境にヘラケズリの稜がある。

口縁部の形態がCタイプは資料数39点、そのうち外面タタキ痕が残るもの資料数が12点、ナデやハケ調整で仕上げた資料数が27点となる。タタキ痕が残るものうちで底部の形状がわかるものの資料数4点、すべてxタイプの平底となる。また蒸気孔の形状がわかる資料数が4点で、aタイプが3点、cタイプが1点となる。

口縁部の形態がCタイプでハケ、ナデで仕上げられた27点の資料数のうち底部の形状がわかるものの資料数は4点、xタイプの平底が1点、yタイプが3点である。蒸気孔の形状がわかる資料数は5点で、bタイプが1点、dタイプが4点となる。

口縁部の形態Dタイプは資料数37点、外面はすべてハケ調整で仕上げられている。この中で底部と蒸気孔の形状の形状がわかる資料数が10点、すべて底部の形状y、蒸気孔のタイプdとなる。

4項目の分類の要素をすべて満たす資料でみると、口縁タイプAは外面調整タタキのみ、口縁タイプCは外面調整がタタキ、ハケ、ナデの3タイプすべてを含んでおり、口縁タイプDは外面調整ハケのみになる。

生駒西麓産の胎土を有する個体はすべて平行タタキの個体であった。

④鍋

分類の要素は4項目で、口縁部の形状でA、Bの2タイプ、底部の形状でx、yの2タイプ、把手の形状でa～dの4タイプ、外面調整で1、2の2タイプに分類した。

・口縁部の形状（第698図）

A一口縁部は頸部からやや直立したあと外反し端部は面をなす。

B一口縁部は頸部からくの字型に外反し端部は丸く終わる

・底部の形状（第698図） x一丸底、y一丸みを帯びた平底

・把手の形状（第698図）

a一円柱状の把手で先端に平坦面をもつ

b一円柱状の把手で先端は丸い

c一舌状の把手

d一把手がつかない

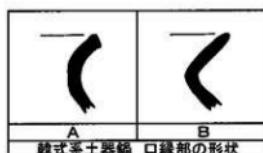
・外面に残るタタキの種類・外面調整 1 平行タタキ 2 ハケ

本報告書に実測図を掲載した鍋を4項目の基準にあてはめて分類し、生駒西麓産の胎土を有す

第7表 韩式系土器鍋 口縁部・底部・把手の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係

	口縁部の形状	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B
	底部の形状	x	x	x	-	x	x	y	y	-	y
	把手の形状	a	b	-	-	c	-	c	-	c	d
外面に残るタタキの種類・外面調整	1 平行タタキ	1	2(1)	4(2)	1(1)						
	2 ハケ					1	1	2	2	1	4

※ () 内の数字はタタキの上からナデやオサエをおこなっている個体数を表す

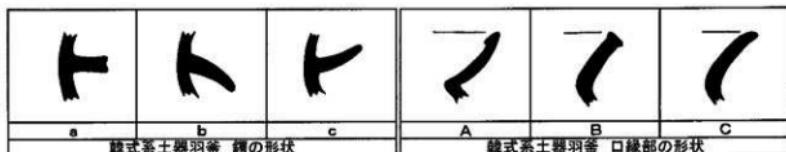


第698図 韩式系土器 鍋の分類

第8表 韩式系土器羽釜 口縁部・鋤の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係

	口縁部の形状	A	B	-	B	-	C
	鋤の形状	a	a	a	-	b	c
外面鋤から下の調整	1 平行タタキ	1	2(1)	2(1)			
	不明		1	3	1	1	
	2 ハケ						2

※ () 内の数字はタタキの上からナデやオサエをおこなっている個体数を表す



第699図 韩式系土器 羽釜の分類

るか、内外面調整、法量などあわせて一覧表にしたのが第31表（87頁）である。表は口縁部の形状を最優先し、次に底部の形状、把手の形状、外面調整の種類の順にならべている。また口縁部、底部、把手の形状と外面調整の関係を調べるために、第7表を作成した。表の横軸はそれぞれの形状を、縦軸は外面調整を配し、出土個数を記入した。

口縁Aタイプの資料はすべて口径25cm以上で、丸底、外面調整は平行タタキ1種類のみであるが、平行タタキの上からナデやオサエをおこなっている個体もある。把手のタイプは2種類に分かれ、1点は先端に平坦面を持つaタイプ、2点は先端が丸いbタイプである。8点の資料中5点が生駒西麓産の胎土を有し、そのうち4点は平行タタキの上からナデを施している。

口縁Bタイプの資料のうち2点は底部形状xタイプの丸底で、他の8点はyタイプの平底である。外面調整はすべての個体がハケ調整で、把手は付くものと付かないものがあるが、口縁部Bタイプに付く把手はすべて形状が舌状のcタイプである。

⑤羽釜

羽釜は消耗度がひどく良好な資料は少ない。分類の基準は3項目で、口縁部の状態でA～Cの3タイプに、鍔の形態をa～cの3タイプ、外面鍔から下の調整を1、2の2タイプに分類した。

・口縁部の形状（第699図）

A—頸部から内湾しつつ外方に屈曲し、端部は内傾斜面をもつ

B—頸部からやや直立したのち外反し端部は面をなす。

C—頸部からくの字型に外反し端部は丸く終わる

・鍔の形態（第699図）

a—横方向に水平に伸び、端部は面をなす

b—下外方にのび、端部は丸くおわる

c—上外方にのび、端部は丸くおわる

・外面鍔から下のタタキの種類・調整 1—平行タタキ 2—ハケ

本報告書に掲載した羽釜を、内外面調整、生駒西麓産の胎土の有無などの観察項目を加え、口縁部の形態A～Cを優先し、鍔の形状、外面調整の順に一覧表にしたのが第32表（88頁）である。さらに口縁部・鍔の形状と外面の調整との関係を調べるために第8表を作成した。表の横軸はそれぞれの形状を、縦軸は外面調整を配し、出土個数を記入した。

口縁部形状Aは布留式土器の甕口縁部と極似しており、資料No1のみの出土である。水平にのびるタイプaの鍔を有し、他の出土例に比べ口径が16.4cmと小さく、かけられるカマドの掛け口も小さくなる。外面平行タタキで内面は同心円當て具痕が残る。布留式甕の口縁部に新しい渡来系の炊飯具羽釜の体部がそのまま合体された形状を示している。

口縁部の形態Bの羽釜はすべて鍔の形状がaタイプで、外面調整は平行タタキが残るか、もしも平行タタキの上からナデやナデ消しをおこなうもののみである。1点を除き、残りすべての資料は生駒西麓産の胎土を有す。

鍔が下方に下がる鍔の形状 b の資料は資料 No. 12 の 1 点のみ、口縁は欠損しており形状は不明である。資料 No. 12 は生駒西麓の胎土を持つが、他の生駒西麓産の胎土と異なり、色調が暗褐色を呈す。口縁部の形状 C タイプ 2 点の資料は共に鍔の形状は c タイプ、外面ハケ調整でしあげられている。

⑥ 移動式カマド

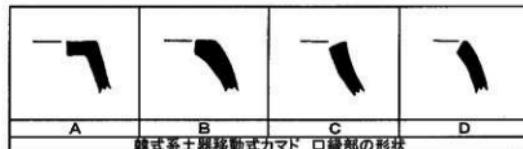
移動式カマドは出土量、種類ともに豊富で、本遺跡の出土品を特徴づける器種である。図化した資料は 100 点を超える。本項で分類するカマドは掛け口が一つのカマドであるが、掛け口を 2 つもつ移動式カマドが 1 点出土している（第 584 図、図版 169）。出土したのは掛け口が穿たれている上部平坦面の部分と側面の破片 3 点である。図上復元による法量は上部面が推定長径 45cm、短径 30cm の平面橢円形で、この上部面に推定直徑 15.8cm の掛け口が 2 孔穿たれている。上部面はヘラミガキ、体部側面はハケ調整、長径線上に一組の把手が付く。ひとつ口カマドの 20cm 前後の掛け口径に比較すると、5cm 近く径が小さいものが掛けられていたことになる。

この二つ口カマドとほぼ同寸の孔が上部にうがたれているのが第 605 図の土製品で、こちら

第 9 表 移動式カマド 掛け口・庇・焚口左右の突帯の形状と外面調整の関係

	掛け口の形状	A	A	A	A	B	B	C	C	D	D	D
	庇の形状	x	x	y	y	—	x	x	y?	x	x	—
	焚口左右の突帯の形状	a	c	a		—	a	b	c	b		c
外面調整	1 平行タタキ	10 (7)	1 (1)	1 (1)	1 (1)							
	2 ナデ					1						
	3 ハケ	1					2	4	1	2	2	1

※ () 内の数字はタタキの上からナデやオサエをおこなっている個体数をあらわす



第 700 図 韓式系土器 移動式カマドの分類

は移動式カマドというより、造りつけカマドの付属具、掛け口上部を覆う器具等の用途を持つと思われる。外面細かいハケ調整、内面強いケズリ状のナデで仕上げられている（図版 169）。

以下分類の対象とするのは掛け口が一つの移動式カマドである。分類の基準は 4 項目で、掛け口の形状で A～D の 4 タイプ、底の形状で x、y の 2 タイプ、焚き口左右の凸帯の形状を a～c の 3 タイプ、外面調整を 1～3 の 3 タイプに分類した。

・掛け口の形状（第 700 図）

A—内外面とも体部から屈曲し、掛け口は平坦面をなす

B—外面は体部から屈曲し、内面は体部から屈曲せず上内方にのび掛け口に平坦面をなす

C—外反して上内方にのび、端部は面をなす

D—内湾して上内方にのび、端部は面をなす

・底の形状 x—付け底 y—曲げ底

・焚き口左右の凸帯の形状（第 700 図）

a—外面に断面方形の凸帯が付く

b—外面に断面三角形の凸帯がつく

c—凸帯が無い

・外面調整 1—平行タタキ痕が残る 2—ナデ 3—ハケ調整

本報告書に掲載した移動式カマドの他に未掲載の実測遺物も抽出して合わせて 40 点の資料を分類した。未掲載から抽出した資料は分類の要素を 2 項目以上満たすものを選択した。分類した資料を、掛け口の形状 A～C の順を優先し、次に底の形状 x、y、次に焚き口左右の凸帯の形状、外面調整 1～3 の順にならべ、内外面調整、生駒西麓産の胎土の有無などの観察項目を加え一覧表にしたのが、第 33 表（89～91 頁）である。さらに掛け口、底、突帯の形状と外面調整の関係を調べるために第 9 表を作成した。表の横軸はそれぞれの形状を、縦軸は外面調整を配し、出土個数を記入した。

掛け口の形状 A タイプは 26 点、全体の約半数をしめる。このタイプの外面調整は 1 点を除き、平行タタキ痕が残るか、もしくはタタキをナデ消している。底の形状は曲げ底 y タイプが 2 点あるが、残りはすべて x タイプの付け底である。焚き口左右の凸帯の断面はすべて断面方形で、8 割以上の資料が生駒西麓産の胎土をもつ。掛け口の形状 A タイプは、体部を成形するとき掛け口の平らな面を底にして（倒立して）成形したと思われる。把手の上面や底の上面に残る棒状具の刺突痕は、把手や底を接合したあと乾燥までの間に把手や底が接着部分からはがれて落下しないようにささえとしていた棒の痕跡であろう。

掛け口の形状 B タイプは 3 点で、外面はナデやハケでしあげられている。3 点とも底の形状は x の付け底のみ、焚き口左右の凸帯の断面はすべて断面方形である。掛け口 B タイプの資料の把手の上面には掛け口 A タイプと同じ棒状具の刺突痕が認められるものがあり、掛け口 B タイプも倒立して体部を製作したと推定できる。

掛け口の形状C、Dタイプは合わせて10点、すべて外面ハケやナデで仕上げられており、底の形状はxの付け底のみ、焚き口左右に凸帯があるものはすべてその断面はすべて三角形である。掛け口C・Dタイプは底部から粘土を積んで体部を成形したと思われ、A・BタイプとC・Dタイプは製作技法の系統が異なることが考えられる。

⑦U字形板状土製品

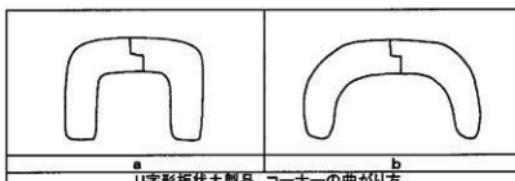
造り付けカマドの焚口枠として使用されたと推定されている土製品であり、朝鮮半島高句麗、百濟の系譜をひく韓式系土製品である。本遺跡では600点以上の破片が出土しており、総括編第4章で詳述するが分類の基準は2点あり、板の表面に付けられている突帯の形状でI～V、全体の形状の判明する資料はコーナー部の曲がり方でa、bに分類する。

・突帯の形状（第701図）

- I－粘土を両側からつまみあげなで成形しており、断面三角形で先端はまるい
- II－粘土板の内縁に沿って断面L字型に折り返して突帯をつくるタイプ
- III－粘土板の内外縁に沿って断面台形状の突帯がはりつけられるタイプ
- IV－粘土板の外縁に沿って断面L字型に折り返して突帯をつくるタイプ
- V－突帯が無いタイプ

第10表 U字形板状土製品 突帯の形状とコーナーの曲がり方の関係

		突帯の形状	
		II	III
コーナーの曲がり方	a	2	3
	b	0	6



第701図 U字形板状土製品の分類

・コーナー部の曲がり方（第701図）

- a -コーナーが角ばって曲がる
- b -コーナーが円弧状にまがる

当遺跡の破片資料を突帯の形状で分類すると全体の88%がⅢタイプになり、Ⅲタイプの資料はほぼ100%生駒西麓産の胎土を有している。全体像が想定でき、コーナー部の曲がり方が判別できる資料はⅡタイプとⅢタイプの11点で、突帯の形状とコーナーの曲がり方の関係は第10表のとおりである。完形品ではないが、Ⅱタイプの2点は残存部分から推定して、ともにコーナー部の曲がり方がaタイプとした。Ⅲタイプはaタイプが3点、bタイプが6点でbタイプのはうが多くなる。U字形板状土製品はコーナー部が角張る鉄製品の模倣からはじまったとすれば、コーナーが角張るaタイプから円弧状に曲がるbタイプへの型式変化が予想され、bタイプは後出のものといえるであろう。

3. 土師器の器種分類

韓式系土器や須恵器の影響を受け、前代の土師器がどう変化したか、その中で当遺跡の土師器の特色はどういうものか、この2点を念頭において各々の器種分類を進めていきたい。とりあげる器種は高坏、鉢、甌である。

(1) 高坏

高坏は器形の変化が顕著にとらえられることから編年の軸に据えられることも多い。そこで先学の秀でた研究成果を踏まえ^{註6)}、形態の変化を見極めるため、坏部の形態から5タイプの型式に大別、そのうち有稜高坏と無稜直口高坏については口縁部の形状でそれぞれ3種に細分した。またそれぞれの類型について口径、坏部の深さ等の法量による細分をおこなった。各形式の代表例の実測図を第703図に掲載した。

1 -大型有段高坏

坏部口径が20cm以上のもので、坏底部から稜を形成して屈曲し口縁部がのびる

2 -有稜高坏 坏底部から稜を形成して屈曲し口縁部がのびる

a. 口縁部がまっすぐ上外方にひらく

1 口径が20cm未満 15cm以上 2 口径が15cm未満

b. 口縁部がやや内湾しつつ上外方にひらく

1 口径が15cm以上 2 口径が15cm未満

c. 口縁部が上外方にひらき端部が外反するもの

3 -無稜外反高坏 坏底部から内湾しつつたちあがり、口縁部は上外方にのび、端部は外反する

4 -無稜直口高坏

a. 口縁部は坏底部から屈曲してたちあがり上外方に伸びる

1 口径が15cm以上 2 口径が15cm未満

- b. 口縁部は坏底部から直線状に上外方にのびる
 　1 口径が 15cm以上 2 口径が 15cm未満
- c. 口縁部は坏底部から内湾してたちあがり上外方にのびる
 　1 口径が 15cm以上 2 口径が 15cm未満
- 5-楕円高坏 坏底部から内湾してたちあがり口縁端部も内湾しつつおわる
 　a. 坏部深さが 4cm以上を測るもの
 　　1 口径が 15cm以上 2 口径が 15cm未満
- b. 坏部深さが 4cm未満のもの
 　　1 口径が 15cm以上 2 口径が 15cm未満
- 形態分類に加え、接合技法を観察検討した。高坏の脚部の接合方法については特に中野咲氏の論考に詳しい^(注6)。中野氏は特に脚部の製作手順を詳細に検討し、技法の省略とともに接合技法が変化していることに注目して、接合技法の時期的変遷を論じている。同氏の成果に従って、藏原北遺跡の高坏を検討し、その方法が当遺跡でも有効か検討する。
- そこで接合技法の分類については、脚柱部上部が中空か、中実かを判断の第1の基準として分類を試みた。脚柱部上部が中実の個体では、脚部を成形するときに軸芯をとおす、あるいは内面をヘラケズリするという手間を省く技法の省略が生じている。中実の脚部では円盤充填はおこなわれなくなり、中空から中実になり、脚柱部が細くなるときには、脚頂部はうすい粘土板でおおい、頂部側面から粘土をナデつけるようにして全体をつつみこむ接合がとりいれられている。

第11表 土師器高坏の種類と接合技法の関係

高坏の型式		接合技法					
		a	a +	b	b +	c +	c
1	大型有段高坏				1	6	2
2	有稜高坏	a	5		2		1
		b	2		1		
		c	4		1	3	1
3	無稜外反高坏	a	2	1	1	1	
4	無稜直口高坏	a			2		
		b	2	1		2	
		c	2			4	1
5	楕円高坏	a	5	2	5	2	4
		b				11	3



第702図 土師器 高杯の分類

接合技法の分類の第2の基準は脚部の内面に施されている刺突の有無をとりあげた。刺突の詳細は二分できる。一つは中空の脚部を坏部に接合して充填、もしくは坏底部に刺突を加え、脚内部の器壁を滑らか平滑にし、乾燥をたすけたもの、二つ目は上部に絞り痕が残る中実の脚柱部に刺突を加え、脚内部にケズリを加えるものとなる。

以上整理して、高坏の接合技法を7タイプに分類した。

- a 中空の脚柱部を坏部に接合する、脚柱部に補充された粘土痕が明瞭に残るもの
- a + aで刺突が施されるもの
- b 中空の脚柱部を坏部に接合する、脚柱部内面が丁寧にナデ、又は削られて補充粘土の痕跡は残っていない
- b + bで刺突が施されるもの
- c 中実の脚部を坏部に接合するもの
- c + cに刺突が施されるもの
- d 各々が完成した脚部と坏部を接合する、須恵器的な接合法 a ~ cとは異なり、脚上部外面をとりまくように付加される粘土はほとんど見られない

以上の形態と接合技法の分類を、判定できる資料のみに限って内外面調整、法量等とともに一覧表にしたもののが第34表(92~94頁)である。接合技法はa・b→cの順に変遷し、接合技法cに刺突がおこなわれなくなったものが、最も後出の形態と考え、第34表では接合技法a→a+→b→b+→c+→cの順を優先し、それぞれの接合技法ごとで高坏の種類を1~5の順にならべている。

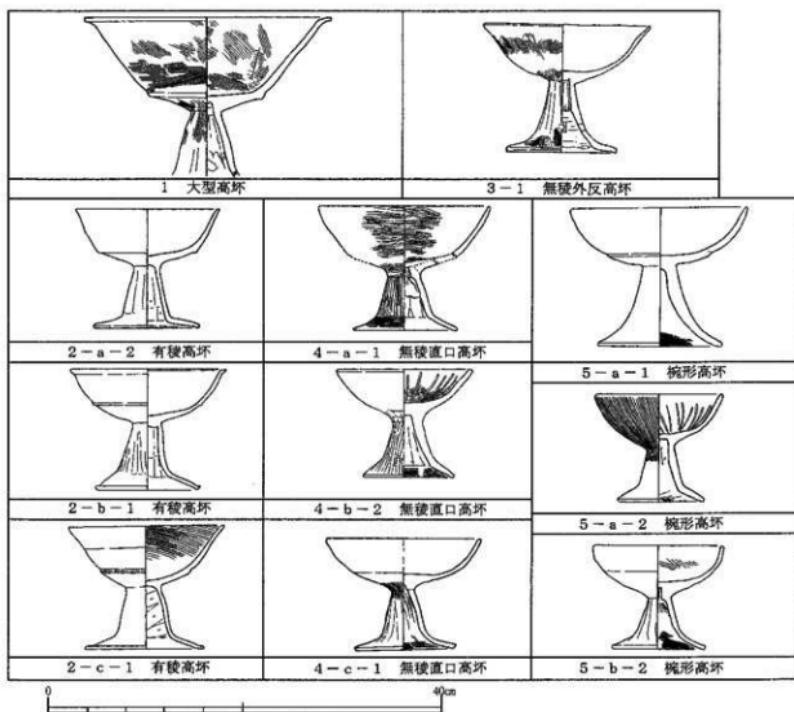
接合技法ごとの出土量をみてみる。接合技法aは22点、刺突の有るa+は4点、接合技法bは13点、刺突の有るb+が13点、接合技法cが11点、刺突のあるc+が30点、接合技法dが1点となり、全体の約30%がc+となった。

接合技法を高坏の形式と関係をしらべたのが、第11表である。表をみると、接合技法aでは有稜高坏が半数をしめ、無稜外反高坏が2点、無稜直口高坏が4点、楕形高坏が5点になる。接合技法a+は無稜外反高坏と無稜直口高坏が1点づつ、楕形高坏が2点になる。接合技法bでは有稜高坏4点、無稜外反高坏1点、無稜直口高坏2点、楕形高坏5点になる。接合技法b+では大型有段高坏1点、有稜高坏3点、無稜外反高坏1点、無稜直口高坏6点、楕形高坏2点となる。接合技法c+では大型有段高坏が6点、有稜高坏が1点、無稜直口高坏が8点、楕形高坏が15点となる。接合技法cでは大型有段高坏が2点、有稜高坏が2点、無稜直口高坏が4点、楕形高坏が3点となった。

集計の結果、大型有段高坏は接合技法c+と関係が強い、有稜高坏は接合技法aと関係が強い、無稜直口高坏と楕形高坏は接合技法c+と関係が強いことが判明した。

(2) 鉢

当遺跡の鉢はさまざまなタイプがあり、器の大小に加えて、銘々器に近いものから煮沸具と取



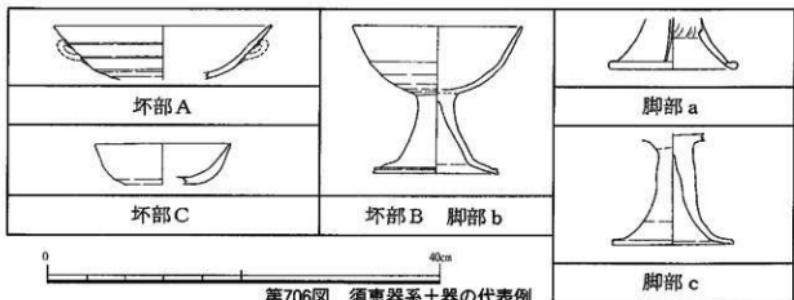
第703図 土師器 高杯の型式の代表例



第704図 小型製塩土器の代表例



第705図 土師器 鉢の型式の代表例



第706図 須恵器系土器の代表例

れるものまで多様性がある。全体の形状から各型式を分類し、類型をまとめた。各類型の代表例の実測図は第705図に掲載した。

浅鉢形1-a 口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾し端部に面をもつ

浅鉢形1-b 底部は丸底、口縁部は内湾し端部は丸くおわる

口径の大小により1、2に二分する 1-口径20cm前後 2-口径13cm前後

浅鉢形1-c 口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾しつつ直口し端部は丸くおわる

浅鉢形2-a 口径13cm前後、底部は平底、口縁部は内湾しつつ直口し端部は丸くおわる

浅鉢形2-b 口径13cm前後、2-aより器高が低い、底部は平底、口縁部は内湾しつつ直口する

楕形3-a 口径12cm前後、底部は平底、口縁部は上外方に開く

楕形3-b 口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は上外方に開く

鉢形4 底部平底、口縁部は内湾し端部は短く外方に屈曲する

口径の大小により1、2に二分する 1-口径17cm前後 2-15cm以下

鍋形5 口径20cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾し端部は短く外方に屈曲する

鍋形6 底部ほぼ丸底、扁球状の体部で口縁部は外反する

口径の大小により1、2に二分する 1-口径20cm前後 2-15cm未満

深鉢形7-a 底部平底、口縁部は内湾しつつ上方にのびる

口径の大小により1、2に二分する 1-口径15cm以上 2-15cm未満

深鉢形7-b 底部丸底、口縁部は内湾しつつ上方にのびる

口径の大小により1、2に二分する 1-口径15cm以上 2-15cm未満

深鉢形7-c 底部平底、口縁部は上外方にのび、器高が口径を凌駕する 体部中位に把手をもつ

深鉢形7-d 底部は丸底に近い、口縁部は上外方にのび、器高が口径を凌駕する

深鉢形7-e 底部は丸底に近い、体部は上外方にのび、口縁部は外反する

器高が口径を凌駕する

以上の形態の分類を、判定できる資料のみに限って内外面調整、法量等とともに一覧表にしたもののが第35表(95~97頁)である。

浅鉢形1、2、楕形3は銘々器として考え环と呼称することも選択肢の一つであった。しかし浅鉢1の場合、内外面に煤が厚くこびりついている個体が多数あり(特に1-b-1の口径が大きいタイプはすすぐ厚く付着している)、供膳具としての环とは異なると判断して鉢と分類した。楕形3の場合は内面は丁寧な板ナデ等が施されているが、外面は未調整に近い状態で火熱を受け変色している個体がある。同様の形状の個体で火熱を受け、白色物が付着している資料は製塙土器と分類して鉢の一覧表には掲載していない。

鍋形6で口径が20cmをこえるものは、韓式系土器鍋に系譜を求めて、その項目で分類するこ



第707図 土師器 壺の分類

とも考慮したが、把手がなく、外面がハケ調整でしあげられていることから土師器の鉢とした。
 深鉢形7-aと7-bは平底が丸底からの形状の違いで分類したが、7-bの大型は壺の下半部をそのまま利用したボウル状の形状で、煤の付着などから煮沸具としての利用が想定される。
 深鉢形7-cは韓式系土器に系譜を求められる把手付鉢である。深鉢形7-eはカマドに直接掛けで使用される煮沸具であろう。

(3) 壺

煮沸具である壺は高壺、鉢とは異なり、韓式系土器の影響を大きく受けた。当遺跡から出土する壺はさまざまな形態があり、次の二つに大別できる。

- ・前代の布留式土器からの系譜をひく球形の体部を持つ球胴壺、大小さまざまな容量の壺がある

- ・カマドに伴う炊飯具として韓式系土器の影響を受け、新たに出現した口頸部径が大きく、器高が高い長胴壺

本項では壺の容量の変遷、また長胴壺の出現がいつどのようにはじまっているか、考察しつつ壺の分類をおこなう。

分類の最初の項目は口縁部の形態で、すべての壺を次の7タイプに分類した（第707図）。

a - 布留式壺の系譜をひく、内湾して上外方にのびる口縁をもつ

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 口縁端部は内面に肥厚する | 2 口縁端部は内傾斜面をもつ |
| 3 口縁端部内面をつまみあげる | 4 口縁端部は外傾する面をもつ |

b - 外反する口縁をもつ

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1 口縁端部は面をもつ | 2 口縁端部は丸くおわる |
| 3 口縁部は短く外反し端部は丸くおわる | |

次に相対的に大きさを比較するために、口径×器高=大きさ指數1～9を設定した。この指數は壺の容量そのものを示すものではなく、あくまで相対的に各々の壺の大きさ=サイズを比較するための指數である。

1 - 50 以上 100 未満 2 - 100 以上 150 未満 3 - 150 以上 200 未満 4 - 200 以上 250 未満
 5 - 250 以上 300 未満 6 - 300 以上 350 未満 7 - 350 以上 400 未満 8 - 400 以上 450 未満
 9 - 450 以上

外反する口縁部をもち、大きさ指数が 7 以下の甕は、概算で 100 点以上出土している。そこでこれらの中小甕については、各遺構の大きさ指数別甕出土数を調べ、甕のサイズの時期的変遷を検討した。第 12 表は中小甕が多く出土した井戸等の遺構を後述する萩原北編年 2 ~ 5 期の時期別にならべ、大きさ指数別の出土個体数を調べたものである。表をみると、5 世紀代（萩原北編年 2 ~ 3 期）には 1 ~ 7 までの大きさ指数の甕があり、さまざまなサイズの甕が用いられていたが、6 世紀代（萩原北編年 5 期）の甕のサイズは大きさ指数 2 を中心に集約されていくことがわかる。

大きさ指数 8 以上の大型の甕は、口縁部の形態、大きさ指数のほかに、外面調整を分類の要素として加えた。

・外面の調整

- 1 - 肩部ヨコハケ他はタテ、ナナメハケ
- 2 - 肩部ヨコハケ上からナデ、ヨコナデ、他はタテ、ナナメハケ
- 3 - タテハケ
- 4 - ナデ

大きさ指数が 8 以上の大型甕は、長胴甕への変化が予想される。長胴甕はその名のとおり器高が高くなり、上に幅がることから頸部径がある程度必要である。器高と頸部径の関係に変化が現れ大型甕が長胴甕と呼称される数値をさぐるため、頸部径 × 器高を調べてみた。その結果、頸部径 × 器高の数値が 470 から飛躍的に増大し、形に変化が現れたことがよみとれた。数値が 470 を超える甕の法量は、頸部径 15cm 以上、器高 30cm を超えていることがわかり、この法量以上のものは、長胴甕と呼称できるであろう。

本報告書に実測図を掲載した大きさ指数 8 以上の甕を、口径・頸部径・器高の法量、外面調整、外面の煤の付着範囲などの観察項目を加え、球胴甕、長胴甕ごとに口縁部の形態 a 1 ~ b 3 を優先し、外面調整の順に一覧表にしたのが第 36 表（98・99 頁）である。長胴甕については口縁部の形態 → 外面調整 → 頸部径 × 器高の数値の小さい順にならべた。

一覧表をみると資料 No. 8 ~ 10 の長胴甕は、布留式甕の系譜をひく a タイプの口縁部をもち、外面調整も肩部にヨコハケが施されている。b タイプの外反する口縁を持つようになると外面調整はタテハケ、もしくはナデが施されるようになり、外面の煤の付着範囲がよりはっきりする（第 36 表では●を記入）ようになってくる傾向が読み取れた。

4. 須恵器系土器とその器種分類

須恵器系土器は須恵器の影響を受け、その技法を取り入れて製作された土器を呼称する。まず須恵器の影響を受けた点を具体的にあげる。第一に器形の模倣では、高脚脚部のスカシ孔、

第12表 土師器中小甕 大きさ指数別の出土個体数

出土区域	遺構種別	遺構No.	時期区分	共伴須恵器の型式	大きさ指数=口径×器高ごとの出土個体数						
					50以上 100未満	100以上 150未満	150以上 200未満	200以上 250未満	250以上 300未満	300以上 350未満	350以上 400未満
					1	2	3	4	5	6	7
南西居住域	井戸	E 090805	2期	I - 3			1		2	1	1
南西居住域	土坑	A 1135	3期	I - 4	3	1		1			
北東居住域	井戸	C 2549	3期	I - 4		2	7	3	6		
南東居住域	井戸	A 494	3期	I - 4, 5	2	3	7	3	2		
南東居住域	井戸	E 090806	3期	I - 5		4	3	1	1		
北東居住域	井戸	B 131000	3期	I - 5	1	1		1			
北東居住域	土坑	C 4159	3期	I - 5	1	2			1		
南西居住域	土坑	A 1654	3期	I - 5		3	3	1	2		
大溝		H 11 - 2層	4期	I - 5, II - 1		4	1	1			
北西居住域	土坑	D 1617	4期	II - 1	1	1					
北西居住域	溝	D 986	4期	II - 2		3		1			
北東居住域	井戸	C 2476	5期	II - 2		1			2		
北東居住域	井戸	D 474	5期	II - 2, 3		4					
北東居住域	擧立柱建物 C 1脇辺		5期	II - 3, 4		3			1		
北西居住域	土坑	D 472	5期	II - 3, 4	1	4					
北東居住域	土器群	C 2401上部	5期	II - 5		1	1				

坏部外面に稜線や装飾的な把手を付ける等があげられる。製作、調整技法では回転ヘラケズリ、回転ナデを取り入れること、高坏の脚部と坏部を接合方法で、坏部に刻み目をいれ脚部を貼り付け接合する方法をとっていることがあげられる。さらに装飾技法としては波状文を施すことなどがあげられる。

次に須恵器との相違点についてのべる。第一は焼成で、土師器よりは硬質に焼きあがっているが、あくまで酸化炎焼成であり、色調は淡褐色を呈する。なかには薄い黒斑がついているものもあり、須恵器のような完璧な穴窓で焼成されたものではないことを示しているといえよう。

次に製作技法であるが、回転技法を取り入れてはいるが、波状文の流れ方などを観察すると、須恵器のような安定した回転状態での施文ではないようである。あるいは技法は取り入れても道具が調っていないかった可能性もある。

第三に器形の模倣であるが、須恵器の器形を部分的に模倣しているが、まったく同じデザインではない。とくに波状文は須恵器とはまったく別の場所に施しており、とくに高坏脚部に施す例がみられる。

以上のように須恵器系土器は須恵器の技法を取り入れながらも、須恵器、土師器とも異なる独自の発展をとげて5世紀後半から6世紀にかけて継続して生産されていたと考えられる。当遺

跡ではこの須恵器系土器が 100 点以上出土しているが、ほとんどの器種が高環である。これらの出土例を検討した結果、高環について、下記のとおり坏部の形態で 3 タイプ、脚部の形態で 3 タイプに分類できた。代表例は第 706 図に実測図を掲載した。

・坏部の形態による分類

A - 外面に稜線を施したり、装飾的な把手をつけているもの 同時期に存在した須恵器無蓋高環の形状をより多く取り入れていると思われる

B - 口縁部は底部から内湾しつつ上外方にのび、端部はまるくおわる

C - 平坦で器壁が厚い环底部から口縁部は屈曲して上外方にのび、端部はまるくおわる

・脚部の形態による分類

a - 斧孔を持ち同時期に存在した須恵器高環の形状をより多く取り入れていると思われる

b - 中空の脚部で脚頂部からラッパ状に下外方にひらく

c - 脚柱部が長く、内部が中実、もしくは中実に近いもの

分類した高環を含む本報告書に実測図を掲載した須恵器系土器を、壺などの器種も含めて一覧表にしたのが第 37 表 (100 ~ 102 頁) である。表では波状文のある資料は○を記してある。

坏部の形態 A と脚部の形態 a はより須恵器に近い形態をめざして製作されたと思われる。脚部の形態 b と c を比較すると、c のほうが脚柱部内面の絞り目の後を丁寧になでていない、中実の頂部になり、脚部製作技法の省略が見られることから、b → c への時期的な変遷が推定できる。

5. 製塙土器の器種分類

当遺跡では豊富な種類の製塙土器が大量に出土した。最初に、形状により分類、次に外面調整により細分可能なものは細分する。それぞれのタイプの代表例の実測図を第 704 図に掲載した。

A - コップ形 - 口径 5cm 以内の筒状のコップ形を呈する。先学の分類では小型丸底 I 式^(注7)、あるいは大阪湾 F 類^(注8)と呼称されていたものであるが、当遺跡では形状、調整ともにさまざまなタイプが存在する。

x - 丸底と y - 平底にわけ、それぞれを外面調整 1 - ナデ・オサエで仕上げたものと 2 - タタキがあるものに細分する。

B - 鉢形、a ~ d の 5 タイプにわける。

a 小楕形 口径 8cm 前後、半球状の体部をもち、口縁部は内湾しつつ上方にのびる。口縁端部は強く内湾するものもある。器壁は薄く、内外面ともナデ調整で仕上げられているが、内面は二枚貝条痕を残すものが多い。

b 浅楕形 口径 10cm 前後、器高が低く楕形を呈す。器壁は厚く、外面は未調整、粘土接合痕を残し、内面は工具ナデで滑らかに仕上げられている。

c 平底バケツ形 口径 5 ~ 8cm の鉢形、ほぼ平底のバケツ型を呈す。外面調整により、1 - ナデ・オサエで仕上げたものと 2 - タタキがあるものに細分する。内面はタテ方向

の指ナデの跡が顯著に残る。

d 深鉢形 口径 8cm 前後、器壁は厚く、体部は内湾して上方にのび口縁端部は外方に屈曲する

C—大型化したポール形 口径 15cm 前後のポール形を呈する。

第 13 表は当遺跡から出土した A、B 2 種類の小型製塙土器の主要遺構における出土量をまとめたものである。A コップ形はすべての製塙土器の種類の中で最も多く出土した。底部の形状 x—丸底と y—平底を分類の基準にしたが、実際の出土例をみると底部は欠損している例が多い。したがって破片の個数の集計は x—丸底と y—平底はわけていない。

具体的に出土例を見る。南西居住域土坑 A 1 1 3 5 からは遺跡内で最も大量の製塙土器が出土した。この遺構から出土したコップ形 A でタタキが残るものは 1 点の丸底を除きすべて平底—y である。同じ南西居住域土坑 A 1 6 3 2 から出土したコップ形 A はすべて x—丸底、1—タタキなしである。このようにコップ型 A は出土する遺構により技法や形状のまとまりがある。

鉢形 B a ~ f はコップ形 A と共に共伴して出土するが、大溝を除く土坑からの出土例を見る限り、鉢形 B の a タイプと b タイプは共伴しない傾向がある。

6. 土器組成の変化と編年

以上のとおり当遺跡出土の韓式系土器・土製品、土師器、須恵器系土器、製塙土器の器種分類をおこなった。次になるべく一括性の高い資料をとりあげ、器種分類した土器の組成の変化を調べ、その消長を表にしたのが第 14 表である。表の縦軸には資料が出土した区域と遺構名を記載した。大溝・区画溝の場合は出土層位も記載した。表の横軸はそれぞれの分類項目を器種ごとの一覧表の順に左から記載した。一がマークされているところはその分類項目は満たしていないことをしめしている。共伴する須恵器も型式編年の順に左から順に記載した。■マークが記入されると、その分類項目を満たすタイプの器種が出土したことを示している。一ヶ所の遺構で 3 点以上同じタイプが出土した場合は■マークを大きくして記入している。★マークは生駒西麓産の胎土を有するタイプの出土資料を示す。●マークは長胴甕を示す。

第 14 表の消長表をみると当遺跡の古墳時代中・後期の土器は、器種構成や調整技法の違う、5 段階の土器群に区分することができた。以下、段階設定した土器群を蔀屋北 1 期～5 期と呼称し第 14 表に基づきその特徴を記述していく。

(1) 蔊屋北 1 期

蔀屋北 1 期の特徴は軟質の韓式系土器と土師器高坏に多様なタイプが存在することがあげられる。軟質の韓式系土器は器形や調整に統一感が無いさまざまなタイプが出土している。土師器高坏は全期を通して最も種類が多く、出土量が多い。

この段階を構成する土器群は、北東居住域では周溝墓 B 1 3 1 1 0 1、周溝墓 B 1 3 1 2 5 0、

溝C 2331、北西居住域では井戸D 643、土坑D 640、大溝E 090001下層、南西居住域井戸A 1613、南東居住域井戸A 695、大溝F中層b出土資料等があげられる。

土器群の器種構成をみると、韓式系（硬質）土器では舶載の陶質土器に鉢・甕・壺がある。鉢、甕は百濟系の特徴をもつものが出土している。黒色研磨土器には高環・壺がある。

軟質の韓式系土器では壺・甕・平底鉢・瓶がある。軟質の韓式系土器の特徴は口縁部等の形状と外面に残るタタキの種類が多様なことである。器種別にみると壺・甕は口縁部の形状がa、c～eまで4タイプ、タタキの種類も1の繩縞文タタキ～3格子タタキまで3種類あり、多様なタイプのものが使用されていたことがうかがえる。甕についても同様の傾向があてはまり、口縁部の形状がA、Cの2タイプ、タタキの種類は2の斜格子タタキ～4平行タタキまで3種類ある。平底鉢は外面に鳥足文タタキ、平行タタキを残す個体があるが、ほとんどの個体がタタキの上からハケやナデを施している。平底鉢には外面をヘラナデで仕上げたものもある。

土師器高环は大型有段高环、無稜外反高环、無稜直口高环、有稜高环、楕形高环すべてのタイプがそろい、全期を通して最も多様で出土量も多い。环部と脚部の接合方法は、中空の脚柱部を环部に接合し脚部内面に円盤充填の後がはっきり残るaタイプが最も多く、その他の接合方法では中実の脚柱部を环部に接合するcタイプで刺突を施さないもの以外はすべて存在する。土師器鉢は浅鉢形1、2、鍋型6がある。

土師器の甕は、中小甕では布留系の口縁部を持つ大きさ指数5までの甕が存在する。大型球胸甕では布留系の口縁部の形状aで2の端部に内傾斜面をもつタイプ、3の口縁端部を内面につまみあげるタイプが存在する。

	坏	高坏	甕	鉢	甕	壺	提瓶	器台	その他	土師器的須恵器
I - 1										
I - 2										
I - 3										
I - 4										
I - 5										
II - 1										
II - 2										
II - 3										
II - 4										

第708図 須恵器 時期別・器種別の出土量

須恵器系土器は高坏坏部形状Bタイプのみ出土している。

製塙土器は壺形のみで、形状、法量はさまざまである。

須恵器はI型式2段階以前のものが共存する。第708図は須恵器の時期別器種ごとの出土量をしめしたものである。第708図をみると、1期の須恵器の全体量は2期以降に比べると少ないが器種は蓋壺、高坏、壺、鉢、甕、壺、器台があり、1期のみに出現した器種として瓶、鍋が一点ずつ加わる。また土師器の高坏や壺の器形を模倣した形状の須恵器も存在する。

(2) 韶屋北2期

韶屋北2期の特徴は、軟質韓式系土器の外面調整にハケ調整を施した個体が出現することである。また新たな器種として鍋が加わる。土師器でも、中小の土師器壺に外反する口縁を持つものや、長胴甕が新たに出現する。製塙土器では小型器種が出現する。

2期を構成する土器群は、北東居住域では竪穴住居跡C3767、3684、3818、3840、土坑C3837、C製塙土器だまりの資料があげられる。北西居住域では竪穴住居跡D8、南西居住域では土坑A1632、井戸E090805、南東居住域では井戸A590、西居住域では竪穴住居F8出土資料があげられる。大溝ではF中層、D900-6層、区画溝ではE091006、A950下層出土資料が該当する。

土器群の器種構成をみる。舶載の陶質土器は蓋・甕がある。共に百濟(榮山江流域)に系譜を持つものである。黒色研磨土器は高坏がある。軟質の韓式系土器では壺・甕、平底鉢、瓶に、新たな器種として鍋が加わる。

軟質の韓式系土器の形態の特徴を器種別にみる。2期の壺・甕は口縁部の形態がb、c、dの3タイプ、タタキの種類は2の斜格子タタキと4平行タタキのみで1期に比べると、種類・出土数が減少する。平底鉢も出土数は減少し、全体の形狀がA、C、Dタイプ、タタキの種類は平行タタキの1種類で、タタキを施した後ハケやナデで仕上げている。平底鉢は、外面にタタキを施すもの他に、タタキを施さずハケ調整で仕上げたものが出現している。

瓶は口縁部の形狀がCタイプと新たに出現したBタイプの2種類で、外面調整もタタキが施された個体に加えて、新たにハケのみで仕上げた個体が出現する。

鍋は2期から新たに出現した器種である。口縁部の形狀Aで、先端に平坦面を持つ円柱状の把手をもち、外面調整は平行タタキである。

土師器の器種構成をみる。高坏は1期に比べ資料数は減少し、橢形高坏が全体の7割以上をしめる。坏部と脚部の接合方法は、中空の脚柱部を坏部に接合し脚柱部内面が丁寧に調整されているbタイプと、中実の脚柱部を坏部に接合して刺突を施すc+タイプが同数出土している。鉢は1期から存在する浅鉢形1、2は出土数が増加している。さらに浅鉢形1、2に加えて新たに鉢4が出現する。

甕は大きな変化が現れた。第一の変化は大きさ指数が7までの中小甕に、布留系の口縁部形状

aタイプに加えて新たに外反する形状bタイプが出現したことである。第二の変化は長胴甕の出現である。初現期の長胴甕は口縁部の形状が布留系の口縁部形状aタイプで、外面調整は肩部にヨコハケが施されている1タイプである。口縁部の形状と外面調整をみるかぎり大型甕とかわりないが、頸部径と器高がともに大きくなり、甕を載せて使用することが可能な法量に変化している。長胴甕のほかに、1期から引き続き存在する端部に内傾斜面をもつ布留系の口縁aタイプの大型甕と、新たに外反する口縁部形状bタイプの大型甕が出現し、並存する。

製塩土器は小型器種が出現した。コップ形Aは小破片であれば当遺跡の古墳時代の遺構のほとんどから出土するといつても過言でないが、消長表では図化した資料が出土している遺構のみ■マークを記入し、主要遺構からのタイプ別出土量、個数の集計は第13表にまとめた。2期の主要遺構から出土したコップ形Aの総重量は約15kg、遺跡全体の主要遺構からのコップ型Aの出土量の12%を占める。15kgのうちの約6割が外面にタタキがない1タイプである。

2期の製塩土器の出土状況をみると住居床面、あるいは土坑に埋納された状態で、あまり破損せず個体が復元できる状態で出土している例が多い。特に南西居住城土坑A1632ではほぼ完形状態のコップ形A-1タタキなしタイプがまとまって12個体埋納されていた。小型製塩土器はコップ形の他に鉢形B-aの小椀形タイプも出現している。

須恵器はI型式2、3段階おもにI型式3段階のものが共伴する。全体量は1期に比べると増加しており、蓋環、高环、甕、鉢、甕、壺、器台の器種がそろっている（第708図）。

（3）舟屋北3期

この段階は舟屋北遺跡でもっとも大量で多様な遺物が出土した時期である。3期の特徴は羽釜・移動式カマド、U字形板状土製品の出現、生駒西麓産の胎土をもつ韓式系土器群の出現である。

この段階を構成する土器群は、北東居住城では井戸C2549、井戸B131000、土坑C3485、土坑C2203、土坑C4159、土坑C4264、土坑C2927、落ち込みC2701出土資料などがある。南西居住城では井戸E090806、土坑A1135、土坑A1654、土坑E090750出土資料などがある。また西居住城では竪穴住居F12など、南東居住城では井戸A494出土資料があげられる。区画溝ではB130240、A950上層出土資料があり、大溝では溝H11-3層、溝D900-5層出土資料があげられる。

韓式系土器は、壺・甕、平底鉢、甕、鍋に新しい器種として羽釜と移動式カマド、U字形板状土製品が加わる。壺・甕は口縁部がd、e、fの3種類のタイプがあり、eタイプがもっとも多い。全体の形状のわかる長胴甕の口縁部はすべて口縁タイプeであり、口縁タイプeは長胴甕の口縁部となる可能性が高い。eタイプの外面調整はすべて平行タタキだが、北東居住城土坑C4159からの出土例のように、平行タタキをナデけしている資料もある。口縁タイプfは直口壺の口縁となり、資料は1点のみで外面は平行タタキがのこる。口縁タイプe、fの資料は大半が

生駒西麓産の胎土を有している。

平底鉢は出土数量が減少し、全体の形状が底部と体部の境にヘラケズリを施さない丸みを帯びた形状Cのみになる。外面調整もヘラなどで、ハケ調整で仕上げられており、タタキ痕が残る資料はない。

瓶は口縁タイプCのみで、蒸気孔の形状は底部中央に円孔を1個、周囲に3~4個の円弧状の孔を体部にかけて穿つdタイプのものが新たに出現する。外面調整は平行タタキとハケ調整の資料が並存する。大溝H11-3層や北東居住域土坑C3486からの出土資料は外面の平行タタキを指オサエ等でところどころ消している。外面平行タタキの資料はすべて生駒西麓産の胎土である。

鍋は2期から存在した口縁の形状Aタイプに、外反する口縁をもつBタイプが新たに加わって並存する。口縁Aタイプは把手がつき、外面調整は平行タタキであるが、外面平行タタキの上からナデや指オサエをほどこしているものがある。具体例で示すと、区画溝B130240からの出土資料は口縁Aタイプ、先端が丸い円柱状のbタイプの把手を有し、外面は平行タタキ目をナデや指オサエで部分的にナデ消しており、生駒西麓産の胎土である。口縁Bタイプは把手が付かないものもあり、外面調整はすべてハケ調整である。

羽釜は3期から新たに出現した器種である。口縁の形状はAタイプとBタイプがあるが、鉢の形状はどちらもaタイプである。外面鉢から下の調整はすべて平行タタキで、タタキの上からナデをおこなっている資料もある。口縁Bタイプの羽釜はすべて生駒西麓産の胎土である。

移動式カマドは羽釜と同じく3期から新たに出現した器種である。3期から出現した移動式カマドは掛け口の形状がすべて上面に平坦面を持つAタイプで、底はすべてxタイプの付け底である。ほぼすべての資料の外面は平行タタキが残るが、タタキの上からナデをおこなっている資料もある。

3期の移動式カマドはすべて生駒西麓産の胎土である。同じように3期から出現した羽釜も移動式カマドと同様の胎土、調整をもっている。同じ粘土、同じ技法で製作された器種どうし、同時期にセットで使用された可能性が高いと思われる。そこで3期の羽釜と移動式カマドを組み合わせてみた。その結果カマド掛け口上面の内側の円形に煤がついていない部分が羽釜の鉢の下にびったり隠されて、それ以外の外側部分に煤が付着しているという状態が観察でき、セット関係を確認できた。

U字形板状土製品は、破片総数約600点の9割以上の個体が3期に出現する^(註9)。突帯の形状はほぼすべてがⅢタイプで生駒西麓産の胎土を持つもののみである。全体の形状がわかる資料をみると、コーナー部が角張って曲がるタイプaの個体は2点のみ、残りはすべて円弧状に曲がるタイプbである。

3期の韓式系土器・土製品をみると、平底鉢を除く甕・壺、瓶、鍋、羽釜、移動式カマドの器種において1-口縁端部に面を持つなど細部の形態に共通性がある、2-遺跡近隣の生駒西麓の

粘土を使用している、3—外面に平行タタキを施す等、同じ技法により製作された齊一性のある韓式系土器のまとまりが存在するという大きな特徴があることが判明した。U字形板状土製品も同じ生駒西麓産の粘土を使用して製作されており、このまとまりに含めて考えることが可能である。

3期の土師器の特徴は高坏の出土数の減少、外反する口縁を持つ中小甕の出土量の増加、長胴甕の定着などがあげられる。

高坏の出土数は2期よりさらに減少する。種類は無稜直口高坏、有稜高坏、楕形高坏があり、無稜直口高坏が半数以上をしめる。坏部と脚部の接合方法は、中実の脚柱部を坏部に接合するcタイプで刺突を施すc+が最も多い。鉢は楕形3、鍋型5が新たに出現した。浅鉢形1bタイプは2期から継続して出土し、ほぼ同じ出土数を保っている。

中小甕は口縁部が外反するタイプbのみになり、出土数が増加している。3期の中小甕の資料は井戸底に埋納されていたものが多く、第12表の中小甕遺構別出土表をみると3期の甕は2期に比べると出土数は多いが全体に小さくなり、大きさ指数が1~5までの中小甕がまんべんなく出土している。

大型甕では2期まで存在していた布留系の口縁部をもつ大型球胴甕は出土数が減少し、新たに外反する口縁部形態bタイプで外面調整タテハケ3タイプの長胴甕が多数出現する。3期から出現する長胴甕は外面の煤の付着範囲がはっきりしているものが多く、口頸部よりやや下部から底部までに明瞭に煤が付着している。順を上にのせた後、蒸気が漏れないように長胴甕の口頸部を覆っていた可能性があり、そのためこの部分は煤があたらなかったと思われ、このように煤が付着しているものが数多く出土しているのは、長胴甕の使用方法が統一されて定着してきたことを示している。底部に丸く煤が付着していない部分を持つ長胴甕もあり、支脚をあてがっていたことがわかる。

須恵器系土器は出土数が増加し、高坏では坏部の形態A、B、脚部の形態a、bタイプがある。

製塙土器は出土数量が増大する。3期の主要遺構から出土したコップ形Aの総重量は約120kg、これは遺跡全体主要遺構からの出土量の9割を占めている。残存状態のよいコップ形Aの重量から推定した完全な形のコップ型1個の平均重量は約50gであり、コップ型Aの出土数はおおよそ2400個と推測できる。そのなかで外面調整が2ータタキありは約74kg、コップ形Aの7割以上がタタキありになり、2期に比較するとコップ形Aは全体の出土量は増大し、1ータタキなしと2ータタキありの割合は逆転してタタキがありが圧倒的に多く出土している。3期のコップ形製塙土器の出土状況をみると、砕かれた小片となり、炭とともに出土している例がみられる。小型製塙土器はコップ形の他に、鉢形タイプB—a~dのすべてのタイプが出現する。

須恵器はI型式3、4、5段階、主としてI型式4、5段階のものが共伴する。蓋坏、高坏、楕、鉢、甕、壺、器台の器種に加えてあらたに提瓶が出現している（第708図）。全体量は2期に比べると増大しており、器種別でみると、特に蓋坏、高坏、甕の出土量が多い。

(4) 韶屋北4期

4期は3期に比べると出土量、器種ともに減少する。4期を構成する土器群は、北西居住域土坑D1617、溝D986、区画溝B130670、大溝H11-2層、大溝D900-4層出土資料があげられる。

韓式系土器は出土量、器種ともに減少し、壺・甌では口縁形状cタイプとeタイプの資料があるが、ともに外面調整は平行タタキの上からナデをほどこしている。平底鉢は消滅する。

甌は口縁部の形状Cに加え、新たに口縁部が直立し、端部は丸く終わる形状Dが出現する。底部の形状は底体部境に稜がないy、蒸氣孔の形状はd、外面は6のハケ調整で仕上げられたもののみとなる。形態や技法の系譜から韓式系土器の項目において検討をすすめてきたが、外面調整にタタキ痕を残すものを狭義の韓式系土器とするならば、ハケ調整を主要技法とするこれらの甌は韓式系土器とは言えず、土師器の器種となったといえよう。鍋も、外面調整タタキを残すものはなくなり、3期から継続して存在する口縁部形態Bで底部の形状y、外面ハケ調整で仕上げられたもののみで、甌と同様鍋ももはや韓式系土器とは言えず、土師器の器種となったといえよう。

羽釜はこの時期良好な資料は出土していない。

移動式カマドは3期に比べて出土数が減少するが、細部の形状や調整においてさまざまなタイプが存在する。掛け口に平坦面を持つAタイプは2点出土している。1点は底の形状がyタイプの曲げ底をもつ資料である。曲げ底を持つ資料はこのタイプの資料のみである。この資料は外面調整は平行タタキがのこるがタタキの上からナデやオサエをおこない、タタキを部分的に消している。もう一点掛け口に平坦面をもつAタイプの資料があるが、外面体部中央と底部に円筒埴輪のタガのような突帯があり、外面調整は3のハケ調整である。また新たに掛け口形状B、Cで外面調整が3のハケ調整のものが出現する。掛け口形状Bタイプの出土例はxタイプの付け底である。掛け口形状Cタイプの出土例は、体部内面に補強目的の凸帯が上下方向につけられている。生駒西麓の胎土を持つが、他の生駒西麓産の胎土の色調が淡褐色～茶褐色を呈しているのと異なり、暗褐色を呈す。以上のように4期の移動式カマドは、細部の形状や調整が1種類であった3期に比べて、さまざまなタイプのものがある。

U字形板状土製品は3期と同様、突帯の形状Ⅲタイプで生駒西麓産の胎土を持つものが出土しているが、出土点数は激減し、全体の1割にも満たない。

土師器高坏は3期からさらに出土数が減少する。種類は有稜高坏と無稜直口高坏のみである。接合技法はa、c十に加えて、新たにcの中実の脚部を坏部に接合して刺突を加えないタイプが出現する。坏部と脚部の接合は技法の省略が進んだと想定できる。

鉢は、浅鉢形1、2、楕形3、鉢形4は3期から継続して存在する。鍋形5、6は出土が途絶える。

中小甌は3期に比べ全体の出土数が減少する。大きさ区分でみると、3期は大きさ区分1～5の甌が出土し、区分3の出土数が最も多いが、4期になると出土するのは大きさ区分4まで

で、区分2の甕の出土数が多い（第12表）。長胴甕は3期から継続して口縁部の形態bで外面調整3のタテハケのものが存在する。

須恵器系土器は3期と同じ出土傾向で、器種が高坏で脚部の形態a、bタイプが出土している。

製塙土器はコップ形Aの出土は3期から継続しているが、出土量は3期に比べ激減する。鉢形タイプBはaタイプ～cタイプまでが3期から継続して出土している。

4期に共伴する須恵器の年代はI型式4段階からII型式2段階まで、I型式5段階、II型式1段階が中心である。須恵器全体の出土量は3期にくらべ減少しており、器種別にみると、高坏、鉢の減少が目立つ（第708図）。

（5）藩屋北5期

5期は土器群を構成する器種が減少し単化していくが、4期で減少した全体の出土量は再び増加する。しかしこれは5期の期間が長いことも考慮しなければならない。

5期を構成する土器群は、北東居住域溝C2422、井戸D474、土器群C2401上部、大溝E090001最上層、D900-2層出土資料があげられる。

外面にタタキをほどこした土器は5期にはみられない。甕は口縁部形状Dタイプのみになり、蒸気孔はd、外面はハケ調整で仕上げられている。鍋は4期から継続して出土している口縁部形状Bタイプのみで、把手の付くものと付かないものがある。

羽釜は口縁部の形状Cで外面錫から下の調整がハケのものが新たに出現する。移動式カマドは口縁部形状D、付け庇、外面ハケ調整のものが新たに出現する。他のタイプは存在しない。羽釜、カマドともに外面にタタキをほどこした土器はみられず、完全に土師器の器種となったといえよう。

4期ではわずかながら出土していたU字形板状土製品の出土は5期に完全に途絶える。

上師器高坏は、4期とほぼ同量の出土数で、大型有段高坏、有稜高坏、無稜直口高坏がある。接合方法はすべて中実の脚柱部を坏部に接合し、刺突を施さないcタイプである。

鉢は1期から4期まで継続して出土していた浅鉢形1、2の出土が途絶え、新たに深鉢形7が出現する。

中小甕は出土量が減少し、大きさのバリエーションが少くなり、大きさ区分2、3の甕のみになる。長胴甕は口縁部の形態b3タイプが出現し、また器高の長大化が増して、器高40cmを超えるものもある。

須恵器系土器は器種高坏で脚部の形態cタイプの他、壺が出現する。全体の出土量は4期と変わらない。脚部や壺の外面には波状文が施されているものが出現する。

製塙土器は小型タイプの出土が途絶え、大型ポールCのみになる。

5期に共伴する須恵器の年代はII型式2～4段階まで、II型式2、3段階が中心である。須恵器全体の出土量は4期にくらべて増加しており、3期に匹敵する出土量である。これは5期の期

間が長いことも考慮しなければいけない。器種別にみると、蓋坏、甕、甌、壺、提瓶、器台があり、とくに蓋坏の出土量が多い（第708図）。4期まで出土していた高坏は5期には出土が激減する。高坏は須恵器だけではなく土師器においても4期から出土数が減少しているが、須恵器系土器の高坏だけは3期からほぼ途絶えることなく出土しており、土師器や須恵器の高坏の減少を補う機能を担っていたと想定できる。

7. 土器編年からみた渡来人の居住の実態

当遺跡から出土した古墳時代中・後期の土器を茆屋北1期～5期の5段階に分け、それぞれの土器群の特徴を検討し、特に、韓式系土器がどのように受容されて、変容し、土師器と同化するか分析、記述してきた。消長表に記載した各器種の代表的な出土例を茆屋北1期～5期の順に並べ、変遷図にしたもののが第709～714図である。

次に分析の結果から渡来人の居住の実態の様相を復元的に考察してみたい。まず1期～2期の韓式系土器は器種も壺、甕、平底鉢、甑と少なく、それぞれの器種においてタイプもさまざまで統一感がない。これは渡来人の移住が小規模で散発的なものであったことを示すようである。この時期の韓式系土器は当遺跡の北東、南東、南西、北西、西の5ヶ所の居住域どこからでも出土する。これは小数の渡来人が土師器を使用している在地人と共にこれまで集落がなかった各居住域に散在して移住し、暮らし始めたことを示すものであろう。竪穴住居からの出土例をみると韓式系土器は陶質土器、軟質韓式系土器を合わせても1～2点で、とくに軟質の韓式系土器は甑、甕、平底鉢などの炊飯関係の器種に限定され、蓋坏や高坏などの銘々器、食器は須恵器、土師器を使用している。2期には土師器の技法であるハケ調整で仕上げられた甑や長胴甕が出現しており、これは渡来系の人々が在地人と共に居住して、在地人と同化してきたことを示していると思われる。

3期の韓式系土器・土製品は、甕、甑に、新たに鍋、羽釜、移動式カマド、そしてU字形板状土製品が加わる。これらの器種は、口縁端部に面を持つなど細部の形態に共通性をもち、遺跡近隣の生駒西麓の粘土を使用して、平行タタキを施す等、同じ技法、同じ粘土により製作された齊一性のある韓式系土器の一群である。この韓式系土器の一群（710・711図の★印の資料）は北東、南西の居住域を中心に出土する。とくにU字形板状土製品の出土は北東居住域と南西居住域にほぼ限定される。新しい土器群の出現から3期には新たに渡来人の移住があったと推定できる。3期に移住した渡来人の集団は1期～2期に渡来した人々ととなり、北東、南西の居住域に集住し自分たちの集団の独自のスタイルの統一した土器を使用して居住しつつ、土師器を使用していた在地の人々と共存していったと思われる。3期に移り住んだ渡来人の人々はU字形板状土製品の系譜からみても、韓半島全羅南道宋山江流域と強いつながりをもつ人々とみて間違いないと思われる。U字形板状土製品の個体数を復元すると20個体弱となる。仮に一棟の建物に一個ずつU字形板状土製品が使用されていたとすると20棟の渡来系の人々の建物の存在が想定でき、規

模の大きい集団が移住していたといえるであろう。当遺跡は朝鮮半島との間で大人数の人の往来があり、恒にそれらの人々を受け入れる北河内における拠点集落の機能をもっていたと思われる。

4期は韓式系土器の統一したスタイルがなくなり、3期に爆発的に出土したU字形板状土製品はもはや消滅寸前であり、韓式系土器の器種の消長が始まる時期である。集落内の再編成がおこなわれていると想定でき、それが遺構や遺物の減少に現れているとおもわれる。

5期は韓式系土器の器種、甕、瓶、鍋、羽釜、移動式カマドは完全に土師器の器種として型式変化を遂げている。当遺跡においては土器の変容と並行して集落内の再編成がおこなわれたのではないかと想定できる。

以上茅屋北1期から5期の土器編年の中について詳述してきた。第2節以降では茅屋北土器編年に対応する遺構の分析・検討をおこない、遺構と遺物の両面からみた茅屋北遺跡の渡来人の居住の実態を明らかにしたい。具体的には1～3期とくに3期の渡来人の居住の実態、また5期の集落の再編成の内容について詳述していく。

第2節 古墳時代の遺構の検討とその変遷

1. はじめに

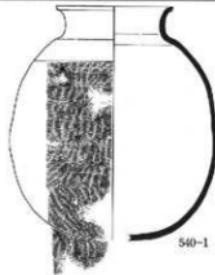
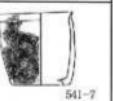
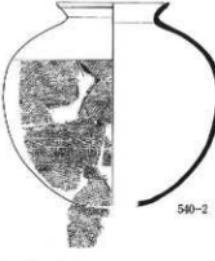
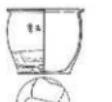
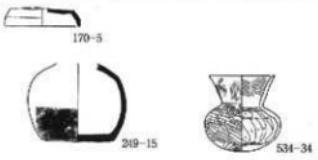
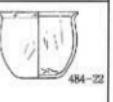
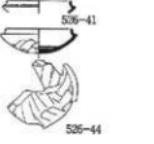
ここまで茅屋北遺跡から出土遺物した古墳時代中・後期の土器の様相を分析し、土器群の組成の特徴を抽出し、茅屋北1期～5期の編年作業をおこなった。その結果出土土器の様相をみると、1期と2期の渡来人の居住の実態と3期の居住の実態は大きく異なる。1期と2期は少数の渡来人が、北東、南西、南東、北西、西のすべての居住域に散在していたのに対し、3期に新たに居住した渡来人はほぼ北東、南西の居住域に限って居住している。この集団は規模の大きい集団で、韓半島全羅道榮山江流域と強いつながりのある集団であり、U字形板状土製品や移動式カマド、羽釜など故地の生活様式の一部を強く残した土器・土製品を使用して、居住していたことが判明した。

また4期には韓式系土器の消滅と在土地器への同化がすすみ、5期にいたる。5期では韓式系土器の器種は製作技法、調整などにおいて完全に土師器の器種となり、後述する遺構の変遷と合わせてみると、当遺跡においては土器の変容と並行して遺構にも変化が生じ、集落構造の再編成が完了したと思われる。

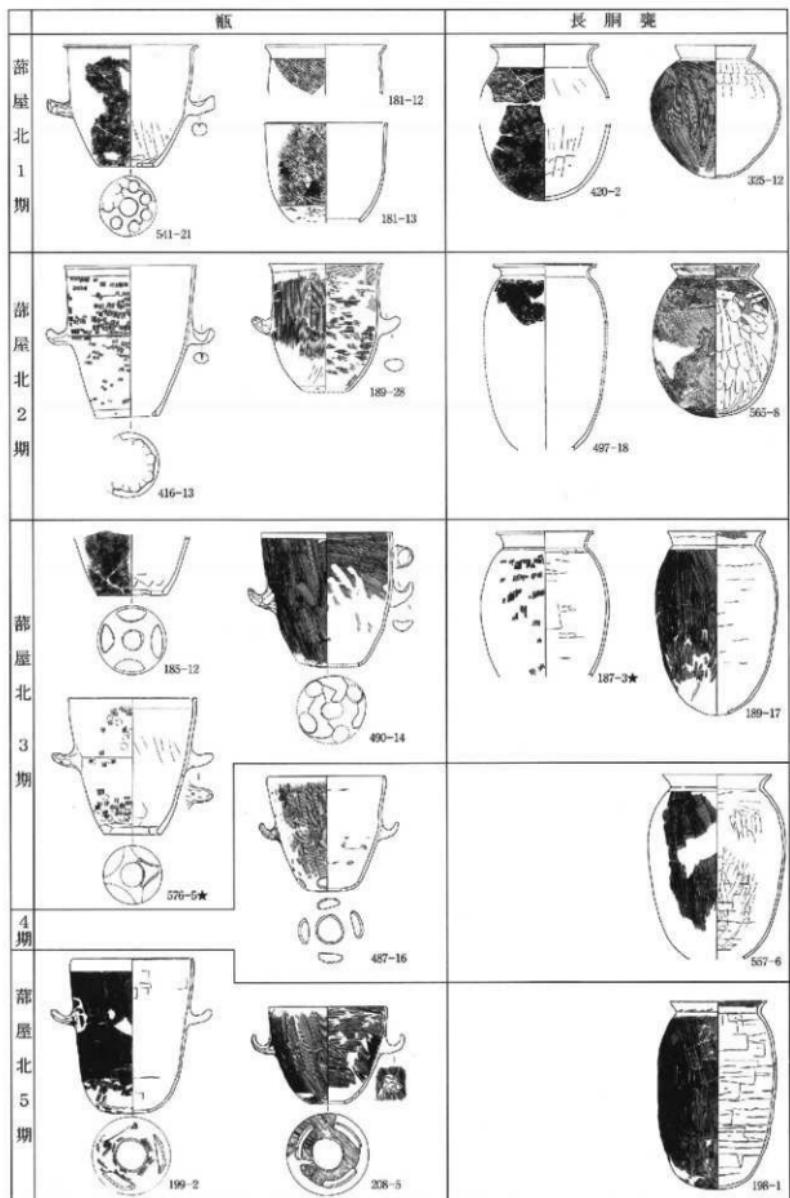
本節では、検出した遺構の具体的な内容を分析、検討し、出土土器の様相により設定した茅屋北1～5期の編年に照合し、遺構・遺物の両面からみた当遺跡の古墳時代の変遷をまとめることにする。

2. 大溝・区画溝と居住域の関係

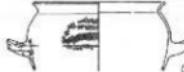
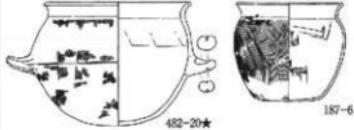
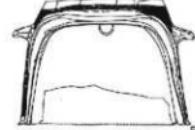
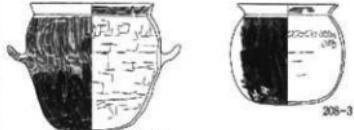
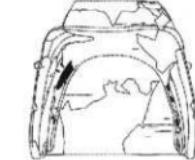
茅屋北遺跡の古墳時代中・後期の集落は溝によって区画された北東、南東、南西、北西、西の5ヶ所の居住域によって構成されている（第715図）。各居住域と大溝、区画溝の関係について

陶質土器		韓式系土器 平底鉢		
蔚屋北 1期	 <p>537-18 537-30 540-1</p>	 <p>545-18</p>	 <p>558-13</p>	 <p>541-7</p>
	 <p>540-2 181-2</p>		 <p>558-14</p>	
蔚屋北 2期	 <p>170-5 249-15 534-34</p>	 <p>558-9</p>	 <p>558-8</p>	 <p>463-7</p>
	 <p>577-25</p>			 <p>484-22</p>
蔚屋北 4期	 <p>526-41 526-44</p>	 <p>562-21</p>		

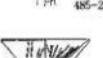
第709図 陶質土器・韓式系土器平底鉢 変遷図 (1/8)



第710図 瓶・長胴甕 变遷図 (1/10)

鍋	羽釜	移動式カマド・U字形板状土製品
 170-25		
 422-20★ 187-6	 566-2	 555★
 427-10	 494-8★	 611★
 222-20 208-3	 535-9	 598-2 602 600

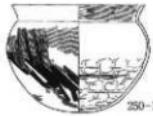
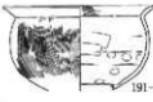
第711図 鍋・羽釜 (1/10)・移動式カマド・U字形板状土製品 変遷図

	大型有段高坏	有 稲 高 坏	無稲 外反 高坏
葫 屋 北 1 期		    	
葫 屋 北 2 期		 	
葫 屋 北 3 期		  	
葫 屋 北 4 期			
葫 屋 北 5 期			

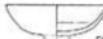
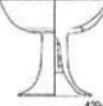
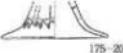
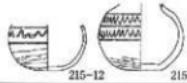
第712図-1 土器 高坏 変遷図 (1/8)

無棱直口高坏	椭形高坏
 182-5	 171-1 559-18
	 559-28
	 181-1
	 559-23
	 182-18
	 492-3
	 493-8
	 559-32
	 492-2
	 171-4
 485-6	 485-8
 485-9	 490-5
 427-2	 338-1
	 574-16
	 574-17

第712図-2 土師器 高坏 变遷図 (1/8)

		土 師 器 鉢				
蔚 屋 北 1 期						
						
蔚 屋 北 2 期						
						
						
						
蔚 屋 北 3 期						
						
						
蔚 屋 北 4 期						
						
						
蔚 屋 北 5 期						

第713図 土師器 鉢 変遷図 (1/8)

須恵器系土器		製塙土器	
菖屋北1期		 182-16	 420-1
菖屋北2期	 183-14  505-8	 339-21	 580-32
菖屋北3期	 186-18  186-19  184-12  490-7	 344-55	 580-33
菖屋北4期		 574-29  574-30	 580-18  339-11
菖屋北5期	 429-17  524-32  175-20  464-12  215-12  215-13	 504-9	

第714図 須恵器系土器 (1/8)・製塙土器 変遷図

その概要を記述する。

南西居住域と西居住域、北西居住域の西側には北西から南東方向の大溝があり居住域を画している。大溝の検出面からの最大深さは1.7m前後で、調査地内で最も北西のH地区ではこの大溝の西側の肩を検出し、南西居住域、西居住域、北西居住域では東側の肩を検出している。北西居住域では大溝の東肩に杭が打ち込まれており、溝と集落を区切る柵列が存在していたことがわかる。それぞれの居住域の現地調査の段階では大溝という統一した名称ではなく別々の遺構名称、遺構Naがつけられていたため、本報告書では各居住域での現地調査時での遺構Naと層序を記載し、今後の検証の資料にしている。また4ヶ所で検出した大溝の層序を対照し、蔚屋北1期～5期に編年したものが第15表である。出土した遺物の年代からみて大溝は5世紀後半の蔚屋北3期の段階で徐々に埋まっていき、6世紀後半の蔚屋北5期の段階ではほぼ埋没したといえる。埋没した後は居住域を示す段差が残っていたと思われる。南西居住域と西居住域では大溝より西側に集落遺構は検出されていないことから、大溝は両居住域付近では集落の西限を示しているといえる。最北西の調査区のH地区では大溝西側から遺物が廃棄された状況をしめしており、北西居住域の西側には大溝を挟んで対岸に居住域がさらに広がっている可能性が高い。

北西居住域と北東居住域の間には南北方向の溝D767があり、居住域を画している。溝D767は幅25～30mの深い谷地の最低部で検出した。遺物はほとんど出土していない。

北東居住域と南西居住域の間には北西から南東方向の溝B130240（上部溝は溝130670）と溝A950があり、居住域を画している。二つの溝は同一の溝で北半のB調査区で検出された溝が溝130240、南半のA調査区で検出された溝をA950と呼称している。幅2～5m、検出面からの深さは60cm前後で、大量の遺物が出土した。

南西居住域と南東居住域の間には北西から南東方向の溝A428があり、居住域を画している。幅20～25m、検出面からの深さは1m前後で、少量の遺物が出土した。

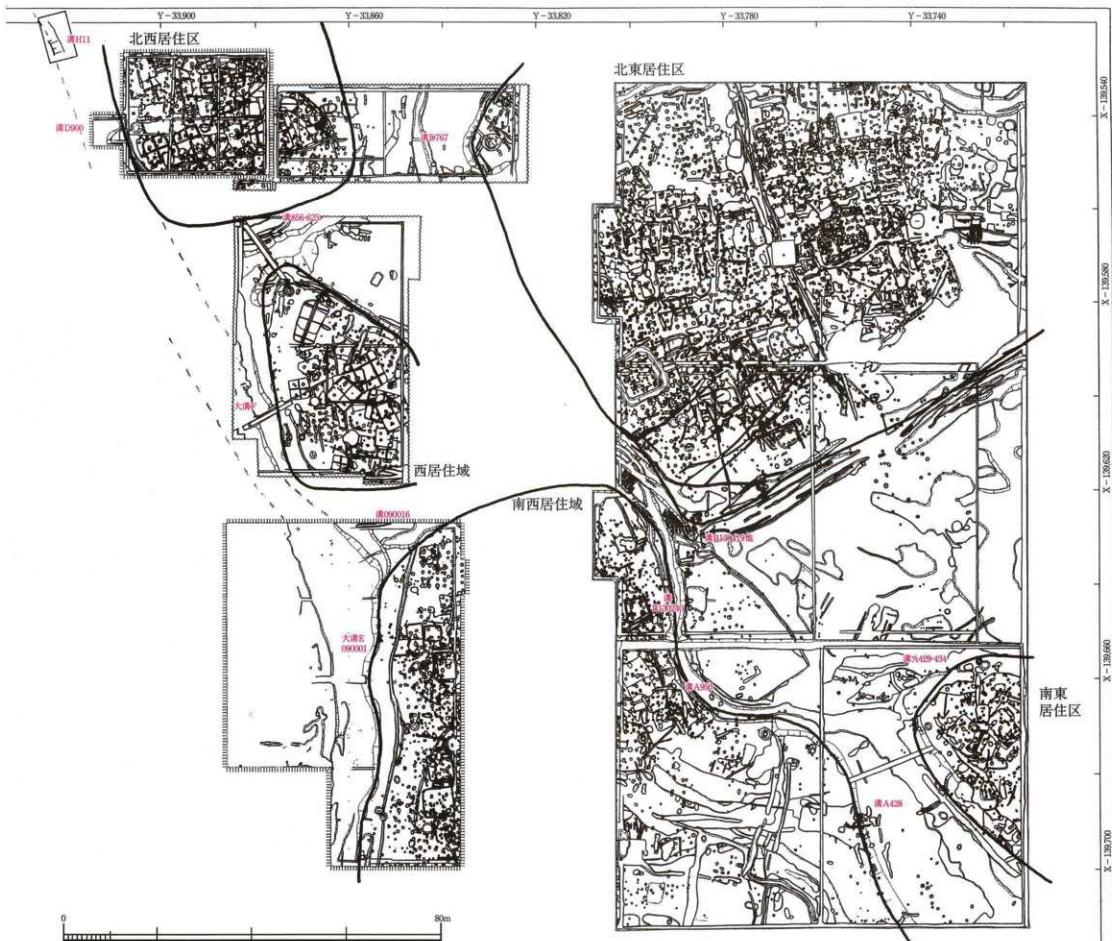
南東居住域の北限を画するのは溝A429で、幅2.2～6m、深さは60cm前後である。

北東居住域の南東限を区画するのは溝B130406、溝B130417、溝B130419、溝B130107等で、溝幅0.5～1mの溝が平行して何条も掘削されている。中央に一ヶ所溝が途切れている箇所があり、北東居住域の出入口にあたると思われる。

北東居住域の南側、南東居住域北側の区画溝A429までの間はなだらかな傾斜面で、東端がもっとも標高が低い。遺構はほとんど検出しておらず、本報告書では居外地区としてあつかっている。

南西居住域の北側を区画するのは溝E091006、北西居住域の南側を区画するのは溝F856、625で共に遺物が出土している。

以上の区画溝と各居住域との対応関係、及びそれぞれの区画溝の出土遺物の時期をまとめたものが、第16表である。第16表の表中で、西限と記入しているのは、その区画溝がその居住域の西限になることを示している。出土した遺物の年代からみるとすべての区画溝はおおむね5世



第715図 居住域全体図 (1/800)

第15表 現地調査時の大溝の遺構No・層序と蔀屋北縛年との関係

出土土器の時期	II調査区 溝11		北西居住域 溝D900		西居住域 人溝F、谷F1		南西居住域 大溝E090001	
	層序	共伴する 須恵器	層序	共伴する 須恵器	層序	共伴する 須恵器	層序	共伴する 須恵器
蔀屋北5期	1層	II-2~3	1・2層	II-2~3	谷1	II-2~3	最上層- 谷7下、谷6、 谷6跡	II-2~3
蔀屋北4期	2層	II-2~ I-5	3・4層	II-2~ I-5	上層	II-1~ I-4	上層-谷7	II-1~ I-4
蔀屋北3期	3層	I-3、4	5層	I-3、4			中層-谷7下、 谷3上	I-2~4
蔀屋北2期	4層	I-2、3	6層	I-2、3	中層a	I-3		
蔀屋北1期	5層	I-2以前	7層		中層b、 下層	I-2、 I-2以前	下層-谷3	I-2以前
	5層下位	布留・庄内					弥生後期・ 古墳前期の 溝	

第16表 区画溝と各居住域との対応関係

出土遺物の時期	区画溝No	北東居住域	南西居住域	南東居住域	北西居住域	西居住域
	区画溝D767	西限			東限	
蔀屋北2~4期	区画溝B130419他	南東限				
蔀屋北3期	区画溝B130240	南西限	北東限			
蔀屋北2~3期	区画溝A950		北東限			
蔀屋北1~3期	区画溝A428		東限	西限		
蔀屋北1~3期	区画溝A429・434			北限		
蔀屋北2期	区画溝E090016		北西限			
蔀屋北2期	区画溝F856・625				南限	北限

紀末には埋没していることが推定できる。区画溝が埋没した後は居住域の境界を示す段差は残っていたと思われる。

3. 居住域の立地条件

次に5ヶ所の居住域の立地条件、面積等について説明する。

北東居住域は調査地内でもっとも大きい面積を占める。B、C、D調査区にかかり、南西限と南東限は判明しているが、北東限と北西限は調査地外に広がる。全域は不明であるが、B、C調査区とD調査区間の未調査部分も含めて、調査地内の北東居住域の面積は約8200m²で、現在判明している居住域では最大規模で、調査地外をあわせれば、更に大きい面積になる。平面形は方形になり、溝で区画された方形の居住域となる。居住域の南東部は傾斜面であり、C調査区では南東谷と呼称していたが、引き続き調査されたB調査区の調査においてA調査区まで続く傾斜面であることが判明した。北東居住域は、この傾斜面も一部居住域に含んでおり、方形の居住域を強く意識して区画していると推定できる。居住域内はさらに南南東から北北西方向に幅が50cm前後の小溝を連続して検出しており、5世紀代はこの小溝群を境界にして居住域内は東西に二分されていたと思われる。この居住域内の区画と居住域の南東限が交差するところが北東居住域の南東の出入り口になっている。古墳時代遺構面の標高はT.P.1.5~2mで、各居住域の中で最も高く居住適地といえる。

南西居住域はA、B、E調査区にまたがり、西限、北限、東限は判明しているが、南限は調査地外になり、全域は不明である。A、B調査区とE調査区の間の未調査部分も含めて、調査地内の南西居住域の面積を推定計算すると、約7200m²になり、北東居住域に次ぐ大きさとなる。平面形は不整形で自然地形に即している。古墳時代遺構面の標高はT.P.1m前後である。

南東居住域はA調査区内にあり、西限と北限は判明しているが、東限は調査地外になり、全域は不明である。平面形は不明であるが、調査区内で検出したエリアを北西隅とすれば、方形の居住域の可能性もある。調査地内の南東居住域の面積は約780m²である。古墳時代遺構面の標高は南西居住域と同じくT.P.1m前後である。

北西居住域はD調査区内にあり、西限、南限、東限は判明しているが、北限は調査地外になり、全域は不明である。平面形は方形の可能性もある。F調査区との間の未調査部分も含めて、北西居住域の面積を推定計算すると約1500m²になる。古墳時代遺構面の標高はT.P.1~1.5mである。

西居住域はF調査区内にあり、西限、南限、北限は判明し、東限も調査地内で推定でき、唯一全域がわかる居住域である。未調査部分も含めた面積を推定計算すると約1260m²となる。平面形は不整形で自然地形に即している。古墳時代遺構面の標高はT.P.1.5m前後で北東居住域について標高は高い。これは北東居住域が立地している北東から南西にのびる微高地が西居住域に派生しており、その上に立地しているためと思われる。

4. 居住域内の検出遺構

居住域で検出された遺構群のうち集落の特色を端的に示す竪穴住居、住居、倉庫を含む掘立柱建物の建物遺構そして井戸についてその内容を検討する。その他、土坑については主要なものを取り上げる。

建物遺構は切り合い関係と出土遺物により部屋北2期～5期に編年した。部屋北1期の建物遺構は検出していない。部屋北編年2期～5期のうち、4期と5期はそれぞれ須恵器編年により前半・後半に細分し、2期、3期、4期前半、4期後半、5期前半、5期後半に6区分した。出土遺物を整理した結果、先年に刊行した概要報告書と本報告書とで時期区分が異なり、所属時期が修正されている建物があることを断っておく。2期か3期かの細分はできなかった建物遺構は、2・3期、4期前半か後半か細分できなかった建物遺構は4期、同じく5期前半か後半か細分できなかった建物遺構は5期に区分している。

(1) 竪穴住居

検出した総数73棟の竪穴住居の一覧表が第17表である。第17表ではすべての竪穴住居を各居住域、部屋北2～5期後半の順にならべ、個々の竪穴住居の規模、平面形、長辺の方位等のデータを掲載した。第17表には時期のまったく判別できなかった竪穴住居や、5世紀か6世紀かの区分は可能であるが、それ以上詳しい時期区分は不可能な住居もふくんでいる。時期のまったく判別できなかった住居を除いた竪穴住居の検出棟数は65棟となる。65棟それぞれの竪穴住居を居住域毎、時期別に分類したのが第18表である。

時期別にみると、2期が最も多く19棟、3期が10棟、4期前半、4期後半はそれぞれ2、3棟と棟数は減少していくが、5期前半の検出棟数は6棟と増加し、5期後半は5棟検出している。2・3期と4期、5期の3区分で検出棟数の増減をみると32棟→11棟→22棟と変化しており、4期に一旦減少するものの5期に増加していることがわかる。

一旦時期別を取捨し、居住域ごとにその数をみると北西居住域が21棟で最も多く、次に多いのは、西居住域で16棟を数える。南東居住域の4棟はすべて2期に属するもので、これ以後南東居住域では、竪穴住居は検出していない。北東居住域も5期に属する竪穴住居は検出していない。

次に竪穴住居の平面形の規模を比較するために、長辺×短辺を算出し、次の2～6類に分類した。2から分類したのは、掘立柱建物では平面形1類-10m²以下から分類できるが、竪穴住居では平面形1類は存在しないからである。

- ・2類-10m²以上20m²未満（極小規模）
- ・3類-20m²以上30m²未満（小規模）
- ・4類-30m²以上40m²未満（中規模）
- ・5類-40m²以上50m²未満（大規模）
- ・6類-50m²以上（特大規模）

建物規模に基づき、各時期の居住域ごとの棟数を調べたものが第19表である。

時期別にみると、2期では北東、南東居住域の竪穴住居は規模が30m以上の大・中規模の竪穴住居、特に北東居住域では特大規模の竪穴住居が検出されているが、同じ2期に北西、西の居住域では中・小規模の竪穴住居しか検出されていない。特に西居住域で検出された竪穴住居6棟はすべて極小規模の2類である。

3期以降には南東居住域で竪穴住居は検出されていない。北東居住域と北西・西居住域の竪穴住居の規模の格差は2期と同じ状態が続き、北東居住域では規模が30m以上の中規模の竪穴住居が検出されているが、北西、西の居住域では規模が30m未満の小・極小規模の竪穴住居しか検出されていない。2期に小規模の竪穴住居が1棟しか検出されなかった南西居住域は3期になると平面規模が2~5の大・中・小のすべての竪穴住居が1棟ずつ検出されるようになる。

4期では北東、南西、北西の居住域では規模が2~4の中・小・極小規模の竪穴住居が検出されている。しかし西居住域では2・3期と変わらず20m未満の極小規模の竪穴住居しか検出されていない。

5期になると居住域ごとの竪穴住居の平面規模は大きく変化する。これまで規模の大きな竪穴住居が検出された北東居住域で、竪穴住居が検出されなくなる。これに対して規模の小さい竪穴住居しか検出されていなかった西居住域で規模が3~6の中~特大の竪穴住居が検出されるようになる。南西居住域は4期と変わらず、5期でも2~5の小・中・大規模の竪穴住居が検出されている。北西居住域は5期では2、3の極小・小規模の竪穴住居のみが検出されている。

以上、居住域ごとの竪穴住居の棟数や規模について検討した結果、当遺跡の古墳時代竪穴住居は集落成立当初の2期から、北東居住域では大規模の建物が出現しているのに対し、北西・西居住域では中~極小規模の建物のみという規模の格差をもって存在していることが判明した。居住域ごとの規模の差は4期まで続くが、5期に至るとこれまで小規模な竪穴住居のみ検出していた西居住域で特大規模の竪穴住居が出現し、居住域間の差に変動があることが判明した。

(2) 挖立柱建物

検出した総数84棟の掘立柱建物の一覧表が第20表である。第20表ではすべての掘立柱建物を各居住域、藤原北2~5期後半の順にならべ、個々の掘立柱建物の規模、束柱の有無、柱間寸法・面積等のデータを掲載した。柱材を検出した柱穴数や、検出した柱の直径、さらに柱材が丸太材ではなく、芯去材の場合はその本数を記入している。礎板やワラ材を検出した柱穴数も記入した。礎板については敷きこまれた状態を次のA~Dの4種類に分類した。

A-柱穴の底一面に板材が1枚整然と敷きこまれている。

B-柱穴の底に部材が1枚敷きこまれている。

C-一つの柱穴に複数枚の部材が積み重ねられたり、並べられたりして用いられている

D-柱の根固めに部材がすえてある。

第20表には5世紀か6世紀かの区分はできたが、それ以上詳しい時期の細分は不可能な掘立柱建物もふくんでいる。84棟の掘立柱建物の、各居住域の、時期別の棟数を示したのが第21表

第17表-1 積穴住居一覧表

居住域	調査区	時期	調査区 内建物 No.	遺構No.	一辺の長さ (m)		長辺× 短辺 (m ²)	最大 深さ (cm)	平面形	長辺の方位	カマドNo.
					長辺	短辺					
1 北東	C	2期		2484	(6.7)	6.6	15	長方形	N - 10° - W	-	-
2 北東	C	2期		3217	5.2	5.2	27.04	18	隅丸方形	N - 25° - W	-
3 北東	C	2期		3333	6.8	6.7	45.56	14	方形	N	-
4 北東	C	2期		3767	8.5	6.8	57.80	15	長方形	N	-
5 北東	C	2期		3840	5.8	5.7	33.06	10	隅丸方形	N - 5° - W	-
6 北東	C	3期		3770	5.2	5	26.00	13	隅丸方形	N - 40° - W	-
7 北東	C	3期		3818	6.2	5.7	35.34	19	隅丸長方形	N - 22° - W	-
8 北東	C	3期		3888	6.2	6.2	38.44	16	隅丸方形	N - 41° - W	-
9 北東	C	2、3期		4040	(3.7)	(20)	-	10	-	-	-
10 北東	B	4期		130902	4.6	4.4	20.24	10	隅丸方形	N - 25° - W	-
11 北東	C	4期		2440	6.3	5.7	35.91	7	隅丸長方形	N - 20° - W	-
12 北東	C	4期		1693	5.2	5.2	27.04	8	隅丸方形	N - 6° - W	-
13 南東	A	2期	1	430	7.2	5.7	41.04	15	長方形	N - 40° - W	-
14 南東	A	2期	2	500	6.7	5.4	36.18	10	長方形	N - 44° - E	-
15 南東	A	2期	3	523	(4.8)	(3.2)	-	-	方形	N - 25° - E	-
16 南東	A	2期	4	658	(6.0)	(2.2)	-	-	方形	N - 27° - E	-
17 南西	E	2期	1	090040	4.4	3.8	16.72	14	隅丸方形	E - 7.5° - N	090600
18 南西	B	3期		130475	5.7	5.4	30.78	20	方形	N - 8° - W	-
19 南西	E	3期		6090710	4.3	4.18	17.97	16	隅丸方形	N - 2° - E	090720
20 南西	E	3期		8090358	5.5	5.4	29.70	8	方形	N - 15° - W	090442
21 南西	E	3期		9090356	6.58	6.12	40.27	10	方形	N - 6° - W	-
22 南西	E	4期		3090161	3.7	3.6	13.32	20	隅丸方形	N - 3° - E	-
23 南西	E	4期		5090709	6	4.82	28.92	8	隅丸長方形	E - 6° - N	090719
24 南西	E	5期		7090222	4.78	4.3	20.55	6	方形	N - 60° - W	090603
25 南西	E	5期		10080120	3.5	3.2	11.20	-	隅丸方形	N - 5° - W	-
26 南西	A	5期	5	1011	6.1	5.8	35.38	20	方形	N - 31° - W	-
27 南西	A	5期	6	1012	5.2	3.8	19.76	20	長方形	N - 30° - W	-
28 南西	E	5期		2090200	6.5	6.5	42.25	10	方形	W - 3° - S	-
29 南西	E	5期		4090220	6.94	4.3	29.84	10	長方形	E - 2° - N	090601
30 北西	D	2期	14	1236	3.45	(3.5)	-	-	方形	-	-
31 北西	D	2期	16	1030	3.7	3.5	12.95	5	方形	-	-
32 北西	D	2期	8	1222	5.78	5.42	31.33	10	隅丸方形	E - 38° - N	1573
33 北西	D	3期	18	1113	4.9	(4.2)	-	-	方形	-	1534
34 北西	D	3期	25	1378	5.25	(4.8)	-	15	方形	E - 14° - N	1598
35 北西	D	2、3期	1	984	4.1	4.1	16.81	10	隅丸正方形	N - 17.5° - W	1645
36 北西	D	2、3期	3	1070	5.85	5.8	33.93	20	隅丸方形	E - 28° - N	1646
37 北西	D	2、3期	5	901	(5.0)	(3)	-	18	隅丸方形	N - 9° - E	1647
38 北西	D	4期	12	1000	5.3	(3.4)	-	10	方形	N - 23° - E	-
39 北西	D	4期	13	1235	4.6	(3.5)	-	16	方形	W - 5° - S	-
40 北西	D	4期	2	978	5.75	5.6	32.20	20	隅丸方形	N - 26° - E	1435
41 北西	D	4期	4	1088	5.05	4.85	-	13	方形	N - 33.5° - E	1469
42 北西	D	5期	10	1025	(4.9)	(3)	-	15	方形	N - 65.5° - E	-
43 北西	D	5期	11	1024	(2.9)	(1.4)	-	16	方形	N - 45° - S	-
44 北西	D	5期	15	1028	4.9	4.9	24.01	21	方形	N - 64.6° - E	1434
45 北西	D	5期	19	1110	4.45	4.43	19.71	8	方形	N - 18.5° - W	1103
46 北西	D	5期	23	1221	4.9	4.6	22.54	14	隅丸方形	N - 14° - W	-
47 北西	D	5期	27	547	(4.5)	(4.0)	-	8	方形	N - 19° - E	-
48 北西	D	5期	20	1112	4.7	5.4	25.38	4	方形	-	1114
49 北西	D	5期	28	860	-	-	-	12	方形	N - 26° - E	-
50 北西	D	5期	29	861	-	-	-	13	方形	N - 35° - E	-
51 北西	D	-	9	1237	3.6	3.15	11.34	10	-	N - 26° - W	-
52 北西	D	-	17	1100	(4.6)	(1.2)	-	-	-	E - 10° - N	-
53 北西	D	-	21	1238	-	-	-	-	-	-	-
54 北西	D	-	22	-	-	-	-	-	-	-	-
55 西	F	2期	7	930	4.06	4	16.24	12	隅丸方形	N - 4° - E	931
56 西	F	2期	8	935	3.5	3.18	11.13	20	隅丸方形	N - 78° - W	1133
57 西	F	2期	9	755	4.35	4.25	18.49	17	方形	N - 12° - W	1105
58 西	F	2期	10	1000	3.4	3.1	10.54	24	隅丸方形	N - 11° - E	1117
59 西	F	2期	16	1289	4	3.84	15.36	-	方形	N - 15° - W	1303

第17表-2 壁穴住居一覧表

居住域	調査区	時期	調査区 内建物 No.	遺構No.	一辺の長さ (m)		長辺× 短辺 (m)	最大 深さ (cm)	平面形	長辺の方位	カマドNo.
					長辺	短辺					
60 西	F	2期	19	1134	4.5	3.7	16.65	-	隅丸長方形	N-15°-W	
61 西	F	3期	12	1099	4.18	3.72	15.55	24	隅丸方形	N-3°-E	1068
62 西	F	4期	14	1219	4.5	4.4	19.80	23	方形	N37°-E	
63 西	F	4期	15	1190	3.8	(3.4)	-	-	隅丸方形	N	1434
64 西	F	5期	1	900	5.82	5.7	33.17	26	方形	N-49°-W	987
65 西	F	5期	2	920	6.04	6	36.24	25	方形	N-26°-W	965
66 西	F	5期	3	727	5.76	-	0.00	28	方形	N-18°-E	1033
67 西	F	5期	4	915	6.6	-	0.00	30	方形	N-13°-E	916
68 西	F	5期	5	921	5.26	5.1	26.83	-	方形	N-11°-W	
69 西	F	5期	11	991	7.4	5.06	37.44	15	長方形	-	
70 西	F	5期	13	950	7.7	7.5	57.75	-	方形	N-27°-W	982
71 西	F	-	6	1044	-	-	-	-	-	-	
72 西	F	-	17	1231	-	-	-	-	-	-	
73 西	F	-	18	1232	-	-	-	-	-	-	1534

第18表 壁穴住居 時期別・居住域別棟数集計表

部屋北偏年 時期区分	2期	3期	2、3期	4期前半	4期後半	4期	5期前半	5期後半	5期	合計
	I-3 (4)	I-4	I-3· 4	I-5	II-1	I-5、 II-1	II-2· 3	II-4	II-2~ 4	
北東居住域	5	3	0	2	1	0	0	0	0	11
南東居住域	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
南西居住域	1	4	0	0	0	2	0	2	4	13
北西居住域	3	2	3	0	2	2	6	1	2	21
西居住域	6	1	0	0	0	2	0	2	5	16
合計棟数	19	10	3	2	3	6	6	5	11	65

第19表 壁穴住居 建物規模別棟数集計表

部屋北偏年 時期区分	2期	3期	2· 3期	4期 前半	4期 後半	4期	5期 前半	5期後 半	5期	棟数合計
	I	I	I	I	II	I II	II	II	II	
須恵器編年										
3 (4)	4	3·4	5	1	4	1	2·3	4	2~4	
平面形の大きさ	2	3	4	5	6	2	3	4	2	3
北東居住域	1	1	1	1	1	2	1	1	1	10
南東居住域		1	1							2
南西居住域	1			1	1	1	1		1	13
北西居住域	1	1		1	1	1	1	1	2	12
西居住域	6		1			1			2	13
棟数合計	8	1	3	2	1	3	3	3	1	50

である。

時期別に検出した棟数を検討する。2期の掘立柱建物は4棟、3期の掘立柱建物は8棟、2期と3期に細分できなかった2・3期の掘立柱建物の9棟を加えると2、3期で21棟の掘立柱建物を検出している。4期前半は4棟、4期後半は5棟、4期の前半、後半に細分できなかつた15棟の掘立柱建物を加えると4期全体で24棟の掘立柱建物を検出している。5期前半は10棟、5期後半は8棟、5期の前半、後半に細分できなかつた21棟の掘立柱建物を加えると、5期全体で39棟の掘立柱建物を検出している。2、3期と4期、5期の3区分で検出棟数の増減をみると21棟→24棟→39棟と増加しており、掘立柱建物の検出棟数は5期が最も多いことがわかる。

一旦時期別を捨てし、居住域ごとに検出した棟数を検討する。最も多く掘立柱建物が検出されたのは北東居住域で43棟を数え、全体の検出棟数84棟の約半数を占める。統いて北西居住域で16棟、南西居住域で13棟、西居住域で10棟、南東居住域で2棟を検出している。これを床面積で比較したのが第22表である。第22表では東柱の有無で集計を分けている。北東居住域で検出した掘立柱建物の総床面積は1045.3m²で、検出した全ての掘立柱建物の総床面積1597.7m²に占める割合は65%となる。検出棟数は全体の約半数であるから、北東居住域はより規模の大きい掘立柱建物を検出していることがわかる。

掘立柱建物の平面形の規模を詳細に検討するため、竪穴住居と同様、梁間×桁行=床面積を算出し、次の1～5に分類した。

- ・ 小規模 1類-10m²未満 2類-10m²以上 20m²未満
- ・ 中規模 3類-20m²以上 30m²未満 4類-30m²以上 40m²未満
- ・ 大規模 5類-40m²以上 50m²未満 6類-50m²以上

また平面形のプランを次のa～cに分類した。

a-東柱が無い掘立柱建物

b-東柱が有る総柱建物で、梁間が2間×桁行3間以上のように梁間と桁行の間数が異なる平面プランを持つ総柱建物

c-東柱が有る総柱建物で、梁間と桁行の柱間数が例えば2間×2間、3間×3間のように同じ間数の総柱建物

bプランとcプランを分けた理由は、bプランの総柱建物には住居建物が含まれる可能性が想定したからである。一般的に総柱建物は倉庫としての用途が考えられているが、当遺跡においてはすべての総柱建物が倉庫ではない可能性がある。一例を挙げると、第20表No.10の北東居住域で検出した梁間3間×桁行4間の掘立柱建物C25は外回りの柱穴全てから礎板を検出しているが、東柱の柱穴からは礎板は出土しておらず、重量物を保管する倉庫とするより、住居建物の可能性が高い。

第23表は各時期にどの規模のどのプランの掘立柱建物が出現するか、居住域ごとの棟数を調べたものである。

第20表-2 挖立柱建物一覧表

居住域 区域	時期	建物No.	規模 東柱の有無	梁間平均		柱間平均		面積 壁幅 平均	検出した柱穴 柱根の平均数 柱根の平均根 大径	芯去材 の有無	機板を 検出した柱穴 の有無	機板の 状態	ワラ材 を検出 した柱 穴数
				行距 平均	柱間 平均	m	m						
				間	m	m	m						
65 北西 D 4期	7	2×2	有	3.39	3.50	1.70	1.75	11.87	9	0	-	0	0
66 北西 D 4期	8	3×3	有	4.78	6.30	1.59	2.10	30.11	11	0	-	0	2 C 0
67 北西 D 5期	1	3×3	-	5.11	6.19	1.70	1.77	31.60	14	0	-	0	0
68 北西 D 5期	3	2×(2)	有	-	1.74	1.81	-	9	0	-	0	0	0
69 北西 D 5期	5	3×3	-	1.06	4.95	1.35	1.65	20.07	12	0	-	0	0
70 北西 D 5期	6	3×3	-	4.61	5.31	1.54	1.77	24.48	12	3	13	0	0
71 北西 D 5期	9	2×2	-	3.03	4.03	1.51	2.02	12.19	8	7	10.7	0	0
72 北西 D 5期	11	2×2	有	3.42	3.63	1.71	1.81	12.41	9	0	-	0	0
73 北西 D 5期	16	2×(3)	-	-	1.52	1.77	-	7	0	-	0	0	0
74 北西 D 5期後半	2	3×4	-	4.60	6.41	1.53	1.60	29.43	14	0	-	0	0
75 西 F 2~3期	5	2×3	-	3.23	4.08	1.62	1.36	13.16	10	1	0	0	0
76 西 F 2~3期	6	3×(4)	-	-	1.27	1.22	-	9	0	-	0	0	0
77 西 F 4期前半	3	2×2	有	3.20	3.48	1.60	1.74	11.14	8	0	-	0	0
78 西 F 5期	4	2×2	有	3.60	4.33	1.80	2.16	15.55	9	0	-	0	0
79 西 F 5期	1	3×(2)	-	-	1.40	1.67	-	7	1	0	-	0	0
80 西 F 5期	2	3×3	-	4.18	4.94	1.39	1.65	20.63	11	0	-	0	0
81 西 F 5期	7	3×3	有	4.34	4.52	1.45	1.51	19.59	16	0	-	0	0
82 西 F 5期	8	2×2	-	3.12	3.99	1.56	2.00	12.45	8	0	-	0	0
83 西 F 5期	9	2×3	有	4.07	4.73	2.03	1.57	19.21	10	0	-	0	0
84 西 F 5期	10	3×3	-	4.71	5.01	1.57	1.67	23.55	12	0	-	0	0

第21表 挖立柱建物 時期別・居住域別棟数集計表

部屋北偏年時期区分	2期	2、3期	3期	4期前半	4期	4期後半	5期前半	5期	5期後半	合計
須鹿器編年	I - 3 (4)	I - 3、4	I - 4	I - 5	I - 5 ~ II - 1	II - 1	II - 2、3	II - 2 ~ 4	II - 4	
北東居住域	2	2	8	3	5	3	10	3	7	43
南東居住域	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
南西居住域	0	1	0	0	6	2	0	4	0	13
北西居住域	0	4	0	0	4	0	0	7	1	16
西居住域	0	2	0	1	0	0	0	7	0	10
合計	4	9	8	4	15	5	10	21	8	84

第22表 挖立柱建物 時期別・居住域別床面積集計表

部屋北偏年時期区分	2期	2、3期	3期	4期前半	4期	4期後半	5期前半	5期	5期後半	
須鹿器編年	I - 3 (4)	I - 3、4	I - 4	I - 5	I - 5 ~ II - 1	II - 1	II - 2、3	II - 2 ~ 4	II - 4	
東柱の有無	東柱有	東柱無	東柱有	東柱無	東柱有	東柱無	東柱有	東柱無	東柱有	合計
北東居住域	50.6	0.0	36.8	133.5	15.8	73.1	21.5	31.3	79.0	18.2 262.0 68.8 38.2 0.0 194.9 21.6 1045.3
南東居住域	30.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0 0.0 0.0 0.0 30.0
南西居住域	0.0	0.0	17.8	0.0	0.0	16.7	38.3	26.3	0.0	0.0 53.5 12.5 0.0 0.0 165.1
北西居住域	0.0	4.0	17.8	0.0	0.0	12.5	42.0	0.0	0.0	0.0 88.3 12.4 29.4 0.0 206.4
西居住域	0.0	13.2	0.0	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	15.6	0.0 0.0 56.6 54.4 0.0 0.0 150.9
合計	80.6	17.2	72.4	133.5	15.8	84.2	50.7	111.6	105.3	33.8 262.0 68.8 236.6 79.3 224.3 21.6 1597.7

第23表 堀立柱建物 建物プラン・規模別棟数集計表

蔵屋北編年時期区分	2期	2・3期	3期	4期前半	4期	4期後半	5期前半	5期	5期後半	
須恵器編年	I	I	I	I	I II	II	II	II	II	
	I	I	I	I	I I	I	I	I	I	
	3 (4)	3·4	4	5	4 1	1	2·3	2~4	4	
平面形の大きさ	2	3	2 1	2 3 4	2 3 5 1	2 3 4 2 3 4 5	2 3 4 5	2 3 4 5	2 3 4 3 4	機数合計
a プラン 北東居住域 束柱無				1	1	1	1 1	4 3 2	1 5	20
b プラン 北東居住域束柱有 2×3、2×4間の建物	2	2	2 2 1	1	2					12
c プラン 北東居住域束柱有 2×2、3×3間の建物			1 1			1	1 2		1	7
a プラン 南東居住域 束柱無	1									1
c プラン 南東居住域束柱有 3×3間の建物	1									1
a プラン 南西居住域 束柱無					1 1	1		1 1		5
b プラン 南西居住域束柱有 2×3、2×4間の建物		1			1					2
c プラン 南西居住域束柱有 2×2、3×3間の建物					1			1		2
a プラン 北西居住域 束柱無					1 1			1 2 1 1		7
c プラン 北西居住域束柱有 2×2、3×3間の建物		1			1			1		3
a プラン 西居住域 束柱無		1						1 2		4
b プラン 西居住域束柱有 2×3、2×4間の建物								1		1
c プラン 西居住域束柱有 2×2、3×3間の建物				1				2		3
合計	2	2	5 1	3 2 1	2 1 1 1 7	1 1 1 1 1 1	1 1 2 4 3 10 4 2 3 5	68		

最も掘立柱建物が多く検出された北東居住域の様相を検討する。2、3期に検出した掘立柱建物は全て総柱建物で、大半はbプラン梁間2間×桁行3間以上の総柱建物である。4期では東柱のないaプランの掘立柱建物が検出されるようになり、5期ではaプランで大・中規模の掘立柱建物が多く検出されている。とくに5期前半にはaプランで3間×5間の大型建物が検出される。一方bプランの総柱建物は4期に検出棟数が減少し、5期になると検出されなくなる。4期後半からはcプランの梁間と桁行の柱間数が同じ総柱建物のみ検出されるようになる。

他の居住域では検出した掘立柱建物の棟数が少ないが、南西居住域では北東居住域と同様の傾向がみられ、東柱の無いaプランの掘立柱建物は4期から検出しており、総柱建物でbプラン梁間2間×桁行3間以上の掘立柱建物は2・3期と4期に1棟ずつ検出したのみで、5期には検出されていない。5期の総柱建物はcプランのみ1棟検出している。

北西居住域と西居住域は東柱の有る掘立柱建物の検出棟数は非常に少ない。北西居住域はaプランは4期から、bプランは全期間を通じて検出していない。

西居住域はaプランの掘立柱建物は2・3期に1棟検出しているが、4期には検出棟数がなく、5期に再び検出する。bプランの総柱建物は北東居住域、南西居住域とはことなり、1棟のみであるが5期に検出している。

以上、掘立柱建物を居住域ごと、棟数や平面プラン、規模について検討した結果、当遺跡の古墳時代掘立柱建物は集落成立当初の2期から居住域ごとに、平面プラン、規模の差をもって出現していることが判明した。特に北東居住域の掘立柱建物は他の居住域と比較して検出棟数、平面プラン、規模等すべてにおいて優位をもっており、この状態は5期まで続く。南西居住域も検出棟数は少ないが、各プランの建物の出現時期は北東居住域と同様である。北西、西居住域は北東、南西居住域とは建物構成が異なり、検出棟数は少ないが、5期に至ると居住域ごとの検出棟数は南西居住域よりもわずかながら多くなり、平面規模も大きい建物が出現する。

掘立柱建物も前項の竪穴住居と同様4期から5期に至る時期に南西居住域と北西・西居住域間の差に変動があり、2期から5期まで北東居住域の圧倒的優位は変わらないが、その下で4期まで北西・西居住域に対し優位であった南西居住域が、5期では北西・西居住域とほぼ同列になったことが認められた。

建物遺構全体の変遷は後述の遺構全体の変遷の項目で詳述することにする。

(3) 井戸

第24表は集落内で検出した27基の井戸を各居住域ごとに茆屋北編年順に一覧にしたものである。当遺跡内で検出した井戸は井戸枠を持つものが多く、一覧表には板材を使用した井戸枠の有無を記載している。

時期別に検出した数を検討する。1期の井戸6基のうち、南東居住域で検出した井戸A695のみ筒状の木組みの井戸枠をもち、残りはすべて素掘りの井戸である。2期の井戸は3基、3期の井戸は5基、2・3期の井戸は3基検出した。4期の井戸は1基のみ、5期の井戸は5基検

第24表 井戸一覧表

茅屋北編年	検出居住域	調査区	遺構番号	井戸枠の有無	特記事項
茅屋北2・3期	北東居住域	C	2756		
茅屋北3期	北東居住域	C	2549	有	井戸枠に船材を利用
茅屋北3期	北東居住域	B	131000	有	井戸枠に船材を利用
茅屋北5期	北東居住域	C	2476	有	井戸枠下部は井桁、上部は井筒
茅屋北5期	北東居住域	D	474		
茅屋北1期	南東居住域	A	695	有	井戸枠は筒状の木組み
茅屋北1期	南東居住域	A	542		
茅屋北1期?	南東居住域	A	767		
茅屋北2期	南東居住域	A	590		
茅屋北2期	南東居住域	A	676		
茅屋北3期	南東居住域	A	494	有	井戸枠に船材を利用
茅屋北1期	南西居住域	A	1613		
茅屋北1期	南西居住域	E	090451		
茅屋北2期	南西居住域	E	090805	有	井戸枠に船材を利用
茅屋北3期	南西居住域	A	1501	有	井戸枠に船材を利用
茅屋北3期	南西居住域	E	090806	有	井戸枠に船材を利用
不明	南西居住域	E	090553		
茅屋北1期	北西居住域	D	643		
茅屋北1期?	北西居住域	D	952		
茅屋北4期	北西居住域	D	1281		
茅屋北5期	北西居住域	D	550		
茅屋北1期	西居住域	F	944		
茅屋北1期?	西居住域	F	627		
茅屋北2・3期	西居住域	F	806		
茅屋北2・3期	西居住域	F	1168		井戸内に船材を投棄
茅屋北5期	西居住域	F	690		
茅屋北5期	西居住域	F	855		

出している。このうち3期の井戸5基はすべて井戸枠の部材に船材が用いられていることは、当遺跡の井戸の大きな特徴である。

居住域別にみると、各時期の井戸数はほぼ変わらないが、北東居住域と南西居住域、南東居住域の井戸は船材を転用した井戸枠を持っているのに対し、北西居住域、西居住域は全時期にわたり素掘りの井戸のみである。建物遺構と同様居住域により井戸構造を堅牢なものにするか、簡単なものにするか、3期の段階で北東・南西居住域と北西・西居住域との間に格差が認められる。5期になると北東居住域のみが複雑な構造をもつ井戸を保持しており、井戸構築方法の差は北東居住域と南西・北西・西居住域との間の差に変化したことがわかる。

(4) 土坑

土坑については、第一に馬埋葬土坑をとりあげる。馬埋葬土坑は南西居住域で2か所検出した。そのうち1か所からは馬の頭部のみ、土坑A940からは馬の全身骨格が出土した。いずれの土坑も馬骨以外の出土遺物は少ないと、3期に属する土坑と推定されている。

次に製塙土器が大量に出土した製塙土器廃棄土坑について検討する。製塙土器廃棄土坑は、第13表に取りあげた小型製塙土器が大量に出土した土坑である。廃棄されている製塙土器のタイ

アは第1節5. 製塩土器の項で分類したコップ形Aタイプ、小楕形Bタイプの小型製塩土器である。

製塩土器廃棄土坑は2期から出現する。2期には南西居住域で1か所、北東居住域に1ヶ所の廃棄土坑が検出された。南西居住域で検出された土坑A 1 6 3 2から出土したコップ型Aタイプは欠損が少なく、土坑A 1 6 3 2は廃棄土坑というより、貯蔵土坑のような用途も考えられる。北東居住域では廃棄された製塩土器が盛り上っている場所を検出している。

3期になると製塩土器廃棄土坑の検出数は増加し、南西居住域では8ヶ所、北東居住域では6ヶ所、南東居住域では1ヶ所の製塩土器廃棄土坑が検出されている。南西居住域の土坑A 1 1 3 5、北東居住域の土坑C 3 4 8 5などでは製塩土器の碎片とともに大量の炭を検出しており、火を使用した作業の後、製塩土器が廃棄されたことを示している。廃棄された製塩土器はほとんどがコップ形Aタイプであることを考えると、この作業は製塩の最終段階で塩の消費直前の焼き塩であると考えられる。

4期になるとはじめて北西居住域に製塩土器廃棄土坑が検出されるが、廃棄されている製塩土器の種類が3期とはことなり、小楕形のみになる。西居住域では大量に製塩土器が廃棄されている土坑は検出されていない。5期では製塩土器が集中して廃棄された土坑は検出されていない。

廃棄土坑検出状況を検討すると、3期の時期に北東居住域と南西居住域は大量の塩を消費してその容器を廃棄していたことわかる。

4. 古墳時代の遺構の変遷

これまで検討してきた建物遺構、井戸、土坑など遺構別に時期判定したものを統合し、蔀屋北編年1期、2・3期、4期、5期の各期の建物を中心とした遺構平面図を作成した。1期の遺構変遷図には25cm間隔の等高線ラインも記入して集落全域の地形変化が読み取れるようにしている。この遺構平面図をもとに、蔀屋北遺跡の古墳時代の遺構の変遷を北東、南東、南西、北西、西の5か所の居住域の内容の比較検討を通して記述していきたい。

(1) 蔑屋北1期（第716図）

蔀屋北1期は建物遺構は検出していない。北東居住域で2基の周溝墓、溝状遺構、その他の各居住域で井戸が検出されている。検出された井戸のうち井戸A 6 9 5は細長い筒状の木組みの井戸枠をもつ。その他の井戸は素掘りの井戸である。

1期に建物遺構は検出されていないが、周溝墓や井戸は検出していることから、渡来人を含む少数の人々が調査地周辺に散在して居住していたと思われる。

(2) 蔑屋北2期（第717図）

蔀屋北2期は調査地内に本格的に集落が成立し、活動を開始する時期である。溝により区画された居住域が成立し、特に北東居住域は平面方形の広大な面積を占めている。第718図遺構平面図は、2期か3期か細分できない建物遺構があるため、2・3期あわせて作成している。

豎穴住居は各居住域で検出されるが、北東居住域、南東居住域では平面形の規模の大きい豎穴

住居を検出している。これに対して北西、南西、特に西居住域では平面形の規模の小さい竪穴住居のみが検出されている。2期の竪穴住居は方位をほぼ南北方向に向いているものが多く、この傾向は北東居住域、西居住域の竪穴住居で顕著に見られる。北東居住域では建物のきりあい関係から同時に存在していた竪穴住居は2棟と推定でき、少なくとも2期の間で2回の建て替えがあったと思われる。西居住域も建物の切りあい関係からみて少なくとも2期の間で2回以上の建て替えがあったと思われ、建物の存続期間はほぼ同時期であったと思われる。

掘立柱建物は北東居住域で中規模の総柱建物、南東居住域で総柱建物を含む小規模の掘立柱建物を検出している。集落は成立当初から居住域間で、建物構成、建物規模に格差があり、北東居住域は竪穴住居・掘立柱建物の両方の建物の規模、棟数において他の居住域より優勢であったことがわかる。

2期の井戸は南西居住域で1基、南東居住域で2基、2期か3期か細分できない2・3期の井戸を加えると、北東居住域で1基、西居住域で2基の出土数となるが、南西居住域の井戸E 0 9 0 8 0 5を除き、素掘りの井戸である。南西居住域の井戸E 0 9 0 8 0 5は井戸枠に船材が転用されており、当遺跡で検出された船材を井戸枠に転用した最も古い検出例である。

南西居住域は建物遺構の検出棟数は少ないが、井戸E 0 9 0 8 0 5の出土例のように井戸枠に転用できる大型の木材や、製塩土器埋納土坑の検出例から一定量の塩を保有していることが想定でき、2期の段階から優勢にたつ居住域といえよう。

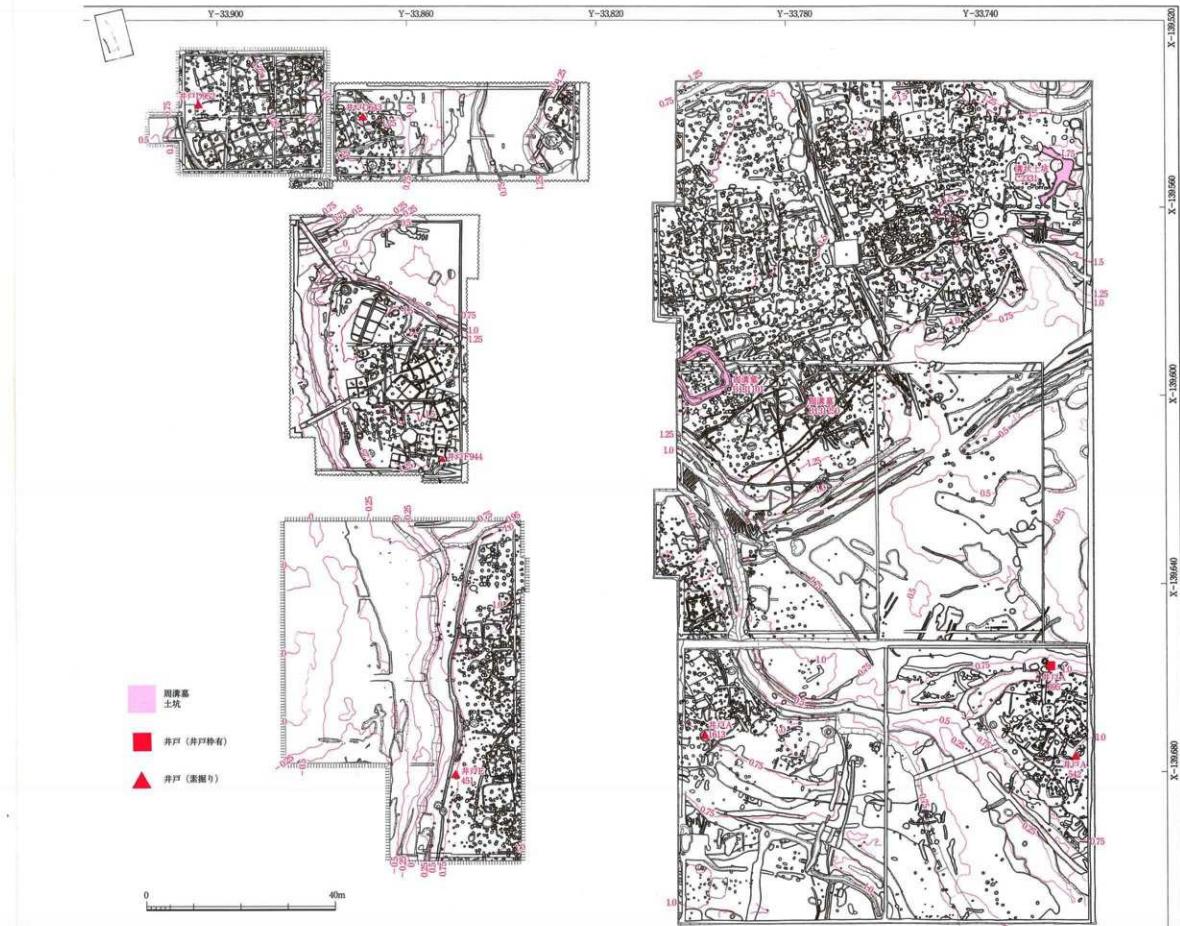
南東居住域は2期以降の建物遺構は検出していないが、3期の井戸が1基検出されているので、調査区域外に居住域が広がっている可能性が高い。

(3) 蕨屋北3期（第717図）

蕨屋北3期は集落の活動が拡大した時期である。北東・南西・北西・西の各居住域で竪穴住居が検出され、とくに南西居住域で検出棟数が増加している。建物の方位は2期で検出した北東・西居住域の竪穴住居と異なり、どの居住域でも一見して統一が無い状態に見える。これは各居住域ごとに建物が至近距離にある大溝や区画溝を意識してその方位に建物の方位を合わせているためと思われる。居住域の区画が3期からは明白に意識されていたことを示すものであろう。

北東居住域では竪穴住居に加えて、総柱建物の検出棟数が増大する。北東居住域では竪穴住居（住居）・総柱建物（住居）・総柱建物（倉庫）の3種類の建物構成が考えられ、竪穴住居（住居）と総柱建物（倉庫）の2種類の建物から成り立つ他の居住域とは異なる建物構成をみせている。北東居住域掘立柱建物C 2 5（総柱）や掘立柱建物C 1 6（調査区内では北東コーナー部の柱穴を検出しており全体は不明である）などは主屋建物と推定でき、これらの主屋建物の回りに一回り小さい総柱の倉庫建物が付随していたと思われる。北東居住域では竪穴住居も2期同様検出しており、竪穴住居と掘立柱建物（住居）が並存している。

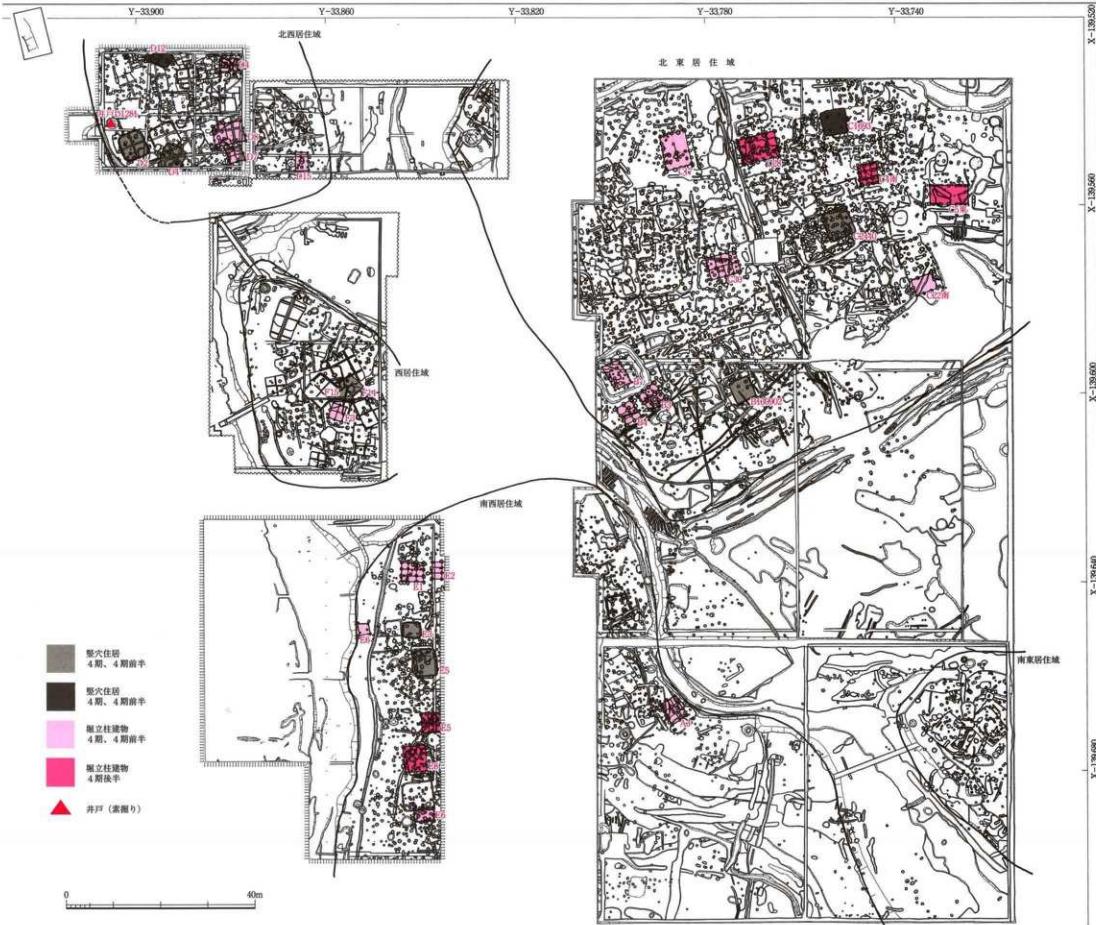
北東、南西、南東の居住域は船材を井戸枠に転用した井戸を検出している。北東、特に南西居住域では大量の製塩土器を廃棄した土坑も検出されている。南西居住域では馬の全身骨格が検出



第716図 萩屋北1期の遺構全体図 (1/800)



第717図 藩屋北2・3期の遺構全体図 (1/800)



第718図 萩屋北4期の遺構全体図 (1/800)



第719図 萩屋北5期の遺構全体図 (1/800)

された土坑等、馬が埋葬された土坑が2ヶ所検出されており、この居住域は大量の塩を消費する渡来人の稼業である馬飼いの実践区域であった可能性が高い。南西居住域に居住した人々は馬飼いの実践部隊として北東居住域の人々と一体となって牧を經營していた主体であろう。

北西、西居住域は平面形の規模の小さい竪穴住居が少數検出されるのみで、2期より検出棟数は減少しており、素掘りの井戸は検出されるが、製塩土器廃棄土坑は検出していない。3期に至って、北東、南東、南西居住域と北西、西居住域との格差はさらに広がったといえよう。

(4) 蔵屋北4期（第718図）

蔵屋北4期は北東、北西と南西の居住域に束柱の無い掘立柱建物が出現し、掘立柱建物のプラン、建物構成に変化が見られる時期である。集落全体の活動が縮小しているようにもとれるが、建物構成の変化は、居住域ごとの序例に変化がおこり集落の再編成を示していると理解できる。北東、南西、北西居住域では竪穴住居（住居）・掘立柱建物（束柱無し、住居）・縦柱建物（倉庫）の建物構成となる。北東居住域の検出例を検討すると、掘立柱建物C17のプランのように4間×5間で屋内棟持柱があったり、掘立柱建物C22-南のように2×3間で屋外棟持柱を持つプラン、掘立柱建物C28のように3間×5間など、さまざまなプラン、規模があり、4期の束柱の無い掘立柱建物は、定まった平面プランが無いように受け取れる。竪穴住居は南東居住域を除く居住域で検出しているが、検出棟数や規模が突出している居住域はない。井戸は集落全体で北西居住域に1基検出したのみである。

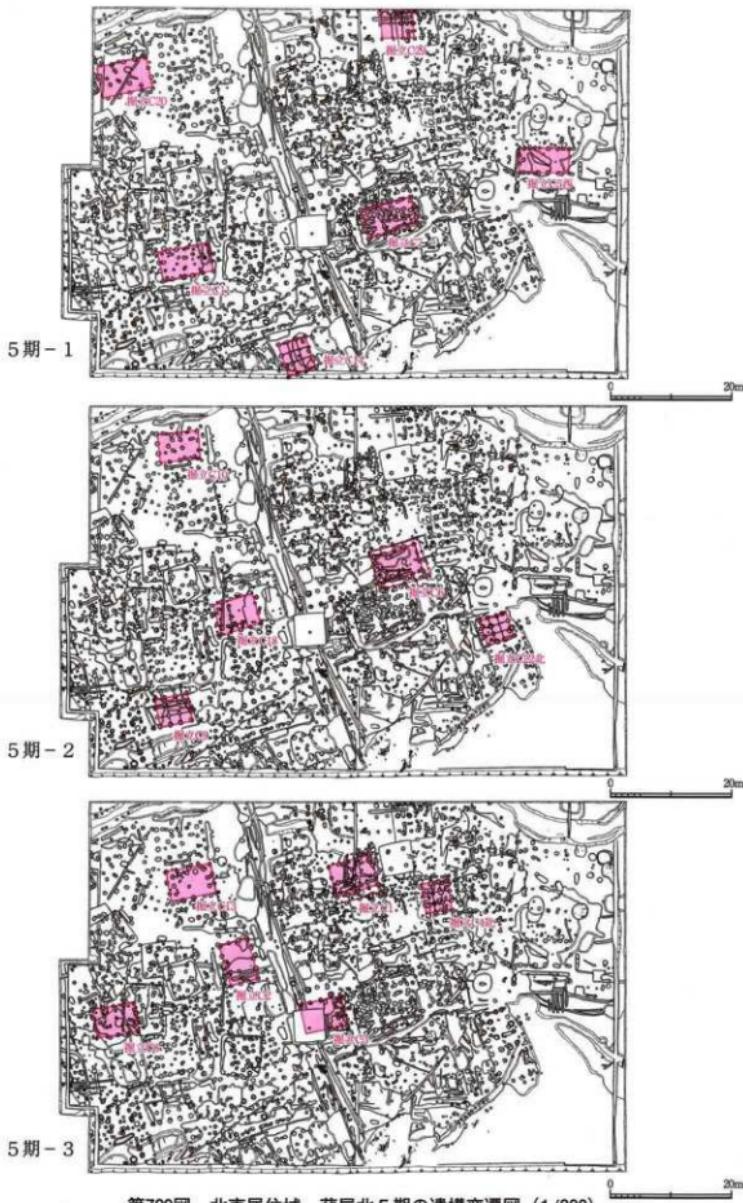
(5) 蔵屋北5期（第719図）

5期は4期から続いている居住域ごとの建物構成の変化が完了し、集落の活動が再び活発化する時期である。

北東居住域の建物は掘立柱建物（住居）・縦柱建物（倉庫）の建物構成をとり、竪穴住居は検出していない。掘立柱建物、特に束柱のない住居建物は他の居住域より規模の大きい、3間×4間もしくは3間×5間のプランのそろった建物が検出されるようになる。倉庫と推定される縦柱建物も他の居住域より一回り面積、規模の大きい規模の3間×3間のプランの建物が検出されている。

北東居住域の5期の建物は、それぞれの建物が切り合うことがない。建物間の距離を考慮すると、3回の建て替えが考えられる。とくに集落廃絶直前の建物群は柱が抜き取られることなく残された状態で検出したものが多く、この建物群は同時存在した単位ととらえることができる。この建物群からさかのぼり、5期の建物の更新をそれぞれ5期-1、5期-2、5期-3の3回に復元したのが第720図である。この変遷図からみると、北東居住域の5期の建物は、建物間に広場的な空間をとりながら、それぞれの建物を更新していた様相が復元できる。また5期-1は平面プランが3間×5間の掘立柱建物と縦柱建物（倉庫）、5期-2、3は平面プランが3間×4間の掘立柱建物と縦柱建物（倉庫）であり、時期ごとに同じプランが採用されており、同時期に存在する住居に規模の差がない。

これに対し、南西、北西、西居住域は竪穴住居（住居）・掘立柱建物（束柱無し、住居）・縦柱



建物（倉庫）で構成される居住域である。4期以前と同様竪穴住居を検出しているが、これまで最も規模の小さな竪穴住居しか検出していなかった西居住域に、規模の大きい竪穴住居が検出されるようになる。西居住域の5期の建物は建物の切りあい関係がみられ、切りあい関係と建物間の距離から少なくとも4回の建て替えが想定できる。建物の更新の様相は北東居住域とは異なりほぼ同じ場所で少し位置をずらして建て替えており、建物間に広場的な空間はない。

5期の井戸は北東、北西、西居住域から検出しているが、北東居住域から検出された井戸C2476の木製井戸枠は下部は井桁、上部は井筒の複雑な構造をもっており、西居住域の素掘りの井戸を比較すると対象的である。

遺構の内容をみると、3期までは馬埋葬土坑や製塙土器の大量出土が特徴であった南西居住域が5期には建物の規模が縮小して、北西・西居住域と同規模・同質に変化し、北東居住域のみが、建物構成、規模からみて優勢な居住域となり、居住域の序列の再編成が完成したといえる。

集落は6世紀末で途絶える。5期末最終段階に北東居住域に構築されていた掘立柱建物は柱が傾斜した状態で検出されたことから、出水に遭い、居住に耐えられなくなり消滅したと推定できる。以降現代に至るまで、周辺一帯は一部の微高地に居住地があるのみでほぼ耕作地として利用されていた。

5. 土器・土製品、遺構の両面からみた蘆屋北遺跡の渡来人

遺構の変遷から読み取れた蘆屋北遺跡渡来人の居住の実態を、前節で分析した韓式系土器の受容と変容の実態とあわせ、再度考察してみたい。

蘆屋北1期の遺構の状況は少数の人々が周辺に散在している様相をしめしている。韓式系土器の出土状況も統一感のないさまざまなタイプの器種が出土しており、遺構のあり方から見た分析と同様、渡米人、渡来系の人たちを含む少数の人々が散在して暮らしあじめたことを示していると思われる。

蘆屋北2期は渡来人、渡来系の人たちが、集団で本格的に居住を開始し、集落が成立する時期である。集落は溝により区画された北東、南東、南西、北西、西の5か所の居住域で構成されている。韓式系土器は1期とさほど変わらず、どの居住域からも出土するので、渡来系の人々が、どこかの居住域に偏って居住していたとは考えにくい。しかし竪穴住居や掘立柱建物などの遺構からみると北東、南東、南西居住域と北西、西居住域との間に建物の規模や構造に格差があることがわかる。居住域の面積や、立地条件をみると、北東居住域はより優位の居住適地であったといえよう。2期には土師器の技法であるハケ調整をとりいれて作られた韓式系土器も出現しており、渡来系の人々と在地人との同化が始まっているといえる。

蘆屋北3期は建物遺構、井戸、製塙土器廐棄土坑等、どの遺構からみても北東、南西居住域と北西、西居住域の格差が広がった時期である。韓式系土器の出土状況をみると、1期、2期に使用していた甕・瓶などの器種以外に、あらたに鍋、羽釜、移動式カマド、U字形板状土製品など

が加わっている。これらの韓式系土器は口縁端部の面など細部の形態に共通性をもち、遺跡近隣の生駒西麓の粘土を使用して、平行タタキを施す等、齊一性のある一群である。特にU字形板状土製品、移動式カマド等は北東、南西居住域に出土が集中している。これは3期に新たに渡来人の移住があり、新たに移り住んだ渡来人は、1、2期に渡来した集団とは異なり、北東、南西居住域に集住し、自分たちの集団の独自の統一されたスタイルの土器を使用して居住していたということを示していると思われる。北東、南西の居住域の優勢は、この独自の土器群を使用して居住した渡来人によってもたらされたものと思われる。3期に移り住んだ渡来の人々はU字形板状土製品の系譜からみても、韓半島全羅南道崇山江流域と強いつながりをもつ人々とみて間違いないと思われる。馬具の出土や馬埋葬土坑、大量の製塙土器廃棄土坑などからみてこれらの人々により牧が経営、拡大されていったと思われる。とくに南西居住域は馬飼いの実践区域であったと思われる。萩屋北遺跡は韓半島との間に人の往来があり、恒にそれらの人々を受け入れる拠点的な集落であったと推定できる。

部屋北4期は検出造構からみて集落全体の規模が縮小、居住域ごとに建物構成の再編成が行われている時期と受け取れる。出土土器をみても韓式系土器の消滅と在地土器への同化が進行する時期と読み取れる。

萩屋北5期は韓式系土器は完全に土師器としての型式変化を遂げており、同時に検出造構をみ

第25表 萩屋北3期の各居住域の属性

居住域	調査地内での推定規模(mf)	平面形	区画施設	内部施設						遺物から推定できる手工業生産			祭祀遺物	その他	
				溝	区画溝・橋	大型掘立柱建物	掘立柱建物	大型堅穴住居	堅穴住居	船材などの枠がある井戸	金属	製塙(焼き塙)	玉	木	
北東居住域	8200	(推)方形	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	
南東居住域	780	?	○			○	○	○	○	△	○	△		△	
南西居住域	7200	不整形	○			○	○	○	○	○	○	○	△		△ 馬埋納土坑
北西居住域	1500	(推)方形?	○			○		○						△	△
西谷居住域	1260	不整形	○			○		○					△	△	

第26表 萩屋北5期の各居住域の属性

居住域	調査地内での推定規模(mf)	平面形	区画施設	内部施設						遺物から推定できる手工業生産			祭祀遺物	その他	
				段、空開地	区画溝・橋	大型掘立柱建物	掘立柱建物	広場的空間	大型堅穴住居	堅穴住居	船材などの枠がある井戸	金属	玉	木	
北東居住域	8200	(推)方形	○	○	○	○	○				○	○	△	△	
南西居住域	7200	不整形	○			○				○		○	△	△	
北西居住域	1500	(推)方形?	○			○				○				△?	農業生産
西居住域	1260	不整形	○			○		○	○	○			△	△?	農業生産

ると北東居住域は掘立柱建物のみで構成される居住域となり、それ以外の居住域の間で建物構成が異なるという5期以前の時期にみられた格差とは隔絶した変化がおこった。またそれまで小規模な建物しか構築していなかった西居住期が大型竪穴住居を構築しており、北東居住域の下に、北西・南西・西居住域が同規模に変化するという、居住域の序列の再編成が完成した。

ここで改めて蔚屋北3期と5期の各居住域の属性を整理してみたのが第25、26表である。手工業生産については、例えば鉱滓や砥石の出土から金属器生産、製塙土器と炭の出土から土器製塙（焼き塙）と判断している。祭祀遺物は有孔円板等の石製品、琴、ササラなどの木製品の出土の有無を調べている。これらの手工業生産や祭祀は関連遺物の出土量から集落内の日常的なものであったと思われる。

第25表の3期と第26表の5期を比較してみると、3期では規模の大小はあるといえ、ほぼ同じ建物構成をとっていた各居住域が、5期になると北東居住域のみが、建物構成、遺物等すべての面で隔絶した居住域として屋敷地を形成していたことがわかる。この北東居住域の屋敷地は支配者層の居住域として他の居住域を従属させている状態を示している。この北東居住域の支配者層は具体的にどのような人々であったか、考察してみる。

蔚屋北遺跡は均質な集落の中からある階層が析出したのではなく、集落成立当初から差（階層あるいは出自というものが）があり、北東居住域は蔚屋北1期から5期まで恒に優位を保っていた。地形的にも高い広い場所に住み、恒に優位を保ってきた北東居住域に居住した集団は、やはり渡来系の人々の子孫と考えるのが妥当と思われる。5期の北東居住域の在り方は3期以来の渡来人の指導者層が在地支配層に成長した結果と思われる。ここでいう渡来人の指導者層とは牧の経営の現場指揮者、高度な技術を保持しそれを駆使した技術者層であったと推定する^{註10)}。北東居住域の屋敷地の在り方は渡来人の指導者が在地に根を下ろし、支配者層となっていました姿を体現しているといえよう。在地支配者の居住空間については大阪府下の遺跡では大園遺跡、伽山遺跡などがあげられるが、いずれの遺跡も支配者層の居住空間がどういう過程を経て成立していったのかは不明である。蔚屋北遺跡の場合は、5世紀中頃の入植からはじまり、廃絶するまでおよそ150年にわたる集落の内部構造の変化の過程を明らかにできたといえる。最後に居住域ごとの各時期の特徴を簡潔にまとめ、総括表とした（第27表）。

蔚屋北遺跡は渡来人の集落の変遷を約150年にもわたり追及することができた全国でも稀有な大規模な調査例である。本章では調査者の判断を述べるだけでなく、できる限り資料を客観的に呈示し、今後の研究の資料として活用されるよう心掛けた。遺構や遺物の評価については、今後の研究によりさらに深化されるものと信じる。当遺跡の資料が地域史のみならず、今後の東アジアにおける国際交流の実態、とくに韓半島との関係を示す資料として活用されることを願い、一応の総括を終えることとする。

- 註 1 中村浩編『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978、中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981
- 註 2 韓式系土器の識別等については以下の方々にご教示をいただいた。記して謝意申し上げます。金 武重・
金 大煥・權 丘榮・徐 賢珠・譙早直人・木下 哲・田中清美・柳本照男（敬称略）
- 註 3 寺井誠「古代難波の外来遺物」『難波宮址の研究 第12集』
- 註 4 今津啓子「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『岡崎敏先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』
下 岡崎敏先生退官記念事業会 1987
- 註 5 許 美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
1999 中野 咲『接合技法からみた古墳時代中・後期の土師器窯坏—いわゆる刺突法とその周辺—』『韓
式系土器研究X』韓式系土器研究会 2008
- 註 6 前掲注5中野 咲 2008に同じ
- 註 7 広瀬和雄「小島東遺跡」「岬町遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978
- 註 8 積山 洋「大阪湾沿岸の古墳時代上器製塙」『季刊考古学』別冊14号雄山閣 2004
- 註 9 U字形板状土製品は2期に所属する竪穴住居からも2点出土しているが、いずれも住居床面ではなく覆
土からの出土である。これらの資料は3期に属する遺構からの出土資料と接合しているので、2期より
下る可能性が高いとし、U字形板状土製品は3期から出現するとした。
- 註 10 「豪族居館」については次の論文を参照した。寺沢 黒「古墳時代の首長居館—階級と権力行使の場と
しての居館—」坂 靖「古墳時代の階層別にみた居宅—「豪族居館」の再検討」『古代学研究』第141
号 1998

第27表 部屋北遺跡総括表

	部屋北1期	部屋北2期	部屋北3期	部屋北4期	部屋北5期	各時期を通じての特徴
北東居住域 周辺壁		大型堅穴住居 掘立柱建物（倉庫） 居住域内に区画	大型掘立柱建物が優勢 リ字形土器品・生糞西敷胎土 多数 移動式カマド（生糞西 敷胎土） 船材棒井戸 製塙土器陶業土坑 鉛滓出土	平面プランがさまざまな掘 立柱建物（住居・倉庫） 居場地を形成している 屋敷地出土	住居は大型掘立柱建物の み（住居・倉庫） 建物 間に広場的な空間があり 居場地が形成している 屋敷地出土	後高地の居住地に立地 方形区画 8200m ² 以上 常に聚落の中で優勢な集 団が居住
南東居住域 木棒井戸		大型堅穴住居 掘立柱建物（倉庫）	船材棒井戸 鉛滓出土			780m ²
南西居住域 素掘り井戸		船材棒井戸 小型堅穴住居+縦柱掘立柱 倉庫？	リ字形土器品・移動式カマド 馬糞敷土坑 船材棒井戸 鉛滓出土	等質化	掘立柱建物・堅穴住居 鉛滓出土	馬糞実験集団の居住地 7200m ² 以上
北西居住域 素掘り井戸		小型堅穴住居+縦柱掘立柱 倉庫？	木工？	等質化 製塙土器陶業土坑	掘立柱建物・堅穴住居 水田に隣接 農業生産	小型堅穴住居中心 1500m ²
西居住域 素掘り井戸		小型堅穴住居	木工？	等質化	掘立柱建物・大型堅穴住 居 水田に隣接 農業生産	堅穴住居中心 1260m ²
全体の様相の特徴	居住遺構なし (周辺に住居) 鉢式系土器が全体 に分布	尖山江流域土器の出土 輪式系土器の土器化傾向 製塙土器が各居住区に散在	樂山江流域から渡来第二波 が經營盆地 在地土器との再融合	在地土器のない掘立柱建物（住 居）の出現	北東区居住者を指導者と して聚落が再編成 受け入れる拠点として 馬糞い技術者の聚落	韓半島からの渡来集団を 受け入れる拠点として 馬糞い技術者の聚落

第28表-1 神式系土器 塚一覧表

資料名	器種	図面名	出土地域	遺構	遺構名	部位	外表面形	内面調査	口径 (cm)	器底 (cm)
1	蓋か壺	541	17	大溝	E090001	北半下層～地山部	a × 1	縦文タタキ	ヨコナデ	推 15.4 残 5.2
2	蓋か壺	541	18	大溝	E090001	北半部	a × 4	平行タタキの上からヨコナデ	ヨコナデ	推 18.0 残 4.5
3	土師器の蓋付タタキ	219	24	北東居住域 落ち込み	C3833		b × 3	倍子タタキの上からナデ消し	ナデ、ヨコナデ	推 10.2 残 9.9
4	土師器の蓋付タタキ	549	9	大溝	並路		b × 3	倍子タタキの上から圓柱ナデ	ナデ、圓柱ナデ	推 18.6 25.7
5	土師器の蓋付タタキ	493	14	区画溝	A950	下層	b × 4	平行タタキのうえから圓柱ナデ	ナデ	推 15.8 残 20.5
6	蓋か壺	558	21	大溝		中層裏下部	c × 1	縦断文タタキ、沈線あり	ヨコナデ	推 19.0 残 6.8
7	蓋か壺	183	1	北東居住域 陶溝	B131101		c × 2	斜格子タタキ	ヨコナデ	推 18.9 残 2.9
8	蓋か壺	204	27	北東居住域 亀合窓		新10面掘り下げ	c × 3	倍子タタキ	横ナデ	推 17.8 残 22.4
9	蓋か壺	556	33	大溝		上層	c × 4	平行タタキの上からナデ	ヨコナデ	推 19.4 残 6.7
10	蓋か壺	541	14	大溝	E090001	中層 a	c × 4	平行タタキ	ヨコナデ	推 16.0 残 4.0
11	蓋か壺	558	19	大溝		中層 a	c × 4	平行タタキ	工具ナデ	推 14.0 残 5.6
12	蓋	225	31	北東居住域 土坑	B131097		c ○ 4	平行タタキのうえからヨコナデ	ヨコナデ	推 13.9 残 8.6
13	蓋か壺	345	1	南西居住域	A957		d × 2	斜格子タタキ	ナデ、ヨサエ	推 19.2 残 28.4
14	蓋か壺	171	9	北東居住域 要穴住居	C3767	南西部	d × 2	斜格子タタキ	ヨコナデ	推 16.5 残 6.2
15	蓋	558	18	大溝		中層 b	d × 3	倍子タタキ	タテナデ、ヨコナデ	推 17.4 残 22.6
16	蓋か壺	482	19	区画溝	B130240/2	上層	d × 3	倍子タタキ、沈線あり	上層ナデ	推 21.0 残 4.2
17	蓋か壺	183	4	北東居住域 陶溝	B131101		d × 3	倍子タタキ	ヨコナデ	推 19.7 残 5.3
18	蓋か壺	183	2	北東居住域 陶溝	B131101		d × 3	倍子タタキ	横ナデ、ヨコナデ	推 17.8 残 6.6
19	蓋か壺	183	5	北東居住域 陶溝	B131101		d × 3	倍子タタキ	横ナデ、ヨコナデ	推 20.1 残 6.5
20	蓋か壺	181	16	北東居住域 陶溝	B1312020	アセ4	d × 3	倍子タタキ	ナデ、板ナデ	推 19.0 残 7.2

第28表-2 韓式系土器 直・甕一覧表

資料番 号	種類	圓周 cm	出土地域	遺物 名	遺構Na	層位	外面調整		内面調整		口径 (cm)	容積 (cm)	
							生 歯 西 翼 部 の 形 の 施 工	歯 部 の 形 の 施 工	板子タタキの上からヨコナデ	板子タタキ	板ナデ、ヨコナデ	板ナデ	
21	盃か甕	186	23	北東呑牛城 土坑	C4159		d	×	3	板子タタキの上からヨコナデ	板ナデ	189 残	4.5
22	盃か甕	420	2	北西呑牛城 土坑	D643		d	×	3	板子タタキ	板ナデ、ヨコナデ	21.6 推	32.6
23	盃か甕	336	27	南西呑牛城 土坑	A1344		d	×	4	平行タタキの上から沈線	ナデ	18.0 残	14.9
24	盃か甕	541	16	大溝	E1690001	北半部中層	d	×	4	平行タタキ	板ナデ、ヨコナデ	189 残	7.5
25	長胴甕	181	15	北東呑牛城 周溝	B131250		e	×	1	織縫文タタキ	板ナデ、ヨコナデ	25.0 推	14.2
26	長胴甕	497	18	区画溝	A428	LILII層	e	×	3	板子タタキ	板ナデ、ヨコナデ	207 残	38.0
27	盃か甕	201	9	北東呑牛城 包含層		第10面掘り下げ	e	×	3	板子タタキ	板ナデ	208 残	5.8
28	盃か甕	556	32	大溝		大溝F	上層	e	○	4 平行タタキ	ヨコナデ	21.0 推	4.6
29	盃か甕	204	22	北東呑牛城 包含層		第10面掘り下げ	e	×	4	平行タタキの上からヨコナデ	板ナデ	207 残	5.8
30	盃か甕	200	27	北東呑牛城 包含層		北東谷部	e	×	4	平行タタキ	ヨコナデ	18.8 残	6.3
31	盃か甕	541	11	大溝	E1690001	北半部	e	×	4	平行タタキ	ヨコナデ	14.4 残	5.7
32	盃か甕	556	31	大溝		大溝F	上層	e	○	4 平行タタキ	ヨコナデ	17.0 残	6.1
33	盃か甕	209	37	北東呑牛城 十坑	C3582		e	○	4	平行タタキ	ヨコナデ	19.3 残	7.1
34	盃か甕	210	14	北東呑牛城 土坑	C3583		e	○	4	平行タタキ	ヨコナデ	21.7 残	5.5
35	長胴甕	187	3	北東呑牛城 土坑	C4159		e	○	4	平行タタキの上からナデ、ヨコナデ	板ナデ、ヨコナデ	19.3 残	29.8
36	盃か甕	222	15	北東呑牛城 十坑	C4264		e	○	4	平行タタキの上から部分的にヨコナデ	ヨコナデ	19.6 残	9.5
37	盃か甕	210	32	北東呑牛城 包含層			e	○	4	平行タタキ	板ナデ	19.7 残	7.3
38	盃か甕	349	5	南西呑牛城 土坑	E1690750		e	○	4	平行タタキ	ヨコナデ	19.3 残	6.0
39	甕	348	26	南西呑牛城	E1690749		f	○	4	平行タタキの上からヨコナデ	ヨコナデ	15.7 残	6.2
40	盃か甕	497	17	区画溝	428	1層II層	x	1	織縫文タタキ、沈線あり	ナデ、ヨコナデ	推	4.0	

第29表-1 輪式系土器 平底鉢一覧表

資料 No.	図面 No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	全體 の形狀	口縁 部の形態	外 面調整	底 部 の削 り	内面調整	口径 (cm)	器高 (cm)		
1	428	9	北西居住域	ビット	D1601	A	a	3	不完全な格子タタキ、下半部ヘラ	有	ナデ	推	10.4	8.0
2	541	1	大溝		E090001	谷6、谷7 上層	A	a	3 格子タタキ	有	ナデ	推	15.6	13.5
3	416	25	北西居住域	堅穴住居 D14の ビット	D1664	A	a	4	平行タタキの上からハケ	有	ナデ	10.2	9.4	
4	558	9	大溝		大溝F	中層a	A	a	4 平行タタキ	有	ナデ	推	11.8	10.4
5	558	14	大溝		大溝F	中層b	A	a	4 タタキの上からヨコナデ	有	ナデ	推	12.4	10.5
6	558	13	大溝		大溝F	中層b	A	a	5 ヘラケズリ	有	ナデ	推	10.6	7.8
7	541	7	大溝		E090001	谷3	A	b	4 平行タタキの上からタタキを消している。	有	ヨコナデ	推	12.4	推 12.1
8	499	22	区画溝		A429		A	b	5 ナデ、オサエ	有	ナデ	推	11.3	8.2
9	203	1	北東居住域	土坑	C2391		A	c	5 ヘラケズリ	ナデ	ナデ	推	12.8	10.7
10	500	25	区画溝		A434	B a	5	ナデ?	有	ヨコナデ	推	12.5	15.1	
11	422	1	北西居住域	土坑	D640	B b	5	ナデ、オサエ	有	ハケ、ナデ	推	8.8	7.0	
12	254	21	南東居住域	土坑	A1567	B c	5	ナデ	ナデ	ナデ	推	11.6	13.3	
13	463	7	西居住域	堅穴住居	F935	覆土	C	a	6 ハケ	ナデ	ナデ	10.4	8.9	
14	484	19	区画溝		B130240	C b	5	ヘラナデ	ナデ、オサエ	ナデ	ナデ	推	11.7	10.9
15	482	16	区画溝		B130240	アセ12間	C	b	5 ナデ	ナデ	ナデ	9.8	8.3	
16	482	17	区画溝		B130240	アセ12間の 土器あげ後	C	b	6 ハケ	ナデ	ナデ	ナデ	残	13.6

第29表-2 韓式系土器 平底鉢一覧表

資料No.	遺物No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	全體の形状	口縁部の形態	外面調整	外面調整	内面調整	口径(cm)	器高(cm)
17 173 13	北東居住域	土坑	C2405	C b	6	ハケ				ナデ	11.8	11.1
18 558 8	大溝	大溝F	中層a	D a	4	平行タタキの上からヨコナデ、下 半部は不定方向のヘラナデ			ナデ	10.4	8.8	
20 545 18	大溝	E090001	中層C、中 層直上	a 1	鳥足文タタキ				ナデ	18.8	10.5	
21 173 19	北東居住域	豎穴住居	C2484	a 4	平行タタキ				ナデ	12.9	5.6	
22 541 5	大溝	E090001	北半部中層 上層、谷7 層	a 4	平行タタキの上からヨコナデ				ナデ	12.0	4.0	
23 541 2	大溝	E090001		a 5	回転ナデ?				回転ナデ?	13.0	3.1	
24 182 23	北東居住域	周溝墓	B131101		2	繩文タタキ			ナデ			
25 172 12	北東居住域	豎穴住居	C3770		2	繩文タタキの上からハケ			有ナデ			
26 204 25	北東居住域	包含層			9面掘り下 げ				有ナデ			
27 170 24	北東居住域	土坑	C3988		3	格子タタキ			ナデ	14.5	5.0	
28 423 11	北西居住域	土坑	D1617		3	格子タタキ			ナデ	12.0	4.9	
29 201 8	北東居住域	ピット	C2131		3	格子タタキ			ナデ			
30 219 5	北東居住域	溝状土坑	C3398		3	格子タタキ			ナデ			
31 219 9	北東居住域	溝状土坑	C3408		3	格子タタキの上からナデ			ナデ			
32 172 11	北東居住域	豎穴住居	3770		3	格子タタキ			有ナデ			
33 215 27	北東居住域	包含層			10面掘り下 げ				ナデ			
34 541 10	大溝	E090001			3	格子タタキ			ヨコナデ			
35 484 20	区画溝	BL30240	中下層		4	格子タタキ			ヨコナデ			
					4	平行タタキ部分的にナデ			ヨコナデ			
									有			

第29表-3 縦式系土器 平底鉢一覧表

資料No.	図面No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	全體の形状	口縁部の形態	外側調整	内面調整	口径(cm)	器高(cm)
36	182	26	北東居住域	周溝墓	B131101	南側周溝南東コーナー部	4 平行タタキの上からナデ	有	ナデ	5.1	残
37	182	27	北東居住域	土坑	C4087	4 平行タタキ	有	ナデ	7.8	残	
38	215	14	北東居住域	包含層	土器集積周辺	4 平行タタキの上からナデ	有	ナデ	8.2	残	
39	419	5	北西居住域	掘立柱D2のピット	D1107	4 平行タタキの上からヘラケズリ	有	ナデ	4.1	残	
40	541	3	大溝		E090001	中層a	4 平行タタキの上から部分的にヨコナデ	有	ヘラケズリ	3.5	残
41	541	4	大溝		E090001	中層b	4 平行タタキの上から部分的にヨコナデ	有	ヘラケズリ	5.2	残
42	558	10	大溝		大溝F	中層	4 平行タタキ	有	ナデ	6.6	残
43	558	11	大溝		大溝F	中層b	4 平行タタキ	有	ナデ	6.1	残
44	200	25	北東居住域	包含層	北東谷	5 ナデ		ナデ		3.4	残
45	558	12	大溝		大溝F	中層b	5 不定方向ヘラナデ	ナデ	ヘラケズリ	4.1	残
46	558	15	大溝		大溝F	中層b	5 縦方向ヘラナデ	ナデ	ヘラケズリ	6.7	残
47	182	28	北東居住域	周溝墓	B131101	南側周溝南東コーナー部	5 ナデ、オサエ	有	ナデ	9.1	残
48	182	24	北東居住域	土坑	C4085	5 ナデ	有	ナデ	7.2	残	
49	215	26	北東居住域	包含層	9	5 ナデ	有	ナデ	4.2	残	
50	220	23	北東居住域	包含層	11	5 ヘラケズリ	有	ナデ	4.7	残	
51	541	9	大溝		E090001	北半壠下層	5 ヨコナデ	有	ヨコナデ	4.8	残

第30表-1 轉式系土器・土鋤器 既一覧表

資料No.	出土地域	遺構	遺構No.	層位	外面調整			底部端の削り	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
					生駒西薙産の始土	蒸氣丸の形態	底部の形態					
1 541 21	大溝	北東居住域	E090001	下層	A x a × 3	斜丁タタキ	有	タテナナ	推 26.8	11.9	25.1	
2 186 27	北東居住域	土坑	B1459	A x	x 3	斜子タタキ	有	タスクリ、ナナ	推 26.0	15.3	25.8	
3 483 27	区画溝	溝	B130010	A	x x	細面文タタキ (開口幅狭い)	有	ヨコナナ	推 20.8	15.3	残 9.4	
4 181 12	北東居住域	土坑	C2231	A	x 2	斜格子タタキ	有	ナナ	推 24.4	15.0	残 10.0	
5 422 7	北西居住域	溝	D640	A	x 2	斜格子タタキ	有	ヨコナナ	推 28.0	15.0	残 10.6	
6 497 16	北東居住域	土坑	A128	A	x 3	斜子タタキ	有	ヨコナナ	推 24.0	15.0	残 6.1	
7 181 14	北東居住域	周溝墓	B131250	A	x 4	平行タタキの後部分的にナナ	有	ナナ	推 21.7	15.0	残 11.8	
8 219 19	北東居住域	土坑	C3833	A	x 4	平行タタキ	有	ヨコナナ	推 21.7	15.0	残 11.8	
9 504 8	区画溝	溝	E091006	B x c × 6	ハケ	有	ハケ、ト半筋ケズリ	推 22.0	12.8	26.9		
10 486 6	区画溝	溝	B130240	C x a × 3	斜面文タタキ	有	ナナ、指押さえ	推 25.1	11.0	残 20.0		
11 551 20	大溝(谷)	谷	F1	f層	C x a × 3	斜子タタキ	有	ヨコナナ	推 18.2	11.0	推 21.0	
12 416 13	北西居住域	堅穴D8	D1222	C x a × 4	平行タタキの後ヨコナナ(回転ナナ)	有	ナナ	推 26.6	13.0	31.3		
13 347 9	南西居住域	溝	E090524	C x b × 5	工具ナナ	有	工具ナナ	推 21.1	11.6	22.1		
14 576 5	大溝	H11	3層	C x c ○ 4	平行タタキの上から指押さえ	有	縦筋方的工具ナナ	推 25.6	11.8	28.0		
15 498 24	区画溝	溝	A128	C y d × 6	ハケの後ナナ	有	板ナナ	推 26.4	11.8	26.5		
16 227 9	北東居住域	土坑	B130965	C y d × 6	ハケ	有	板ナナ	推 26.6	11.8	26.5		
17 557 8	大溝	大溝F	上層	C y d × 6	ハケ	有	ナナメナナ	推 22.0	11.8	27.5		
18 490 14	区画溝	溝	A150	上層	C d × 6	ハケ	ハケ、ナナ	推 26.6	11.8	27.5		
19 181 13	北東居住域	溝状土坑	C2231	C x 2	斜格子タタキ	有	不明	推 24.7	11.8	26.5		
20 177 11	北東居住域	ビット	B120013	C	x 4	平行タタキの後部分的に指押さえ	ヨコナナ	推 27.0	11.8	26.5		
21 229 30	北東居住域	ビット	B131272	C	x 4	平行タタキ	ヨコナナ	推 26.0	11.8	26.5		
22 213 4	北東居住域	落ち込み	C2895	C	○ 4	平行タタキの上からナナ	ナナ	推 26.8	11.8	26.5		
23 221 20	北東居住域	包含層	C	○ 4	平行タタキをナナ消し	ナナ	ナナ	推 20.8	11.5	26.5		
24 208 2	北東居住域	包含層	C	× 4	平行タタキ	有	ナナ	推 20.8	11.5	26.5		
25 415 23	北西居住域	堅穴D3	D1070	C	x 4	平行タタキの後ヨコナナ(回転ナナ)	回転ナナ?	推 24.0	11.8	26.5		
26 551 19	大溝(谷)	谷	F1	e、i層	C	○ 4	平行タタキの後ナナ、指押さえ	板ナナ	推 24.0	11.8	26.5	
27 492 12	区画溝	溝	A150	下層	C	× 6	ハケ	板ナナ	推 23.4	11.8	26.5	
28 492 10	区画溝	溝	A150	下層	C	× 6	ハケ	ハケ、指押さえ	推 25.0	11.8	26.5	
29 492 11	区画溝	溝	A150	下層	C	× 6	ハケ	ハケ	推 25.0	11.8	26.5	
30 253 29	南東居住域	土坑	A435	C	× 6	ハケ	工具ナナ	推 29.2	11.8	26.5		

第30表-2 韓式系土器・土器器 觀一覧表

資料 No.	出土地域 遺構 No.	遺構 遺跡No.	層位	口底部の形態 蒸気孔の形状 外側部の形態 生駒西翼産の土上	外側調整		内面調整	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
					底部 削り	表面調整				
31 333 8	南西居住域	土坑	A1135	C	x 6	ハケ	ヨコハケ	推 26.0	推 21.8	残 103
32 226 7	北東居住域	土坑	B130765	C	x 6	ハケ	ハケ	推 20.6	推 17.6	残 17.6
33 227 5	北東居住域	土坑	B131180	C	x 6	ハケ	ナデ	推 30.8	推 30.8	残 19.9
34 229 28	北東居住域	土坑	C1811	C	x 6	ハケ	ハケ	推 37.7	推 37.7	残 75
35 204 21	北東居住域	ピット	C3107	C	x 6	ハケ	ハケ	推 23.8	推 23.8	残 5.1
36 210 27	北東居住域	土坑	C4159	C	x 6	ハケ	ハデ	推 22.6	推 22.6	残 26.7
37 187 2	北東居住域	土坑	C4159	C	x 6	ハケ	ハケ	推 23.4	推 23.4	残 26.3
38 189 28	北東居住域	包含層	集中帯	C	x 6	ハケ	有 ハケ	推 30.2	推 30.2	残 5.8
39 174 23	北東居住域	掘立	掘立CI	C	x 6	ハケ	ナデ、ケズリ	推 26.0	推 26.0	残 6.4
40 234 18	北東居住域	溝	D495	C	x 6	ハケ	ヨコナデ	推 30.8	推 30.8	残 13.3
41 233 19	北東居住域	土坑	D520	C	x 6	ハケ	ナデ	推 28.0	推 28.0	残 10.0
42 230 14	北東居住域	土坑	D519	C	x 6	ハケ	ナデ	推 26.0	推 26.0	残 8.2
43 415 17	北西居住域	堅穴D2	D678	C	x 6	ハケ	工具ナデ	推 27.0	推 27.0	残 20.7
44 566 3	大溝	土坑	D690	3~6層	C	x 6	ハケ	ハケ、ナデ	推 27.0	推 27.0
45 421 23	北西居住域	土坑	D480	C	x 6	ハケ	ナデ	推 23.7	推 23.7	残 25.4
46 348 13	南西居住域	溝	E090446	C	x 6	ハケ	ナデ	ハケの後ナデ	推 26.8	残 7.3
47 463 4	西居住域	堅穴F9の カマド	F1105	C	x 6	ハケ	ハケの後ナデ	推 24.0	推 24.0	残 16.5
48 576 7	大溝	区画溝	H11	1層	C	x 6	ハケ	ハケ	推 24.0	推 23.7
49 487 16	北東居住域	土坑	B130670	D y d	x 6	ハケ	ハケ後ナデ	推 24.0	推 24.0	残 19.9
50 208 5	北東居住域	土坑	C2700	D y d	x 6	ハケ	ハケ	板ナデ	推 22.7	推 22.0
51 208 4	北東居住域	土坑	C2401	D y d	x 6	ハケ	ナデ	板ナデ	推 21.7	推 21.7
52 187 1	北東居住域	土器群	C4159	D y d	x 6	ハケ	ナデ	板ナデ	推 22.8	推 22.8
53 199 2	北東居住域	土器群	C2401の 上部	D y d	x 6	ハケ	板ナデ	推 24.2	推 24.2	30.5
54 199 1	北東居住域	土器群	C2401の 上部	D y d	x 6	ハケ	板ナデ	推 26.0	推 26.0	31.7
55 417 4	北西居住域	堅穴D15の カマド	D1028	D y d	x 6	ハケ	ハケ、ナデ	板ナデ	推 21.3	推 21.3
56 424 8	北西居住域	土坑	D1617	D y d	x 6	ハケ	板ナデ	推 21.7	推 21.7	21.7

第30表-3 轉式系土器・土鍋器 鋼一覧表

資料No.	遺物No.	出土区域	遺跡	遺構No.	層位	生駒西墓業の形狀 蒸気孔の形態 底部部の形態	外而調整 底部部の削り	外而調整		内面調整	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)									
								D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推21.4	推21.4	残33.7	
57	427	13	北東居住域	溝	D886	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推21.4	推21.4	残25.2	
58	536	7	大森	溝	E1001	谷7上	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推21.4	推21.4	残9.0
59	333	9	南西居住域	土坑	A1035	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推20.8	推20.8	残7.1	
60	496	28	北東居住域	土坑	B10419	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推24.4	推24.4	残18.6	
61	227	8	北東居住域	土坑	B10965	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推25.6	推25.6	残21.8	
62	227	10	北東居住域	土坑	B10966	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推21.0	推21.0	残11.0	
63	225	34	北東居住域	土坑	B131097	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推24.1	推24.1	残7.1	
64	182	30	北東居住域	周溝墓	B131101	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推27.0	推27.0	残10.7	
65	229	7	北東居住域	土坑	B131231	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推22.4	推22.4	残9.0	
66	228	31	北東居住域	土坑	B131200	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推23.4	推23.4	残11.0	
67	194	3	北東居住域	溝	C2422	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推26.2	推26.2	残9.5	
68	209	21	北東居住域	土坑	C3547	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推22.2	推22.2	残11.1	
69	211	8	北東居住域	落込み	C4167	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推16.2	推16.2	残11.1	
70	217	5	北東居住域	包含層	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推24.6	推24.6	残16.2		
71	174	22	北東居住域	掘立	掘立C1	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推23.9	推23.9	残11.9	
72	175	12	北東居住域	掘立	掘立C2	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推23.3	推23.3	残6.2	
73	175	13	北東居住域	掘立	掘立C2	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推24.0	推24.0	残12.3	
74	174	21	北東居住域	掘立	掘立C1	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推20.8	推20.8	残5.2	
75	232	18	北東居住域	土坑	D474	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推21.6	推21.6	残24.1	
76	232	17	北東居住域	土坑	D474	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推27.4	推27.4	残13.8	
77	230	1	北東居住域	掘立D13の ピット	D509	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推30.0	推30.0	残17.0	
78	418	3	北西居住域	土坑	D1394	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推20.9	推20.9	残7.8	
79	424	7	北西居住域	土坑	D1617	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推25.7	推25.7	残15.0	
80	424	6	北西居住域	溝	F724	D	y	d	x	6	ハケ	ナテ	ナメナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	板ナテ	ハケ	推19.4	推19.4	残13.3	
81	468	7	西居住域	溝	F1062	D	y	d	x	6	ナテ	ナテ	ナメナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	推23.6	推23.6	残19.8	
82	467	6	西居住域	溝	F1062	D	y	d	x	6	ナテ	ナテ	ナメナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	推23.8	推23.8	残19.2	
83	558	22	大森	中層F	D	y	d	x	6	ナテ	ナテ	ナメナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	板ナテ	ナテ	工具ナテ	工具ナテ	残5.1		

第30表-4 韓式系土器・土師器 鑑一覧表

資料 No.	出土地域 遺物 No.	遺構	遺物No.	層位	外側調整		内面調整	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		
					生 物 底 部 の 形 態	陶 器 底 部 の 形 態						
84	464	25	西宮住城	竪穴F13	F950	D	×	6	ハケ	ハケ、ナデ	推 244 残 124	
85	576	6	大澤	H11	1層	D	×	6	ハケ	ナデ	推 200 残 125	
86	497	23	区画溝	A28			X	a	平行タキの後ヘラナデ	ヨコナデ	推 116 残 38	
87	492	13	区画溝	A950	下層	X	a	X	平行タキの後ヘラナデ	ヨコナデ	推 274 残 89	
88	484	1	区画溝	B130240		X	a	X	平行タキの後工具ナデ	ヨコナデ	推 123 残 28.5	
89	229	17	北東居住城	B131093	土坑	X	a	X	平行タキの後部分的に押さえ	ヨコナデ	推 140 残 37	
90	568	25	人澤		大溝F	中層b	X	a	平行タキの上から回転タキ	ヨコナデ、押さえ	推 120 残 60	
91	463	6	西居住城	竪穴F97	F1105		X	a	3	格子タキ	ヨコナデ	推 155 残 45
92	500	30	区画溝	A34	1層	X	a	X	5	工具ナデ	ヨコナデ	推 152 残 25
93	344	30	南西居住城	溝	A951		X	a	X	不明	不明	推 128 残 31
94	324	20	南西居住城	竪穴E8	E909358		X	a	X	○ 4 キ?) の後部分的にヨコナデ	タテナデ	推 142 残 123
95	185	12	北東居住城	土坑	C3486		X	c	0	平行タキ (单線脚走集線文タタキ?)	ヨコナデ	推 16.6 残 15.6
96	419	31	北西居住城	土坑	D607		X	c	X	3 格子タキ	ヨコナデ	推 15.1 残 9.3
97	541	22	大澤	E909001	中層a	X	c	X	5	不定方向のゆるいヘラタキ	タテナデ	推 14.0 残 19.3
98	541	23	大澤	E909001	谷3	X	c	X	5	ケスリ	ヨコナデ	推 20.5 残 5.9
99	215	28	北東居住城	包含層		X	c	X	3	格子タキ	ヨコナデ	推 16.5 残 9.8
100	341	25	南西居住城	土坑	AI393		Y	b	X	6 ハケ	ハケ	推 10.7 残 11.1
101	424	19	北西居住城	土坑	D472		Y	c	X	6 ハケの上からナデ	工具ナデ	推 18.5
102	225	1	北東居住城	獨立C7周	E131001		Y	d	X	6 ハケ	ナデ	推 140 残 102
103	194	4	北東居住城	圓溝	C2422		Y	d	X	6 ハケ	ナデ	推 140 残 102
104	175	1	北東居住城	掘立	掘立C1	北壁土器 滴り	Y	d	X	6 ハケ	板ナデ ナデ?	推 140 残 102
105	497	22	区画溝		A128	1層	X	1-3	編帶文、格子タタキ	ヨコナデ	推 140 残 102	
106	463	20	西居住城	竪穴F12	F1095		X	1	單線横走集線文タタキ	ヨコナデ	推 140 残 102	
107	463	10	西居住城	カマド	F1573		X	1	編織文タタキ	ヨコナデ	推 140 残 102	
108	465	13	西居住城	井戸	F690		X	6	ハケ	ヨコナデ	推 140 残 102	
109	558	23	大澤		大溝F	中層b	X	6	ナデ	ヨコナデ	推 140 残 102	

第31表 韓式系土器・土師器 編一覧表

資料 番 号	遺 物 名	出土区域	選様	遺標No.	層位	口部 底部の形状 把柄の形状 手形の形状	外 面調査	内面調査	口径 (cm)	器高 (cm)
1 482 20	区画溝			B130240	上層	A x b ○ 1 平行タタキ、輪筋的に上からナデ	ナデ、板ナデ あて具鉢の上からナデ	推 296	23.3	
2 482 21	区画溝			B130240	上層	A x 久 × 1 平行タタキ	板ナデ	推 295	22.9	
3 216 1	北東居住域	包含層		C3818と3840の 切り合ひ部開窓 区南西部	10面掘り下げ	A x 次 ○ 1 平行タタキ、輪筋的に上からナデ	ヨコナデ、板ナデ	推 307	22.9	
4 170 25	北東居住域	堅穴住居		C473		A ? a × 1 平行タタキ	ナデ	推 265	14.2	
5 192 12	北東居住域	土坑		A ? b × 1 平行タタキ (單線横走集線文?)	ナデ	推 300	残 14.7			
6 224 22	北東居住域	13面		B131001		A ? 次 ○ 1 平行タタキ、輪筋的に上からナデ	板ナデ	推 296	21.4	
7 222 22	北東居住域	溝		C4247	10面掘り下げ	A ? 次 ○ 1 平行タタキ	ナデ、板ナデ	推 256	残 18.8	
8 340 24	南西居住域	土坑		A1800		A 久 ○ 1 平行タタキ、輪筋的に上からナデ	ヨコナデ	推 274	7.8	
9 484 23	区画溝			B130240		B x x 2 上部ハケ、下部板ナデ、削り	ナデ	推 270	16.2	
10 482 22	区画溝	溝		B130240	上層	B ? c x 2 ハケ	ハケ	推 256	13.0	
11 232 20	北東居住域	井戸		D474	5面下、6面下	B y c x 2 ハケ	板ナデ、ナデ	推 250	26.6	
12 427 10	北西居住域	溝		D986		B y c x 2 ハケ	ナデ	推 228	21.0	
13 187 6	北東居住域	土坑		C4159		B y d × 2 ハケ	指オサエ	推 21.3	22.0	
14 338 7	南西居住域	土坑		A1654		B y d × 2 ハケ	工具ナデ	推 24.0	22.0	
15 251 7	南東居住域	井戸		A494	底下層	B y d × 2 ハケ	板ナデ	推 222	21.9	
16 208 3	北東居住域	11坑		C2700		B y d × 2 ハケ	指オサエ、ナデ	推 20.4	20.5	
17 296 17	北東居住域	落ち込み		C2701		B y × 2 ハケ	指オサエ	推 22.2	22.5	
18 463 23	西居住域	堅穴F12、 カマドF1068 F1063		F1099、F1088		B y × 2 ハケ	板ナデ、ナデ	推 29.6	27.0	
19 191 2	北東居住域	土坑		2303		B c × 2 ハケ	ナデ、工具ナデ	推 30.0	残 13.5	

第32表 神式系土器・土師器 羽釜一覧表

資料 番号 No.	出土地域 No.	遺構 No.	遺構 No.	層位	生 物 軸 西 露 部 の 形 態 輪 の 輪 土	外 面 調 整 部 より 下 部	内面調整		山径 (cm)	器高 (cm)
							A	a × 1 平行タタキ	同心円出で具痕残る ヨコナデ	
1 566 2	大溝	D900	5層	A a × 1 平行タタキ	同心円出で具痕残る ヨコナデ	推 164	26.0			
2 490 13	区画溝	A950	上層	B a ○	ヨコナデ	179 残 5.9				
3 494 8	区画溝	B130236		B a ○ 1 平行タタキ	ヨコナデ、指押さえ	175 残 26.5				
4 205 28	北東居住域	C2701		B a ○	ヨコナデ、指押さえ	推 192 残 5.0				
5 205 17	北東居住域	包含層	南東谷部	B a ○ 1 平行タタキの上から部分的にヨコナ デ	ヨコナデ	推 196 残 10.9				
6 484 3	区画溝	B130010 B130240.2と対 応か		a ○	ヨコナデ	残 9.4				
7 205 29	北東居住域	包含層		第10面掘り下げ a ○	ヨコナデ、指押さえ	残 4.5				
8 185 11	北東居住域	土坑	C3485	炭層 a ○	ヨコナデ	残 4.2				
9 207 8	北東居住域	包含層		第11面削立 a × 1 平行タタキ	ヨコナデ	残 6.4				
10 207 28	北東居住域	包含層		第10面掘り下げ a ○ 1 平行タタキをナナデ消し	ヨコナデ、工具ナナデ	残 15.3				
11 219 18	北東居住域	土坑	C3283	b ○ 2 ナナデ? 開の下面はハケ	ヨコハケ、ヨコナナデ	残 6.7				
12 497 14	区画溝	A128	I層	B ○	ヨコナナデ	推 19.8 残 6.6				
13 536 9	大溝	E090001	谷の東の肩口	C c × 2 タテハケ	工具ナナデ、ヨコナナデ	推 20.0 残 9.7				
14 536 8	大溝	E090001	谷7、5、3(西 壁内)	C c × 2 タテハケ?	工具ナナデ、ヨコナナデ	推 21.2 残 7.8				

第33表-1 輪式系土器・土師器 移動式カマド一覧表

資料 番号 No.	出土地域 No.	遺構 名	遺構 番号 No.	層位	掛け口と本体部の境に開けた口の形状 及び左右の凸縁の形状	掛け口の形状 及び底の形状 の数	外側の調整 内面の調整	掛け口外径 × 間隔 cm	掛け口内径 × 間隔 cm	掛け口形状 とタイルの形状 は内径を示す	器高 (cm)
1 584 1 北東居住域 沼、土器窯 傍邊	C2423, C4264	2	○					15.5, 16			残 14.8
2 594 1 区画溝 清 A950	上層	1 A x ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	25.4						残 22.55
3 区画溝 清 A428・434・501	1層	1 A x ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 27.2						残 17.65
4 585 1 南西居住域 土坑 A1135	(試E)2層	1 A x a ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	28.7			21.9		33	残 32
5 595 2 北東居住域 土坑 B130764		1 A x a ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 27.6			23			残 18.4
6 北東居住域 沼、ヒット C250・2606 2607		1 A x a ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 29.6			25			残 27
7 北東居住域 ヒット、包 C265、南東谷部 C2422・2415 2580・2431 2701		1 A x a ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 30			23.8			残 21.6
8 593 2 北東居住域 沼、土坑、 落ち込み C2927		1 A x a ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 24.6			18.6			31.5
9 586 1 北東居住域 沼 D900	5~6層	1 A x c ○ 有	1	平行タスキの上から部分的にナデ	推 25.4			18.4			残 14
10 598 1 大溝								27.5			残 20.5
11 591 1 大溝	包含層、E090001	谷7上、7下、7下層 下層、谷7上、 上層a、 ^b 中層 谷3~地山	1 A x a x 有	1 平行タスキの上から部分的にナデ	推 25.5			20.3		49	30.1
12 589 1 大溝	E090001,包含層	北半中層 中層a、下層、 谷7上下層	1 A x a ○ 有	1 平行タスキの上から部分的にナデ オサエ	推 27.6			21.5		43.2	34.4
13 587 1 大溝	E090001,包含層							28		21.9	46.2
13 588 1 大溝											36

第33表-2 韓式系土器・土師器 移動式カマド一覧表

資料番号	出土地域	遺構	遺構No.	層位	外側の調査	内面の調査	掛け口形状 掛け口の形狀 口の数	掛け口形状 掛け口と外側 の内往を示す)	底高 (cm)
14 594 2	大溝		E090001.包含層	谷7上層(谷3直上 中層、直下層)	1 A x a ○ 有	1 平行タキの上か ら部分的にナデ、 ナオサエ	推 27.4	推 21	30.5
15	南北居住城 墓、大溝	土坑	E090001A1800		1 A x ○ 有	1 平行タキの上か ら部分的にナデ、 ナオサエ	推 28.4	推 22.5	残 14.8
16	北東居住城 土坑		C2415.3485		1 A x a ○ 有	1 平行タキの上か ら部分的にナデ、 ナオサエ	推 28.2	推 25.2	推 43.5
17 598 3	区画溝		B13240	中・下層	1 A b ○ 有	1 平行タキの上か らナデ、ナサエ	推 24.2		残 6.8
18 598 2	大溝	大溝F		大溝、谷1	1 A b a x ○ 有	1 平行タキの上か らナデ、オサエ	推 28.2	推 25.2	推 43.5
19	屋外	土坑	B13046		1 A ○ 有 1	1 平行タキの上か らナデ	推 27.4		残 5.65
20	北東居住城	落ち込み	C2701		1 A ○ 有 1	1 タキの上からナ デ	推 26.6		残 8
21	区画溝	溝	A228	1層	1 A x ○ 有 1	1 タキをナデ消し ナデ	推 25.4		残 11.15
22	区画溝	溝	A950	上層	1 A x ○ 有 2	1 タキをナデ消し ナデ	推 26.4		残 18.65
23 593 1	区画溝	骨	A228	1・IIW	1 A x a ○ 有 1	1 タキをナデ消し ナデ	推 26.4		残 19
24	北東居住城	包含層、土	C2426、南東谷部		1 A x ○ 有 2	2 タキのあと?ナ デ	推 25.6	推 21.6	残 7.4
25	北東居住城	土坑	C2426		1 A x ○ 有 2	ナデ	推 27.2		残 9.8
26	大溝		H11	2層	1 A x ○ 有 2	ナデ	推 25.6		残 14.95
27 604 2	大溝		D900	3層、4層	1 A x a x ○ 有 2	底部付近ハケ 他ナデ	推 25.6	推 17.6	
28 604 1	北東居住城	部分谷部、9-4tr		1 B ○ 有 2	ナデ	板ナデ、ナデ	推 28	推 22.8	残 9.3
29 596	北東居住城	部分住居、 溝	C3770、B130670	覆土	1 B x a ○ 有 3	ハケ	推 27.9	推 22.3	残 22.7
30 597 1	大溝		E090001	上、中層、谷7層、 谷7下層	1 B x a x ○ 有 3	ハケ	前り、ハケ	推 25.8	推 22
31 601 3	北東居住城	掘立柱建物	C3871、掘立C2, 掘立C2(外)、木 箱3周辺	1 C x b x ○ 有 3	ハケ、一部ナデ	ハケ	推 19		20.7

第33表-3 韓式系土器・土師器 移動式カマド一覧表

資料No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	掛け口の形状	掛け口の形状	外表面調査	内面の調査	掛け口径 (掛け口タイ プの場合は内径を 示す)	底高 (cm)
32 599 1	大津	E090001, 包含層	1 C x b x	3 ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	21.2	残 18.9			
33 599 2	大津	E090001, 包含層	1 C x b x	3 ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	21.4	残 21.5			
34 602 1	大津	大溝F、谷F1	谷1、大溝	1 C x b x	3 ハケ、部分的にナデ	23	残 22.2			
35 424 9	北東居住域	土坑	D1617	底の上位	1 C y c ○	3 ハケ	ナデ	24	残 11.6	
36	大溝	E090001	谷5底土、谷6、谷 の東の肩口(谷7 上面)	1 D x x	3 ハケ、ヨコナデ	ナデ	23.6	22	残 13	
37 600 1	流路	F529北の片口、 F524渠下部	渠529北の片口、 渠524渠下部	1 D x b x	3 ハケ	ナデ	20.5	20.5	残 39.7	
38	流路	F524	土器群②	1 D x b x	3 ハケ、部分的にナ デ	ナデ	21	21	残 17.8	
39 603	谷	F1	谷1	1 D x x	3 ハケ、部分的にナ デ	ナデ	21.8	21.8	残 30.1	
40 604 3	大津	大溝F、谷F1	天溝、谷1	1 D c x	3 ハケ	ナデ、オサエ	20	20	推 36.5	
41	北東居住域	土坑	C3024	1 x b x	3 ハケ	ナデ	37	37	残 23.8	
42	北東居住域	土坑	C3024	1 x x	3 ハケ	ナデ	11.3	11.3	残 11.3	
43	北東居住域	掘立柱建物 、十坑	D456	1-層 南半	1 x b x	3 ハケ	ナデ	35.7	35.7	
44	北東居住域	溝	D456	包含層 (池山重上)、 1-層 南半	1 x b x	3 ハケ	ナデ	41.8	41.8	
45 601 4	北東居住域	溝	D456	包含層 (池山重上)、 1-層 南半	1 x b x	3 ハケ	ナデ	31.8	31.8	
46	大津	E090001	谷5、 谷6、 谷7の東の肩 口(谷7上面)	1 x b x	3 ハケ	ナデ	24.6	24.6	残 24.6	
47 601 2	大津	E090001	谷5、 谷6、 谷7の東の肩 口(谷7上面)	1 x b x	3 ハケ	ナデ	46	46	推 46	
48	北東居住域	C2422	谷6、 谷7の東の肩 口(谷7上面) 土器集中部	1 b x	3 ハケ	ナデ	48	48	残 18.8	
49 601 1	大津	E090001	谷5、 谷6、 谷7の東の肩 口(谷7上面)	1 b x	3 ハケ、ナデ	ナデ	46	46	推 46	
50	大津	E090001	谷5、 谷6、 谷7の東の肩 口(谷7上面)	1 b x	3 ハケ	ナデ				

第34表-1 土師器 高杯一覽表

資料番号	型式(大区分)	型式(小区分)	口径の大小	脚部の接合方法	側穴の有無	図面No.	実剖No.	出土地域	遺構	遺構No.	層位	壺部内面調査		壺部外面調査	
												口径(cm)	體高(cm)		
1 2	右幾高杯	a	1 a	1 a	29	559	19	大溝	中層b	A1189	ナデ	ハケの後ナデ	ナデ	15.4 残 55	
2 2	右幾高杯	a	1 a	1 a	266	344	16	南西居住域	中下層	B130240	ハケ	ハミガキ	ハケ	16.4 14.3	
3 2	右幾高杯	a	1 a	1 a	232	485	2	区画溝	中下層	B130240	ナデ	ハケの上から工具ナデ	ナデ	15.8 残 6.1	
4 2	右幾高杯	a	2 a	1 a	14	485	1	区画溝	中下層	B130240	工具ナデ	ハミガキ	ナデ	13.5 残 5.9	
5 2	右幾高杯	a	2 a	1 a	424	484	22	区画溝	中下層	B130240	ナデ	ナデ	ハケの後ヨコナデ	14.7 残 10.8	
6 2	右幾高杯	b	1 a	1 a	20	559	21	大溝	中層b	A1187	ナデ	ハケの後ヨコナデ	ナデ	16.8 残 6.4	
7 2	右幾高杯	b	1 a	1 a	333	556	21	大溝	上層	B130240	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	15.6 12.3	
8 2	右幾高杯	c	1 a	1 a	245	559	11	大溝	中層最下部	B130240	工具ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	17.9 截 6.3	
9 2	右幾高杯	c	1 a	1 a	56	559	13	大溝	中層	B130240	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	15.4 11.6	
10 2	右幾高杯	c	1 a	1 a	844	349	20	南西居住域	土坑	E090948	ハケ	ハケの後ヨコナデ	ハケ	18.6 残 6.2	
11 2	右幾高杯	c	1 a	1 a	80	182	7	北東居住域	圓溝墓	B131250	ナデ	ナデ	ナデ	18.0 残 8.0	
12 3	無綫外反高杯	c	2 a	2 a	864	341	32	南西居住域	土坑	A1187	不明	不明	不明	11.4 截 3.9	
13 3	無綫外反高杯	c	2 a	2 a	80	340	27	北東居住域	土坑	A1171	ナデ	ナデ	ナデ	11.7 截 7.1	
14 4	無綫直口高杯	b	2 a	2 a	188	485	6	区画溝	中・下層	B130240	ナデ	ハミガキ暗文あり	ヨコナデ	13.4 11.1	
15 4	無綫直口高杯	b	2 a	2 a	195	182	5	北東居住域	圓溝墓	B131250	ナデ	ナデ	ナデ	13.0 残 9.5	
16 4	無綫直口高杯	c	2 a	2 a	212	340	32	南西居住域	土坑	A1171	不明	不明	不明	14.1 残 8.9	
17 4	無綫直口高杯	c	2 a	2 a	289	182	19	北東居住域	周溝	B131101	ナデ	ハミガキ	ナデ	13.8 10.7	
18 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	53	559	25	大溝	中層a	B130240	ナデ	ハミガキ暗文あり	ヨコナデ	13.8 5.2	
19 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	63	559	27	大溝	中層F	B130240	ナデ	ハミガキ暗文あり	ヨコナデ	14.3 残 5.8	
20 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	559	559	28	244	大溝F	B130240	ナデ	ハミガキ暗文あり	ハケ	14.9 残 6.1	
21 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	58	485	7	18	区画溝	B130240	ナデ	ナデ	ナデ	12.5 残 9.7	
22 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	58	559	18	人溝	中下層	B130240	ナデ	ナデ	ナデ	14.4 残 6.9	
23 3	無綫外反高杯	+	1 a	1 a	70	485	10	区画溝	中層	B130240	ナデ	ナデ	ナデ	16.7 13.1	
24 4	無綫直口高杯	b	1 a	1 a	1185	201	27	北東居住域	包含層	B130240	ナデ	ナデ	ナデ	15.9 残 5.7	
25 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	136	498	1	区画溝	南東谷部	A428	ナデ	ハミガキ暗文あり	ヨコナデ	13.8 残 6.3	
26 5	輪形高杯	a	2 a	2 a	566	181	7	136	区画溝	C2331	ナデ	ハミガキ暗文あり	ハラナデ	14.0 残 5.8	
27 2	右幾高杯	a	1 b	1 b	508	542	12	大溝	中層~地山蔭上	E090901	ナデ	ナデ	ヨコナデ	18.0 12.4	
28 2	右幾高杯	a	2 b	2 b	870	495	19	南西居住域	土坑	A930	ナデ	ナデ	ナデ	14.4 12.2	
29 2	右幾高杯	b	2 b	2 b	483	483	1	43	区画溝	B130240	ナデ	ナデ	ナデ	12.5 9.3	
30 2	右幾高杯	c	1 b	1 b	30	559	21	大溝	中層F	B130240	ナデ	ナデ	ヨコナデ	15.6 12.5	

第34表-2 土師器 高杯一覧表

資料番号	型式(大区分)	型式(小区分)	刺突の有無	図版No.	測量No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	坏部内面調整		坏部外面調整	口径(cm)	器高(cm)	
										脚部の接合方法	口径の大小	遺物No.	遺物No.		
31.3	無縫外反高杯	a	b	492	4	180	区画溝	A950	下層	ハケの後ナデ	ハケミガキ	推152	残112		
32.4	無縫直口高杯	a	b	542	13	580	大溝	E090001	中層、下層	ハラミガキ	ハラミガキ	推174	推127		
33.4	無縫高杯	a	b	485	9	453	区画溝	B130240	中・下層	ナデ	ヨコナデ	推137	119		
34.5	輪形高杯	a	b	559	23	390	大溝F	A950	中層b	ナデ	ヨコナデ	推166	166		
35.5	輪形高杯	a	b	492	3	183	区画溝	A950	下層	ナデ	ナデ	推177	14.5		
36.5	輪形高杯	a	b	492	9	151	区画溝	A950	下層	ハラミガキ	ハラミガキ	推209	残146		
37.5	輪形高杯	a	b	463	8	145	西居住域	F113, P35	下層	ハラミガキ断面あり	ハラミガキ	推127	109		
38.5	輪形高杯	a	b	219	7	465	北東居住域 排水溝	C3408	下層	ナデ	ナデ	推123	116		
39.1	入大型有段高杯	b	+	215	3	801	北東居住域 排水溝	E090001	10面削り下げ	ハラミガキ断面あり	不明	推28.9	残16.4		
40.2	有段高杯	c	1	b	+	542	9	779	大溝	E090001	谷3(鬼山里上)	ナデ	ハラミガキ	推166	残5.8
41.2	有段高杯	c	1	b	+	220	26	871	北東居住域 土坑	C4551	タテミガキ	タテミガキ	推16.4	残9.1	
42.2	有段高杯	c	1	b	+	220	27	871	北東居住域 土坑	C4551	タテミガキ	タテミガキ	推16.2	残6.4	
43.3	無縫外反高杯	c	2	b	+	542	16	531	大溝	E090001	北半部、アゼよ	ナデ	ナデ	推14.2	残5.4
44.4	無縫直口高杯	b	1	b	+	542	15	778	大溝	E090001	谷3	不明	ヨコナデ	推16.6	残5.6
45.4	無縫直口高杯	b	2	b	+	498	5	747	区画溝	A428	IV層1層	ナデ	ヨコナデ	推13.6	残9.7
46.4	無縫直口高杯	c	1	b	+	338	1	419	南西居住域 土坑	A1654	ナデ	ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推15.3	残10.4
47.4	無縫直口高杯	c	1	b	+	496	21	228	区画溝	B130417	ナデ	ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推16.8	残13.4
48.4	無縫直口高杯	c	2	b	+	542	18	530	大溝	E090001	中下層	ナデ	ナデ	推14.3	残5.0
49.4	無縫直口高杯	c	2	b	+	421	24	421	北西居住域 土坑	D480	不明	ナデ	ナデ	推13.7	残5.8
50.5	輪形高杯	c	2	b	+	559	29	62	大溝F	B13101	中層a	ハラミガキ	ハラミガキ	推13.9	13.7
51.5	輪形高杯	a	2	b	+	182	18	163	北東居住域 周溝裏	B130240	中下層	ハラミガキ	ハラミガキ	推20.2	残7.8
52.4	無縫直口高杯	a	1	c	?	485	11	21	区画溝	E090001	中層a	ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推21.2	残7.4
53.1	大型有段高杯	c	+	559	15	52	大溝	A428	中層b	ヨコナデ	ヨコナデ	推24.8	残9.0		
54.1	大型有段高杯	c	+	542	11	534	大溝	A428	中層b	不明	ナデ	推22.5	14.8		
55.1	大型有段高杯	c	+	498	4	745	区画溝	B130240	上層	ハラミガキ	ハラミガキ	推25.0	残16.3		
56.1	大型有段高杯	c	+	221	1	825	北東居住域 排水溝	C3996, 3818	10面削り下げ	ハラミガキ	ハラミガキ	推22.6	残8.6		
57.1	大型有段高杯	c	+	170	17	416	北東居住域 排水溝	B130240	中・下層	ヨコナデ	ヨコナデ	推23.0	残9.0		
58.9.2	無縫直口高杯	a	2	c	+	485	4	37	区画溝	B130240-2	2, 3層	ハラミガキ	ハラミガキ	推14.3	残7.3
60.4	無縫直口高杯	c	1	c	+	574	17	373	人溝	H11	2, 3層	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	推15.4	11.5
61.4	無縫直口高杯	c	1	c	+	574	16	288	大溝	H11	2層	ヨコナデ	ヨコナデ	推16.2	11.7
62.4	無縫直口高杯	c	1	c	+	564	4	489	大溝	D900	ナデ	ナデ	ナデ	推15	11.8

第34表-3 土器一覧表

資料番号	型式(大区分)	型式(小区分)	口経の大小	脚部の採査方法	刺突の有無	図面No.	遺物No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	坏部内面調整		坏部外面調整	口径(cm)	器高(cm)
												上層	下層			
63	4 無段直口高坏	c	2	c	+	341	12	850	南西居住域 土坑	A1357		ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推	146	129
64	4 無段直口高坏	c	2	c	+	490	5	118	区画溝	A950	上・中層	ハケの後ナデ	ナデ、ヨコナデ	推	154	117
65	4 無段直口高坏	c	2	c	+	485	8	17	区画溝	B130240	中・下層	ハケ	ハケの後ナデ	ナデ	149	97
66	4 無段直口高坏	c	2	c	+	643	24	131	西丘居住域 夥穴F16	F1289		ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推	148	58
67	4 無段直口高坏	c	1	c	+	542	19	783	大溝F	E090001	谷3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	推	152	114
68	5 梭形高坏	a	2	c	+	559	22	246	大溝F		中層	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	推	137	113
69	5 梭形高坏	a	2	c	+	559	32	33	大溝F		中層	ハケ	ヨコナデ、ナデ	推	144	116
70	5 梭形高坏	a	2	c	+	171	3	257	北東居住域 土坑	C13857		ハラミガキ断文ありナデ、ヨコナデ	ハラミガキ断文ありナデ、ヨコナデ	推	127	109
71	5 梭形高坏	a	2	c	+	483	4	325	区画溝	B130240	上層	不明	ハラミガキ	推	132	105
72	5 梭形高坏	b	1	c	+	492	2	181	区画溝	A950	下層	ハケの後ナデ	ハケの後ナデ	推	149	111
73	5 梭形高坏	b	1	c	+	220	1	747	北東居住域 包含層		10面掘り下げ	ナデ	ナデ	推	152	99
74	5 梭形高坏	b	1	c	+	220	2	746	北東居住域 包含層		10面掘り下げ	ハミガキ	不明	推	156	119
75	5 梭形高坏	b	2	c	+	499	10	129	区画溝	A429		ハケの後ナデ	ナデ	推	133	106
76	5 梭形高坏	b	2	c	+	499	11	130	区画溝	A429	最下層	ハケの後ナデ	ナデ	推	134	残
77	5 梭形高坏	b	2	c	+	499	12	132	区画溝	A429		ナデ	ナデ	推	134	残
78	5 梭形高坏	b	2	c	+	499	13	131	区画溝	A429		ナデ	ナデ	推	130	52
79	5 梭形高坏	b	2	c	+	192	18	798	北東居住域 土坑	C3471		不明	ナデ、ヨコナデ	ナデ	144	99
80	5 梭形高坏	b	2	c	+	171	4	1762	北東居住域 土坑	C3837		ナデ	ナデ、ヨコナデ	推	142	97
81	5 梭形高坏	b	2	c	+	415	1	195	1		床面	ハケ	不明	ナデ	134	53
82	5 梭形高坏	b	2	c	+	225	28	169	北東居住域 土坑	B13103	下層	ハラナデ、ヨコナデ	ハラナデ、ヨコナデ	推	135	118
83	1 大型有段高坏	c	229	13	736	北東居住域 包含層					10面掘り下げ	ハミガキ	不明	210	114	
84	1 大型有段高坏	c	177	20	146	北東居住域 カマド					ナデ	ナデ	ナデ	247	169	
85	2 有段高坏	a	1	c	177	21	147	北東居住域 カマド	C1559		ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	ナデ	177	151	
86	4 無段直口高坏	b	2	c	203	4	51	北東居住域 ピット	C2063		ナデ	ハケ	ナデ	141	127	
87	4 無段直口高坏	b	2	c	177	19	221	北東居住域 カマド	C1557		ハケ	ハケ	ナデ	154	残	
88	4 無段直口高坏	b	2	c	427	2	498	西北居住域 溝	D986		ハケ	ハケ	ナデ	126	102	
89	5 梭形高坏	c	341	31	854	西北居住域 土坑					10面掘り下げ	ハミガキ	不明	147	残	
90	5 梭形高坏	a	1	c	492	8	13	区画溝	A187		ナデ	ナデ	ナデ	186	推	
91	5 梭形高坏	a	2	c	559	26	60	人溝	A950	中・下層	ハラミガキ断文あり	ハラミガキ断文あり	ナデ	135	52	
92	5 梭形高坏	a	2	c	204	2	1024	北東居住域 包含層		10層	ナデ	ナデ	ナデ	134	123	
93	1 大型有段高坏	d	559	33	393	大溝					ナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	ナデ	216	残

第35表-1 土師器 鈴一覧表

資料 No.	型式 形態	口径 の大小 (大・小区分)	出土区域 No.	遺物 No.	遺構	遺構No.	層位	内面調査	外面調査	口径 (cm)	器高 (cm)
1 浅鉢形	a	201	28	北東居住域	包含層						
2 浅鉢形	a	201	32	北東居住域	包含層						
3 浅鉢形	a	559	5	大溝							
4 浅鉢形	a	542	6	大溝							
5 浅鉢形	a	574	1	大溝							
6 浅鉢形	b	1	201	30	北東居住域	包含層	H11	2層、3層、下層	ナデ	ハラミガキ断文あり ハラケズリ、ヨコナナデ	11.5
7 浅鉢形	b	1	207	20	北東居住域						
8 浅鉢形	b	1	574	14	大溝						
9 浅鉢形	b	2	490	2	区画溝						
10 浅鉢形	b	2	490	3	区画溝	A950	上層	ナデ	ハケ、ヨコナナデ	11.8	4.7
11 浅鉢形	b	2	192	7	北東居住域	C2914		不明	不明	130	5.2
12 浅鉢形	b	2	192	10	北東居住域	C4773		ナデ	ハケ、ヨコナナデ	13.7	4.8
13 浅鉢形	b	2	170	8	北東居住域	C3840		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	14.8	6.5
14 浅鉢形	b	2	183	12	北東居住域	C3837		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	13.3	5.5
15 浅鉢形	b	2	183	11	北東居住域	C3837		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	12.6	5.1
16 浅鉢形	b	2	214	20	北東居住域	C3828		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	13.8	5.1
17 浅鉢形	b	2	201	29	北東居住域						
18 浅鉢形	b	2	559	6	大溝						
19 浅鉢形	b	2	556	17	大溝	D1086					
20 浅鉢形	b	2	542	1	大溝	D900	3層以下	ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	12.4	4.9
21 浅鉢形	b	2	574	3	大溝	A1135	(試E)第16層上面	ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	15.0	4.7
22 浅鉢形	b	2	177	10	北東居住域	H11	2層	ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	12.5	4.6
23 浅鉢形	b	2	415	24	北西居住域	B120013		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	13.9	4.8
24 浅鉢形	b	2	564	3	大溝						
25 浅鉢形	c	333	3	南西居住域							
26 浅鉢形	c	213	17	北東居住域	ピット	C3351		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	12.7	5.0
27 浅鉢形	c	195	5	北東居住域	掘立柱周圍溝	C2422		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	13.4	4.5

第35表-2 土器器一覧表

資料名	形態	口径(大・小)cm	図面名	出土地域	遺構	遺構No.	層位	内面調整	外表面調整	口径(cm)	器高(cm)
28 浅鉢形	2 a	566 18	大溝		大溝F	上層	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	13.8	5.3	
29 浅鉢形	2 a	542 3	大溝		E190001	中下層～地山面上	ハケ状工具ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	11.4	4.6	
30 浅鉢形	2 a	542 7	大溝		E190001	下層	ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 13.6	5.6	
31 浅鉢形	2 b	333 4	南西居住域	土坑	A1135		ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	13.0 残	4.1	
32 浅鉢形	2 b	559 4	大溝		大溝F	中層a	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	12.0	4.6	
33 浅鉢形	2 b	542 2	大溝		E190001	下層	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	15.8	5.0	
34 浅鉢形	2 b	542 4	大溝		E190001	下層	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	推 13.0	3.9	
35 浅鉢形	2 b	542 5	大溝		E190001	下層、中層及びF	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	推 12.6	4.5	
36 椭形	3 a	333 2	南西居住域	土坑	A1135		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 13.0 残	5.0	
37 椭形	3 a	196 20	北東居住域	掘立C10北縁溝	C4354		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 13.0	5.0	
38 椭形	3 a	196 19	北東居住域	掘立C10北縁溝	C4354	10面掘り下げ	工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 13.2	4.4	
39 椭形	3 a	221 15	北東居住域				工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 11.3	4.9	
40 椭形	3 a	197 7	北東居住域	土器群	C2401の上部		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 11.8 残	5.6	
41 楠形	3 a	574 2	大溝		H11	2層	工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 11.0 残	5.5	
42 楠形	3 b	195 6	北東居住域	掘立C7周開溝	2422		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 12.0 残	4.7	
43 楠形	3 b	195 8	北東居住域	掘立C7周開溝	2422		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 11.8 残	3.8	
44 楠形	3 b	196 18	北東居住域	掘立C10北縁溝	4354		工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 11.3 残	4.0	
45 楠形	3 b	574 4	大溝		H11	2層	工具ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 13.0 残	4.0	
46 鉢形	4 1	204 3	北東居住域	土坑			10面掘り下げ	ヘラミガキ留文あり	推 17.0 残	9.3	
47 鉢形	4 2	214 23	北東居住域		C3472		ナデ、ヨコナナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 10.2 残	6.3	
48 鉢形	4 2	559 1	大溝		大溝F	中層	ナデ	ヨコナナデ	推 11.6 残	3.8	
49 鉢形	4 2	559 2	大溝		大溝F	中層	ヨコナナデ	ナデ、押さえ	12.8	6.5	
50 鉢形	4 2	559 3	大溝		大溝F	中層	工具ナデ	ハケ、ヨコナナデ	10.6	5.5	
51 鉢形	4 2	559 7	大溝		大溝F	中層a	工具ナデ	ヘラケズリ、ヘラナナデ	推 15.4	4.8	
52 鉢形	4 2	566 15	大溝		大溝F	上層	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナナデ	推 12.6	6.0	

第35表-3 土器器 鉢一覧表

資料 No.	形態 式	口径 (大区分)	口径 (小区分)	出上区城 遺物 No.	遺物 名	遺物 位置	遺物 No.	層位	内面調整		外面部調整	口径 (cm)	器高 (cm)	
									内面調整	内面調整				
53	錐型	5	-	333	7	南西居住域		土坑	A1135	(試E) 2層	ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	推 20.1 残 10.0	
54	錐型	5	-	177	28	北東居住域		溝	C3829		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	推 13.8	
55	錐型	6	2	196	17	北東居住域		獨立C1北縁溝	C4354		ナデ	ハラケズリ、ヨコナナデ	推 8.1	
56	錐型	6	1	191	3	北東居住域		土坑	C3342		ナデ、ハケ	ハケ、ヨコナナデ	推 20.0 残 10.8	
57	錐型	6	1	191	25	北東居住域		溝状土坑	C2927		ナデ、オサエ	ハケ、ヨコナナデ	推 19.2	
58	錐型	6	1	191	3	北東居住域					押さえ、工具ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 18.8 残 9.4	
59	錐型	6	1	220	3	北東居住域			A695		ナデ、オサエ、ハケ	ハケ	推 21.6	
60	錐型	6	1	250	17	南東居住域		井戸			ナデ、オサエ	ハケ	推 26.0	
61	錐型	6	1	499	18	区縫溝			A429		板ナデ、オサエ	ハケ	推 15.5	
62	深鉢形	7	a	1	201	34	北東居住域		土坑	C2203	9面掘り下げ	ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 25.0 残 13.9
63	深鉢形	7	a	1	220	4	北東居住域				10面掘り下げ	ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 16.0 残 7.2
64	深鉢形	7	a	2	201	33	北東居住域		南東谷部		工具ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 17.0 残 8.6	
65	深鉢形	7	a	2	217	7	北東居住域				ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 11.4	
66	深鉢形	7	b	1	196	20	北東居住域		獨立C7周溝	C3509	10面掘り下げ	ハケ状工具ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 14.6 残 7.5
67	深鉢形	7	b	1	196	19	北東居住域		獨立C7周溝	C3509		ハケ状工具ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 20.4 残 13.7
68	深鉢形	7	b	1	175	17	北東居住域		標Y3の柱52+ -			ハケ、ヨコナナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 15.0 残 8.1
69	深鉢形	7	b	1	196	3	北東居住域		土器群	C2401の上部		ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 15.8
70	深鉢形	7	b	1	556	30	大溝		大溝F 上層			ナデ	ハケ状工具ナデ	推 19.2
71	深鉢形	7	b	1	428	21	北西居住域		溝	D902		ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 18.5
72	深鉢形	7	b	2	197	5	北東居住域		土器群	C2401の上部		ナデ	ハケ	推 15.2 残 8.5
73	深鉢形	7	b	2	197	6	北東居住域		土器群	C2401の上部		ナデ	ハケ	推 12.6 残 5.8
74	深鉢形	7	b	2	195	18	北東居住域		獨立C7周溝	C2422		ナデ	押さえ、ヨコナナデ	推 13.8 残 6.0
75	深鉢形	7	c	219	3	北東居住域		溝状土坑	C3416		ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 14.4	
76	深鉢形	7	c	422	23	北西居住域		土坑	D1258		ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 14.0 残 12.5	
77	深鉢形	7	d	203	20	北東居住域				9面掘り下げ	ケシリ	ケシリ、ヨコナナデ	推 17.4 残 11.5	
78	深鉢形	7	e	574	15	大溝			H11	1~4層	ナデ、板ナデ	ハケ、ヨコナナデ	推 20.0	
													13.3	

第36表-1 土器類 大型甕・長甕一覧表

資料 No.	種類 No.	大きさ 指 番 号	出土地域 No.	遺構 No.	遺構 名	位 置	外 部 調 整		内 部 調 整		口径 (cm)	腹 深 (cm)	器 高 (cm)	頸部 × 器 高
							外 部 の 様 子 の 形 態	外 部 の 様 子 の 形 態	外 部 の 様 子 の 形 態	外 部 の 様 子 の 形 態				
1 球胴甕	4558	9 493 1	区画溝	A950	下層	a 1	2 脊部ヨコハケ上からヨコナデ、他タテハケ	指オサエ	推	17.6	14.1	残	25.9	365.19
2 球胴甕	4406	8 325 12	南西居住域	A1613	井戸	a 2	1 脊部ヨコハケ、他タテハケ	指オサエ	推	16.2	14.2	27.2	386.24	
3 球胴甕	4872	9 575 5	人溝	H11	2~5層	a 2	1 脊部ヨコハケ、他タテハケ	指オサエ	推	17.4	15.1	推	280	422.8
4 球胴甕	4134	8 561 2	大溝	人溝F	中層b	a 3	1 脊部ヨコハケ、他ナメハケ	タテ方向ナデ	15.6	13.3	推	26.5	352.45	
5 球胴甕	4696	9 250 3	南東居住域	A542	井戸	a 4	? ハケ? (内外部付着)	ナデ?	17.2	15.0	27.3	409.5		
6 球胴甕	5138	9 493 13	区画溝	A950	下層	b 1	3 タテハケ	ナナメハケ	17.3	14.4	29.7	427.68		
7 球胴甕	4998	9 344 6	南西居住域	A1194	井戸	b 1	? ヨコハケ?	タテ方向ナデ、ナデ	17.0	13.7	29.4	402.78		
8 長胴甕	5418	9 504 7	区画溝	E091006	井戸	a 2	2 脊部ヨコハケ上からナデ、他タテハケ	指オサエ	推	18.0	15.7	30.1	472.57	
9 長胴甕	5544	9 565 8	大溝	D900	6層	a 3	1 脊部ヨコハケ、他ナメハケ		17.6	15.3	31.5	481.95		
10 長胴甕	7973	9 565 7	大溝	D900	6層	a 4	1 テハケ		23.8	16.1	推	33.5	539.35	
11 長胴甕	7363	9 567 5	大溝	大溝F	上層	a 4 ●	3 タテハケ	ケシリ	20.8	19.6	推	35.4	693.84	
12 長胴甕	6435	9 565 1	大溝	D900	3層	b 1 ●	3 タテハケ、部分的に板ナデ	指オサエ	推	19.5	16.9	推	33.0	557.7

第36表-2 土器器 大型甕・長胴甕一覽表

資料 種類 No.	大きさ 口径× 器高 cm	出土区域 遺物 No.	遺構 遺構 No.	遺構 位置	外面調整			内面調整			口径 (cm)	腹部全 (cm)	器高 (cm)	頸部径 × 器高 (cm)	
					口縁 横 幅 cm	縁 部 の 形 態	外 縁 部 の 形 態	口縁 横 幅 cm	縁 部 の 形 態	外 縁 部 の 形 態					
13 長胴甕	579.7 9	253 26	区画溝	A435-435 アゼ	b 2	3 タテハケ	ナデ?	b 2	3 タテハケ	ナデ?	推	18.7	推	16.7 犬 31.0 517.7	
14 長胴甕	605.5 9	226 9	北東居住域 土坑	B130764	b 2	● 3 タテハケ	ナデ	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	推	17.5	15.1	34.6 522.46	
15 長胴甕	601.1 9	565 6	大溝	D900	3層以下、5層、6層	b 2	● 3 タテハケ	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	推	20.8	18.1 犬 28.9 523.09		
16 長胴甕	661.5 9	194 7	北東居住域 堀立C7 周開溝	C2422	b 2	● 3 タテハケ	ナデ	b 2	● 3 タテハケ	ナデ	推	19.6	17.4	33.8 587.25	
17 長胴甕	689.3 9	185 13	北東居住域 土坑	C3485	b 2	3 タテハケ	ヨコハケ	b 2	3 タテハケ	ヨコハケ、一部ナナメハ	推	20.7	推	17.7 犬 33.3 589.41	
18 長胴甕	657.7 9	344 1	南西居住域 溝	A1229	b 2	3 タテハケ	ナデ、一部ナナメハ	b 2	3 タテハケ	ナデ	推	19.4	17.4	33.9 589.86	
19 長胴甕	734.3 9	494 7	区画溝	B130236	b 2	● 3 タテハケ、下半部ナ	ナデ	b 2	● 3 タテハケ、下半部ナ	ナデ	推	20.2	16.9	36.4 614.315	
20 長胴甕	736.9 9	189 17	北東居住域 土坑	C2415	b 2	● 3 タテハケ、下半部ナ	ナデ	b 2	● 3 タテハケ、下半部ナ	ナデ	推	19.7	17.9 推	37.5 671.25	
21 長胴甕	801.2 9	486 5	区画溝	B130240	中・下層	b 2	● 3 タテハケ	ヨコハケ、ナデ	b 2	● 3 タテハケ	ヨコハケ、ナデ	推	21.0	17.8	38.2 679.07
22 長胴甕	786.7 9	198 2	北東居住域 土器群	C2401上部	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	推	19.4	17.2	40.6 697.46	
23 長胴甕	847.0 9	557 6	大溝	F 上層	b 2	● 3 タテハケ	タテ指ナデ	b 2	● 3 タテハケ	タテ指ナデ	推	22.0	19.1 推	38.5 735.35	
24 長胴甕	861.8 9	194 5	北東居住域 堀立C7 周開溝	24872422	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	b 2	● 3 タテハケ	板ナデ	推	21.9	20.0	39.4 787	
25 長胴甕	798.6 9	198 5	北東居住域 土器群	C2401上部	b 2	● 4 ナデ	板ナデ	b 2	● 4 ナデ	板ナデ	推	22.4	20.5	35.7 730.825	
26 長胴甕	748.8 9	198 1	北東居住域 土器群	C2401上部	b 3	● 3 タテハケ	板ナデ	b 3	● 3 タテハケ	板ナデ	推	19.5	17.4	38.4 668.16	

第37表-1 猿惠器系土器一覧表

種類	器種	脚部の形態	波状文の有無	出土区域	遺構	遺構No.	層位	口径(cm)	器高(cm)
1 高坏	A			186 18 北東居住域	土坑	C4159	10面掘り下げ	推 13.0	残 4.5
2 高坏	A			210 24 北東居住域	包含層		推 22.4	残 5.6	
3 高坏	A			219 14 北東居住域	包含層		推 23.9	残 2.9	
4 高坏	B b			184 9 北東居住域	土坑	C3485		19.3	12.7
5 高坏	B b			184 12 北東居住域	土坑	C3485		推 17.2	15.1
6 高坏	B			574 27 大溝		H11	2層	推 18.0	4.2
7 高坏	B			505 8 区割溝		F625		推 16.4	5.1
8 高坏	B			183 14 北東居住域	土坑	C4083		推 17.0	4.3
9 高坏	B			184 8 北東居住域	土坑	C3485		推 20.0	6.8
10 高坏	B			184 10 北東居住域	土坑	C3485		推 18.5	7.5
11 高坏	B			184 11 北東居住域	土坑	C3485		推 20.6	5.9
12 高坏	B			221 17 北東居住域	包含層		10面掘り下げ	推 18.3	残 4.1
13 高坏	C c			184 17 西北居住域	包含層		第11層以下	推 18.0	残 15.9
14 高坏	C			542 27 大溝			谷3	推 16.4	4.9
15 高坏	C			200 21 北東居住域	包含層		北東谷部	推 16.4	5.6
16 高坏	C			215 19 北東居住域	包含層		10面掘り下げ	推 17.0	4.1
17 高坏	C			217 1 北東居住域	包含層		9面掘り下げ	推 15.4	5.2
18 高坏	C			217 2 北東居住域	包含層		10面掘り下げ	推 14.0	4.2
19 高坏	C			218 6 北東居住域	溝状土坑	C3821			
20 高坏	C			218 7 北東居住域	溝状土坑	C3821			
21 高坏	a			534 28 大溝		E090001	中層		
22 高坏	a			574 29 大溝		H11	2層		
23 尚坏	a			7 区割溝		A950	アゼ		
24 高坏	a			189 6 北東居住域	土坑	C2415			

第37表-2 繁體器系土器一覧表

器種	種類	図面No.	遺物No.	出土区域	遺構	遺構名	層位	口径(cm)	器高(cm)
	高坏	a	200	23 北東居住域	包含層		北東部		6.2
	高坏	a	214	15 北東居住域	ピット	C4485			残 残 4.7
	高坏	a	214	26 北東居住域	包含層		10面掘り下げ		残 残 3.7
	高坏	a ○	175	20 北東居住域	掘立C南のピット	C2226			残 残 5.5
	高坏	a	223	7 北東居住域	溝	C3473			残 残 3.1
	高坏	b	231	31 北東居住域	井戸	D474	5層(下)		残 残 6.7
	高坏	b	524	30 大溝		E09001	谷5、谷の東の肩口		残 残 8.5
	高坏	b	534	29 大溝		E09001	上層		残 残 7.7
	高坏	b	534	31 大溝		E09001	北半部		残 残 6.8
	高坏	b	534	32 大溝		E09001	中層a		残 残 8.7
	高坏	b	542	28 大溝		E09001	谷3		残 残 5.0
	高坏	b	542	29 大溝		E09001	地山相当の粘土層直上		残 残 8.5
	高坏	b	544	18 大溝		E09001	谷7		残 残 7.9
	高坏	b	556	13 大溝		E09001	大溝F	上層	残 残 5.8
	高坏	b	574	28 大溝		H11	2層		残 残 6.2
	高坏	b	490	6 区画溝		A950	上層		残 残 7.5
	高坏	b	348	22 南西居住域		E090749			残 残 5.9
	高坏	b	186	19 北東居住域	土坑	C4159			残 残 11.9
	高坏	b	203	13 北東居住域	包含層	8-2tr			残 残 4.9
	高坏	b	174	3 北東居住域	掘立C1		南面コーナー		残 残 4.9
	高坏	b	214	5 北東居住域	包含層		10面掘り下げ		残 残 6.5
	高坏	b	214	6 北東居住域	包含層		10面掘り下げ		残 残 4.8
	高坏	b	215	20 北東居住域	包含層		10面掘り下げ		残 残 10.0
	高坏	c ○	504	31 大溝		E09001	谷6層		残 残 11.2
	高坏	c ○	504	32 大溝		E09001	谷の東口(谷7上面?)		残 残

第37表-3 猿惠器系土器一覧表

種類	器種	脚部の形態	波状文の有無	図面No.	遺物No.	出土区域	遺構	遺構No.	層位	口径(cm)	器高(cm)
51	高坏	c		534	30	大溝	土坑	E090001	中層a		6.0
52	高坏	c		340	17	南西居住域	土坑	A1800			6.7
53	高坏	c		464	12	西居住域	堅穴住居F3のカマド	F1033			11.4
54	高坏	c	○	551	9	谷		F1	e、f層		10.8
55	高坏	c	○	184	16	北西居住域	包含層		第9層		8.0
56	高坏	c		422	16	北西居住域	土坑	D679			9.0
57	高坏	c		193	23	北東居住域	掘立C7周圍溝	2422			8.5
58	高坏	c		200	24	北東居住域	包含層		北東谷部		8.5
59	高坏	c		203	14	北東居住域	包含層	8-2tr			8.4
60	高坏	c		215	21	北東居住域	包含層				
61	高坏	c		217	3	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
62	高坏	c		217	4	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
63	高坏	c		219	16	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
64	高坏	c		221	18	北東居住域	包含層		9面掘り下げ		
65	高坏			574	30	大溝		H11	2層		
66	高坏			340	18	南西居住域	土坑	A1800			
67	高坏			340	19	南西居住域	土坑	A1800			
68	环盖			219	15	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
69	环身			203	3	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
70	壺	○		193	18	北東居住域	掘立C7周圍溝	2422			
71	壺	○		193	19	北東居住域	掘立C7周圍溝	2422			
72	壺	○		200	22	北東居住域	包含層		北東谷部		
73	壺	○		215	12	北東居住域	包含層		9面掘り下げ		
74	壺			215	13	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		
75	壺			217	6	北東居住域	包含層		10面掘り下げ		

第2章 古墳時代中・後期の遺物について

第1節 墳輪

藤屋北遺跡では、E調査区、H地区、F調査区などで検出された大溝から埴輪が出土している。

大溝E 090001出土埴輪（第581図1～6・8～12、第582図1～11、図版234・235）

大溝E 090001からは埴輪の出土が認められたが、そのほとんどが小片で、図示し得たのは22点であった。

大部分が円筒埴輪であるが、なかには一部人物（581-2・3）などの形象埴輪も含まれている（581-1～6）。

円筒埴輪のうち、全体を復元できたものは1点のみ（581-10）であったが、いずれも復元口径20～30cmの小型のものである。大部分は土師質であるが、須恵質のものが4点（581-10・581-2・6・11）認められた。調整は確認できたものすべてがタテハケのみで、横方向のハケ調整を施すものはみられない。

上層・中層・下層のいずれの層からも出土している。

大溝H 11出土埴輪（第581図7、第582図5）

大溝H 11からは、2点出土した。いずれも土師質で、衣蓋形埴輪（581-7）と円筒埴輪（582-5）がある。

大溝F出土埴輪（第583図1、図版234）

大溝Fからは1点出土した。1箇所で破片がまとまって出土したが、ほぼ1個体に復元できた。土師質で、低い台形状の断面を呈するタガが3段認められ、1段目と2段目、2段目と3段目のタガ間に2箇所ずつ円孔がみられる。器面の調整はタテハケのみで、横方向のハケ調整はみられない。

埴輪の出土数は僅少で、そしてそのすべてが集落西限の大溝から出土している。他の遺物と同様に破棄されたものといえる。大半が6世紀前半のものである。

第2節 石製品、玉類

古墳時代中・後期に属する石製品が調査区全域から出土している。その種類は、玉類として、勾玉・子持勾玉・管玉・白玉・ガラス玉・琥珀玉・土玉を挙げることができる。また石製品として、紡錘車（土製品を含む）、双孔円板、有孔円板、剣形模造品、鏡形模造品及び砾石を挙げ報

告する。

勾玉（第623図1～15、図版243b、観察表編168頁）

勾玉は勾玉形石製品を含め、全部で15点出土した。

623-9・10はE・F調査区の集落西限の大溝から出土した。623-9は長さ3.35cm、厚さ1.2cmを測るヒスイ製の勾玉である。623-10は長さ3.65cm、厚さ1.0cmを測るメノウ製の勾玉である。両者とも片面穿孔である。

他の勾玉は滑石製である。扁平な滑石の板石を加工した一群と、丸味を帯びた小型の一群に分類できる。623-1は長さ4.15cm、厚さ0.75cmと滑石製品の中では厚みがあり、表面は平滑に磨かれるが、筋状の研磨痕が残存する。623-2～6・11・15は厚さ0.4cm前後の板状の勾玉である。表面に及び端面に研磨痕が明瞭に観察される。623-7・8は板状勾玉の未製品である。穿孔前の整形段階である。623-12～14は小型の勾玉である。623-12の長さ1.95cm、623-13の長さ2.18cm、623-14の長さ1.65cmを測り、いずれも表面は丁寧に磨かれている。

子持勾玉（第624図1・2、図版243c、観察表編168頁）

624-1はD調査区の流路から出土した、長さ11.15cmの子持勾玉である。断面の形状は扁平な板状を呈する。腹部に1個、背部に4個の省略した突起（子）を持つ。両側面に4個の省略した突起を削りだす。624-2はB調査区の包含層から出土した子持勾玉の破片である。断面の形状は橢円形を呈する。頭部及び尾部が欠損し、また背部と腹部の一部が欠損する。背部と腹部の突起が各1箇所、両側面の4個の省略した突起が残存する。残存長7.55cm。

石製紡錘車（第625図1～15、図版244、観察表編168・169頁）

石製紡錘車はすべての調査区から、合わせて13点、未製品2点が出土した。形態の特徴から、算盤玉形・截頭円錐形・円盤状の3種に分類できる。また台形には有紋・無紋の2種がある。

625-1は算盤玉形を呈し、径4.7cm、重さ51.8gを測る。表（a）面、裏（b）面の斜面部は、円周に直交する方向で平滑に磨く。

625-2～5は無紋で截頭円錐形を呈し、下端に0.2～0.4cmの面取りを施す。径4.5～5.0cm、重さ29.0～59.9gを測る。斜面部は円周に直交する方向で平滑に磨く。

625-6～10は有紋で截頭円錐形を呈し、下端に0.4～0.8cmの面取りを施す。紋様の特徴は、a面平坦部と斜面部の境界に1～2条の圓線を刻み、斜面部に鋸歯紋を描くもの（625-6・8・9・10）、圓線を刻まず斜面部に鋸歯紋を描くもの（625-7）がある。また、b面平坦部外周と穿孔部周囲に圓線を刻み、その内側に鋸歯紋を描くもの（625-6・7・9）、b面穿孔部周囲に圓線を刻み、その外側に内向きの鋸歯紋を描くもの（625-10）、b面無紋のもの（625-8）がある。

625-11・12は円盤状を呈し、11のb面平坦部外周と穿孔部周囲に圓線を刻み、その内側に鋸歯紋を描く。

625-13は無紋で截頭円錐形を呈する。径2.3cmと小型で、重量も4.9g非常に軽いため、紡錘車形模造品といえよう。625-14は、625-13と同様の特徴を有するが、穿孔前の未製品である。

625-15 は径 5.0cm、重さ 60.7 g を測る紡錘車未製品で、ノミによる整形の痕跡が観察される。截頭円錐形への加工途中である。

土製紡錘車（第 626 図 1 ~ 14、図版 245、観察表編 171 頁）

土製紡錘車は A 調査区以外の調査区から 14 点出土した。形態の特徴から、算盤玉形・円柱形・截頭円錐形の 3 種類に分類できる。

626-1 ~ 4・9・14 は、径 3.85 ~ 4.6cm を測る、算盤玉形を呈する。626-14 が指オサエ整形により形状を作り出している以外は、側面斜面、及び上下端面を工具によるナデで成形し、明瞭な稜線を作り出す。

626-5 ~ 7・10 ~ 13 は円柱形を呈する。側面は太鼓腹状に張り出し、上下端面は平坦面をユビオサエにより作り出しているため、明瞭な稜線は見られない。

626-8 は径 4.3cm を測る截頭円錐形を呈する。上下端面は平坦に仕上げられるが、斜面部は工具による調整を行っていない。

剣形模造品（第 627 図 1、図版 243 d、観察表編 169 頁）

B 調査区から出土した長さ 5.5cm を測る、剣形模造品である。板石を菱形に加工するが、上部は明瞭な刃を作らず、円弧状を呈する。上部に 1 箇所穿孔する。表面に研磨痕が観察される。

鏡形模造品（第 627 図 2、図版 243 d、観察表編 169 頁）

B 調査区から出土した径 5.2cm を測る、鏡形模造品である。表面は平滑に仕上げられ、研磨痕が観察される。背面はやや膨らみを持ち、金属器による加工痕とその後の研磨痕が観察される。背面中央部には円形の鉢を削りだし、紐孔を開ける。

管玉（第 628 図 1 ~ 21、図版 243 a、観察表編 168 頁）

B・C・F 調査区、H 地区から 19 点の管玉が出土した。大きさから、径 0.6 ~ 0.7cm を測る太いタイプと、径 0.4cm 前後の細いタイプの 2 種に分類できる。両者ともに両面穿孔を基本とする。大阪府文化財センターの協力を得て、管玉のレントゲン撮影を行った結果、穿孔の詳細がより明らかとなり、628-15 ~ 19 は画面から各々 1 回の穿孔により穴が貫通したのではなく、細かい単位で方向修正を繰り返しながら穴を貫通させた様子が観察できた。

628-20・21 は C 調査区から出土した管玉の未製品である。管玉の大きさに割り出した素材で、縦方向に側面を円柱状に成型した段階で、未研磨・未穿孔である。

土玉（第 629 図 1 ~ 14、図版 248 e・f、観察表編 171・172 頁）

A・D・E 調査区、H 地区から 15 点出土した。大きさにより 2 種に分類できる。

629-1 ~ 3 は土製の丸玉で、径 2.5 ~ 3.0cm を測る。ユビオサエにより球形に整形し、1 箇所穿孔を施す。629-4 は径 1.65cm の円柱形を呈する土玉である。

629-5 ~ 14 は、径 0.65 ~ 1.1cm を測る円柱形を呈する土玉である。上下端面を平坦に作り、側面は太鼓腹状にやや張り出す。いずれの土玉も 1 箇所の穿孔を施し、色調は黒色である。

双孔円板・有孔円板（第 630 ~ 633 図、図版 246・247）

すべての調査区から合計139点出土した。扁平な板石に開けられた穿孔の特徴から、2孔（以上を含む）のもの、単孔のものに区別される。

2孔のもの=双孔円板は平面形の特徴から、正円形・橢円形・略円形・長方形等を呈するものに分類できる。上下端面は研磨痕が観察でき、側面にも研磨痕が観察できることから、各々の形態が完成形であり、全てが円形（円板）を目指して加工されているものではない。

単孔のもの=有孔円板は長方形を呈するものが多く、中央に穿孔するものではなく、一短辺側に偏って穿孔する。

630-1～33は、北東居住域、第631図1～4は南東居住域、630-5～15は南西居住域、630-16～18は西居住域、630-19～26は北西居住域から出土した。北西居住域出土の有孔円板の出土比率が高いという特徴がみられる。

632-1～22は集落西限の大溝から出土した。丁寧に円形に加工した円板の出土が目立つ。632-23～26、633-1～6は各調査区の区画溝或いは溝から出土した。633-7～17はA・B調査区の居外から出土した。

個々の詳細な法量等の情報は観察表編169～171頁（表3）に示した。

白玉（図版248a・b・c・d）

すべての調査区の各種の遺構・包含層から出土した。総数2490点を数える。出土位置（遺構）及び重量を観察表編173～184頁（表4）に示した。

砥石（第634～640図、図版249～251）

すべての調査区の各種の遺構・包含層から出土した。総数193点を数える。石材及び法量等個々の詳細な情報は観察表編185～188頁（表5）に示す。

634-1～9、640-1～8はE・F・H調査区の集落西限の大溝から出土した砥石である。634-1は扁平な板石の上面が使用されている。裏面および右・下側面は使用されておらず、他の2側面は欠損し本来の形状は不明である。上面には幅1.4cmの断面U字形の溝が2条観察される。砂岩製の筋砥石で玉製作に使用されたものである。634-2は円柱状の紡錘車と同様の形態を呈するが、側面が砥面として使用されている。中央に穿孔がある、流紋岩製の携帯用砥石である。634-4は扁平な橢円形を呈する緑色片岩製で、全ての面が砥面として使用されている。上部に穿孔がある携帯用砥石である。634-2・5～9、635-1～3・8は直方体状の形態を呈する。各個体の欠損状況により残存面に差はあるが、使用時は上下面と左右側面が砥面として使用されていたものである。635-4・5・7・9は不定形な石材を使用し、1面以上を砥面として使用されている。

635-9、636-1・2・4～6はA・B調査区区画溝から出土した砥石である。635-9は扁平な板石の上下2面を、636-2・4～6は直方体状で上下面と左右面の4面を砥面として使用されている。636-1は扁平な滴形を呈する頁岩製で、上下2面が砥面として使用されている。上部に穿孔がある携帯用砥石である。

636-3、637-6・7はA・B調査区居外から出土した。

637-1～5、638-1～9は北東居住域から出土した砥石である。直方体状の形態を呈する砥石が多く、638-4は右上部に径0.8cmの穿孔があり、携帯用砥石と考えられる。638-8は、上面及び側面が砥面として使用されている。側面はいくつかの単位で使用されているため、面取りを行った多角柱状を呈する。

639-1・2・5・6、640-5～7はD調査区の北西居住域から出土したある砥石である。640-5以外は直方体状の形態を呈し、上下面と左右側面の4面を砥面として使用されている。

639-3・4、640-2・7はF調査区の西居住域から出土したある砥石で、直方体状の形態を呈し、上下面と左右側面の4面を砥面として使用されている。

639-7～12、640-4はA・B・D・E調査区の南西居住域から出土したある砥石である。639-7～12は、直方体状の形態を呈し、上下面と左右側面の4面を砥面として使用されている。639-9は下部中央に径0.5cmの穿孔があり、携帯用砥石と考えられる。また639-7は下部中央に径0.7cmの穿孔途中の痕跡があり、穿孔部中心に針穴が観察できる。右側面上部にも穿孔途中の痕跡がある。640-4は使用面数が多く六角柱状を呈する。

640-1はA調査区の南東居住域から出土したある砥石である。直方体状の形態を呈し、上下面と左右側面の4面を砥面として使用されている。

ガラス玉・琥珀玉（原色図版23、分析編227～232頁）

C・D・E・F調査区、H地区からガラス玉56点、H調査区から琥珀玉3点が出土した。出土位置及び法量等の詳細は観察表編の表2に示す。また成分等については、別途分析編で詳述する。

ガラス小玉は55点出土し、最小1.8mm、最大8.7mm、平均4mm前後の径を測る。色調は、青紺色・青色・青緑色・緑色・黄緑色・黄色・赤色不透明を呈する。

ガラス棗玉1点がH地区から出土した。径8.8mm、長さ11.2mmを測る。ガラス管の両端を絞り、膨らませた形状で、表面には微細な皺が観察される。内部は中空で淡黄褐色を呈する。所謂金層ガラスの内部が脱落したものと考えられる。

琥珀玉はH地区から3点出土した。うち2点は破片である。

第3節 鉄製品

藤屋北遺跡では、古墳時代中・後期に所属する鉄製品が44点検出されており、それらの中には大溝から出土した遺存状態の良好な一括資料も含まれている。これらについては調査区ごとに刊行されている概報すでに報告されているものもあるが、ここでは未報告のものも加えたうえで器種ごとに再編し、それぞれに検討を加える。観察表編191頁（表7）参照。

出土した鉄製品には農工具、馬具、漁撈具、雑具、武器などがある。

1. 農工具

農工具には鎌、斧、刀子、鑿などがある。

鎌（第641図1～9、図版252）

古墳時代の鎌は、長方形状を呈する直刃鎌と先端の尖った曲刃鎌の2種に大別される。

直刃鎌は日本列島で独自に作られた鉄製品のひとつとされ、いまのところ朝鮮半島には出土がみられないようである。それに対して曲刃鎌は、朝鮮半島から日本列島にかけて分布がみられ、朝鮮半島から伝播された鉄製品のひとつと考えられている。

蘆屋北遺跡では鎌が8点出土しており、直刃鎌と曲刃鎌がともにみられる。

直刃鎌（641-1・2）は2点みられた。641-1は比較的短く幅広の長方形状を呈し、基部の端部を右側に直角に曲げて着柄部を形成している。着柄部の形状から直角鎌と考えられる。H地区の大溝H1の1層から出土した。641-2は比較的長く幅狭の長方形状を呈するもので、基部の端部を右側に曲げて着柄部を形成するのは、641-1と同じであるが、着柄部の折り曲げの角度が直角とは異なる点に差異がみられる。直柄部の角度から鈍角鎌と考えられる。H地区の大溝H1の5層下から出土した。

曲刃鎌（641-3～9）は7点みられた。641-3は比較的長く幅狭で、背部、刃部とともに基部から先端部にかけて緩く弯曲する形状を呈する。着柄部は基部の短部を上半のみ右側に斜めに折り曲げており、直柄部の角度から鈍角鎌と考えられる。641-4～9は背部、刃部とともに比較的直線的で幅狭の長方形に近い形状を呈し、先端部付近で下方に短く湾曲させ尖らせている。基部の端部の全体を直角に折り曲げて着柄部を形成している。折り曲げの方向に、右側に曲げるものと左側に曲げるものの2つのタイプが認められる。着柄部の形状から直角鎌と考えられる。

641-3はA調査区の土坑A435、641-4はE調査区の大溝E0900001最上層、641-5～7は大溝E0900001中層、641-8は大溝E0900001、641-9はD調査区の大溝D900の3層から出土した。

上述のように、曲刃鎌は刃先を左側にして上方より見た場合、朝鮮半島では基部端部を左側に折り曲げるものばかりで、右側に折り曲げるものはほとんどみられず、右側に折り曲げるものは日本列島で製作されたものとされている。そうであれば、蘆屋北遺跡出土例には朝鮮半島製と日本列島製がほぼ同じ比率で認められることになる。しかし蘆屋北遺跡出土例を見る限りでは、いずれも折り返した側の面に刃を付けており、左手に持つのに都合のいい鎌と右手に持つのに都合のいい鎌という、実用性が考慮されていると考えることも可能なのではないか。今後、特に朝鮮半島での類例の増加が期待される。

斧（第642図1・2、図版252）

斧は2点みられた。いずれも有袋式であり、袋部が筒状を呈する精緻な作りである。そして有袋式鉄斧は、袋部下端の肩の有無で無肩、有肩で筒状の袋部、有肩で爪状の袋部の三形態が認められているが、本例はともに有肩で筒状の袋部を呈するものである。古墳に副葬されたものと違つていはずれも実際使用されていたと思われ、特に642-2は刃先の磨耗が著しい。大溝から大量の

木製品や刀子、鑿などとともに出土しており、木製品の加工に使われていたものと考えられる。

642-1はB調査区の落ち込みB 130045から、642-2はF調査区の竪穴住居F 8検出時に出土した。

刀子（第642図3～9、第643図1～5、図版253・254）

刀子は最も出土点数が多い鉄製品で、12点みられた。特異な形状の曲柄刀子1点と通有の刀子11点に大別され、刀子はさらに3つに細分される。

曲柄刀子（642-3）は、刀身から柄までの全体を長方形の断面を呈する1本の鉄棒から作り出したもので、柄部の端部付近をくの字状に斜上方に折り曲げている。柄部の全面に綾杉文の陰刻が認められる。H地区の大溝H 11の3層から出土した。

642-4～9・643-1～5は通有の形状を呈する刀子であるが、形状の差異によって3つに分類でき、茎と刀身の境目の、刀身と柄が接する部分に刃側と峰側の両側に闕を設けた両闕式（642-4～8）と、刃側にのみ闕を設けた片闕式（643-3・4）が認められる。両闕式には切先が膨らむものと膨らみの乏しいものの2形態が認められるが、片闕式は切先が膨らむもののみが認められた。16には木製の柄の一部が残存しており、柄が装着された様子が観察できる。また、643-4は巻の衝などにみられる捩り手法を用いて形成された、特異な茎部を呈するものである。643-5は1本の薄く細長い鉄板の先端を斜めにそぎ、基部を細めて刀子の形状をなすもので、切先の部分にのみ刃を研ぎ出している。いわゆる切り出しの彫刻刀のように、繊細な作業に使用されたものと考えられる。

642-4はE調査区の大溝E 090001下層、642-5・6と643-3は大溝E 090001上層、642-7はA調査区の溝A 428、642-8・9はH地区の大溝H 11の2層、643-1・2はA調査区の第10面と第9面、643-4はF調査区の大溝F中層、643-5は大溝F上層から出土した。

鑿（第643図6・7、図版255）

鑿は2点みられた。ともに断面方形の細長い茎部と断面長方形の薄い刃部からなるもので、茎部端部付近に横円形状の袋部を有する。袋部には木製の柄が差し込まれていたようで、どちらにも柄の痕跡が残っている。643-6はF調査区の大溝F中層、643-7はF調査区の包含層（第13a・b層）から出土した。

2. 馬具

馬具には鐐轡、環状金具などがある。

鐐轡（第644図1～5、図版255）

鐐轡は左右一対のうちの左側半分の部品と、右側の鐐の一部および立聞金具がみられた。

衝と引手が遊環によって連結された644-1の衝外環に644-2の鹿角製鐐が押しこまれ、さらに鐐に644-3の立聞金具が打ち込まれた姿が出土状況から明瞭に判別できた。左側の衝内環と右側半部は欠損しており、644-4の鐐の一部と644-5の立聞金具のみが認められた。

鍔轡の形状から、銜が1本の細長い角棒をU字形に曲げ、基部に銜外環となる円環部を作つてその先を捩じって棒状にした、いわゆる2条捩じり銜であること。銜と引手を連結する際に、直接連結するのではなく遊環を用いて連結していること。U字形状を呈する古式の立聞金具を伴うことなどの特徴が認められた。

644-1～5はE調査区の大溝E 0 9 0 0 0 1中層から出土した。

銜と引手が遊環を用いて連結されるのは百濟および伽耶の轡にみられる特徴であり、そして形状が韓国清州新鳳洞72号墳から出土した鍔轡と類似していることなどから、本例は朝鮮半島南西部からの移入品ないしは、移入品を模倣して製作したものと考えられる。

また、本例は牧の集落から出土した実用品であり、何らかの理由で破損したため大溝に廃棄されたものと考えられる。出土した大溝中層からの供伴遺物によって、5世紀中葉に廃棄されたものと想定された。また、2条捩じり銜に短い引手、U字形状を呈する立聞金具を伴うという古式の特徴を示していることからも、日本列島出土の有遊環鍔轡としては初現期の類例のひとつで、5世紀前半頃に比定できるものと考えている。

環状金具（第644図6、図版255）

長方形形状の断面を呈する細長く薄い鉄棒を曲げて、径3.9cmの円環を形成したもので、端部を上下に合わせて鍛接している。馬具の部品のひとつと推定したが、詳細は不明である。644-6はE調査区の大溝E 0 9 0 0 0 1中層から出土した。

3.漁撈具

漁撈具には釣針がある。

釣針（第645図1～2、図版256）

釣針は2点みられた。645-1は径0.3cmの棒の一方をU字形に折り曲げ、先端を斜めに削って尖らせることにより針先を形成するもので、基部が折れて2片に分離し、先端側と針先側とともに欠損しているため全長等は不明である。645-2は基部の先端と針先のU字形に曲げられた部分を欠損しているが、残存部分は645-1とほぼ似た形状を呈する。645-1・2はH地区の大溝H 1 1の2層から出土した。

4.武器

武器には鎌がある。

鎌（第645図3～14、図版256）

鎌は刀子とともに最も出土点数が多い鉄製品で、12点が出土している。

645-3～7は長頸鎌に含まれるもので、そのうち645-3は刃部が片丸造りを呈する。645-4～6は長頸片刃鎌で、逆刺の有無から、逆刺の無いもの（645-4）、逆刺のみられるもの（645-5・6）に分類できる。

第38表 出土鉄製品時期別一覧

時期	品名	図面番号	番号	出土遺構	調査区
I - 2 以前	直刃鎌	641	2	大溝H 1 1 5層下位	H地区
	刀子	642	4	大溝0 9 0 0 0 1下層	E調査区
	鑓	645	3	大溝0 9 0 0 0 1下層	E調査区
	鑓	645	4	大溝0 9 0 0 0 1下層	E調査区
	鑓	645	10	大溝H 1 1 5層下位	H地区
	鑓	645	12	大溝0 9 0 0 0 1下層	E調査区
I - 2 ~ I - 4	曲刃鎌	641	5	大溝E 0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	曲刃鎌	641	6	大溝E 0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	曲刃鎌	641	7	大溝E 0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	刀子	643	4	大溝F 中層	F調査区
	鑓	643	6	大溝F 中層	F調査区
	轡	644	1	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	644	2	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	立闇金具	644	3	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	644	4	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	立闇金具	644	5	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	環状金具	644	6	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	645	5	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	645	6	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	645	13	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
	鑓	645	14	大溝0 9 0 0 0 1中層	E調査区
I - 3 ~ I - 4	曲柄刀子	642	3	大溝H 1 1 3層	H地区
	刀子	642	7	溝A 4 2 8	A調査区
I - 4 ~ I - 5	曲刃鎌	641	3	土坑A 4 3 5	A調査区
I - 4 ~ II - 1	刀子	642	5	大溝0 9 0 0 0 1上層	E調査区
	刀子	642	6	大溝0 9 0 0 0 1上層	E調査区
	刀子	643	3	大溝0 9 0 0 0 1上層	E調査区
	刀子	643	5	大溝F 上層	F調査区
I - 5 ~ II - 1	曲刃鎌	641	9	大溝D 9 0 0 3層	D調査区
I - 5 ~ II - 2	刀子	642	8	大溝H 1 1 2層	H地区
	刀子	642	9	大溝H 1 1 2層	H地区
	釣針	645	1	大溝H 1 1 2層	H地区
	釣針	645	2	大溝H 1 1 2層	H地区
II - 2 ~ II - 3	直刃鎌	641	1	大溝H 1 1 1層	H地区
	曲刃鎌	641	4	大溝0 9 0 0 0 1最上層	E調査区
	鑓	645	11	大溝H 1 1 1層	H地区

7～9は方頭斧箭鏃に含まれるもので、逆台形状の鏃身部と細長い茎部からなるもの（645-7・8）と逆三角形状の茎部側端部に短い闊を設けた鏃身部を呈するもの（645-9）に分けられる。

645-10は三角形鏃で、長三角形の鏃身と斜行する頭部からなるものである。645-11は圭頭鏃で、圭頭斧箭鏃に含まれるものである。645-12・13は茎部のみの破片で、全体の形状は不明であるが、長頭鏃に含まれるものと思われる。645-14は刀子ないしは鏃の未製品と思われる。

645-3・4・12はE調査区の大溝E 0 9 0 0 0 1下層、645-5・6・13・14は大溝E 0 9 0 0 0 1中層、645-7・8はA調査区の第10面と第9面、645-9はB調査区の第12面直上、645-10はH地区の大溝H 1 1の5層下、645-11は大溝H 1 1の1層から出土した。

これまでの調査によって、以上45点の鉄製品が出土した。土器や木器などと比べて出土量は少ないが、特に大溝から出土したもののが遺存状態は極めて良好で、ほとんど錆化していないものが多く認められた。

鉄製品の大半は大溝E 0 9 0 0 0 1、大溝H 1 1、大溝F、大溝D 9 0 0など、集落の西限の大溝から出土したものである。これらの大溝の埋積状況には、それぞれ若干の差異が見られるが、出土した須恵器によって各層の埋積時期を対比できた（総括編49頁-第15表）。したがってここで第15表に従って、須恵器との供伴関係から鉄製品の年代に触れておく。

最も前出は大溝H 1 1の5層下位（庄内・布留期）出土のもので、直刀鏃（641-2）と鏃（645-10）がある。

大溝下層が相当する蔚屋北1期（I型式2段階以前・5世紀前半以前）には刀子（642-4）、鏃（645-3・4・12）などが、大溝中層が相当する蔚屋北2・3期（I型式2段階～4段階・5世紀前半～後半）には曲刃鏃（641-5～7）、刀子（643-4）、鑿（643-6）、鍔轡（644-1～5）、環状金具（644-6）、鏃（645-5・6・13・14）などが、大溝上層が相当する蔚屋北4期（I型式4段階～II型式2段階・5世紀後半～6世紀中頃）には曲刃鏃（641-9）、曲柄刀子（642-3）、刀子（642-5・6、643-3、643-5）、釣針（645-1・2）などが、大溝最上層が相当する蔚屋北5期（II型式2段階～II型式3段階・6世紀中頃～後半）には直刀鏃（641-1）、曲刃鏃（641-4）、鏃（645-11）などが認められた。

第4節 鍛冶関連遺物

蔚屋北遺跡からは、鉄製品の他に鉛滓あるいは鍔の羽口等、鍛冶に係わる遺物も出土している。

鍔羽口・炉壁（第646図1～7、図版258）

鍔を鍛冶炉に取り付ける羽口の部分が、北東居住域で1点、北西居住域で1点、南西居住域で2点、南西居住域付近の大溝から2点の計6点出土した。

1・5・6は炉壁との接合部に近い部分で、二次焼成痕がみられるもの（1）や、鉛滓が厚く付着しているもの（5・6）などが認められる。小片がほとんどで、送風孔の形状が把握できるも

のは2点(5・6)にすぎず、また、後端部が残存するものはなかった。送風孔の形状は、後端部に向かってハの字状に開くものである。

以上の図化し得たもののほかに、羽口と思われる破片が9点出土しているが、いずれも小片のためめ、詳細は不明である。

大溝からは炉壁の一部と思われる破片が1点(7)出土しているが、こちらも小片のため詳細は不明といわざるを得ない。観察表編194~196頁(表8)参照。

鉱滓(図版257-1~11)

すべての居住域で、遺構や包含層から鉱滓が出土している。その内訳は北東居住域48点(1164.5g)、南東居住域3点(451.2g)、北西居住域5点(407.0g)、西居住域2点(68.1g)、南西居住域35点(452.5g)の計93点(2543.3g)で、その他に大溝からも9点(886.5g)が出土している。

出土した鉱滓には、再結合滓(図版257-1~5・7~11)、ガラス質滓(図版257-6)、鉄滓などがある。このうち最も多く見られるのは、鍛造剥片、粒状滓、鉄滓、鉄粒などが鉄錆で固まつた二次堆積物である再結合滓で、これは北東居住域で22点、南東居住域で1点、南西居住域で4点、西居住域で1点、北西居住域で5点、居住域の区画溝から3点、集落西限の大溝から8点の、計44点が出土した。ガラス質滓は北東居住域で11点、南西居住域で1点、北西居住域で1点、大溝から2点の、計15点が出土した。そして鉄滓は北東居住域で1点、南東居住域で1点、南西居住域で5点の、計7点が出土した。観察表編194~196頁(表8)参照。

第5節 骨角製品

1. 概要

骨角製品は鹿角加工品を含めて25点で、C調査区から1点、D調査区から5点、E調査区から7点、F調査区から1点、H地区から11点が出土している。観察表編197頁(表9)参照。

C調査区の掘立柱建物C1の北側土器溜まりから(第649図5)、D調査区の大溝D900から(第648図1・2、図版262a-2・5)、E調査区の大溝E090001から(第647図2・3、第648図6、第649図2・3、図版262a-3、図版270a-2)、F調査区の大溝Fから(第647図1)、H地区の大溝H11から(第648図3~5・7、第649図1・4・6~9、第650図1・2)で、C調査区の1点以外はすべて同一の遺構と考えられる大溝D900、大溝E090001、大溝Fから出土した。

内訳は鹿角製刀剣装具4点、鹿角製刀子柄4点、骨角製管玉2点、有孔骨角製品3点、卜骨3点、鹿角製加工品9点である。

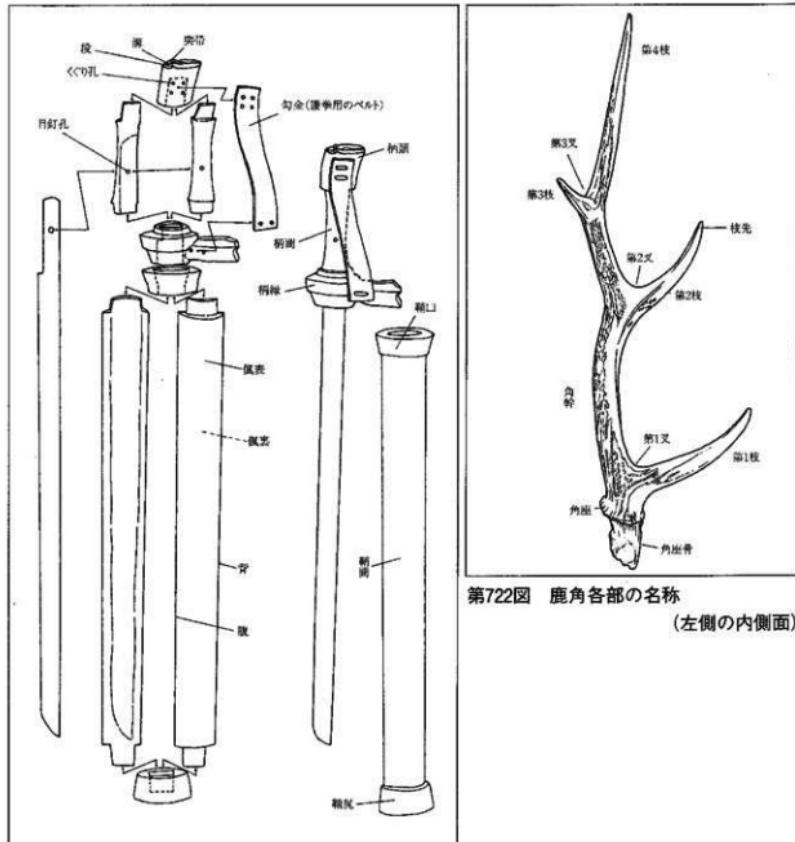
2. 鹿角製刀剣装具(第647図1・2・3、第649図1、図版260、図版261b)

刀剣装具は柄装具と鞘装具に大きく分けられ、柄装具は柄頭・柄間・柄縁、鞘装具は鞘口・鞘

また、^{さやじり} 鞘尾装具の部品からなり、鹿角製刀剣装具には柄頭、柄縁、鞘口、鞘尾がある^(註1)。

以下、記述にあたっては、小林行雄氏、置田雅昭氏の研究成果^(註2)にしたがい、刀剣を左に佩用することを前提に、各部分を頭（頭端）、尾、背、腹、佩表、佩裏と呼称する（第722図）。なお、「佩表、佩裏」を側面と呼称する場合もある^(註3)。

今回の調査では柄頭装具（以下、装具を省略）2点（第647図1・2）、柄（柄頭+柄間）1点（第649図1）、鞘尾1点（第647図3）が出土している。いずれも古墳以外の集落遺跡から出土するものは極めて稀な資料といえる。



第721図 木装太刀の部品組合せ模式図

柄頭については、内部が貫通する「円筒形タイプ」と貫通しない「円柱形タイプ」の2つに大きく分けられる。「円筒形タイプ」は頭側面から円形、尾側面から方形の孔を穿っている。「円柱形タイプ」は頭側面の中央を半球状に彫り窪め、尾側面に方形の穴を穿っている。尾側面の孔・穴はいずれも柄（柄間）を挿入するためのものである。なお、置田雅昭氏の木製柄（把）装具AI類の柄頭^(註6)は「円柱形タイプ」を模倣したものである。

両タイプの頭端部は基本的に平坦につくり、中央やや腹側面寄りに突帶をつくり出し、突帶の下端に段を設けている。さらに、突帶または段に対して直交するかたちで、上下二方から溝を刻んでいる。なお、突帶については、痕跡的に稜として存在するもの、また、つくり出さない例もある。次に、外周面に直弧文を飾るもの、何ら文様を施さず鹿角本来の自然面を残しているもの。また、側面に護拳用のベルト（勾金）を通すための滑り孔を設けている場合もある。（第647図1・2）は円筒形タイプ、（第649図1）は円柱形タイプに相当する。

柄頭（第647図1、図版260a、X線写真121頁、原色図版23）

資料番号F2653で、F調査区の大溝F中層bから出土した。第1叉と第2叉間の角幹（第721図）をやや斜め気味にカットし、管状に整えている。斜めにカットすることで、柄挿入穴に柄（柄間装具）を装着すれば、頭端をもたげた姿に復元できる。長さ38.77mm、最大径32.71mmを測る円筒形で、両端は平滑に研磨され、側面觀は平行四辺形を呈している。潜り孔に通した紐も遺存するなど保存状態は極めて良好である。頭端面の中央に径15.89×14.95mmの円形の孔を穿ち、その上下二方から溝を刻んでいる。腹側下位寄りに段を設けているが、突帶は作り出していない。円形の孔周辺、溝に赤色顔料が付着していた。蛍光X線分析の結果、赤色顔料は水銀朱（辰砂）による赤色と判定されている。

外周面には直弧文などの文様ではなく、鹿角本来の自然面のままで、一切加工を施していないが、頭端の孔の周辺や溝に見られたように、水銀朱を塗布している。側面のやや尾側寄りに二孔一対の紐通しの潜り孔を穿ち、内部に紐が遺存していた^(註7)。潜り孔は略円形を呈し、径は3.42～5.43mmで、紐（蔓状の繊維？）は太さ3.15～3.55mmを測る。尾側面に穿たれた柄挿入孔は径17.15×17.45mmの隅丸方形を呈し、柄の入り込む長さは1.15cmで、その部分には接着剤に使用されたと考えられる黒色物質が付着していた。穴の周辺は柄が押し込まれたことを示すやや光沢を帯びた磨滅痕が明瞭に観察され、実際に柄が柄頭に挿入されていたことを物語っている。

柄頭（第647図2、図版260b、X線写真121頁）

資料番号E1705-03で、E調査区の大溝E090001中層から出土した。647-1を一回り大きとしたタイプで、長さ41.52mm、最大径36.11mmを測る。角の表面は一部剥離し、全体的にひび割れが進行し、保存状態は悪い。

頭端面の中央に径16.45mmの円形の孔を穿ち、その上下二方から溝を刻み、腹側下位寄りに段を設けている。突帶の有無については表面のひび割れによって判然としないが、かすかに反り上がりっているようにも見える。このため、突帶ではなく、稜として存在する可能性も考慮しておき

たい。

外周面には直弧文などの文様はなく、鹿角本来の自然面のままで、一部に朱の付着が観察された。647-1と同様に全体に塗布していた可能性が考えられる。

側面（佩表）の頭端、尾端寄りに二孔一対の紐通しの潜り孔を設けている。潜り孔は縦長の梢円形を呈し、径は4.03～5.21mmで、紐（蔓状の繊維？）は太さ3.39mmを測る。

尾側面に穿たれた柄挿入孔は幅19.96mm、厚さ14.99mmの長方形を呈し、柄の入り込む長さは1.9～2.0cmで、その部分には接着剤に使用されたと考えられる黒色物質の痕跡が一部確認された。穴の周辺は柄が押し込まれたことを示すやや光沢を帯びた磨滅痕が観察され、実際に柄が柄頭に挿入されていたことは明らかである。

以上のように（第647図1・2）は、内部が貫通する円筒形タイプで、突帶をもうけず、外周面に角本来の自然面を残し、潜り孔をもつ点で、徳島県恵解山二号墳西棺出土例^(註9)に共通する。頭端部内面と外周面に塗布された朱は、毎年生え変わる角の生命力とあいまって柄頭に特別な意味合いが込められているのである。

鞘尾（第647図3、図版260c、原色図版23）

資料番号E1282-01で、E調査区の大溝090001中層から出土した。第2叉の部分を縦長に利用している。断面形は扁平な六角形で、長さ38.84mm、幅76.07mm、厚さ26.28mmを測る。頭側面、尾端面、腹面は平滑にカットしているが、腹面の中央付近は第2叉の形状をよく残している。外周面には他遺跡の例では直弧文を施しているが、本例は直弧文を刻まず、簡易的な線刻が佩表の上位と下位、佩裏の下位に刻まれているのみで、鹿角本来の自然面を多く残している。頭側面には鞘木を挿入するための径21.44×9.68mm、深さ20.39mmの長方形の穴を穿っている。

なお、鹿角製鞘尾は、集落址では奈良県天理市布留遺跡^(註9)、寝屋川市讃良郡条里遺跡^(註10)などで出土している。

柄（第649図1、図版261b）

資料番号H1061で、H地区の大溝H11の5層下位から出土した（第521図、図版131d）。右角の第1叉と第2叉間の角幹をやや斜め気味にカットし、柄頭と柄間に一緒につくり出している。柄間は途中で折損しており、現存長91.65mmを測る。柄間は57.06mmほど残存し、背には木製品に見られるような茎を落とし込む溝は認められず、約1cmの平坦面を作り出している。中央での断面形は上部を裁断したような紡錘形で、径16.14×21.11mmを測り、両端に向けて徐々に広がる。

柄頭は円柱形タイプで、長さ34.46mm、幅31.28mm、厚さ32.89mmを測る。柄頭端面の中央には径約2cmの円形の浅い窪み（深さ0.6mm前後）をもうけ、円形の窪みの下半には痕跡的ではあるが三角形の稜線がみられる。柄頭の外周及び柄間の背側面は鹿角本来の自然面を残している。頭端面の円形の窪みが浅い点、上下二方からの溝が認められない点を除けば、木製品ではあるが、奈良県天理市布留遺跡の出土例^(註11)にきわめて似ている。

本例は、4世紀中頃から後半にかけての層中より出土していることから、柄頭の円柱形タイプ

の祖形となるものと考えられる。型式的に円柱形タイプから円筒形タイプへと変遷していく可能性が考えられる。

3. 鹿角製刀子柄（第 648 図 2・3、第 649 図 2・3、図版 261b）

鹿角製刀子柄（第 648 図 2、図版 261b）

資料番号 D4227-04 で大溝 D900 の 5 層から出土した。角の枝部分を利用したと考えられ、長さ 38.91mm、厚さ 16.22mm、幅は頭部（図の下端）で 22.35mm、尾部で 20.43mm を測る。背腹面に縫が入り、前後方向にややずれている。両側面の中央部に径 5.27 × 5.21mm、深さ 0.43mm すり鉢状の穴を設けている。装飾を意図した目印と思われる。全体に丁寧な加工を施している。尾部側の茎挿入穴は一部破損しているが、径 9.44 × 6.14mm、深さ 6.69mm 以上を測る。

鹿角製刀子柄（第 649 図 2、図版 261b）

資料番号 E1577 で、E 調査区の大溝 E090001 下層から出土した。角の枝部分を利用している。頭側面は研磨を施し、平坦面をなす。柄縁に相当する尾側面は破損し、現存長 25.68mm を測る。

鹿角製刀子柄（第 649 図 3、図版 261b、X 線写真 121 頁）

資料番号 E3432 で、E 調査区の大溝 E090001 中層から出土した。両端は一部破損し、残存長 81.51mm、径 23.27mm を測る。柄縁寄りに茎を装着する穴をもうけている。表面は丁寧に加工され、角本来の自然面はほとんど認められない。

鹿角製刀子柄？（第 648 図 3、図版 261b、X 線写真 121 頁）

資料番号 H0422-11 で、H 地区大溝 H11 の 2 層から出土した。角座周辺の角幹を利用している。長さ 69.12mm、幅 24.95mm、厚さ 19.17mm を測る。両端は平坦に加工され、角座骨は径 18.08 × 18.06mm の円形を呈している。両面に角歯の痕跡がわずかに認められることから、1 歳前後の若い角を使用した可能性が考えられる。

4. 骨角製管玉（第 649 図 7・8、図版 261a）

鹿角製管玉（第 649 図 7、図版 261a）

資料番号 H0662-103 で、H 地区の大溝 H11 の 2 層から出土した。長さ 13.2mm、径 5.75mm を測る。

骨製管玉（第 649 図 8、図版 261a）

資料番号 H0662-104 で、H 地区の大溝 H11 の 2 層から出土した。鳥類の長管骨を擦り切って利用している。長さ 14.91mm、径 2.27mm を測り、一方の端部寄りに螺旋状の溝を巡らせている。

5. 有孔骨角製品（第 648 図 1、第 649 図 4・9、図版 261a）

有孔鹿角製品（第 648 図 1、図版 261a）

資料番号 D4227-03 で、大溝 D900 の 5 層から出土した。下端の一部及び一側縁は欠損しているが、長さ 75.53mm、残存幅 24.64mm、厚さ 10.06mm を測る。角を縦に半裁し、板状に加工してい

る。図の右は角本来の面で、上端は面取り状に整形している。両面から2つの孔を穿つが、1つは破損後に穿っている。

有孔鹿角製品（第649図4、図版261a）

資料番号H0271で、H地区大溝H11の2層から出土した。角の先端を縦に半裁し、表面（図の左端）は面取り状に加工しているが、角本来の自然面を残している。長さ59.58mm、最大幅15.71mm、厚さ7.74mmを測る。裏面（図の右端）は半裁された面で、ほとんど調整を施していない。上部寄りに径7.13×6.19mmの円孔を両面から穿っている。用途は不明である。

有孔骨製加工品（第649図9、図版261a）

資料番号H0706で、H地区の大溝H11の2層から出土した。長さ81.07mm、幅30.44mm、最大厚15.79mmを測る。ウシの肋骨を利用している。上端に加工を施し、釣り手状をなすが、上部は破損している。下端にもカット痕が観察されるが全域に及ばない。

6. ト骨（第650図1・2、図版259、図版270a-1・2）

ト骨（第650図1、図版259、原色図版23）

資料番号H0708で、H地区の大溝H11の2層から出土した（第518図、図版128c）。ニホンジカの左側肩甲骨で、残存長208.2mm、残存幅119mm、最大厚39.2mmを測る。肩甲棘の上端はカットされ、棘下窓の一部を欠失するものの、保存状態は良好といえる。関節上結節は完全に癒着しており、成獣の個体のものである。棘下窓及び肩甲下窓のほぼ全面に、鋭利な刃物による細かなケズリ痕（光沢をおびる）が観察された。これは骨表面を磨くように削ることにより焼灼面を滑沢・薄平にしようという意図がはたらいたのであろうと思われる。鑑は一側面を欠損しているため、その平面形状は明らかではないが、紡錘形を呈していたものと考えられ、少なくとも二列以上彫りこまれていたものと推測される。上下に隣り合う鑑の重複関係から、上から下に向かって連続して彫り込み、その底面に焼灼をほどこしている。焼灼痕は8ヶ所（図の矢印は黒色に変化した部分）に認められた。

ト骨（第650図2、図版270a-1）

資料番号H0212-04で、H地区の大溝H11の2層から出土した。ニホンジカの右側肩甲骨で、残存長11.4cm、残存幅10.0cm、最大厚1.7cm、頸部幅17.83mmを測る。関節上結節は未癒着で、若獣の個体のものである。鑑や焼灼痕は認められないが、肩甲棘を根元から丁寧に除去していることから、ト骨の未使用品の可能性が考えられる。

ト骨（図版270a-2）

資料番号E1147-01で、E調査区の大溝E090001の最上層から出土した。ニホンジカの右側肩甲骨で、残存長59.27mm、頸部幅28.65mmを測る。関節窓を残して、肩甲頸から近位端にかけての外側面を削っている。遠位端の大半を破損しているため、焼灼痕の有無は不明であるが、関節窓を残して外側面を削っていることから、ト骨の可能性が考えられる。類例は鳥取県鳥取市青

谷上寺地遺跡^(註12)の弥生時代後期以降のト骨に同様のものがある。なお、古墳時代のト骨の出土例は少なく、畿内では大阪府東大阪市日下遺跡^(註13)、大阪府大東市鍋田川遺跡^(註14)に次いで三例目となる。

ト骨について少し整理すると、弥生時代のト骨は使用する動物骨の使用部位および焼灼を加える位置によって大きく4つに分けることが出来る^(註15)。焼灼を加える面を焼面、亀裂を判定する面をト面とすると、(1) イノシシ大腿骨・桡骨、シカ中足骨などの長い骨を使用するもので、焼面とト面が同じ。(2) 肩甲骨を使うもので、焼灼は骨の厚い部分に行う。側縁に施す場合もある。焼面とト面が同じ。(3) 肩甲骨を使用する。内側面の骨の薄い部分に焼灼を施し、裏面に焼痕が見られ、焼面とト面は異なる。(4) 肩甲骨を使用する。焼灼痕が出やすいように骨を削り、焼灼は内外側面から施し、焼面とト面は異なる。

弥生時代前期では肩甲骨は使用されず、桡骨や大腿骨などの細長く厚いものを使用している。中期前半になって初めて肩甲骨の使用が見られる。当初は骨の厚い部分に焼灼を行っていたが、やがて中期中頃には骨の薄い部分も使うようになり、焼灼を行っていった。弥生時代後期以降になると関節窓を残して肩甲頸から近位端にかけての外側面を削り、外側面に焼灼を行なうようになる。今回の資料（第650図1）は、古墳時代後期のもので、肩甲棘の先端を削るのみで、外側面でなく、内側面に焼灼を行っている。内側面に焼灼を行うという弥生時代の伝統に鑽をもうける新しい焼灼法を加味するという点で、今後、ト骨の系統を考える上で特質される資料といえる。

7. 鹿角製加工品（第648図4～7、第649図5・6、図版261a・b、図版262a-1～5）

鹿角製加工品（第648図4、図版261b）

資料番号H0972で、H地区の大溝H11の4層から出土した。径29.02×24.46mm、長さ55.78mmを測る。両端を擦り切りで切断し、周縁を加工しているが、破断面は未調整。側面は鹿角本来の自然面を残している。柄穴などの加工は認められないため、柄の未製品？と思われるが、長さが短いことから、別の用途の可能性もある。

鹿角製加工品（第648図5、図版261a）

資料番号H0230-05で、H地区の大溝H11の2層から出土した。長さ25.06mm、径12.94×12.81mmを測る。角を円筒状に加工している。両端は切断後、破面の海面質部分を丹念に削り、滑らかに仕上げている。縁部、側面は面取り状に加工して形状を整えている。両端から孔を開けているが、孔の周辺の調整はやや粗い。管玉の未製品？

鹿角製加工品（第649図6、図版261a）

資料番号H0662-102で、H地区の大溝H11の2層から出土した。長さ14.17mm、径11.75×10.28mmを測る。断面形は面取り状の加工を施しているためやや角ばり、多角形を呈している。両端は切断後、破面の海面質部分を丹念に削り、滑らかに仕上げている。管玉の未製品？

鹿角製加工品（第648図6、図版262a-1）

資料番号 E1773 で、E 調査区の大溝 E090001 中層から出土した。左角で、第1叉～角座部分は、第1叉と第2叉の角幹中位に擦り切りを入れ切断され、角幹の先端、第2～3枝先端は破損している。残存長は 20.3cm で、全体的に保存状況は悪く、縦方向へ亀裂が生じている。第2叉から第3叉の角幹部分は角本来の自然面を残し、加工痕などは認められないことから未製品と考えられる。なお、第1叉～角座部分は製品として使用されたのであろう。

鹿角製加工品（図版 262a-3）

資料番号 E3116-01 で、E 調査区の大溝 E090001 より出土した。角の先端部分の破片で、基部は両面からカットしている。残存長 82.77mm、厚さ 17.36mm。表面は鹿角本来の自然面を残している。未製品？

鹿角製加工品（第 648 図 7、図版 262a-4）

資料番号 H0320-001 で、H 地区の大溝 H11 の 2 層から出土した。角座から第1叉までの角幹で、角座骨から切断され、第1枝は敲打によって破損している。右角で、長さ 88.99mm を測り、Y 字形を呈し、切断面は面取り状に研磨が丁寧に施されている。角幹部は擦切りで切断しているが、破口については調整をほとんど行っていない。角座と第1枝下端の角幹間の最も細くなっている部位の径（角座上径）は前後径 41.83mm、左右径 34.22mm を測る。角幹の表面には角歯、顆粒が明瞭に観察されなど、角本来の自然面をよく残している。未製品と考えられ、形状から候補の一つに精尻があげられる。

鹿角製加工品（図版 262a-5）

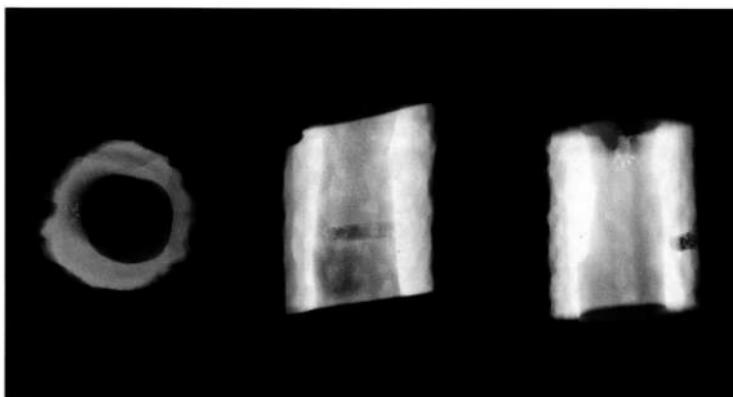
資料番号 D3910 で、D 調査区の大溝 900 の 3 層より出土した。左角で、落角を利用している。角座から第1叉までの角幹で、角幹部および第1枝は擦切り後、敲打を加え切断している。未製品と考えられ、残存長 59.12mm、角座の前後径 54.21mm、左右径 50.54mm を測る。内側は角表面が剥がれています。

鹿角製加工品（第 649 図 5、図版 261a）

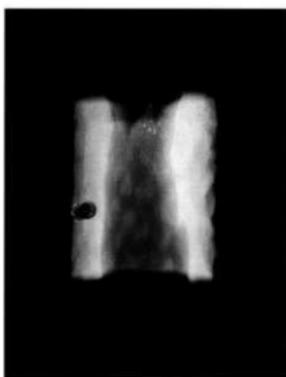
資料番号 C3305 で、掘立柱建物 C1 の北側土器窓より出土した。火熱により一部白色化している。長さ 36.31mm、径 10.55 × 13.53mm を測る。角の先端を擦り切りにより切断し、破口面を丁寧に加工し、穴を開けている。尖頭部は面取り状にケズリ研磨されている。側面には角本来の自然面が残り、下半部に切断しようとした擦り切りの溝がみられるが、全周していない。このため製作途上に何らかの理由により放棄したものかもしれない。

鹿角（図版 262a-2）

資料番号 D3230 で、D 調査区の大溝 D900 の 2 層から出土した落角である。角は 1 尖で、1 才前後の若い個体。先端は破損し、残存長 59.08mm で、角座の最大径 31.56mm を測る。



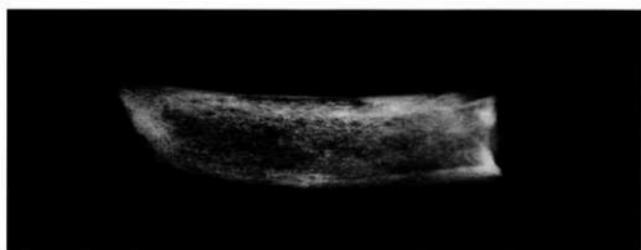
a. 大溝F出土（第647図1）頭側面・偶側面・腹側面



b. 同上 背側面

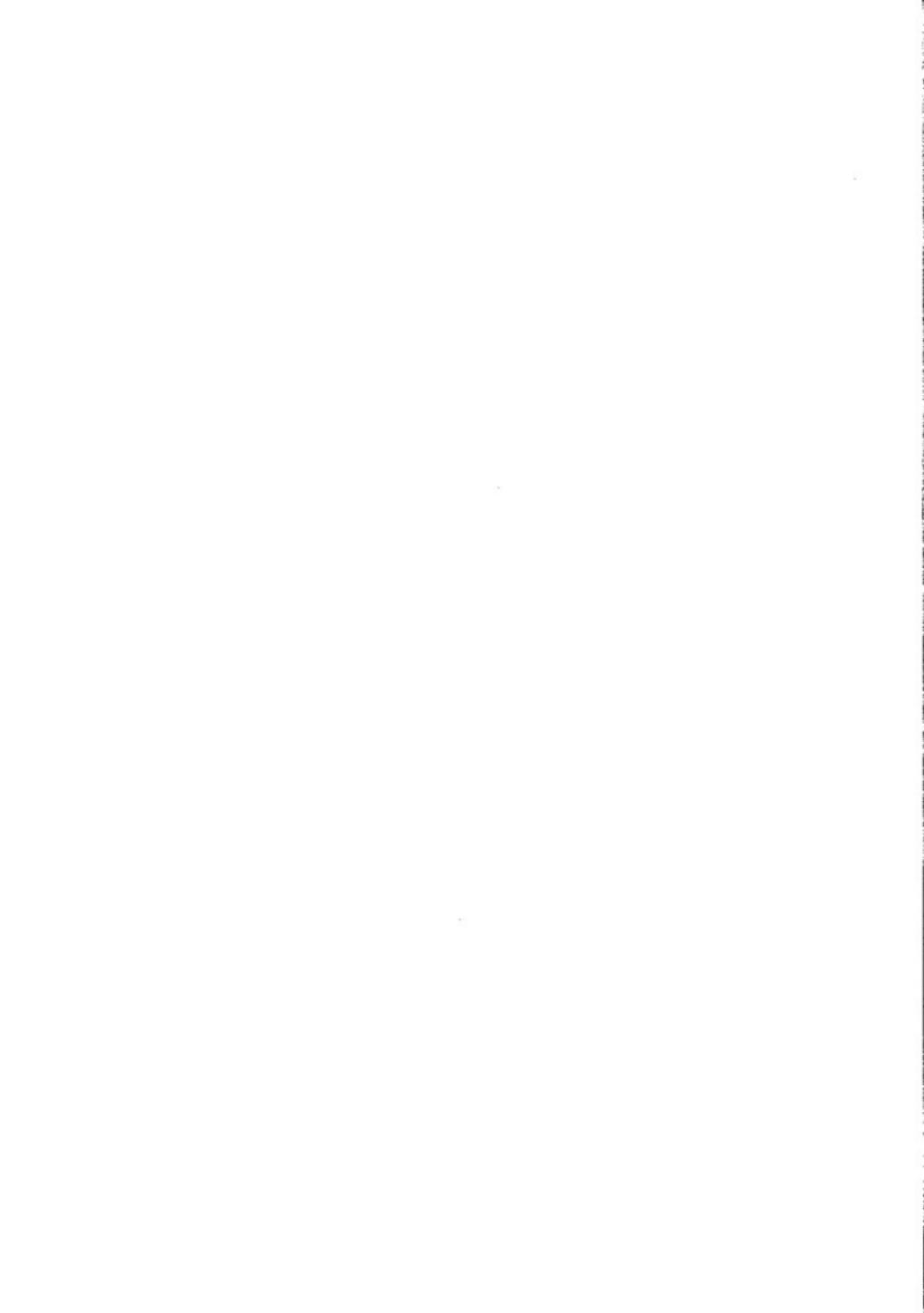


c. 大溝E090001出土（第647図2）偶側面



d. 大溝E090001出土（第649図3）

第723図 X線写真 鹿角製品（1/1）



註

- 註1 小林行雄 1976「鹿角製刀劍装具」「古墳文化論考」平凡社
なお、柄間については柄頭と一緒に造り出され、柄間単独での出土例は現在ところ知られていない。
- 註2 小林行雄 1976「鹿角製刀劍装具」「古墳文化論考」平凡社
置田雅昭 1983「東西礼拝場ふしん地の発掘」「大望」NO.170
- 置田雅昭 1985「古墳時代の木製刀把装具」「天理大学学報」第145輯 天理大学学術研究会
- 註3 (一)瀬和夫 1996「太刀外装の変化」「金の大刀と銀の大刀・古墳・飛鳥の貴人と階層」
平成8年度秋季特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館)の図5に一部加筆して転載
- 註4 (渡邊昌宏 1996「鹿角の呪力」「卑弥呼の動物ランド-よみがえった弥生犬-」
平成8年度春季特別展 大阪府立弥生文化博物館)の第1図に一部加筆して転載
- 註5 奈良国立文化財研究所編 1993「刀劍装具」「木器集成図録 近畿原始篇(解説)」
奈良国立文化財研究所史料第36冊
- 註6 置田雅昭 1985「古墳時代の木製刀把装具」「天理大学学報」第145輯 天理大学学術研究会
なお、現在のところ円筒形タイプを模倣した木製柄頭は知られていない。
- 註7 当初、孔の内縁に紐(蔓状の織維?)が密着していたため、表面観察では孔の内部の様子が不明であった。
そのため、孔がU字状に通じているのか否かを確認するためにX線撮影を行い、潜り孔であることが明らかとなり、内部にも紐が遺存していることが判明した(写真1)。X線撮影にあたっては財団法人大阪府
文化財センターの山口誠治氏、橋本俊範氏の協力を得た。
- 註8 末永雅雄・森浩一 1966「眉山周辺の古墳-恵解山古墳群 節句山古墳群-」
徳島県文化財調査報告書第9集
- 註9 山内紀嗣 1995「木器」「布留遺跡三島(里中地区)発掘調査報告書」埋蔵文化財天理教調査団版
(挿図202-4)
- 註10 奥村茂輝編 2008「滋賀郡条里遺跡VIII」(財)大阪府文化財センター調査報告書 第182集
(図版111-2)
- 註11 山内紀嗣 1995「木器」「布留遺跡三島(里中地区)発掘調査報告書」埋蔵文化財天理教調査団
(挿図196-3)
- 註12 北浦弘人 2001「骨角器」「青谷上寺地遺跡3(本文編)」鳥取県教育文化財団調査報告書72
(第210図)
- 註13 墓田直編 1967「東大阪市日下遺跡調査概報」考古学シリーズ2 帝塚山大学考古学研究室
- 註14 大東市教育委員会編 1973「大東市史」62頁
- 註15 宮崎泰史 1999「まつりの品々」「渡来人登場-弥生文化を開いた人々-」平成11年度春季特別展
大阪府立弥生文化博物館

第6節 木製品

第1項 木製品の概要

本遺跡からは古墳時代中～後期および弥生時代中期に属する多量の木製品が出土している。古墳時代の木製品は主に集落西端の大溝から出土しているが、集落内の井戸や土坑等からも出土しており、集落域で使用された木製品の様相を知る上での良好な資料ということができる。また弥生時代の木製品は集落および微高地縁辺の低地部から出土している。それぞれの所属時期や法量等の属性については表10（観察表編）を参照していただきたい。

本節において報告する木製品については、「木器集成図録 近畿原始篇」（奈良文化財研究所 1993）、「考古資料大観8 弥生古墳時代 木・繊維製品」（山田 2005）、「六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）」（穂積 2000）における器種分類を参考に検討し、以下のような器種分類を行った。

1. 農具（鋤、鋤、大足、鎌柄、豎杵、目盛板、木鍤、横植等）
2. 工具（鉄斧柄、掛矢）
3. 紡織具（紡錘車、糸巻（棒、カセカケ）等）
4. 容器（割物、曲物等）
5. 家具（椅子）
6. 武具・武器（刀剣装具等）
7. 馬具（輪燈、鞍）
8. 祭祀具（武器形、舟形、サシバ形、斎串等）
9. 楽器（琴、琴柱）
10. 運搬具（背負子）
11. 発火具（火鑓臼）
12. 漁撈具（アカ取り）
13. 服飾具（下駄）
14. 食事具（横杓子・杓子形木製品）
15. 船材（準構造船体、舷側板、竜骨）
16. 建築部材（柱、扉、梯子等）
17. 杭材
18. 用途不明品

しかしながら、器種認定に関しては上記などの既往の研究成果を援用しているが、本来組合わされて出土する木製品の場合、部材のみの出土では器種認定に困難さが伴うこと、民具や民俗（民

族) 例との比較研究途上にある場合には、器種認定の可能性の幅が制限されることなど、上記の分類と器種認定には、今後の研究の進展により新たな知見が加わることが十分予想される。

その点は今後の課題とし、以下において器種ごとに解説を行うこととする。

第2項 古墳時代の木製品

1. 農具

(1) 錘類

錘類には、直柄又鍤、曲柄平鍤、曲柄又鍤がみられる（第651・685図、図版276・307）。直柄又鍤(651-02)は大溝出土である。モミ属製で鍤類の樹種として普通のアカガシ亜属ではない。全体形は三叉になると考えられ、欠損面では柄孔とみられる方形孔が鍤身に対し約60°に穿たれていることが観察できる。

曲柄平鍤および曲柄又鍤は、反柄が装着されるいわゆる「ナスピ形曲柄鍤」と呼ばれるもので、大溝出土例では平鍤には鉄製U字形刃先が装着されるもの(651-03・07)と刃先まで木製のもの(651-01・04)がある。一方、曲柄又鍤は、全体形が復元できる例が西居住域の井戸F1168から出土したもの(685-03)と北東居住域の土坑B130764から出土したもの(685-04)のみで、大溝出土例(651-05・06)は破片である。また大溝からは軸部のみの破片も出土している(651-08～10)。軸部の端部は明確に残存しているものが1例あり、端部に突帯を削り出している(651-09)。曲柄平鍤、又鍤ともにアカガシ亜属の柾目材である。

(2) 鋤

大溝からは一木鋤の身部および把手それが2点出土している（第653図、図版278）。このうち653-06は身部破片であるがU字形刃先が装着できるよう加工が施されている。653-07は柄部から身部にかけての破片で、06に比べ厚みがある。ともにアカガシ亜属の柾目材である。

一木鋤の把手は2点出土している(653-03・04)。共に柄部を装着する方形孔に直交するようく小円形孔が穿たれ木釘で固定されていたと考えられる。共にマツ属複維管束亜属（クロマツやアカマツなどの二葉松類）の芯持材である。

一方、集落域からは、北東居住域の井戸D474から1点出土している（第684図4、図版306）。アカガシ亜属の柾目材で把手は付いていない。刃部はやや厚みがあり、鉄製U字形刃先を装着する加工は施されていない。

(3) エブリ

大溝から2点出土している（第653図、図版277）。ともに刃先が鋸齒状を呈するが、柄孔をもつもの(653-01)、柄孔をもたないもの(653-02)がみられる。前者は農具として普通のアカガシ亜属の柾目材であるが、後者はツブラジイの柾目材であり、前者に比べ材質的に強度が劣るために、水田内での耕作ではなく、収穫したモミ等を広げて乾燥させる際に使用したものと考えられる。

(4) 錘・鋤の柄

鍘柄では、反柄が出土している（第653図5、図版278）。サカキ属の分枝部分を利用し、鍘との装着面を平坦に削りこんでいる。また直柄も出土している（第653図9、図版278）。クヌギ節の柾目材を削り出して作製され、先端部を断面長方形に加工している。鍘の方形孔に装着されたものと考えられる。

同図8は、T字形の把手をめ込むために断面長方形に削り出しており、鋤柄と考えられる。ただ、スギの柾目材であり、一本鋤がアカガシ亜属である点と異なる。組合わせ鋤の柄であろう。これらはいずれも大溝出土である。

(5) 鎌・鎌柄

鎌形を呈する木器が大溝から1点出土している（第652図、図版276）。652-01は両刃を削り出している。刃先はややつぶれているが、基部は加工されており欠損しているものではない。ヒノキの板目材であるので、実用の農具というよりは形代として祭祀具に分類すべきかもしれない。本遺跡の木製祭祀具には農具形が見られないことも考慮して、ここでは農具と分類した。

鎌柄は3例出土している（第652図）。このうち652-02は刃の装着部が欠損する握部で、下端部にむけて緩やかに曲がり、ストップ状に削り出している。スギの柾目材を利用している。652-03・04は鉄製鎌との装着部分の破片で、ともに頭部を丸く加工する点で共通している。ともにアカガシ亜属であるが、03は板目材であるのに対し04は柾目材である。

(6) 竪杵

大溝より1点出土している（第652図、図版276）。652-05は全長51cmを測り、古墳時代中期例の平均値（95.9cm）よりもかなり短い（村上1996）。撫部はともに当初丸みを帯びていたものが使用に際して徐々に平坦に変形したようであり、少なくとも真平らではない。サカキ属の芯持材である。

(7) 横槌

大溝より8点出土している（第652・654図、図版277・279）。横槌の民具学的研究（渡辺1985）によると、

- 1類：敲打部と柄部の境界が直角に近い形態で、敲打部が太くて短いもの（652-07）。
- 2類：敲打部と柄部の境界が直角に近い形態で、敲打部が細くて長いもの（652-06・09）。
- 3類：敲打部と柄部の境界が斜めに傾斜する形態で、敲打部が細くて長いもの（652-08・10・654-01～03）

と分類できる。この民具学的分類では、1類が藁打ち、2・3類が豆打ちの機能を有するものとされている。なお、敲打部中央が強く剥離しているものや線状に傷がみられるもの（652-06・09）は工具への転用例で、いずれも2類である。

使用樹種はアカガシ亜属3点、ツバキ属3点、タニウツギ属1点、ヒサカキ1点などである。他樹種に比べて堅く、重量の重いアカガシ亜属を多く利用していることは西日本における民具の

特徴と同様の傾向にある（渡辺 1985）。また工具への転用例はいずれもアカガシ亜属製である。

(8) 大足

大溝からは足板、横桟が出土している（第 654 図、図版 279）。654-04 の足板は全長が 21cm 程度と小さく別の用途を考えるべきかもしれない。また 654-07 の横桟は幅が 2.7cm と狭いため横桟としていいか疑問が残る。これらはスギ、ヒノキで製作されている。

集落跡からは北東居住域の井戸 D474 から横桟、横枠、足板が出土している（第 680 図、図版 301）。これらは井戸堆積土の中位層からまとまって出土したもので、もともとは一体として機能していたものであろう。足板（680-09）と横枠の 1 点（680-08）および横桟の 1 点（680-06）がコウヤマキを利用している他、スギ、ヒノキ、モミ属が利用されており多様である。なお、大溝、集落域とともに大足縦枠は検出されていない。

(9) 目盛板

大溝からは 3 点出土している（第 654・655 図、図版 281）。654-08 は両端部が欠損しており刻目が 2 箇所確認されるのみであるが、その間隔は 16.8cm である。スギの柾目材を利用している。断面が楕円形を呈する。655-09 は上下両辺に刻目をいれている。図の左辺では遺存状態が良好とはいえないが、3 つの刻目が一つの単位をなしており、その単位間は明瞭な部分で 8.8cm を測る。単位内は 1.6 ~ 2.8cm の間隔で刻目をもつ。実測図の右辺も遺存状態が良好ではないが、単位間は約 6cm 間隔で刻目をもつようである。断面は 654-08 と同様に楕円形を呈する。ヒノキの柾目材を利用している。655-10 は小破片であるが刻目が 2 箇所確認できる。

集落域からは、北東居住域の井戸 D474 から 1 点出土している（第 681 図、図版 302）。681-08 はアカガシ亜属の追柾材である。断面が長方形を呈し、幅広面と幅狭面のそれぞれ一方に刻目をもつ。間隔は幅広面では 1.6 ~ 1.8cm（平均 1.7cm）、幅狭面では 1.5 ~ 2.0cm（平均 1.7cm）で、幅狭面の方がややばらつきが大きい。刻目の谷部は刃物による加工痕が明瞭であるのに対し、山部は上面が擦れたように曲面を呈し、谷部にもじり編みの縦糸をわたして使用されていたことには疑問が残る。未製品の可能性を考慮しここでは目盛板としたが、後述するさらなる可能性もある。このような狭小な間隔で用いる木錘は、縦長の形態を呈することが予想されるが、この井戸 D474 から出土している木錘は、後述するように括れをもつタイプで横向きで使用するものであるので、この目盛板とのセット関係ではないと考えられる。

(10) 木錘

大溝および集落域から出土している木錘は、考古・民具学的研究による分類（渡辺 1981）におけるヨコ型で、芯持ち丸太材を利用し、その中央を括るように削りこんで作製されたものが中心である。これを 1 類とする。

大溝出土の木錘は 11 例ある（第 654・655 図、図版 279・280）。そのうち 9 例は 1 類である（654-10・11、655-01 ~ 07）。

使用樹種は判明しているものでヒノキ 3 点、アカガシ亜属 2 点、サカキ 1 点、ツバキ 1 点で

ある。

一方、長方形の板材の両辺部分を括れるように削り込むものを2類とすると、654-09は端部の一方が欠損しているので、本来はヨコ型ではなくタテ型であろう。ヒノキ科の追査材を使用している。また1類と同様に芯持ち丸太材を利用するが、括れの削りこみが浅く、全長が長いものを3類とする。655-08はアカガシ亜属の芯持材である。

また集落域では北東居住域の井戸D474の中位層より7点がまとめて出土している（第681図、図版302）。これらは1類に属するが、681-07のみ未製品である。樹種はアカガシ亜属4点、サカキ・ツバキ属・ツツジ科が各1点である。

木鍤の機能として重量が重要な要素であるため、実測図から堆積を概算し、使用樹種の気乾比重（貴島ほか1962）を乗じて目安としての重量を算出すると（觀察表編の表10の備考欄）、1類はおよそ100～200gに分布しており、比較的よくまとまっている。

目盛板およびそれとセットになる木鍤の民具・考古学的研究（渡辺1983）によると、出土目盛板の刻目の間隔および木鍤の個数によって製作される製品が以下のようにおおよそ想定される。

1群：刻目の間隔が1cm前後。編布などの目の細かい製品を編む際に用いられる。細かい製品の場合は錐具は40～50個程度になる。編布ではその倍以上使用される。重量は20～80gで100g以下。

2群：間隔が2～3cmないし数cm。間隔の広いハバキや腰カゴや背負いカゴ等を編む際に用いられる。錐具の重量は80～250g程度である。

3群：間隔が10～20cm前後の米俵、炭俵、ムシロ、ミノ、ウケ等を編む際に用いられる。特に米俵、炭俵の錐具は中世の絵巻物や伊場遺跡出土例等により古代より8個である。110～470gで2群とは分布範囲が暫移的である。

4群：雪囲いズやエリズなどの大型製品用。間隔は10～30cmで錐具の数は10数個程度である。重量は360～880gでかなり重い。

本遺跡の目盛板のうち654-08は3群に属する。木鍤1類は3群の錐具の重量としても適当であり、米俵等に用いられたものであろう。中でも井戸D474出土例は一活性の高い資料である。

6個（3対）であり米俵等の8個ではないためミノやウケ等の製作に使用されたのであろうか。目盛板655-09は2群に属しカゴ類の作製に用いられたと考えられる。ただ、狭い間隔の刻目を2～3箇所で一単位となり、約9cm間隔でその単位がみられる部分が、どのような製品に対応するかは不明である。目盛板681-08は1群に属し、目の細かい編組製品の作成に用いられたが、これに対応する錐具は、不明である。木鍤の2類（654-09）が対応する可能性も考えられる。

2. 工具

（1）鉄斧柄

大溝から4点出土している（第656図、図版281）。うち1点は未製品である。3類に分類で

きる。1類は組合せ式の斧柄である。1点出土している。656-01は全体が炭化しているが袋状鉄斧を装着できるように台部の先端を凸状に削り出している。縦斧として使用されたものである。台部は板目材、柄は柾目材を利用している。

2類は袋状鉄斧を装着する膝柄で2点出土している。656-04は台部の装着部を断面円形に加工している。端部から5cmほど装着によってささくれている。基部は上下から削り込み凸状に作り出している。モミ属の分枝部分。656-05は台部上面に平坦面を設けている。マツ属複維管束亞属の分枝部分である。ともに横斧に使用されたものである。

3類は板状鉄斧の直柄になると考えられる未製品である(656-02)。上半部を断面方形に加工し下半部は断面円形に加工している。その境界部は幅を厚くしている。他遺跡例では断面方形の部分に側面から板状鉄斧の装着孔を穿つが、本例には見られない。形態的には斧直柄とするには疑問も残るが、コナラ節の柾目材を利用している点で斧柄未製品とした。

(2) 刀子柄

大溝から1点出土している(第656図、図版281)。656-06は端部を肥厚させ全体的に緩やかにカーブしている。ヒノキの柾目材を利用している。

(3) 掛矢

大溝から1点出土している(第656図)。656-03はヒノキの芯持ち材を利用しておらず、全体に作りが粗雑である。敲打部は使用に際してかなり抉れている。横槌よりも大型でかつ明瞭な打撃の痕跡が見られるため掛矢とした。

3. 紡織具

(1) 紡錘車

木製紡錘車が大溝から1点出土している(第657図、図版282)。657-04は平面形はやや楕円を呈し、断面は台形を呈する。中央には1×2cm程度の方形孔が穿たれている。スギの板目材を利用している。

(2) 糸巻(棒)

①棒

棒を「工」字形に組合せ、支え木を持って腕木に糸を巻き取っていく道具である。大溝からは腕木と支え木が出土している(第657図、図版282)。

腕木(657-01)は支え木を装着するために中央部に略方形孔を穿っており、側面から木釘で止めるタイプである。両端部は欠損しているが徐々に細くしている。ヒノキの柾目材である。

支え木は2点出土している。657-07は腕木に差し込む部分を断面方形に作り出しているが、木釘で止められた痕跡はない。軸部は断面円形を呈する。コウヤマキの柾目材である。657-08は腕木に差し込む部分を断面方形に作り出す点で07と同様であるが、軸部断面を多角形に面取りし、また腕木を受けるために軸を肥厚させない点が異なる。ヒノキの柾目材を使用している。

いずれにしても本遺跡の棒は、支え木を腕木に差し込むタイプであり、腕木が支え木を貫通するタイプではない。

②カセカケ

十字に組合された2本の細長い板（支え木）の両端部に複数穿たれた小孔に差し込まれた細い棒材（腕木）に糸を巻き取る道具である。2本の支え木の交点は下から台（または脚）に装着される場合と、軸棒が差し込まれて台に固定される場合があるという（徳積2000）。支え木は回転しながら糸を巻き取る。

この支え木部分が2点出土している（第657図、図版282）。657-03は破片であるが支え木同士の交差部分が残存している。657-10は交差部分を作り出した段差と、台ないしは軸棒を装着する孔が確認できる。端部は腕木を差し込むための小孔が1箇所みられる。ヒノキ科の柾目材を利用している。

（3）タタリ

①台部

大溝からタタリの台部が3点出土している（第657・658図、図版282・283）。3点それぞれ形態的な特徴をもっている。657-11は平面形は長方形を呈し、断面形は台形を呈する。中央に2.5×3.0cmの方形孔を穿つ。下面は削り込まれている。散孔材の柾目材を利用している。658-01も平面形は長方形、断面形は台形を呈し、下面から削り込むが、中央に穿たれた3.0×4.0cmの方形孔は70°程度の角度をもっている。また方形孔内に十字架形の板状木製品が残存しており、この台に伴っていたものと考えられる。軸を固定するための楔であろうか。シイ属の丸太を半裁したものを利用しており、芯から放射状の割れが生じている。658-02はコナラ節の分枝部分を利用しており、中央に2.4×3.6cmの方形孔を穿つ。下面は削り込まれている。

タタリとは、糸を巻き取る際にかけ糸を固定する道具である。軸部と台部からなる。軸部の端部は糸が絡まないように複数の溝を切り、そこへ糸を掛けながら巻き取っていく。

島根県松江市下川津遺跡では台と軸部が一本の例（古墳時代後期～飛鳥時代）も認められるが、台と軸が組合うものが多く、静岡県浜松市山ノ花遺跡例（古墳時代中期）では軸と台部がセットで出土している（鈴木他1998）。三重県津市六大A遺跡例（古墳時代中～後期）では、タタリの台とカセカケの軸棒との組合せの可能性が指摘されており（徳積2000）、台部のみの出土ではタタリかカセカケかの判断は困難である。また四條畷市鎌田遺跡から出土した台付木製品はタタリの台と軸部の組合せに形態が類似するが、出土状況等の検討により「飾り台」としての機能が想定されている（村上2001）。

②軸部

タタリの軸部と考えられるものが大溝より1点出土している（第679図、図版301）。679-04は上部端が欠損しており糸を渡す溝部分は認められないが、かけ糸をのせる突起部を削り出している。台との装着部は断面が1.6×4.0cmの長方形を呈し、長さ9.6cmを測る。上記の台部の方

形孔とはサイズが異なり直接組み合うものではない。

(4) 緯打具

機織の際に経糸に通した緯糸を打ちつける道具である。大溝より2点出土しており、幅狭のものと幅広のものがある（第657・678図、図版282・300）。657-06はアカガシ亞属の柾目材を利用しておらず、曲柄鍬の転用である。678-02もアカガシ亞属の板目材を利用しておらず、中央に4.4×2.0cmの方形孔が穿たれている。2点とも長辺の一方を尖らせるように加工しておりこの部分で緯糸を打ちつけたものと考えられる。

(5) 織機

経巻具もしくは布巻具と考えられる（第657図）。織機としての同定には問題が多く、積極的に同定したものではないが、端部を有頭状に削り出し、幅に比べ厚みがあり丁寧な加工が施されているものを織機とした。657-09は大溝出土であり、スギの柾目材を利用している。

4. 容器

(1) 剣物

①槽

槽は大溝より8点出土している（第659・660図、図版284～286）。全体形状の分かるものについては下記の3種に分類できる。

1類：平面形が橢円を呈し、耳状の持ち手のように長軸方向の両端部分を方形に加工するもの（659-01、659-02）

2類：平面形が橢円の長軸方向の両端部分を切り落とした形態に加工するもの（660-02）

3類：平面形が長方形状を呈するもの（660-01）

1類のうち、659-01は耳部の長さを約8cmと長めに作り出す。内面には刃物痕とみられる直線状の工具痕が多数見られる。659-02は耳部がわずかに作り出される程度で、四脚がつく。樹種はヒノキの板目材を利用している。

2類の660-02は底部が薄く作られているため使用時に欠損したと考えられる。四脚をもつ。クリの板目材を利用している。

3類の660-01は半分欠損しているが、平面形が長方形になり四脚をもつ。

このほか、坏部の破片（660-03、660-04）、脚を有する底部の破片（660-05）がある。

また北東居住域の井戸D474からは2類の槽が出土している（第682図、図版303）。682-07は大溝出土例に比べると大型で、長軸方向の両端部に把手を作り出す。

さらに南東居住域の井戸A542からも大型の槽の破片が出土している（第686図、図版308）。686-03は一部が炭化しているが、把手が残存している。

②コップ形容器

第661図1（図版286）は元々円筒を呈していた形状の一部分で、イヌガヤの板目材を利用し

ている。内外面ともに丁寧な加工を施しており、上端部分はやや厚みを減じている。底部のあり方が不明であるが一本で作られていた可能性もある。

(2) 曲物

大溝からは底板が3点出土している(第661図、図版286)。661-04は正円形を呈し側板との結合は、外周部分を一段低く削り込んで段を形成し、その部分に側板を置いて止めるものである。661-05は橢円形を呈する底板で、縛縛用の孔が1箇所みられる。661-07も橢円形を呈すると考えられるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。

集落域では、北東居住域の井戸D474より底板および側板が出土している(第682図、図版303)。682-02～06は曲物の側板である。682-02は厚さ3～4mm程度の薄いヒノキの板目材2枚重ねて曲げている。上面と下面にV字の切れ込みを入れているが、検出時には縛縛されてはいなかった。未製品であろうか。またこれらの側板には、いずれも外面および内面は刀子のような刃物で削った加工痕が上下辺に対して約45°程度の角度をもってみられる。682-3は端部を接合のために孔を開けている。682-01は曲物底板である。6箇所の孔に桜皮が残存している。側板とは段を切り込みなどを設けず平坦面で接合する。

(3) 指物

板材の接合によって容器とするものを指物として扱った。しかし組合って出土しておらず、側板が出土しているのみである。小孔を穿ち紐で縛縛する紐結合箱の側板が大溝より2点出土している(第661図、図版286)。

661-03は側板の短辺を凸状に作り出して端部に小孔を設けている。また凸状の作り出しの基部と上辺中央に小孔を穿っている。この形態の側板2枚と短辺を凹状に削り込んだ側板2枚で箱として組合っていたものと考えられる。661-06は短辺の一方に凸状を作り出し、一方の短辺を凹状に削り込んでいる、同形態の側板4枚で箱として組合っていたものと考えられる。

5. 家具

(1) 椅子

大溝から出土している椅子は脚部と座板を別に作る、組合わせの椅子である。座板が1枚、脚が2点出土している(第661図、図版287)。

661-08は、端部を座面に対し斜め上方に緩く立ち上がらせ、断面円形に削り出している。下面是長軸方向に幅1.6cmの溝を設け前面もしくは後面に向けて板状の脚を取り付けたと考えられる。また座面を貫通するように一辺2cm程度の方形孔が穿たれており、側面の脚に設けた出納と組合せたものと考えられる。したがって脚は箱状を呈していたものと考えられる。661-09および10は脚部である。ともにやや厚手の材を利用している。

6. 武具・武器

(1) 刀剣装具

①鞘

鞘は半裁した2枚の板材の内側を刀剣の形状に合わせて削りこみ、2枚合わせて鞘口と鞘尻で結合するもので、大溝から2点出土している（第662図、図版287）。

662-01は残存長51cmを測り、鞘尻の端部が残存している。内面の削り込みは刀剣いずれかの形にはならず、長方形を呈している。鞘尻には凸状に出柄が作り出されており、662-04のような部材と組合っていたものと考えられる。662-2は内面を刀形に削り込み、鞘尻には凸状の出柄が作り出されている。662-05は鞘尻部分で内面が逆M字形に削り込まれている。端部に凸状の出柄を作り出さない。また、上辺の中央部分に未貫通の小孔が穿たれている。散孔材の板目材を利用している。

②鞘尻

鞘の付属品として別に扱った。大溝より1点出土している（第662図、図版288）。

662-04はツゲの芯持材を利用したもので、表面はやや粗めの加工痕がみられる。

③柄頭

大溝より2点出土している（第662図、図版287・288）。

662-03はカエデ属の柾目材を利用して作られたもので、柄を挿入するための2.5cm四方の方形孔を穿ち、端部は柄装具を装着するために段差を設け、端部からV字形の切込みを入れている。またV字形の切込みの中央は円形に掘り込まれている。

662-06は柄頭の破片で、ツゲの板目材を利用している。表面下部に方形の小孔があり、その内面にそれと直交するように蟻溝が設けられている。

7. 馬具

(1) 輪鎧

大溝から2点出土している（第664図、図版289）。

664-01は高さ20.6cm、幅15.65cmを測る。輪部は平面形が楕円を呈し、内径は縦7.3cm、横10.6cmである。断面形は内側が広い台形を呈し、幅2.3～2.6cm、厚さ1.8～2.2cmである。柄部は端部に向かって幅を広くしており、断面形は隅丸長方形を呈する。長さ7.3cm、上端幅3.8cm、下端幅2.55cm、厚さ1.3～1.9cmである。柄部の上方に1.5×1.8cmの横長長方形の鎧軸孔（みずおこう）が穿たれている。ここに鎧軸を通して鞍と連絡していた。柄部の上端部および鎧軸孔の内縁上部が著しく磨耗しており、鎧軸の緊縛により生じたものと考えられる。鎧軸孔や輪部の磨耗の痕跡から、乗馬する人の右足を乗せるものと考えられる。表面は丁寧に加工されており、輪部を削り込んで断面を台形にすることで軽くする一方、重量のかかる柄部の基部を厚くするなど、実用向けの細工をしている。なお鎧軸孔の下に径0.3cm、深さ0.3cmの小穴がある。前面を意識するための印であろう。

664-02は柄部を欠き、残存高13.3cmを測る。輪部は平面長椭円形で、内径は縦8.1cm、横9.7cmを測る。断面形は隅丸長方形を呈し、幅2.3～2.6cm、厚さ1.8～2.3cmを測る。664-01に比べて整形が粗い。ともにアカガシ亜属の柾目材を利用している。

(2) 鞍（後輪）

大溝から出土した（第665図、図版290）。遺存状態が非常によく内外面とも黒漆が塗布されている。外面の漆の方が光沢がより鮮明で、内面の漆は使用に際して擦れており、やや光沢に乏しく所々漆塗膜が剥がれている。現存幅46.5cm、高さ27cm、最大厚4.5cmで、トチノキの枝別れ部分や根元などのような湾曲部分を利用して作られている。木取りは柾目である。

鞍の上端はやや丸みをおびた方形となっており、鞍外面右側の馬狭部は末広がりになり、端部まで残存する。右側の馬狭部および左右の磯の下端は欠損している。磯は膨らむように加工されており、磯と海と境には幅0.7cmの凸帯を削り出している。また磯の最も高まった部分はやや平坦に加工されており、州浜形を挟んで一辺約1cmの方形孔が左には2箇所、右に1箇所穿たれている。これについては鞍通し孔の可能性がある。欠損している部分の厚さが0.8cm程度しかないので、鞍に加わる力に耐え切れなかったものと考えられる。

一方、鞍の内面には右側では欠損しているが、左側に高さ1.5cmの凸帯が作り出され、幅1.5cm程度の深い溝が4箇所彫られている。またこの凸帯の奥に、鞍の材内部を下から抉るように断面「コ」字形の溝（幅約3cm、奥行き約2.5cm）が穿たれている。さらに凸帯と鞍内面の接する部分からこの溝に向かって斜め下方向に一辺約1.5cm程度の方形孔が4箇所あけられている。これらは凸帯上の深い溝と位置が対応しており、凸帯の下にあてがった居木を革紐などで固定する役割をもっていたと考えられる。

大阪府における古墳時代の鞍出土例は、八尾市八尾南遺跡（八尾市文化財調査研究会1995）、豊中市上津島遺跡（上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会1997）、堺市百舌鳥陵南遺跡（神谷1987）、寝屋川市讚良郡条里遺跡（2点、大阪府教委1991・大阪府文化財センター-2008a）、茨木市玉櫛遺跡（大阪府文化財センター-2008b）などが知られている。このうち百舌鳥陵南遺跡例や上津島遺跡例には本例と同様に凸帯をもつ構造をもつが、それらは凸帯に直接穿孔している点と鞍下面から溝を穿たない点で本例とは異なっている。鞍下面から溝を穿つものとしては、奈良県御所市长柄遺跡例（御所市教育委員会1994）があるが、これは凸帯をもたない。

本例に対応する居木は出土していないが、4箇所の方形孔と溝を考慮すれば、百舌鳥陵南遺跡で復元された4枚居木の可能性があるが（神谷1987）、福岡市元岡遺跡出土の居木（古代・福岡市教育委員会2003）は2枚居木であり、後輪と固定するための孔が4箇所あることを考慮すると、本例も2枚居木の可能性も残る。ただ元岡遺跡の居木は、居木先が鞍から突き出るのに対し、本例では磯の内側でとどまると考えられる。

また本例は居木を固定した場合に後方に大きく傾斜するものではなく、いわゆる「前・後輪直立鞍」であり、また古墳時代の出土例の検討によれば、金具装飾鞍の外観を模倣する形式である

「谷鞍形式1」に属するものと考えられる（神谷 2005）。

8. 祭祀具

(1) 武器形

①刀形

大溝から4点出土している（第663図、図版288）。柄の形状が3種類ある。

663-01および663-08は柄は刃の腹と背の両側から削り出し、曲線状を呈するもので、663-01は切先部分が欠損するが、刃を内反りに表現している珍しい例といえる。また663-08は小型で刃部を欠損する。柄頭に小突起を設けている。663-05は柄の削り出しが663-01と同様であるが、柄が直線状を呈している。刃部上方が欠損している。663-06は柄の削り出しが刃部の腹から作った後さらに抉りを加えている。刃部上方は欠損している。

②剣形

大溝から2点出土している（第663図、図版288）。

663-04は小型で遺存状態が良好でないが剣形とした。両刃に刃を削り出しており中央に穂をもつ。刃部の途中で欠損している。663-07は切先から茎まで良好に遺存する資料である。刃部の中央に穂を削り出し、また鎬を境に刃部に向けて矢羽状に鎬を表現している。

③鎌形

大溝から1点出土している（第663図、図版288）。663-03は、本来は断面が円形を呈するが欠損している。上半は表面が滑らかで穂はもない。下半部は茎へと徐々に細く加工している。ヒノキの柾目材を利用している。

(2) 舟形

大溝から3点出土している（第663図、図版289）。663-10、11は作りが厚手なのに対し、663-12は薄く、船体中央部分が欠損している。平面形態においても狭長な前者に対し、後者は幅広である。

また北東居住域からも出土している（第686図、図版307）。686-01は全長が約42cmを測り、大溝出土例にくらべ格段に大きい。舳先（櫓）は一方が欠損しているものの丁寧に加工されている。平面形態は大溝出土例の狭長な部類に属する。大溝出土例に比べ深さがあり、舟形容器の可能性もある。

(3) 蓋部材

①笠腕木

器種の認定にやや疑問が残るが、第663図13（図版289）はヒノキの芯持材を利用しているもので、緩やかに湾曲する。本来小径木の幹を軸受とし、そこから伸びる枝を腕木にする例が多いが、本例は軸受と一本であったと思われるが欠損している。また端部には小骨を連結させるための抉りを入れるのが通例であるが、本例は円形孔を2箇所設けている。

②笠鏡板

鏡板とは、蓋の軸受、手に持つための柄、蓋の骨の3種類の構造材を結合するもので、第679図3(図版301)がこれに該当するものと考えられる。半分が欠損するが径4cm程度の円形板の中央に円形孔を貫通させ、上面には断面V字の溝が彫られている。側面には円形小孔が6箇所確認でき、そこに骨と考えられる木材が残存している。奈良県橿原市十六面・薬王寺遺跡(古墳時代中期・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2000)や岐阜県可児市顕戸南遺跡(古墳時代前期・岐阜県埋蔵文化財センター-2000)に類例がある。

(4) サシバ形

大溝から1点出土している(第666図、図版291)。666-01は半分程度欠損しているが、縦長楕円形部分と握部が一本で作られている。ヒノキの板目材を利用しておらず、片面は手斧の加工痕が明瞭である。三重県六大A遺跡(總積2000)に類例がみられる。

(5) 斎串

斎串という名称には問題があるが、律令期のいわゆる斎串とよばれるものと形態的に同様のものである。大溝から2点出土している(第663図2・9)。ヒノキ(科)の柾目材を利用した薄手の板材で、上端ないし上下端に切込みを入れている。

また北東居住域の井戸D474からはまとまって出土している(第141~143図、図版48~50)。遺存状態の悪いものが多いが、先端を両側近から、もしくは片方から切りこんで尖らせていている。樹種の判明しているものは5点ともヒノキ製である(第683図、図版304)。木取りは図示が可能であった25点中、柾目:板目が11:14でどちらかに偏ることはないようである。加工痕は683-12に表面を刀子のような刃物で成形した痕跡が認められるが、多くは木目に沿って裂いた今まで、表面上は縦方向の凹凸をそのまま残し、断面は細長い三角形となる。斎串が一つの遺構からまとめて出土しているのは珍しいといえる。

9. 楽器

(1) 琴

大溝から4点出土している(第667・668図、図版292)。このうち668-01は筑状弦楽器といわれるものである(笠原2004)。ヒノキの板目材を利用している。糸かけ突起が欠損しているが、上端部に集玄孔が確認できる。断面形をカマボコ形に成形し、裏面の中央部分より欠損している先端部にかけて抉りをいれている。

他の3点はいずれも板作りの琴である。667-01は糸かけ突起が3箇所残存している。長辺の一方は生きており、端部を斜めに削って面を持たせている。667-02は糸かけ突起が2箇所残存している。全体に遺存状態が悪く平面形態が判然としない。667-03は糸かけ突起が2箇所でわずかに残存している。全体に遺存状態がわるく平面形態は判然としない。667-01~03は厚さが1.3~1.5cm程度の薄い板材を利用している。

(2) 琴柱

大溝から4点出土している(第667図、図版292)。4点それぞれに特徴を有している。667-04は横長の略三角形を呈し、底面は直線的で頂部にV字形の切込みを入れている。667-05は半円形を呈し、底面に半円形の抉りを入れる。667-06はもっとも丁寧な加工が施されている。正三角形の頂部を切り落としてV字形の切込みを入れる一方、底面には円形の抉りを入れている。667-07は4点中もっとも小型で、正三角形の頂部を切り落としてV字形の切込みを入れるが、底面は直線的である。

(3) ササラ状木製品

ササラとは、棒状の木材に刻みを入れて歯部を作り出し、別の道具で擦って音を発するもので、大溝から2点出土している(第666図、図版291)。

666-02はアカガシ亜属の柾目材を利用したもので、持ち手を断面円形に加工している。刻目は角柱の3辺に細かく入れている。刻目は角がとれて丸みを帯びている箇所もあり、擦られた痕跡と考えられる。666-03は小型であるが、角柱の4辺に刻目を細かく入れている。先端部は三角形に削り出している。下部は欠損している。

10. 運搬具

(1) 背負子

一本の角度の大きいV字形の分枝部分を利用していいるものである(第669図、図版293)。大溝からは5点出土している。669-03、04は断面がカマボコ形を呈するが、背中にあたる部分は特に加工されず、対になるもう一方の部材を向く面を平坦に仕上げている。669-03は荷を受けれる面を平坦にするが、669-04は加工がみられない。669-05～07は軸部のみの出土である。669-06は下端部より2箇所抉りを入れており、横材との連結に用いられたものと考えられる。この3点とも背中にあたる部分を平坦に仕上げている。

11. 発火具

(1) 火鑓臼

大溝より3点出土している(第669図、図版293)。いずれも回転摩擦式である。角柱の側面に切込みを一定間隔で入れ、上面から火鑓杵で摩擦を加えるものである。669-08・10のように小型のものもある。また669-9のようにやや大型のものもみられる。すべてスギの柾目材である。

12. 漁労具

(1) アカ取り

船底に溜まった水を船外へ掻き出す道具で、水を掬い易くするためチリトリのように先端部を尖らせている。大溝から3点出土している(第670図、図版294)。

670-03 は先端部へむけて幅を減じており、把手が付かない。670-02 は先端部へむけて幅を広げている。把手の有無は欠損により不明である。670-03 は幅は一定であるが、前 2 者に比べて浅い。把手が設けられており、掬いやすくするための工夫として、やや上方に角度をもたせている。

13. 服飾具

(1) 下駄

大溝からは 2 点出土している（第 669 図、図版 293）。いずれも足を乗せる台部と齒を一本で作る連歯式の下駄である。669-01・02 ともに、前壺が前歯の前に穿ち、後壺は後歯の前に穿っている。669-02 は前壺がやや中央に寄っており、欠損面に孔の痕跡が確認できる。両者ともに前歯、後歯の中央部分が抉れている。669-01 はヒノキ科の板目材、669-02 はケヤキの板目材を利用している。緒孔の穿孔は 669-01 が方形孔であり、上面から鑿状工具で穿孔したものと考えられる。また 669-02 は円形孔で上下面から穿孔されたものと考えられる。

また北東居住域の井戸 D474 からも 1 点（第 680 図 10、図版 302）出土している。緒孔の穿孔位置は大溝出土例と同様であるが齒の中央部には抉りがなく直線的である。ヒノキの柾目材を利用している。緒孔は上下面から穿孔されている。

14. 食事具

(1) 横杓子

大溝より 1 点出土している（第 666 図、図版 291）。666-04 はコウヤマキの芯持材を利用してアカ取りと同様の形態であるが、幅が狭いためアカ取りとは別の用途を考慮した。

(2) 純子状木製品

真直ぐな柄に扁平でやや幅広の身がつくものである（第 666 図、図版 291）。666-05 は先端部が欠損しているが、円柱上の柄から扁平な身へと滑らかに加工してある。ヒノキの板目材を利用している。

15. 船材

(1) 準備造船体

各居住域で検出されている井戸枠の転用例を中心に 15 点が出土している。

南東居住域の井戸 A494 では、枠に転用された船体部分が 2 点出土している。西側に使用されたもの（第 242 図左）は長さ 210cm、幅 125cm、厚さ 6～9cm を測る。スギを割り抜いて作製され、断面形は浅い鉢形を呈する。舳先（艦）に向かってやや幅を減じている。船底部は平らで幅約 50cm を測る。舷側への立ち上がりは高さ 0.4m になるが、上端部分が削られており、部分的に舷側版を固定するための L 字状の加工がみられる。上から見て右側の舷側の立ち上がりに穿孔が 1 箇所確認できるが、井戸枠に転用する際にあけられたものと思われる。東側に使用されたもの（同

図右)は長さ210cm、幅120cm、厚さ7~10cmを測る。スギを割り抜いて作製され、断面形は浅い鉢形を呈するが一方の舷側部分は削られて残存していない。船体の幅がほぼ一定なので、船体の中央部分にあたるものと考えられる。船底は平らで幅60cmを測る。右の舷側には舷側板を固定するためのL字状加工が明瞭に確認できる。水平部分で5cm、立ち上がり部分で5cmを測る。

北東居住域では、井戸B131000で枠に転用された船体が2点出土している。南側に使用されたもの(第137図上)は、スギを割り抜いて作られたもので、長さ263.5cm、上端幅90cm、下端部幅55cm、厚さ3~6.5cmを測る。上端から下端にかけて緩やかに内湾する形状と、下端部には内側の抉りがみられないことから、舳先(艤)部分と考えられる。断面形は舳先(艤)に近い部分では浅い皿型を呈し、その反対側では鉢形を呈し、船底を平坦に加工している。また枠として転用する際に削られているが、舷側板を固定するための枘孔が左舷側に4箇所、右舷側に3箇所穿たれている。船底に左右1対の方形孔があるが、転用に際して穿たれたものであろう。

北側に使用されたもの(同図下)もスギを割り抜いて作られたもので、長さ249.5cm、上端幅80cm、下端幅55cm(復元)、厚さ2~7.5cmを測る。上端部から下端部へかけて左右辺が平行して伸び、下端部付近で窄まったのち、また平行して方形の下端部を形成している。こうした平面形と、下端部では内側の抉りがみられないことから舳先(艤)部分と考えられる。断面形は舳先(艤)に近い部分は浅い皿型、反対側では鉢形を呈し、船底は平坦に仕上げているが、南側例に比べてやや丸みを帯びている。南側例とは平面形が異なるため、この2例が舳先もしくは艤であると考えられるが、各々どちらになるかは判然としない。また枠に転用される際に削られているが、舷側板を固定するための枘孔を痕跡的に確認できる。

この2点は舳先(艤)の部分としていわゆる「西都原型」とされる古代の準構造船の一類型に類する船材として注目される(一瀬2008)。

同じく北東居住域の井戸C2476でも、船体部分が出土している。南側の枠に使用されていたもの(第135図2)はスギを割り抜いて作られたもので、長さ152cm、幅113cm、厚さ7.5~9.5cmを測る。左右辺は上端部から下端部へと広がっており、右側では舷側板(あるいは他の部材)を固定するための逆L字状の加工と枘孔の一部がみられる。左側では転用の際に削られてしまつており、そのような加工はみられない。逆L字はやや鈍角に開くため、舷側板はやや外側に開くように固定される。船底は平坦面を形成しており断面形は鉢形を呈する。内側左側の下端付近に幅約5cm、長さ約5cmの溝がみられる。また下端部に貫通孔が1箇所みられる。

北側の枠に使用されていたもの(同図3)もスギを割り抜いて作られており、長さ146.5cm、幅98cm、厚さ6~11cmを測る。左右辺が下端へ向けて広がっており、内面右側には、舷側板を固定するための浅い逆L字状の加工がみられる。また下端付近では深さ10cm、幅5cmの溝が穿たれている。内面左側は枠に転用する際の加工により削られており、明瞭な加工痕が残る。

同居住域の井戸C2549でも船体部分が出土している。上記の井戸C2476やA494のように船体を2つ合わせて枠とするのではなく、複数の船体部分の再加工材を用いている。このうち部材

3～5の3点が船体部分である。部材3(第132図左下)はスギを割り抜いて作られており、船底部ではなく立ち上がりの部分である。長さ153cm、幅46cm、厚さ3.7～5.8cmを測る。内側の中央部に長さ8cm、幅5.5cmの溝が掘られている。その反対側の上端部近くに欠損しているものの方形孔がみられる。舷側板を固定するさいのものであろう。部材4(同図左上)は船底部と舷側への立ち上がり部分である。スギを割り抜いて作られている。長さ166.4cm、幅45.8cm、厚さ5.4～6.2cmを測る。立ち上がり部分の内側では中央付近に長さ6cm、幅5cm程度の溝が掘られ、そこから約30cm下端にいたところにも 4×4 cmの非貫通の方形孔を穿っている。一方舷側部分では、内側の中央付近に 4×4 cmの方形孔が斜め上方から貫通しており、その上方と下方にチキリによる部材の固定の痕跡がみられる。この方形孔とチキリにより、この部分と舷側板との固定を行っていたものと考えられる。その他に非貫通の方形孔が2箇所みられるが、その機能は判然としない。部材5(同図右上)もスギを割り抜いて作られている。長さ171cm、幅44.8cm、厚さ2.2～4.3cmを測る。外面の下端部付近に方形孔がみられる他には、孔や溝が存在しない。曲面を作り出すというよりは板状に加工しているので、建築部材の可能性もある。

南西居住域では井戸E090805から船体部分が2点出土している。北側の枠に利用されていたもの(第305図1)はモミ属を割り抜いて作られており、長さ190cm、最大幅94cm、厚みは船底部分で12cm、舷側部分で6cmを測る。下端部にいくにつれ左右辺の幅を減じている。厚みのある船底部分は切断の際の加工痕が明瞭にみられる。また舷側部分には概ね40cm間隔で貫通する 4×2 cm程度の方形孔が4箇所確認できる。方形孔内には楔や桜樹皮が残存している部分もあり、舷側板との固定の際に利用されたものと考えることができる。南側の枠に利用されたもの(同図2)は、モミ属を割り抜いて作られたもので、長さ200cm、最大幅96cm、厚さは船底部分で12cm、舷側部分で6cmを測る。北側と同様に舷側部分の内側には約40cm間隔で方形孔が穿たれており、楔や桜樹皮が残存するものも認められた。この2点は、他の船体がスギである点で異なり、また厚みや断面形状、年輪のあり方から、同一個体である可能性が高いと考えられる。切断面が直接接合するわけではないが、それぞれの断面図を接合すると、船体の幅約140cm、深さ約70cmに復元できる。また船底部に対し方形孔の位置が左右共に同じ高さになる。

同じく南西居住域の井戸E09086からも枠に転用された船体が出土している。第306図1はスギの割り抜きで、長さ228cm、最大幅74cm、厚さ6～10cmを測る。内面の左側には 4×2 cm程度の方形孔が約30cm間隔で7箇所確認でき、楔や桜樹皮がみられるものもある。また内面右側には貫通しない方形孔が2箇所みられる。第307図4もスギ材を利用しておらず、長さ230cm、最大幅76cm、厚さは船底部分で8cm、舷側部分で6cmを測る。船底部分の内側で非貫通の方形孔が4箇所、またチキリ形の掘り込みが1箇所確認できる。舷側板の固定に用いられたものと考えられる。

(2) 舷側板

大溝出土例(第671図、図版295)のうち、671-1は約27cm間隔で穿たれた方形孔が3箇所みられ、中央の方形孔の近くに高さを違えて別の方形孔を設けている。この方形孔にはやや大き

めの方形孔が対応しており、樹皮や楔が残存するものもある。別の舷側板やフェンダー等、どのような部材が接続したのかは明確でない。671-02は舳先（艤）部分の舷側板である。高さはそれほどなく、厚さも2~4cm程度なので、船体に近い部分というよりは、一番上方に近い位置につけられたものであろう。4×2cmの方形孔が概ね20cm間隔で穿たれている。671-03も舳先（艤）に近い部分の舷側板であろう。図の右側端部が曲面をもつように加工しており、二体成形船の場合は波除板、一体成形船の場合は先述した井戸B131000出土の船材（舳先または艤）と接続した可能性がある。また長方形孔が2箇所、方形孔1箇所がみられ、舷側板等と結合していたものと考えられる。671-04も03と同様に方形孔と長方形孔との組合せから舷側板とした。671-05の方形孔には楔および樹皮が残存する。

西居住域の井戸F944からは2点の舷側板が出土している（第685図、図版307）。685-01は方形孔が穿たれている側の端部に幅1.5cmを測る縦方向の溝が掘り込まれている。また685-02は端部に曲面をもつように加工しており、ともに671-03と同様に準構造船の舳先（艤）に近い部分の舷側板である。また北東居住域の井戸C2549から2点出土している（第132図）このうち部材2（同図右下）は斜めに貫通する方形孔が約30cm間隔で5箇所穿たれている。その方形孔とは列を違えて別の方形孔が2箇所みられる。また部材1にみられる方形孔も斜めに貫通している（同図下中）。

さらに南西居住域の井戸E090806では2点出土している（第306図）。このうち2には、方形孔や溝等の加工がなく、船体部分の破片の可能性がある。また3は長さ220cm、最大幅38cm、厚さ約10cmを測る。80~90cm間隔で平面台形を呈する非貫通の納孔がある。厚さの点で、船体の破片の可能性もある。

（3）竜骨

大溝から1点出土している（第671図、図版295）。671-06は船底部分を補強するために、船体の曲面に沿うような形状を呈している。ただ別材と組合わせるための納孔等は不明瞭である。スギの板目材を利用している。

16. 建築部材

（1）柱材

大溝から柱材が出土している（第672図、図版296）。672-01は上部に出納を作り出しており、下半部に12×3cmの方形孔を穿ち、その上方にそれとは直交する非貫通の納孔を左右から入れている。さらにその上方は抉りが入っている。最下端は転用のため再加工している。672-06は上半部に方形孔を穿ち、下半部でそれと平行するように段を削り出している。672-07は半裁されているが、8角形に面取りされていたものである。

また居住域からは柱穴に柱材が伴う場合もあるが、それらについては各遺構の解説で触れていくとおりである。

(2) 扉

大溝から1点出土している(第672図、図版296)。672-10は扉の上端ないし下端である。把手の有無は不明である。ヒノキ科の追柾材を利用している。

(3) 梯子

北東居住域の井戸D474から1点出土している。建築部材を梯子に転用したものでツブラジイの芯持材を利用している(第684図、図版305)。

(4) 垂木

第672図9(図版296)は途中で欠損しているが端部を段状に切り落としており、その面は上方にむけて緩く上がっている。

(3) その他の建築部材

器種認定が困難だが建築部材と考えられるものを列記する(第672・684図、図版296・305)。672-02は3箇所の方形孔が穿たれ、中央の方形孔の付近に側面から円形孔が穿たれている。672-03は板状品の端部に出柄を設けている。672-04は縦長長方形孔が2箇所に設けられており、また非貫通の掘り込みが側面から入れられている。672-05は板状品であり方形孔を設けている。

北東居住域の井戸D474からは横架材と考えられる部材が出土している(684-02)。

17. 杣材

(1) 杣材

柱材や他の建築部材から、杭として転用されているものもあるが、先端を尖らせるように加工しているものを杭材とした(第673図2～5、7・9・10、図版296)。

18. その他・不明品

以下に数が少なく項目を立てるまでもないものや用途不明品などを列記する(第673～679図、図版296～301)。672-11は挿入型の留め具もしくは把手と思われるもので、建築部材などに挿入し、突き出た方形孔に別材を挿入して留め具とするものか、もしくは何かの把手となりうるものである。673-01は下端が欠損しているが井戸枠の構成材であろう。673-06は角柱を上下両面から削り込んでいる。楔であろうか。674-01～03は端部を尖らせる棒状品である。674-01は全体に丁寧な加工で、両端部を尖らせている。674-05はイヌガヤの板目材の中央に軽く抉りを入れたものである。674-06～09はいわゆる有頭棒である。674-10は先端を上下両面から削り込んでいる。全体に丁寧な作りである。674-10・11は両端部に抉りを入れている棒状品で天秤棒の可能性もある。ただ天秤棒の断面形が扁平な四角形になるのに対し、これらは芯持のままである。674-12は中央に小孔が穿たれた棒状品である。674-13は棒状の両端部に小孔が穿たれている。674-14は棒状の木製品で、断面を8角形に削り出している。一方に小孔を3箇所穿ち、その中に木釘状の木材が埋め込まれていた。また下端にも小孔が1箇所確認できる。芯にそって

割れたようで、上下両端部には紐上のもので緊縛された痕跡が残る。674-15・16は角柱の側面に切込みを入れたのみで、火鑓臼の未使用品の可能性がある。

675-01は平面形が舟形を呈し、中央に方形孔を2箇所設けている。675-02は板状品で下端部は欠損しているが、中央に方形孔を斜めに穿っている。675-03は平面形が隅丸方形であり、中央に方形孔を2箇所設ける。675-04・07は方形孔を有する板状品である。675-05は角柱の中央に方形孔を設ける。675-06は台状品である。上面中央に方形孔を設けている。

676-01は中央で2分割の途中で廃棄されたものである。アカガシ亜属を利用している。676-05は上下両端部に抉りを入れている。676-06はスギの柾目材を丁寧に加工している。上方に小孔が2箇所みられる。677-03・07～09は木屑である。677-06は平面形が長方形を緩く曲げたような形状を呈している。舷側板とするには固定のための細工がみられない。677-10はアカガシ亜属の柾目材で農具の転用品であろう。

678-01は作業台的な用途であろうか。678-07と679-01は荷札のような形状を呈し接合する。679-02はアカガシ亜属の柾目材を利用している。平面形が剣形ともみられるので武器形の祭祀具の可能性もあると思われる。679-07は弓弭状の形態となり中空である。

第3項 弥生時代の木製品

弥生時代の集落跡およびその周辺部分から木製品が出土している（第37・38図、図版308）。37-1は棒状品でアカガシ亜属の芯持材の端部を上下面から削り込んで尖らせていている。D調査区下層の掘立柱建物（弥生）1のピット113から出土した。37-02、03、04は櫂である。左右邊を反らせており、隆起部に方形孔を等間隔に穿ち、その間の隆起部上面は緩やかに窪ませている。37-02は広葉樹の芯持材、37-03はマツ属複維管束亜属の板目材を利用したもので、37-04は散孔材の柾目材を利用している。もっとも良く残っていた37-03は残存長125cmになり、復元長は約140cm程度になると考えられる。近畿地方の弥生時代集落から出土する櫂は、農作業用に用いられたと考えられているが（東大阪市文化財協会1987）、検出された集落内やそれが立地する微高地縁辺部から出土しており、特にその周辺の低地では、プラントオパール分析等により水田耕作が行われていた可能性が高いため、上記の考えとは矛盾しない。38-01は組合わせ櫂の身である。アカガシ亜属の柾目材を利用している。柄を挿入するための孔が穿たれているが、柄を受けれる軸部は欠損している。

参考文献

- 一瀬和夫2008「古墳時代における木造船の諸類型」『古代学研究』第180号 215～223頁 古代学研究会
大阪府教育委員会1991「滋賀郡条里遺跡II」

- (財) 大阪府文化財センター-2008a「讚良郡条里遺跡VIII」大阪府文化財センター調査報告第188集
- (財) 大阪府文化財センター-2008b「玉櫛遺跡発掘調査報告書」大阪府文化財センター調査報告第189集
- 笠原潔2004『埋もれた楽器 音楽考古学の現場から』
- 神谷正弘1987「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製駒の復元」『考古学雑誌』72-3 20~40頁 日本考古学会
- 神谷正弘2005「古墳時代集落出土木製駒再論」「埴生の宿-田代克己さん追悼集」149~178頁
- 貴島恒夫・岡本省吾・林昭三1962「原色木材図鑑」保育社
- 岐阜県埋蔵文化財センター-2000「額戸南遺跡」岐阜県文化財保護センター-調査報告書第58集
- 上津島遺跡調査團・豊中市教育委員会1997「上津島遺跡 第5次発掘調査報告」豊中市文化財調査報告第41集
- 御所市教育委員会1994「謎の3・4世紀 萩城-前期古墳の有無と上器様相-公開シンポジウム資料」
- 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館2000「権威の象徴-古墳時代の威儀具-」
- 奈良文化財研究所1984「木器集成図録 近畿古代篇」
- 奈良文化財研究所1993「木器集成図録 近畿原始篇」
- (財) 東大阪市文化財協会1987「鬼虎川の木質遺物-第7次発掘調査報告書 第4冊-」
- 福岡市教育委員会2003「九州大学総合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報-元岡遺跡・桑原遺跡群発掘調査-」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集
- 總務裕昌2000「六大A遺跡発掘調査報告書(木製品編)」三重県埋蔵文化財調査報告115-17
- 村上始2001「大阪府鎌田遺跡の調査速報」「考古学ジャーナル」470 26~29頁
- 村上由美子1996「杵と臼の変遷について」「滋賀考古」15 1~30頁
- 八尾市文化財調査研究会1995「八尾南遺跡第9次」八尾市文化財調査研究会報告47 20~40頁
- 山川昌久2005「考古資料大観8 弥生古墳時代 木・紡維製品」小学館
- 渡辺誠1983「御山千軒遺跡出土木製品の民具学的研究」「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI 御山千軒遺跡」
- 福島県文化財調査報告書109集 33~50頁
- 渡辺誠1985「ヨコヅチの考古・民具学的研究」「考古学雑誌」70-3 52~93頁 日本考古学会

第3章 「讃良の牧」の形成と展開

はじめに

蔚屋北遺跡の所在する北河内地方は、日本書紀に記述がみられる「河内の馬飼い」の故地とされる地域である。これまでにも蔚屋北遺跡の周辺に所在する複数の遺跡からは、馬に係わる遺構や遺物が検出されており、河内の牧が当地付近に存在していたと考えられていたが、蔚屋北遺跡の発掘調査で得られた一連の調査成果は、これまでではっきりしなかった讃良の牧の実像を考え上で有力な手掛りとなるものであった。

ここでは蔚屋北遺跡およびその周辺の遺跡の調査成果を検討することにより、讃良の牧の形成と展開について考えてみたい。

1. 文献に認められた日本列島における馬の受容

元来馬は日本列島には存在せず、朝鮮半島より伝播されたものとされる。そして日本列島で、初めて馬と人との関わりが認められたのは古墳時代中期からである。

文献資料にみられる馬に関する記述は、日本書紀垂仁天皇紀三十二年七月条を始めとして数多くが認められる。

そのうち馬の伝播に関して具体的に記されたものとして、応神天皇紀十五年八月条がある。ここには「秋八月壬戌朔丁卯、百濟王、阿直伎を遣わし良馬二匹を貢がしむ。即ち輕坂上厩に養わる。因りて阿直伎を以て掌飼せしむ。故に其の養馬之處を号して鹿坂と日う。」とあり、朝鮮半島の百濟から馬が伝播されたことを示す最初の文献資料である^(註1)。文中には、軽坂上に厩を設けて、百济から馬を連れて渡来してきた阿直伎に、受容した馬の飼育を掌握させたとあり、これが馬飼いの初現といえる。渡来人の阿直伎は、馬の飼育に関する知識や経験を備えていたと考えられる。応神天皇十五年は5世紀初頭頃に相当すると思われる。

5世紀の日本（後）は、朝鮮半島に共存した列国のうちの百濟・伽耶と友好関係を維持しており、両者との交流が盛んに行われていた。当時の複雑な朝鮮半島情勢の最中^(註2)に、騎馬の風習を持つ人々が大勢渡来し^(註3)、馬自身も伝播されたことで朝鮮半島から馬文化を、この時期に受容したことが窺われる。

文献上に河内の馬飼いが初めて登場したのは、日本書紀履中天皇紀五年九月条である。曰く「秋九月乙酉朔壬寅、天皇、淡路島に狩りしたまふ。是の日に、河内飼部等、徒駕へまつりて轡に執けり。」とある。飼部（うまかいべ）は、馬の調教・飼育にあたる部民のことである。また、延喜左馬式に、河内国の飼部として左馬寮一百八畠・右馬寮五十一畠があると記載される。そして、これを管掌する伴造に河内馬飼首、川内馬飼造、婆羅羅馬飼造、菟野馬飼造などがあり、繼体紀元年正月条（河内馬飼首）、天武紀十二年九月条（川内馬飼造）、天武紀十二年十月条（婆羅羅馬

銅造、菟野馬銅造）などにその名が登場する。また、日本靈異記には、中第四十一に河内国更荒郡馬廿里との記述がみられる。

2. 日本列島における牧の形成と展開

前項で示したように、馬は5世紀の初め頃に百濟から伝播したことが文献資料から窺われた。百濟からの渡来人阿直伎が鹿を駆け、連れてきた馬を飼育した鹿坂は、現在の奈良県橿原市大輕町付近であったと考えられている。当地付近では、牧の存在を直接的に示す考古学資料は確認されていないが、韓式系土器や陶質土器などの、渡来系氏族が存在していたことを示す遺物が多数検出されている地域である。

そしてその後、当時の複雑な朝鮮半島情勢にあって、倭は百濟および伽耶と友好関係にあったが、倭の武力強化の一環として、百濟および伽耶の支援を受けて馬と馬銅い集団が積極的に送り込まれた。その結果、日本列島では5世紀前半～中葉に、本格的な馬匹生産および飼育を行う牧が形成されたと考えられる。

河内（大阪）、科野（長野）、上野（群馬）の三地域で、初期の牧の存在を窺わせる考古学資料が認められているが、ここではまず科野と上野の牧について概観する。

科野（信濃）における牧の形成と展開

科野（信濃）は現在の行政区画上の長野県にあたる。文献中に国名として信濃と表記されるようになったのは和銅6(713)年以降であり、それまでは科野と表記されていた。

科野では、長野県の南端部付近の飯田市を中心とする下伊那地方に伊那谷の牧が、北部の善光寺平を中心とする北信地方に大室牧が形成されたが、伊那谷の牧が科野で最初に形成された牧とされる。

伊那谷の牧

伊那谷は東を南アルプス山脈、西を中央アルプス山脈に挟まれた南北に長い谷状の地形で、中央部を天竜川が南流する。度重なる洪水によって天竜川の両岸には氾濫原が形成され、その外側には段丘が離壇状に発達している。

伊那谷の南部にあたる下伊那地方は、静岡、愛知、岐阜の3県と境を接し、古代から東山道が通る交通の要所であった。

下伊那地方は古墳時代中期に比定される馬骨・馬齒の出土数が格段に多い地域であり、その大半が西岸の段丘上に築造された古墳から検出されている。なかでも古墳の周溝やその周辺に掘られた土壤内に、埋葬された状態で検出された例が多数を占める^(註4)。これらの馬埋葬土壤の上限時期は5世紀前半とされ^(註5)、下伊那地方で古墳の築造が始まる時期と合致する。

古墳のなかには前方後円墳が複数認められるが、段丘上への前方後円墳の築造は近畿の中央王権との関わりが強化されたことの表われと考えられ、その結果、馬と馬匹生産に従事する集団が

牧の経営に適し輸送の便も良好なこの地に送り込まれ、定住化が促進されたものと考えられる。そして古墳に馬の埋葬土壙が多数認められることは、その被葬者が牧の経営に関わった人物であったことを裏付けるものと言える。

伊那谷の牧では、5世紀前半から始まった馬匹生産が5世紀中葉から後半の段階で本格化し、生産された伊那谷の牧の馬は、東山道を通じて近畿の中央王権に供給されていた。

大室の牧

善光寺平は長野県の北部に位置する千曲川流域の細長い盆地である。千曲川は善光寺平で犀川と合流しており、流域にはいくつかの扇状地が形成されている。千曲川は緩やかに大きく蛇行し、両岸に発達した自然堤防を形成しており、その背後の後背湿地には農地が広がる。

北信地方は新潟、群馬の2県と境を接し、原始、古代より稻作を中心とする農耕が盛行した地域であった。

善光寺平では、4世紀以降犀川との合流部付近の東岸側に多くの古墳や古墳群が築造された。善光寺平の古墳には、これまで馬の埋葬土壙を伴うものは認められていないが、長野市松代に所在する大室古墳群は注目される事例といえる。大室古墳群は500基を超える群集墳で、積石塚の形状を呈するものや合掌形石室を持つ古墳が多数含まれている。積石塚や合掌形石室は朝鮮半島の系譜につながる墓制で、日本列島では善光寺平が分布の中心を成している。また、この地は律令時代に大室の牧が置かれたとされる地域であり^(註6)、大室古墳群は牧の経営に従事した集団の墓域と考えられている。

合掌形石室を主体部とする積石塚の大室168号墳では、埴丘裾部から土器の一括とともに馬形土製品が出土しており、土器の年代から5世紀中葉に比定されている。馬形土製品は、伊那の馬埋葬土壙と同様に、祭祀に関連する遺物と考えられる^(註7)。

善光寺平の南西端部に所在する長野県更埴市五輪堂遺跡の4号土壙墓からは、馬の全身骨が検出されており、これは馬埋葬土壙とされている。6世紀中葉に比定されるもので、古墳時代中期に形成された大室牧が、後期まで存続していた例証となる考古資料といえる^(註8)。

これらの事例から、善光寺平には朝鮮半島からの渡来系集団が営んだ大室牧が存在し、大室牧は伊那谷の牧よりやや後出で、5世紀中頃には成立していたと考えられる。

ここまで科野の牧についてみてきたが、科野で牧の経営が最初に開始されたのが下伊那地方の伊那谷の牧で、これは讃良の牧とほぼ同時期の5世紀前半に成立したと考えられた。牧の経営に携わったのは渡来系集団で、これは5世紀中葉には成立していた北信地方の大室牧における考古学資料から窺うことができた。

これらの渡来系集団は、近畿の中央王権との関わりのなかで、馬匹生産と中央への供給を目的として送り込まれ、そして当地に定住化していった。5世紀前半に成立した科野の牧は、信濃となつた律令時代には北信地方を中心に16箇所の牧が経営されるまでに馬匹生産が盛行し、近畿の中央王権への馬匹供給の一翼を担い続けていたものと考えられる。

上野における牧の形成と展開

上野は現在の行政区画上の群馬県にあたり、中央部に位置する榛名山の東麓に上毛野の牧が形成された。

上毛野の牧

榛名山の東麓の子持村から南東の高崎市にかけての地域に形成された。

上毛野の牧に関わる考古学資料としては、高崎市剣崎長瀬西遺跡から5世紀後半に比定される馬埋葬土壙が検出されている。剣崎長瀬西遺跡には古墳と集落跡が存在する。古墳には円墳と方墳、そして積石塚があり、馬埋葬土壙は2基の円墳に接する位置で検出された。馬埋葬土壙からは馬齒とともに鉄製轡が出土しているが、この轡は金官伽耶や百濟の系譜につながるX字銘留環板轡であった。また、方墳の出土遺物に金製垂飾付耳飾や韓式系土器が含まれることや、積石塚が存在することなどからも、剣崎長瀬西遺跡は金官伽耶あるいは百濟からの渡来系集団が営んだ集落で、この集団が馬匹生産や飼育を行う上毛野の牧を経営していたと考えられる。

上毛野の牧では、放牧地の実態を窺い知ることができる考古資料がいくつか見つかっている。

高崎市芦田貝戸遺跡、北群馬郡子持村白井北中道遺跡、子持村田尻遺跡などで多数の馬蹄痕が検出されている。芦田貝戸遺跡では6世紀初頭の小区画水田面に、人の足跡とともに馬蹄痕が検出された。また、白井北中道遺跡では、6世紀中葉に比定される畑一面に多数の馬蹄痕が検出され、畑地を利用して放牧した様子が確認された。さらに田尻遺跡では、古墳の墳丘上や周辺に残る馬蹄痕が検出されており、墓域をも含む一帯を放牧地として利用していたことが判明した。

上毛野の牧が所在する群馬県西部は、古代から東山道が通る交通の要所であった。

上毛野の牧では、金官伽耶あるいは百濟からの渡来系集団による馬匹生産が5世紀後半から6世紀の段階に本格化し、上毛野の牧の馬は東山道を通じて近畿に供給されていた。

5世紀後半に成立した上野の牧は、律令時代には9箇所の牧^(注9)が経営されるまでに盛行し、近畿の中央王權への馬匹供給の一翼を担い続けていた。

3. 河内における牧の形成と展開

現行政区画上の大阪府の北東半部の、八尾市、東大阪市、大東市、四條畷市、寝屋川市にあたる地域が河内地方で、その北端部の四條畷市全域および寝屋川市の南部付近に讃良の牧が形成された。

讃良の牧

古墳時代には河内平野の中央部に河内湖が広がっており、河内湖の東岸から東方の生駒山西麓にかけての地域に讃良の牧が形成され、古墳時代中期から後期にかけて馬匹生産と飼育が営まれていた。

讃良の牧に関連する遺構や遺物が検出されている遺跡は、生駒山系の北端に位置し、南北に走る飯盛山系の山麓から西方約2kmの河内湖岸までの範囲の内に集中して確認されている。この地域は、飯盛山系から讃良川、岡部川、清滝川、権現川などが西流する自然環境が天然の柵を形成しているため、馬を飼育することに適した土地であった。

清滝川下流域の南岸付近にあたる四條畷市中野遺跡および隣接する南野米崎遺跡、奈良井遺跡などの飯盛山麓部に所在する遺跡で、古墳時代中・後期の集落遺構が認められている^(註10)。また、奈良井遺跡や鎌田遺跡などの中野遺跡の周辺に隣接する遺跡では、馬に関わる祭祀場と考えられる遺構が認められている^(註11)。四條畷市教育委員会による調査成果では、これらの遺跡はひとつの集落を構成するものと考えられており、そしてこの集落は、馬匹生産と飼育を主たる生業としていたとされている。

藤屋北遺跡は、中野遺跡・奈良井遺跡の西方、河内湖の北東湖岸付近に位置しており、南側近くに岡部川、北方には讃良川が西流する。両河川はともに河内湖に流入しており、大型の準構造船でこれらを下れば、外洋まで直接航行することが可能な位置にあったといえる。

藤屋北遺跡では、大型の準構造船の船底材や舷側板などを井戸枠に転用した井戸が複数検出されており、井戸枠内や下部に設けられた土器埋納土坑より出土した土器から、これらの船には5世紀前半のもの、5世紀後半のもの、あるいは6世紀前半のものが存在することが判明した。中でも注目すべきは、5世紀前半に比定される船が存在することである。他の船が杉の大木を使用して建造されているのに対して、この船は唯一、モミの大木を使用して建造されていた。日本列島では船材に杉を使用している場合が多いが、朝鮮半島では、大型の準構造船の船底部に使用する刳り船を削り出すことが可能な杉の大木は育たないとされている。したがって杉材を用いた5世紀後半以降の船は、日本で建造されたものと考えられるが、モミ材を用いた5世紀前半の船については、朝鮮半島で建造された可能性も認められる。

また、以下に掲げた出土遺物に認められる特徴などからも、どのような人々が営んだ集落であったか、そしてどのような性格を持つ集落であったかということが見えてくる。

藤屋北遺跡では、平成13年度の調査開始以来、コンテナ3000箱を超える膨大な量の古墳時代中期・後期の遺物が出土している。その大半を土器・土製品が占めており、須恵器、土師器などとともに陶質や軟質の韓式系土器が相当数みられた。韓式系土器のなかには百濟地域の特徴的な器種である瓶類や、鳥足文叩き目を施した土器が含まれており、造り付け竈の焚き口の化粧板とされるU字形板状土製品や、移動式竈、無紋の土製當て具などもみられた。また、大溝から出土した鍼轡が、銜と引手を遊環で連結するタイプのものであることなど、韓式系土器や鉄製品に百濟系の特徴を顕著に示すものが含まれていた。したがって集落を営んだ人々は、5世紀前半に朝鮮半島の百濟から渡來した集団であったと推察できる。

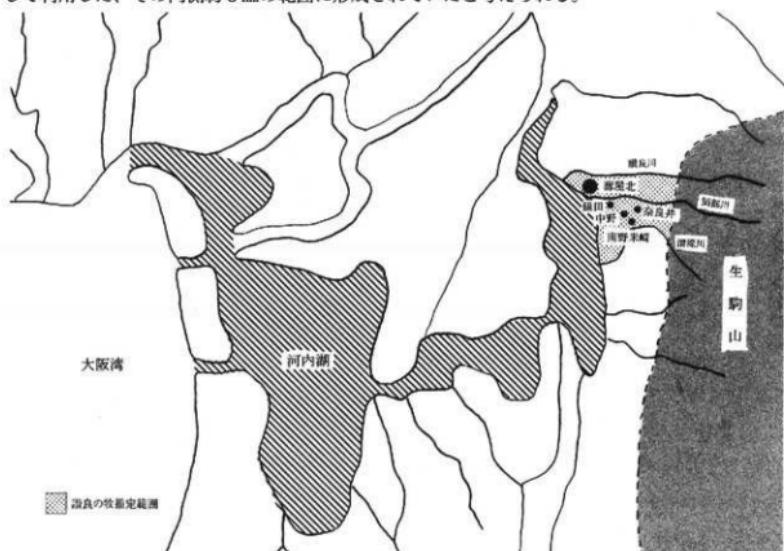
また、構造船の船底や舷側板を転用した5世紀中頃から6世紀後半の井戸が複数検出されているが、古墳時代には大型の準構造船で朝鮮半島と藤屋北遺跡の間を直接航行することは可能で

あったと考えられており、これらの準構造船の存在は、蔀屋北の集落に居住した人々が朝鮮半島と蔀屋北遺跡を直接往来していた事を示唆するものといえる。

さらに、出身地を推定できる複数の遺物とともに、馬一頭を埋葬した土壙、木製の鞍橋や輪鎧、鍔轡などの実用的な馬具、大量の製塙土器などが検出されたが、これらが集落からまとまってみつかっていることが特に重要で、これらの遺物の存在は、蔀屋北集落の人々が牧の経営（馬の飼育）を主たる生業としていた事を示唆するものといえる。

4世紀末に朝鮮半島から北部九州地域に馬具がはじめて伝播され、それと相前後して家畜化された馬、乗馬技術、飼育技術なども伝来したとされているが、近年では、各地の調査成果を基にして、日本列島に馬がもたらされ牧の経営が開始されたのは5世紀中頃で、北河内地方と下伊那地方で相次いで牧が成立したという説が有力となっている。それを裏付けるように蔀屋北遺跡の周辺からは、馬の飼育に関わる遺構や遺物が多くみつかっているが、蔀屋北遺跡の調査成果は、付近一帯が百濟からの渡来人によって成立したとされる、初期の「讃良の牧」の地であったことを明確にしたものといえる。讃良の牧の経営は、5世紀中頃から6世紀初頭の最盛期を経て、6世紀末まで連続と営まれつづけていた。

最後に、これまでの発掘調査によって得られた知見をもとに、讃良の牧を概観してみると、讃良の牧に関わる遺構は、讃良川を北限、権現川中流域を南限とした飯盛山麓から河内湖までの、東西約2km、南北約3kmの範囲内に所在しており、したがって、讃良の牧はこれらを自然の柵として利用した、その内側約6kmの範囲に形成されていたと考えられる。



第724図 訳良の牧推定範囲



第725図 讀良の牧関連遺跡における馬骨出土地点

牧の中核を成す集落は、牧の中央部にあたる中野遺跡、奈良井遺跡を中心とした地域に形成されており、馬の飼育はその周辺で行われていたと考えられる。

一方で、菰屋北遺跡の集落は河内湖の湖岸近くの低湿地に位置しており（第724図）、集落は自然堤防上の周辺より一段高い場所に形成されていた。井戸枠に転用された5世紀～6世紀の準構造船の船材が集落内の井戸から複数検出されているが、これらは大型の準構造船が河内湖を航行し、岡部川を経て菰屋北遺跡に直接乗り入れていたことを窺わせる例証と言え、そのなかに5世紀前半に使用されたと考えられる船が認められることで、当地が朝鮮半島から運ばれてきた馬を最初に陸上げした地点であったと考えられる。そして讀良の牧や、科野、上野から移送された馬が一旦集められ、そして中央王権へと供給されるまでの間、飼育管理する役目を担っていたのではないかと推察する。

菰屋北遺跡の一連の調査では、竪穴住居や掘立柱建物などの主要遺構が5世紀中葉から認められ^(註12)、集落が本格的に機能したのは同時期からと考えられた。そして集落は5世紀後半を最盛期として、5世紀中葉以降6世紀後半に至るまで存続したことが判明している。ただし、中野遺跡や東奈良遺跡などの牧の中心集落では、断片的な調査によるものではあるが5世紀中葉以前の遺物が認められ、馬骨・馬歯などの動物遺体も出土している（第725図）し、菰屋北遺跡でも、集落西限の大溝を中心に、5世紀中葉以前の遺物が多く出土しているので、讀良の牧の形成開始時期を5世紀前半とすることは可能であると考える。

註

- 註1 田中俊明2006「朝鮮半島から河内へ 一渡米の契機と定着ー」シンポジウム古墳時代に生きた渡来人の軌跡 ー長原遺跡・蘆屋北遺跡・上私部遺跡を中心にー要旨集 財団法人大阪府文化財センター 財団法人大阪市文化財協会 大阪歴史博物館より。
- 註2 朝鮮半島では、高句麗、新羅、百濟、伽耶が共存していたが、西暦400年に高句麗・新羅と百濟・伽耶間で戦いが行われた。倭は友好関係にあった百濟・伽耶側に参戦したが、敗戦を喫した。勝利した高句麗は、その後南下政策を執って百済侵攻を繰り返した。
- 註3 高句麗の侵攻に対して、百済は漢城から熊津へ遷都して再建を図った。この戦乱の最中に南へ下った百済や伽耶の民の一部が戦禍を避けて倭へ渡ってきたものと思われる。
日本書紀応神天皇紀十四年条に、「百済より渡來した弓月君が、自國の民を率いて帰化しようとしたが、新羅の妨害にあったために伽耶に留まっていると訴えたので、葛城襲津彦を迎えに派遣した。」とある。
- 註4 飯田市および隣接する高森町には、天竜川西岸の段丘上に多くの古墳が築造されたが、そのなかに馬の埋葬土壙が検出された古墳および古墳群が8ヶ所認められている。これらの古墳のうち最も古式と考えられるのは、I型式2段階の須恵器が出土している物見塚古墳で、5世紀前半の築造と考えられる。
- 註5 飯田市物見塚古墳出土の須恵器はTK216型式に属するもので、よって馬の埋葬土壙の上限は5世紀前半と思われる。
- 註6 延喜式には、大宝牧を始めとする16の牧が置かれていたとされ、これらの牧で生産・飼育された馬は、東山道に關わる駿馬や伝馬として重要な役割を担っていたと考えられている。
- 註7 西山克己1996「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」「長野県の考古学」(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集より。
- 註8 特別展示図録1997「伊那谷の馬 科野の馬 ー古墳時代における受容と広がり」飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館より。
- 註9 延喜式には、上野国には利刈、有馬嶋、沼尾、押志、久野、市代、大藍、塙山、新屋の9箇所の牧が置かれていたと記載されている。
- 註10 中野遺跡は、四條畷市教育委員会による国道163号線の拡幅工事、JR片町線（現学研都市線）複線化、民間宅地建設などに伴う事前発掘調査が逐次実施され、その結果、古墳時代中期から後期に属する掘立柱建物跡、井戸、溝などが検出された。南野米崎遺跡は中野遺跡の南方300mほどにあり、検出された大溝から須恵器、韓式土器、製塩土器、木製品などが大量に出土した。奈良井遺跡は中野遺跡の北東方に近接する位置にあり、石組み製塩炉や木製の籠、ブラシなどが検出されている。
- 註11 奈良井遺跡では、周囲を溝で方形に区画された祭祀場が検出され、板の上に寝かされた状態で出土した1頭を含む7頭以上の馬や、人形や馬形のミニチュア製品などが多数出土した。また、中野遺跡の西方に隣接する鎌田遺跡からは、スリザサラや玉類、木製の刀形や矢形などが馬骨とともに出土している。
- 註12 平成20年度に調査した菅原3地区で大型建物が1棟検出された。蘆屋北遺跡では初めての検出である。5世紀中葉の龍屋北集落初現期のものである。詳細は「蘆屋北遺跡II」で報告する。

第4章 蕃屋北遺跡出土のU字形板状土製品について

藤田 道子

I. 研究史

U字形板状土製品は造りつけカマドの焚口枠とされている土製品で、故地は韓国である。蕃屋北遺跡ではU字形板状土製品の破片が多数出土した。しかも全体像を復元できる資料が多数出土している。持ち運ばれて移動する土器とは異なり、U字形板状土製品は遺構に付属し、それが出土する遺跡での渡来人の活動の痕跡を示す確実な資料である。出土資料を集成し分析検討することは古墳時代日韓交流の過程を探るうえでの重要な課題と思われる。

はじめに研究史を振り返る。1991年から寢屋川市讃良郡条里遺跡、長保寺遺跡等で出土したU字形板状土製品の破片は、当時用途不明土製品として取り上げられていたが、使用痕跡等からカマドに関する製品として報告されるようになった^(註1)。2002年蕃屋北遺跡から全体像がわかる資料が出土し、逆U字形の平面形からU字形板状土製品と呼称されるようになる^(註2)。同じ年に韓国ソウルの風納土城でカマドの焚口の前面にたてた焚口枠としての設置状況の判明する資料が出土し、注目される考古資料となった^(註3)。

日本、韓国二国の資料を集成し、両国の研究者がいくつかの論考を発表しているが、特にU字形板状土製品の系譜、型式分類、変遷について詳述している論文をとりあげる。

①田中清美（文献1）

田中清美氏は日韓両国の出土土製品を集成し、日本国内の出土例は朝鮮半島の三国時代、百濟や高句麗で用いられていた造り付け竈の焚口を保護する器具の系譜を引く「造り付け竈の付属具」であり、475年の漢城滅亡などにより渡来した百済の人々によりもたらされたとしている。

②濱田延充（文献2）

田中氏同様日韓両国の出土土製品を集成し、型式分類をおこなっている。分類の基準になるのは土製品表面突帯の取り付けられる位置、及び形状で、時期差を持つA～Dの4型式が設定されている。各型式の詳細は、A類は小阪合遺跡出土例等に代表される表面中央部に突帯をもつもの、B類は陶邑窯跡群ON231号窯出土例に代表される突帯をもたないもの、C類は蕃屋北遺跡出土例に代表される両側縁に突帯を持つもの、D類は溝疋遺跡出土例にみる片側の側縁に庇状の突帯をもつものである。共伴する土器により各型式の所属時期はA、B類が5世紀前半、C類は5世紀後半、D類は6世紀以降となる。

韓国出土例と各型式を比較検討すると、A・B類は百済風納土城出土例に、C類は馬韓榮山江流域出土例に類似していることから、濱田氏は韓国側の資料でもU字形板状土製品の型式差が、時期差を反映しており、各時期の朝鮮半島のU字形板状土製品の影響の中で、日本国内のA・B類とC類が成立している可能性を指摘した。そしてD類のように日本独自の型式の存在も示唆した。

③徐賢珠（文献3）

土製品のみならず鉄製品も含めたカマドの焚口枠の出土資料集成、型式分類、編年をおこなっている。型式分類の第一の基準は前述の濱田氏と同様突帯の取り付けられる位置で、焚口枠が土製、鉄製どちらの材質にもかかわらず、まず内・外郭（縁）突帯の有無によりA・Bに二分類された。さらに装飾（中間）突帯の有無によりA・B類それぞれが1・2式に細分される。さらに外郭突帯が外縁より内側につけられた1'式を設定した。土製焚口枠は鉄製焚口枠の模倣から始まつたものであり、1'式はより鉄製に近い形から土製焚口枠に変化していく過程で生じる型式として設定されたものである。

焚口枠の系譜については、4世紀代に本格的に展開する百済と高句麗の対立過程で高句麗から百済中心地域に入ってきたものと推定され、日本国内には5世紀前半に百済との交流の結果もたらされ、5世紀後半以降は韓国崇山江流域や薩屋北遺跡を中心とする日本北河内地域に百済中心地域の形態から変化した地域形態が出現するとされている。

2. 研究課題の整理

これまでの主要な研究成果をふりかえってみた。すでに日韓両国のU字形板状土製品の型式編年の大筋は成立しているといえよう。薩屋北遺跡出土資料の出土資料は全体の形状がわかる例が多い。これらの出土資料の観察から、U字形板状土製品の法量、製作調整技法等基礎的データを集め、薩屋北遺跡出土資料の型式分類、変遷を試みたい。型式分類の基準は突帯の取り付け位置のみならず、全体の形状の変化にも注目すべきであろう。その場合U字形板状土製品は鉄製品の模倣から土製品独自の形態へ形状が変化していくという視点を重視したい。つぎに法量、細部の観察から製作方法を復元したい。さらに出土地点、出土状況からU字形板状土製品が設置されていた施設を推論することも課題のひとつである。

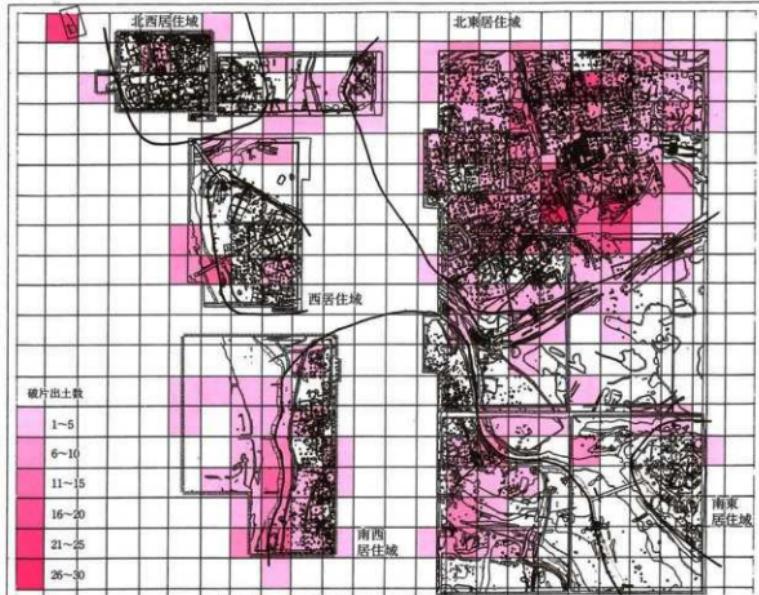
3. 薩屋北遺跡出土資料データの集成

薩屋北遺跡では出土したすべてのU字形板状土製品の破片にA～F、Hの7調査区ごとに破片Noを付けた。小片も含めて出土した破片総数は621点になる。

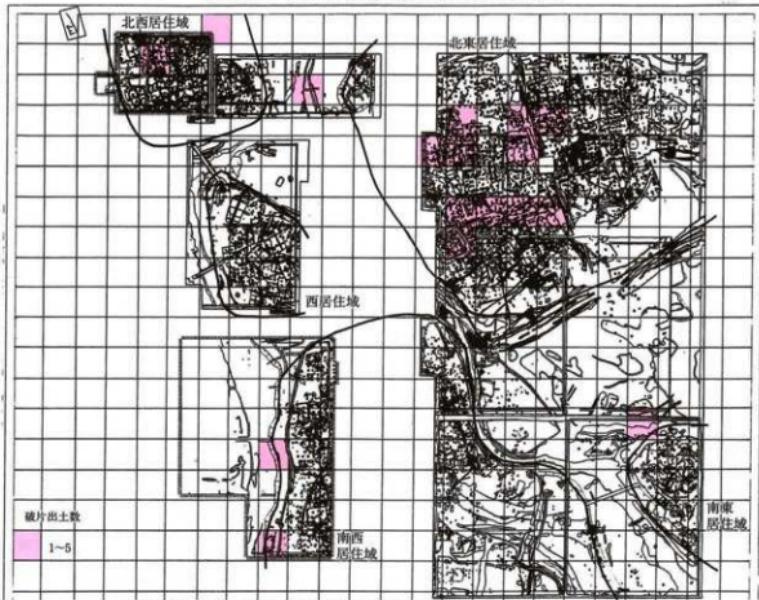
接合作業の結果いくつかの破片が同一個体になったものは調査区ごとに個体Noを付けた。接点がなくとも胎土、形態から同一個体と判別できる場合も同じ個体に含めている。接合、整理の結果290個体にまとめることができた。これらすべての破片資料に資料Noをつけて各居住域、大溝、区画溝の出土場所の順に並べたのが第40表（174～186頁）である。観察事項は出土地点、出土層位、突帯の形状、部分名、法量等である。

出土場所

調査地全体を10mメッシュの小地区で区割りし、621点の破片がどの地区から出土したか分布を調べたのが第726図である。第726図をみると大溝、区画溝からは破片の出土点数は多いが、



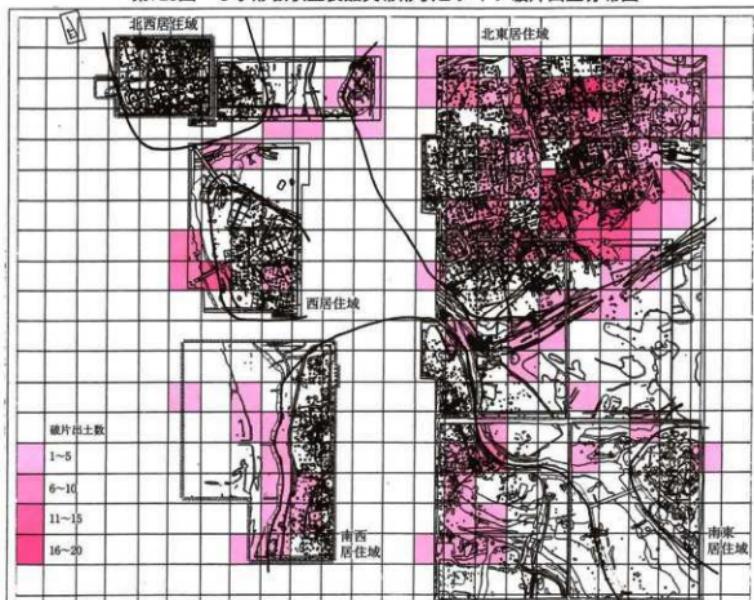
第726図 U字形板状土製品破片出土分布図



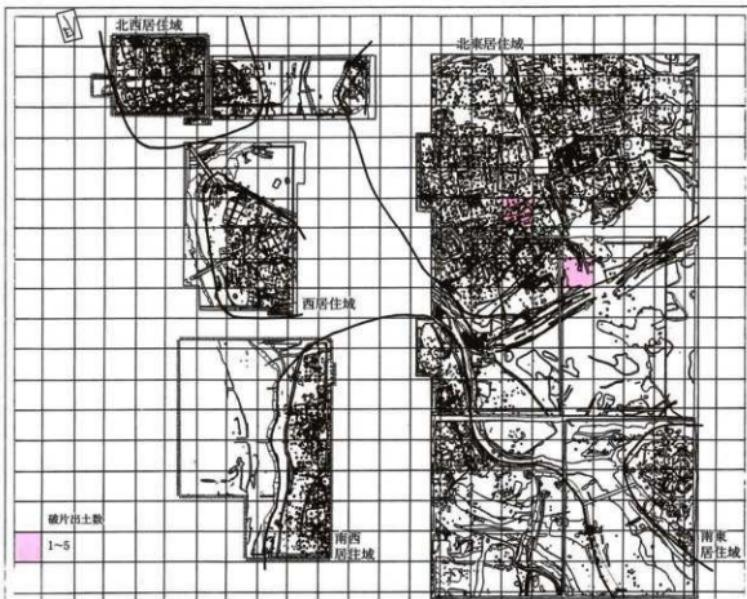
第727図 U字形板状土製品突帯形状 I タイプ破片出土分布図



第728図 U字形板状土製品突帯形状Ⅱタイプ破片出土分布図



第729図 U字形板状土製品突帯形状Ⅲタイプ破片出土分布図



第730図 U字形板状土製品突蒂形状IVタイプ破片出土分布図



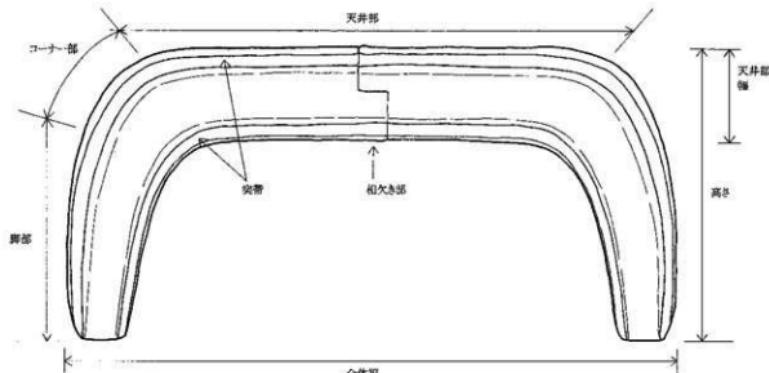
第731図 U字形板状土製品突蒂形状Vタイプ破片出土分布図

接合できたものが多く、個体数は少ない。

接合、整理の結果集計できた290個体の破片を、居住域ごとに分類してその出土数を集計してみると最も多く出土したのが北東居住域で171個体、全体の60%をしめる。南西居住域からは周辺の区画溝と合体接合したものも含めて56点、北西居住域からは1点、西居住域からは1点、南東居住域からは1点出土している。大溝からは47点、区画溝からは14点出土している。北東居住域は区画溝、大溝に直接沿っていないので、大溝、区画溝からの出土資料が全て南西居住域に関係するものとしても出土点数の合計は117点、やはり北東居住域の出土点数が過半数をしめる。

居住域内では（包含層出土資料を除き）竪穴住居、井戸、土坑、溝等さまざまな遺構から出土しているが、ほぼすべてが蕨屋北3期の遺構から出土している。蕨屋北4期に属す遺構からも少量出土している。蕨屋北2期に属す竪穴住居からも2点出土しているが、ともに覆土からの出土であり、この2点の個体はほかに周辺の部屋北3期の土坑や、包含層、大溝などの破片とも接合しているので、当遺跡でのU字形板状土製品の初現期は蕨屋北3期といえる。

出土部位・法量 各破片は判別できる限り部分名（各部名称については第732図参照）、法量を調べた。法量は可能な限り全体幅を復元した。蕨屋北遺跡で見つかっているU字形板状土製品は元々一個の製品を切り離して二分割した接合部をもち、この接合箇所のL字形の突出部分（相欠き部と称す）の $1/2$ の位置が全体幅の $1/2$ となる。（U字形板状土製品の各部名称）この位置の突起上にヘラで線刻の印を入れた個体が2点みつかっており、この印を目印に切り離しがなされ左右同じ大きさの部品が作られたと思われる。290個体のうち部分名が判別できる個体は112個体、そのうち脚部を含んでいるものは38個体、相欠き部を含んでいる個体は33個体ある。U字形板状土製品は1個体につき脚部と相欠き部が2ヶ所ずつあることから、蕨屋北遺跡では最低でも16～19個体が存在していた可能性が高い。



第732図 U字形板状土製品各部名称

突帯の形状 多量の破片を型式分類の資料として取捨選択する第1段階として、部分名が判別できる個体112個を突帯の有無及びその形状により次のI～Vのタイプに分類した。このタイプ分けは破片が小さくても突帯が残っていれば分類は可能となる。蔀屋北遺跡出土資料は突帯を持たないか、もしくは内外縁両側あるいはどちらか側に沿って突帯が存在し、中央部に突帯がとり付けられる個体は一点も出土していない。

Iタイプ—突帯は粘土を両側からつまみ、ナデ上げて成形しており、断面は三角形状だが角がなく先端は丸い。突帯が内外縁両方に存在するものをI-1型、内側のみに存在するものをI-2型とする。

IIタイプ—内縁に沿って体部をL字型に折り返して突帯をつくるタイプ

IIIタイプ—内外縁に沿って断面台形状の突帯が貼り付けられているタイプ

IVタイプ—外縁に沿って体部をL字型に折り返して突帯をつくるタイプ

Vタイプ—突帯が無いタイプ

分類の結果、Iタイプが6個体、IIタイプが5個体、IIIタイプが98個体、IVタイプが2個体、Vタイプが1個体となる。全体の88%がIIIタイプになった。突帯の形状により分類した破片も出土地区的分布を調べた（第727～731図）。

4. 出土例の検討

突帯の形状I～Vの各タイプの代表例を取り上げ検討してみる。特にIIIタイプの出土例は全体幅等が判明している出土例を取り上げて記述する。

Iタイプ

第40表（以下の資料Noも全て第40表による）資料No.41一個体No.21C（第606図-1、図版241e・242e）は北東居住域から出土した破片が接合できた個体で、相欠き部が復元できた。相欠き部がL字型に突き合う位置で個体の上下を決めた。内縁の突帯は粘土を両端からつまみ上げており、断面が三角形を呈する。外縁際は強いナデ調整で粘土を外側に寄せあげており、一見突帯を貼り付けたように見える。法量は天井部幅15cm、厚み2.5cm、突帯の高さは約1cmとなる。裏面は成形時の土台板の細かい木目が残るが、木目がナデ調整で消されている部分もある。

資料No.195一個体No.5E（第606図-2、図版241f・242f）は南西居住域と大溝から出土した破片が接合できた個体である。裏面の土台板の木目はほとんどナデ消されている。法量は天井部幅11cm、厚み約1.9cmとなる。

資料No.196は南西居住域と大溝から出土した破片が接合できた個体である。表面むかって左側脚部にあたり、資料No.41、195とは異なり、内側縁のみに断面三角形状の突帯が残るI-2型である。裏面には土台板の木目が残る。

IIタイプ

資料No.30一個体No.8C（第607図-3、図版241d・242d）は北東居住域から出土した破片が

接合できた個体で、表面に向かって右側の相欠き部からコーナー部手前までを復元できた。残存している破片の位置からみて外縁部は円弧状に内縁部はやや角を持ってまがる。突帯は内縁に沿って折り返されている。法量は全体幅が推定 100cm、天井部幅 13cm、厚み 1.9cm、折り返された突帯は相欠き部周辺では高さ 4cm となる。表面は横方向のナデ調整、裏面は土台板の木目がのこる。相欠き部の突出は左側が上部にくる逆L字形になり、突出幅は上下不均等で上側が幅広い。切り離しは外縁側から下方向きにヘラ状工具でおこなわれている。この場合、切り離しは表面のナデ調整を先におこなってから裏返して下方に突帯を折り返し、突帯側縁にヘラ削りをおこなったあと、相欠き部を切り離したとすれば、スムーズに施工できると思われる。

資料 No. 175 一個体 No. 3 A (第 608 図、図版 241a・242a) は南西居住域と区画溝 A 4 3 4 から出土した 7 個の破片が接合できた個体で、表面に向かって右側の相欠き部からコーナー部手前までが良好に復元できた。残存している破片の位置からみてコーナー部の外縁は角を持ってまがり、内縁はやや円弧状ながら角を持って曲がる。突帯は内縁に沿って折り返して作られている。法量は全体幅推定 80cm、天井部幅 10.6cm、厚み 1.7cm、折り返された突帯は高さ 1 ~ 1.5cm となる。表面は全体を斜め方向にナデ調整、突帯の外側に沿ってナデ調整で仕上げる。裏面は成形時の土台板の細かい木目が残る。相欠き部の突出は左側が上部にくる逆L字形になり、突出幅は上下不均等で上側が幅広い。切り離しは外縁側から下方にヘラ状工具でおこなわれている。内縁側面は面取り状にヘラ削りが施されて一部裏面にも及んでいる。

資料 No. 269 一個体 No. 1 H (第 607 図-1・2、図版 241bc・242bc) H 調査区大溝から出土した。2 点に接点は無いが、胎土形状などから同一個体と判断した。2 は相欠き部の一部が残存していることから天井部と思われる。法量は天井部幅 13.5cm、厚み 1.5cm、折り返された突帯は高さ 1.2 ~ 1.5cm となる。表面は横方向のナデ調整、裏面は木目が残るが一部ナデ調整も施されている。

III タイプ

資料 No. 174 一個体 No. 2 A (第 609・610 図、図版 236c・237c) は南西居住域と区画溝 A 9 5 0 から出土した破片が接合できた個体である。相欠き部から表面に向かって左半分の部品はコーナー部を除きほぼ残存する。天井部から脚端部までを復元位置でならべてみると、コーナー部の平面形は外縁がやや角ばかりながらも内縁は円弧状に曲がる。法量は、左半分の幅を二倍して全体幅は 114.8cm、天井部幅 15.5cm、高さ (推定) 50.4cm、天井部の厚み平均 1.4cm となり、III タイプのなかでは全体幅、高さとも最大のものになる。表面は突帯を貼り付けたあとナデつけられている。右半分突帯の間に線状の線刻がある。相欠き部の幅は上下とも均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離されている。裏面は水平に細かい筋目がのこり、これは成形する時に土台に敷いている板の木目と思われるが、同じ細かい筋目が異なる方向に交差している部分もあるので、ハケ調整の可能性もある。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 177 一個体 No. 5 (E) (第 611・612 図、図版 236a・237a) は南西居住域の土坑 A 1 1 3 5 から出土した個体である。表面右半分のコーナー部を除き両脚部とも残存していた。コーナー

部の平面形は内外縁平行に円弧状に曲がる。法量は全体幅 84.6cm、天井部幅 12.7cm、高さ 40cm、厚み 1.2cm となる。表面は突帯を貼り付けたあとナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離されている。裏面は水平に細かい筋目がのこり、成形時の土台板の木目と思われる。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 31 一個体 No. 10 C (第 613・614 図、図版 236b・237b) は北東居住域から出土した大小さまざまな 27 個の破片が接合できた個体である。部分的に欠損するものの全体像はほぼ完全に復元でき、コーナー部は内外縁とも円弧状にまがる。法量は全体幅 90.6cm、天井部幅 14.7cm、高さ 47.4cm、厚み 1.1cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。裏面は成形時の土台板の木目で凹凸がある。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 23 一個体 No. 1 C (第 615・616 図、図版 238a・239a) は北東居住域から出土した大小さまざまな 26 個の破片が接合できた個体である。欠損部分はあるものの全体像は復元でき、コーナー部は内外縁とも円弧状にまがる。法量は全体幅 86.4cm、天井部幅 15.7cm、高さ 43.3cm、厚み 1cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。裏面は成形時の土台板の木目で凹凸がある。またコーナー部と天井部に細かい粒状の圧痕が外縁と内縁の間に一直線に残っている。これは土台の板に張ってあった（あるいは巻きつけてあったか？）紐繩の跡と思われる。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 42 一個体 No. 22 C (第 617・618 図、図版 238c・239c) は北東居住域から出土した 12 個の破片が接合できた個体で、天井部からコーナー部までが復元できた。コーナー部の内縁は欠損しているが、外縁の形状から推定して、円弧状にまがると思われる。法量は全体幅が推定 93cm、天井部幅 16.3cm、厚み 1.2cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。天井部中央内縁側の突带上に縦方向にヘラで線刻が印されており、この位置が全体幅の約 1/2 にあたり、この印を目印に切り離しがおこなわれたと思われる。裏面は成形時の土台板の木目で凹凸がある。またコーナー部に細かい粒状の圧痕が外縁と内縁の間に一直線に残っている。これは上台の板に土台の板に張ってあった（あるいは巻きつけてあったか？）紐繩の跡と思われる。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 173 一個体 No. 1 A (第 619 図) は南西居住域と区画溝から出土した 10 個の破片が接合できた個体で、天井部からコーナー部までが復元できた。コーナー部はところどころ欠損しているが、外縁の形状は隅丸であるが天井部から脚部への曲がり方はやや角ばっている。法量は全体幅 89.4cm、天井幅 13.5cm、厚みは 1.4cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。裏面は成形時の土台板の木目による凹凸が残る。生駒西麓の胎土である。

資料 No. 24 一個体 No. 2 C (第 620 図、図版 238b・239b) は北東居住域から出土した 10 個の破片が接合できた個体で、天井部、表面向かって右側のコーナー部が復元できた。コーナー部は内

外縁とも円弧状にまがり、法量は全体幅推定 86.4cm、天井部幅 15.5cm、高さ 46cm、厚み 1.1cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。天井部中央内縁側の突帯上に縦方向にヘラで線刻が印されており、この位置が全体幅の約 1/2 位にあたり、この印を目印に切り離しがおこなわれたと思われる。裏面は成形時の土台板の木目で凹凸がある。またコーナー部と天井部に細かい粒状の圧痕が外縁と内縁の間に一直線に残っている。これは土台の板に土台の板に張ってあった（あるいは巻きつけてあったか？）紐繩の跡と思われる。生駒西麓の胎土である。

資料 No 34－個体 No 13 C（第 621 図、図版 240b・d）は北東居住域から出土した 7 個の破片が接合できた個体で、表面向かって右側の相欠き部からコーナー部までが復元できた。コーナー部は内外縁ともやや角ばる形状を示す。法量は全体幅が 84.6cm、天井部幅が 15.3cm、厚みが 1.9 cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部の幅は上下均等で、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。裏面は成形時の土台板の木目による凹凸が残る。生駒西麓の胎土である。

資料 No 264－個体 No 1 F（第 622 図、図版 240a・c）は西居住域と大溝から出土した 29 個の破片が接合できた個体で、表面向かって右側脚部は欠損しているが、他はほぼ復元できた。コーナー部は外縁は円弧状に曲がるが、内縁は角ばっている。法量は全体幅が 80.0cm、天井部幅が 14.8cm、厚みが 1.4cm となる。表面は突帯を貼り付けた後ナデ調整、相欠き部は上部の突出の幅が、下部より幅広く、表面の調整が終了した後ヘラ状工具で切り離している。裏面は成形時の土台板の木目による凹凸と、土台板を加工した手斧痕が残る。生駒西麓の胎土である。

IV タイプ

IV タイプは 2 点のみ出土した。資料 No 157－個体 No 34 C（第 606 図-4、図版 241h・242h）は北東居住域から出土した破片で、コーナー部分にあたるとおもわれる。突帯は外縁を折り曲げて形成されており、表面はナデ調整、裏面と突帯外縁はヘラ削りが施されている。I～IIIまでのタイプはほとんど全ての個体に成形時の土台板の木目が残るが、IV、V タイプ合計 3 点は裏面に工具痕が残り、出土点数が少なく、出土部分も相欠き部を欠いているので、U 字形板状土製品とするに疑問点も残る。が、火熱を受け赤変しており、カマドに関係する付属具と判断して、今回の集成に含めた。

V タイプ

V タイプは 1 点のみ出土した。資料 No 10－個体 No 20 B（第 606 図-3、図版 241g・242g）は北東居住域から出土した破片で、円弧状に曲がるコーナー部分にあたる。突帯はなく、表面はナデ調整、裏面は工具痕が残る。厚みは 1.9cm を測る。

5. 型式分類・韓国出土例との比較

U字形板状土製品の主な出土例を、突帯の有無、およびその形状により I～V タイプに分類し、それぞれの代表例の詳細を観察してきた。その結果各タイプの特徴を抽出することが可能になった。

I、II タイプはほぼすべての資料が厚み 1.5cm 以上をはかる。中には 2cm を超える資料がある。これに対して III タイプは厚み 1cm 前後のものが多い。III タイプで厚みが 1.5cm を超えるものは全体の形状においてコーナーが角ばっている。

相欠き部の形状が判明している個体は 33 点、そのうち II タイプの 2 点はともに相欠き部の組み合わせが逆 L 字形で、かつ相欠き部の幅が不均等である。III タイプは 30 点出土のうち、相欠き部組み合わせが逆 L 字形のものは無く、幅が不均等なものは 1 点のみである。

III タイプは表面に製品を 2 分割した時のヘラ印や、裏面に紐の圧痕がみられるなど成形段階の目印を残したままの資料が多い。

IV、V タイプは全体の形状は不明であるが、ともに胎土は生駒西麓産ではなく、すべてが生駒西麓産の胎土をもつ III タイプと対称的である。

II・III タイプは全体像がわかる資料が出土しているが、ここで全体像が復元できる資料を抽出して、型式分類、型式の変遷を試みたい。すでに突帯については I～V にタイプわけをしており、これに加える要素を 2 点とりあげ類型化してみる。

1 点はコーナー部の曲がり方で、曲がり方が角ばっているものを a タイプ、円弧状に曲がるものを作 b タイプとする。U字形板状土製品は鉄製品の模倣から製作されたものであり、より鉄製品に近い a タイプから b タイプへの変化を区分する要素となる。もう 1 点の要素は胎土で、生駒西麓産の胎土を用いていないものは 1、用いているものを 2 とする。

この類型化をもとに蘆屋北遺跡出土の U字形板状土製品は次のとおり 7 種類に型式分類した。第 733 図に代表例を図示する。

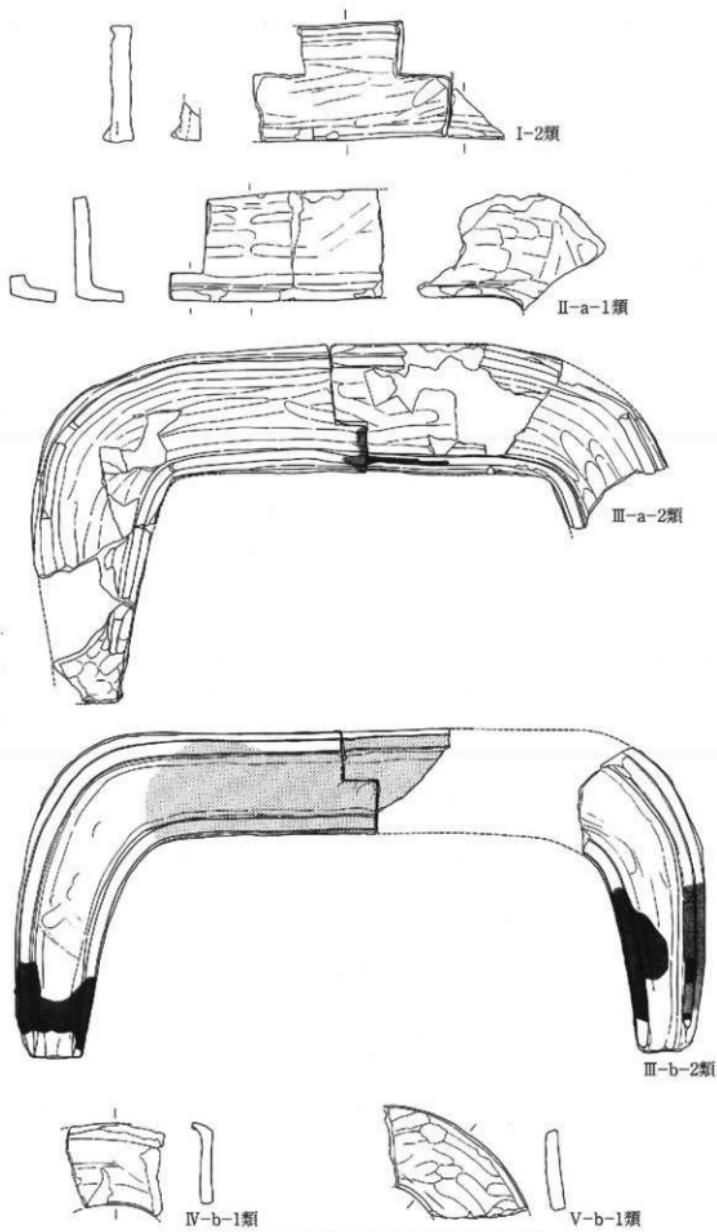
I-2 類 断面三角形の突帯が、内外縁、もしくは内縁のみに取り付けられる。蘆屋北遺跡では全体像のわかる出土例はなく、コーナー部の形状は不明である。生駒西麓産胎土を持つものしか出土していない。

II-a-1・2 類 内縁に沿って L 字形に折り返した突帯をもち、コーナー部は残存部分からやや角をもってまがると推定する。生駒西麓産の胎土のものとそうでないものと両方が存在する。

III-a・b-2 類 内外縁に沿って断面台形の突帯がはりつけられるので、コーナー部が角をもつものと円弧状にまがるものと両タイプが存在する。生駒西麓産胎土を持つものしか出土していない。

IV-b-1 類 外縁に沿って L 字形に折り返した突帯をもつ。コーナーは円弧状に曲がり、生駒西麓の胎土ではない。全体像は不明である。

V-b-1 類 突帯を持たない型式で、蘆屋北遺跡の 1 点の出土例はコーナーは円弧状に曲が



第733図 U字形板状土製品各型式の代表例

第39表 U字形板状土製品法量一覧表

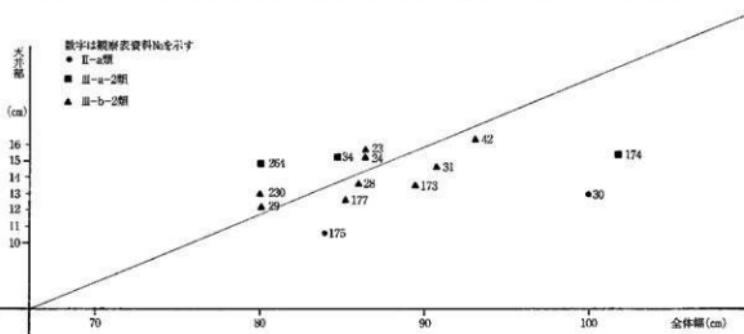
図面No	調査表資料No.	出土地点	個体No.	調査区	突帯のタイプ	コーナーの曲がり方	部分名	法量(cm)			
								全体幅	天井部幅	高さ	厚み
615・616	23	北東居住域	1	C	III	b	脚端部～相欠き部	86.4	15.7	43.4	1
620	24	北東居住域	2	C	III	b	コーナー部、相欠き部	推	86.4	15.5	推 46 1.1
	28	北東居住域	6	C	III		天井部	推	86	13.6	15
	29	北東居住域	7	C	III		天井部	推	80	12.2	15
607-2	30	北東居住域	8	C	II	a	相欠き部、コーナー部	推	100	13	19
613・614	31	北東居住域	10	C	III	b	脚端部～天井部	90.6	14.7	47.4	1.1
621	34	北東居住域	13	C	III	a	相欠き部～コーナー部	推	84.6	15.3	19
617・618	42	北東居住域	22	C	III	b	天井部～コーナー部	推	93	16.3	12
619	173	居外	1	A、B	III	b	天井部～コーナー部	推	89.4	13.5	14
609・610	174	南西居住域	2	A	II	a	脚端部、天井部	推	114.8	15.5	推 50.4 1.4
608	175	南西居住域	3	A	II	a	天井部～コーナー部	推	84	10.6	1.7
611・612	177	南西居住域	5	(E)	III	b	脚端部～相欠き部	推	84.6	12.7	40.0 1.2
	230	大溝	1	E	III		天井部	推	80	13	1.0
622	264	西居住域	1	F	III	a	脚端部～天井部	推	80	14.8	44.4 1.4

り、生駒西麓の胎土ではない。全体像は不明である。

I-2類は韓国では出土例をみない、日本独自の型式と思われる。内側縁のみに突帯があるタイプは東大阪市に所在する池島・福万寺遺跡でII型式1段階の須恵器と共に出土している。郡屋北遺跡では5世紀後半から存在していたとおもわれるが、全体像は不明である。内縁側のみに突帯があるタイプは6世紀にかけて他遺跡において日本独自の形態として発展し存在したと思われる。

II-a-1・2類はコーナーが角をもって曲がるタイプであり、U字形板状土製品が鉄製品の模倣から始まったとすれば、より鉄製品に近いII類が当遺跡出土資料ではもっとも先行する型式であろう。韓国では百濟中心地域を中心に出土しているが、粘土板の中央に装飾的に突帯が入るものが多い^(注4)。

III-a・b-2類は当遺跡で最も出土量が多い。先述のとおり全体の80%が突帯IIIタイプである。IIIタイプでコーナー部がやや角を持って曲がるIII-a類は、II類からIII類への過渡期の様相を示す製品であろう。韓国出土例では榮山江流域から出土した例がもっとも類似している。



第734図 U字形板状土製品天井部幅と全体幅の関係

とくに光州広城市月田洞遺跡出土例^(註5)は粘土板の内外縁に突帯がめぐり、コーナー部が円弧状に曲がることから、藏屋北III-b-2類に最も類似しているが、中央に装飾的な突帯がつけられている。榮山江流域出土例は百濟が漢城落城後に榮山江流域に勢力を伸ばす時に成立したと考えられ、百濟中心地城出土例とは時期差があり、後出するものと考えられている。

全体像がわかるII類とIII類の14点の資料を型式分類してその法量を一覧にしたもののが第39表である。14点のうち6点がIII-b-2類であり藏屋北遺跡を代表する型式をいえる。さらに資料の法量について検討してみる。第734図は縦軸に天井部幅、横軸に全体幅をとり、グラフを作成したものである。

出土点数が最も多いIII-b-2類の個体の位置はグラフの斜線付近に集まっており、天井部幅と全体幅は比例して拡大する。III-b-2類は全体が大きい個体は当然天井部幅も大きくなり、拡大割合は定まっていたと思われる。II-a類はグラフ上に掲載したのは2点のみだが、やはり全体幅を大きい個体は天井部幅も大きいようである。製品に少なくとも大小の2サイズは存在したことになる。III-a-2類の3点の資料No.264・34と174は天井幅と全体幅に関係がないようである。グラフをみるとIII-b-2類は製品としての規格が定まっていると受け取れる。

6. 製作方法の復元

これまでおもにU字形板状土製品の形状、法量等から型式変遷を検討してきた。韓国出土例と比較すると、II-a-1・2類はIII-a・b-2類に先行する型式と考えられる。次に製作方法を復元して、そこからII-a-1・2類からIII-a・b-2類への型式変遷を検討してみたい。検証方法は筆者が実際にIII-b類と同様のものを実験的に製作して、そこから工程を復元した。工程1-木目がはっきり残った板を土台に用意する→板に凹凸がある方が貼り付けた粘土をはがしやすい。木目はU字形板状土製品の幅と平行にあらわれる。

工程2-U字形板状土製品のコーナーの位置を決め、土台板に左右対称に紐を巻いておく（あるいは張ってあったか）→U字形板状土製品は、単純なかたちで、コーナーの角度は厳密な角度を持っているわけではない。したがって土台板にU字形板状土製品の輪郭線等を入れなくてもコーナー部の位置だけ決めておけば、かたちを作ることは可能である。

工程3-粘土を直接板の上でのばして貼り付けながらかたちを作っていく。→出土例の断面を観察すると粘土を何回か重ねているのが解る。

工程4-内縁と外縁に突帯を貼り付けて、側縁をナデつける

工程5-ある程度乾燥させた後、全体幅の中央にヘラ印を入れ、それを目印に相欠きを切る

工程6-ある程度乾燥させた後、別の板を粘土の上に載せ、上下を逆転させてひっくり返し、土台板をはがす そのままの状態で乾燥させる→両側縁の突帯が突っ張りのかわりになり、板と粘土の間に空間ができ乾燥が速まる。ある程度乾燥させたあとひっくり返すので、突帯がへこんだり、崩れたりすることは全くないし、その痕跡は残らない。

工程7—完全に乾燥させた後焼成する

III-b類のU字形板状土製品は、この工程で製作すると量産は可能である。また厚さが1cm前後という極端に薄い製品も難なく製作でき、極限まで合理化された製作方法であったと思われる。III-b-2類は同じ工程、同じ胎土で量産化されたU字形板状土製品であったといえる。

II-a類はIII-b類が裏面未調整であるのに比較すると、裏面にもナデ調整を加えていること、また内縁の突帯を折り返すためある程度の厚みが必要であること、そのため乾燥に時間がかかることが予想され、より複雑な細かい工程が必要となる。III-b類は工程の簡略化が最も進んだタイプであるとすれば、II-a類からIII-b類への型式変遷が想定できる。

7. 使用状況の検討

これまでU字形板状土製品そのものについて詳細を記述してきた。次に実際どのような場所で使用されていたのか検討してみる。その手がかりを探るため、最も出土量が多かった北東居住域C調査区において、①すべての破片がどの10mメッシュ小地区から出土したのか②各個体において、個体を構成する破片がどの遺構、小地区から出土したか、破片はどの程度のひろがりをもって分布しているのかの2点を調べてみた。

最初に北東居住域C調査区から出土した破片は10mメッシュの小地区上でどのように分布しているか、調べてみたのが第735図である。第735図を見ると、分布の中心は北東居住域内でも東半部に偏っており、西半部の豎穴住居が検出された個所は分布が最も少ない。豎穴住居が検出された個所は北東から南北方向にのびる微高地上であるが、この微高地上では東半部でも破片の分布は少ない。破片が集中して出土しているのはこの微高地上南北両サイドに緩やかに傾斜していく斜面上、特に南東谷の縁辺である。

次に各個体の破片の分布をみてみる。

個体1C(第736図) h5、6区の土坑、落ち込みを中心として東西40m、南北30mの範囲で南東谷の縁辺に分布が広がっている。

個体2C(第737図) 南東谷の縁辺にあたるi6区を中心として東西50m、南北30mの範囲に分布が広がっている。

個体3C 調査区東辺の土坑C2198と北東谷からの出土資料が接合している。

個体4C h7区出土の2点が接合している。

個体6C 北東谷出土の2点が接合している。

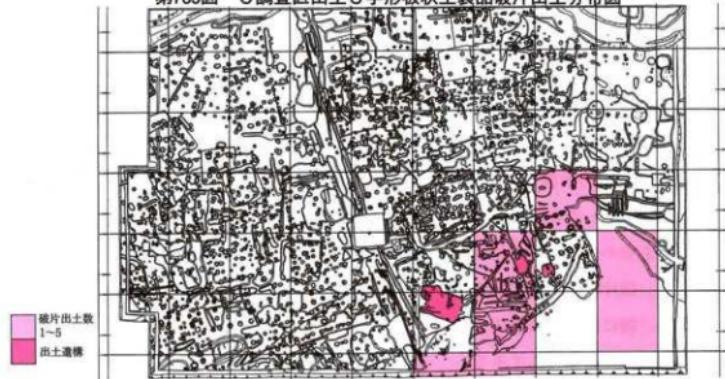
個体7C(第738図) h5区の土坑と南東谷出土資料が接合、東西40m、南北20mの範囲に分布が広がっている。

個体8C(第739図) g7区の土坑とf9区、d10区の自然流路出土資料が接合、東西南北40m四方の範囲に分布が広がっている。

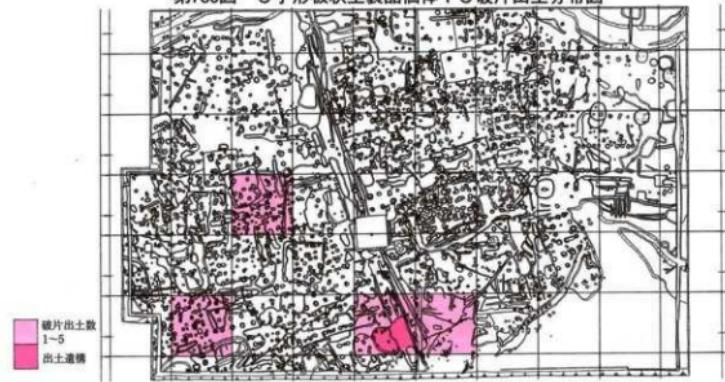
個体10C(第740図) h4区の土坑C2415、i5区の溝C2550などの出土資料を中心



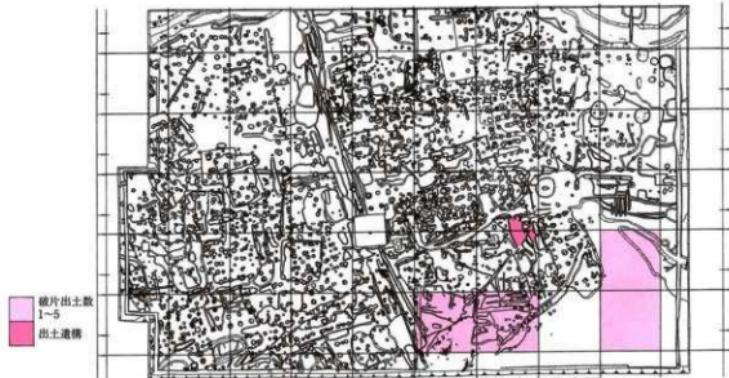
第735図 C調査区出土U字形板状土製品破片出土分布図

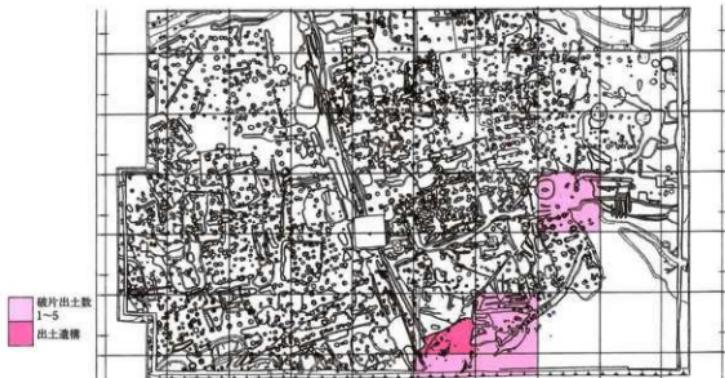


第736図 U字形板状土製品個体1C破片出土分布図

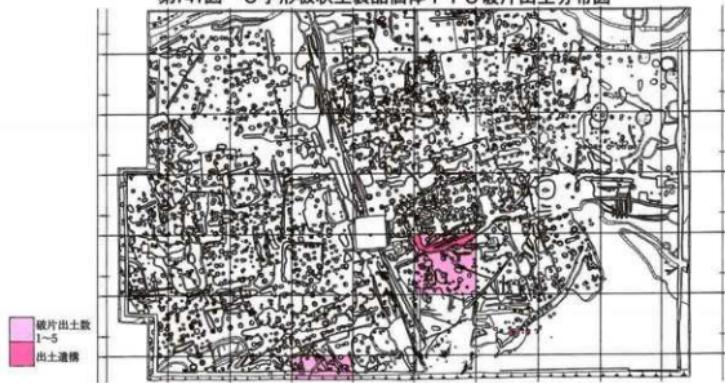


第737図 U字形板状土製品個体2C破片出土分布図

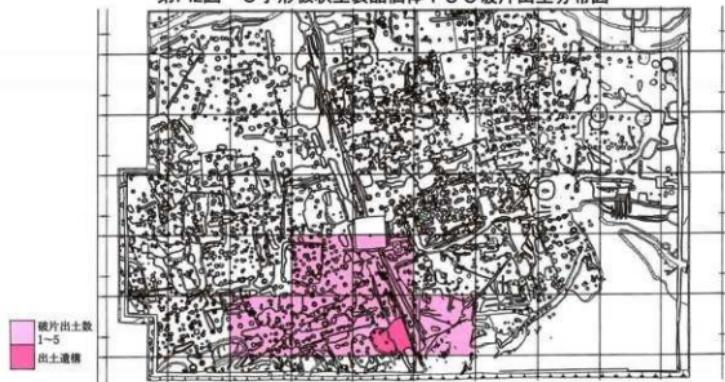




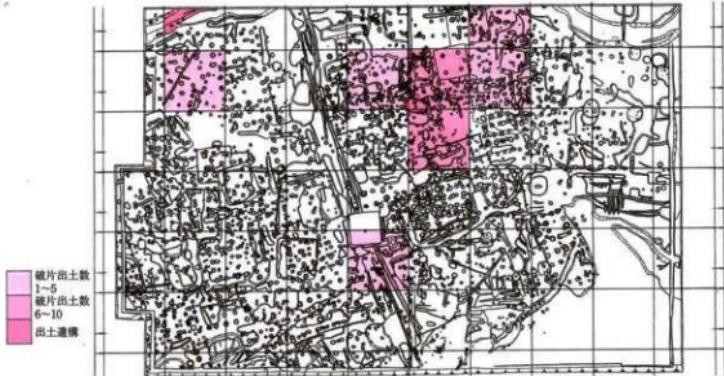
第741図 U字形板状土製品個体11C破片出土分布図



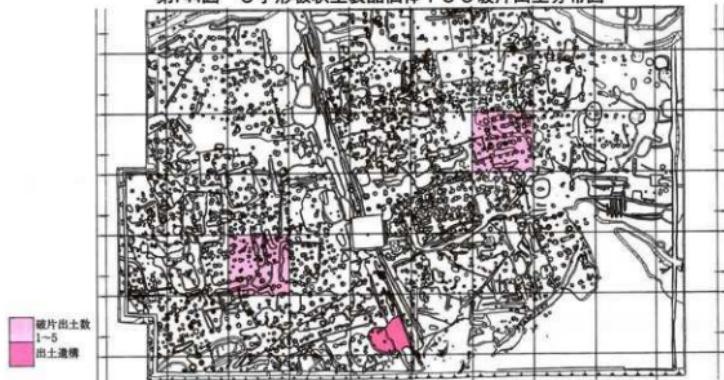
第742図 U字形板状土製品個体13C破片出土分布図



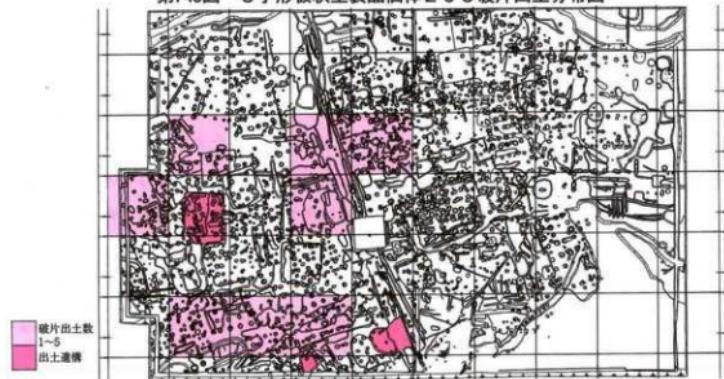
第743図 U字形板状土製品個体14C破片出土分布図



第744図 U字形板状土製品個体15C破片出土分布図



第745図 U字形板状土製品個体20C破片出土分布図



第746図 U字形板状土製品個体21C破片出土分布図

心として南東谷の縁辺、東西30m、南北20mの範囲に分布が広がっている。

個体11 C (第741図) i5, i6区を中心とした南東谷縁辺の出土資料が接合している。

個体12 C h3区出土の2点が接合している。

個体13 C (第742図) i5区の井戸C 2 5 4 9、土坑C 2 6 0 5にh6区の溝出土資料などが接合している。東西40m、南北20mの範囲に分布が広がっている。

個体14 C (第743図) i7区の土坑、g6区の建物のピット出土資料を中心として東西40m、南北30m前後の範囲に分布が広がっている。

個体15 C (第744図) 個体15 Cは接点はないが類似の破片が多い。破片はC調査区の北半中央のe6区を分布の中心にして30m四方に広がっている。やや離れて調査区北西部にも破片の分布がある。

個体17 C f3区出土の1点と土坑C 2 2 0 5の2点が接合している。

個体18 C i6区の土坑出土の1点と20m離れたj9区出土の資料が接合している

個体19 C h5区の落ち込み出土の1点とh4区、i7区出土の各1点が接合している。

個体20 C (第745図) i9区の落ち込み出土の2点とh9区の土坑出土の1点、互いに40m離れたf5区とh9区出土の各1点が接合している

個体21 C (第746図) g 10区の竪穴住居の覆土、j 8区の土坑、i7区の出土資料は接点があり、他に類似の資料を合わせると、東西南北50m四方に破片の分布がある。

各個体を構成する破片の分布状況をみてみると、いずれも原位置から撤去されて破片が分散している状況を示しており、1箇所の土坑などからすべての破片が出土した個体は見当たらない。U字形板状土製品は薩屋北3期に集中的に出土したが、この時期の竪穴住居や掘立柱建物の内部に据え付けられていた状況ではないようである。U字形板状土製品を設置したカマドは住居建物外にあった可能性が高い。

屋外に設置されたカマドは薩屋北5期ではC調査区で3基みつかっており、掘立柱建物間の空き地にカマドが3基密集した状態で検出している。覆屋の存在は不明であった。覆屋があったとしても、これまでに検出されている建物遺構のようはっきりした規模やプランをもつ建物とは異なるのではないかと思われる。

薩屋北3期にU字形板状土製品を設置したカマドも5期に検出したカマドのように建物間の空き地に設けられた共同炊事場的なカマドであり、位置をかえながら何度も作りかえられていたのではないかと思われる。出土したU字形板状土製品には煤や変色部分はあるものの、カマドの火熱にさらされ、長い使用に耐えたような煤の付き方をしているものはみあたらなかった。薩屋北遺跡のU字形板状土製品は朝鮮半島、特に韓国榮山江流域から渡來した人々が使用した特別な土製品であり、渡来系の集落のカマドに設置される一種のシンボル的なものであったかもしれない。あるいは祭りの時のみ使用されるものであったことも想定できる。

本稿では当遺跡出土資料のみの分析が中心になり、国内の出土例、韓国の出土例との比較検討

は課題として残った。今後さらに資料が蓄積され当遺跡の出土資料が有効に活用されることを願い、更なる研究発展を期待したい。

最後になりましたが、U字形板状土製品について、金武重、權五榮、徐賢珠、濱田延充、宮崎泰史の諸氏諸先生からご教示を得た。記して謝意申し上げます。

文献1 田中清美「造付け竈の付属具」『統文化財学論集』2003

文献2 濱田延充「U字形板状土製品考」『古代学研究』第167号 2004

文献3 徐 賢珠「三国時代の竈の焚口枠についての考察」大竹弘之訳『韓式系土器研究』VII

2004

註1 西口陽一「讃良郡条里遺跡発掘調査概要・II」大阪府教育委員会 1991 濱田延充「長保寺遺跡」寝屋川市教育委員会 1993

註2 宮崎泰史「讃良郡条里遺跡（高塚北遺跡）発掘調査概要・IV」大阪府教育委員会 2002

註3 ソウル歴史博物館『風納上城』2002

註4 文献3による

註5 全南大學校博物館・光州広城市『光州 月田洞遺跡』 1996

第40表-4 U字形板状土製品觀察表

面積m ²	形状	出土地点	△ 腹材	横材	横材 片長	横 材 高	横 材 厚	底板	底板 名	底板 厚	通縫合	縫合・止水	被覆タイプ	漏水孔	外体幅 (cm)	元件幅 (cm)	高さ (cm)	厚み (cm)	備考
14	C	258	1110	A18	6														
15	C	57	1135	A18	6														
15	C	64	A18	6															
15	C	77	A18	d10															
15	C	89	A18	6															
15	C	92	A18	e9m															
15	C	93	A18	6															
15	C	105	A18	c5m															
15	C	119	A18	6															
15	C	118	A18	e6															
15	C	151	A18	c7															
15	C	194	A18	e7															
15	C	203	A18	6															
15	C	261	A18	e10															
15	C	219	A18	e10															
15	C	259	A18	e10															
15	C	255	A18	e10															
15	C	272	A18	6															
15	C	273	A18	e6															
15	C	276	A18	6															
15	C	277	A18	e6ES															
15	C	278	A18	e5															
15	C	305	A18	e10															
15	C	310	A18	e6															
15	C	313	A18	e7															
15	C	314	A18	e7															
15	C	316	A18	e6															
15	C	322	A18	6															
15	C	327	A18	e6															
15	C	328	A18	e5															
15	C	329	A18	e6															
15	C	346	A18	e1															
15	C	210	A18	e5															
15	C	46	A18	e5															
15	C	89	A18	e7															
15	C	1104	A18	e6ES															
15	C	97	A18	e5															
15	C	108	A18	e6															
15	C	279	A18	e7															
15	C	387	A18	6															
17	C	18	A18	6															
17	C	18	A18	6															
17	C	172	A18	6															
18	C	143	A18	6															
18	C	211	A18	6															
19	C	40	A18	h5															
19	C	178	A18	6															
19	C	283	A18	6															
37																		15	
38																		16	
39																		17	

第40表-5 U字形板状土製品種類表

図版No.	管番	出土地点	層位No.	層位名	地名	地区名	遺物別	遺物番号	種名・色		外体幅 (cm)	大井部幅 (cm)	高さ (cm)	厚み (cm)	個数
									形状のタイプ	組合せ名					
40	北東	20	C	5	A18	17	落ち込み	C2895	第9面取り下げ	第9面取り下げ	15	25	相次ぎ部	断端部一側部	
	北東	20	C	6	A18	17	落ち込み	C2895							
	北東	20	C	96	A18	15	上端	C3016							
	北東	20	C	138	A18	17	上端	C3016							
	北東	△	204	1725	A18	19	上端	C3016							
	北東	△	21	C	A18	19	上端	C3016							
605-1	北東	△	21	C	224	A18	10	落ち込み	C2895	第9面取り下げ	第9面取り下げ	15	25	相次ぎ部	断端部一側部
	北東	△	21	C	225	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	21	C	226	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	22	C	227	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	228	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	232	A18	10	落ち込み	C2895						
617-618	北東	△	23	C	364	A18	10	落ち込み	C2895	第9面取り下げ	第9面取り下げ	15	25	相次ぎ部	断端部一側部
	北東	△	23	C	365	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	366	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	367	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	368	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	369	A18	10	落ち込み	C2895						
43	北東	△	23	C	366	A18	10	落ち込み	C2895	第9面取り下げ	第9面取り下げ	15	25	相次ぎ部	断端部一側部
	北東	△	23	C	367	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	368	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	369	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	370	A18	10	落ち込み	C2895						
	北東	△	23	C	371	A18	10	落ち込み	C2895						
44	北東	△	24	C	238	A18	10	上端	C3016	第9面取り下げ	第9面取り下げ	15	25	相次ぎ部	断端部一側部
	北東	△	24	C	239	A18	10	上端	C3016						
	北東	△	24	C	240	A18	10	上端	C3016						
	北東	△	24	C	241	A18	10	上端	C3016						
	北東	△	24	C	242	A18	10	上端	C3016						
	北東	△	24	C	243	A18	10	上端	C3016						

第40表-6 U字形板状土製品調査表

規格名	資料名	直地点	△ 順序番号	横	縦	厚さ	規格名	規格番号	規格種別	規格番号	規名・上色	表面(テイア)	開口部名	全体幅(cm)	天井距離(cm)	高さ(cm)	厚み(cm)	備考
		北東	24	C	135	A18												
		北東	24	C	265	A18	16											
		北東	24	C	360	1730	A18	60										
		北東	24	C	304	1731	A18	67										
		北東	25	C	68													
		北東	25	C	100													
		北東	25	C	206													
		北東	25	C	365													
		北東	25	C	347													
		北東	25	C	41													
		北東	25	C	36													
		北東	25	C	213													
		北東	25	C	76													
		北東	25	C	348	1873	A18	16										
		北東	25	(A)														
		北東	26	C	3													
		北東	26	C	102	1732	A18	16										
		北東	27	C	70													
		北東	27	C	82													
		北東	27	C	138													
		北東	27	C	342	1731	A18	16										
		北東	28	C	265													
		北東	28	C	348	1735	A18	14										
		北東	29	C	4													
		北東	29	C	66	518	A18	c1										
		北東	30	C	94	1074	A18	16										
		北東	30	C	259													
		北東	30	C	266	1728	A18	16										
		北東	31	C	19													
		北東	31	C	182													
		北東	31	C	215	1111	A18	6										
		北東	32	C	229													
		北東	33	C	21	14	A18	5										
		北東	33	C	26	442	A18	17										
		北東	33	C	71													
		北東	33	C	174													
		北東	33	C	180													
		北東	33	C	182													
		北東	33	C	215	1111	A18	10										
		北東	33	C	229													
		北東	33	C	311													
		北東	33	C	15	12	A18	6										
		北東	33	C	16	12	A18	6										
		北東	33	C	27	12	A18	6										
		北東	33	C	22	512	A18	8										
		北東	34	C	583													
		北東	34	C	12	570	A18	10										
		北東	34	C	15													
		北東	35	C	16													
		北東	36	C	17													

第40表-7 U字形板状土製品観察表

順位	資料名	出土場所	△標高(m)	標高(m)	地名	地名	遺物番号	遺物番号	品名・特色	実寸(タ		大井深幅(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	備考
										幅分名	合体幅(cm)				
57	生糸	生糸	C	17	369	A18	B18	土塊	C159	9面直り下げ	直	大井部			
58	生糸	生糸	C	19	497	A18	c18								
59	生糸	生糸	C	29	145	A18	d18	柱穴(側面)直り下げ	C257		直	コート部			
60	生糸	生糸	C	38	205	A18	e18	土塊	C2210	9面直り下げ	直	コート部			
61	生糸	生糸	C	44	145	A18	f18								
62	生糸	生糸	C	45	145	A18	g18								
63	生糸	生糸	C	47	145	A18	h18								
64	生糸	生糸	C	53	145	A18	i18								
65	生糸	生糸	C	55	145	A18	j18								
66	生糸	生糸	C	58	1065	A18	k18								
67	生糸	生糸	C	63	1066	A18	l18								
68	生糸	生糸	C	65	145	A18	m18								
69	生糸	生糸	C	69	1067	A18	n18								
70	生糸	生糸	C	72	1067	A18	o18								
71	生糸	生糸	C	74	145	A18	p18								
72	生糸	生糸	C	75	145	A18	q18								
73	生糸	生糸	C	83	1133	A18	r18								
74	生糸	生糸	C	85	1133	A18	s18								
75	生糸	生糸	C	87	1071	A18	t18								
76	生糸	生糸	C	90	145	A18	u18								
77	生糸	生糸	C	91	95	A18	v18								
78	生糸	生糸	C	96	145	A18	w18								
79	生糸	生糸	C	101	1102	A18	x18								
80	生糸	生糸	C	109	145	A18	y18								
81	生糸	生糸	C	111	145	A18	z18								
82	生糸	生糸	C	115	1068	A18	aa18	4.3cm	4.3cm						
83	生糸	生糸	C	115	1072	A18	ab18	4.3cm	4.3cm						
84	生糸	生糸	C	116	145	A18	ac18								
85	生糸	生糸	C	118	1060	A18	ad18								
86	生糸	生糸	C	119	1060	A18	ae18								
87	生糸	生糸	C	123	145	A18	af18								
88	生糸	生糸	C	125	145	A18	ag18								
89	生糸	生糸	C	128	145	A18	ah18								
90	生糸	生糸	C	129	145	A18	ai18								
91	生糸	生糸	C	131	1055	A18	aj18								
92	生糸	生糸	C	132	145	A18	ak18								
93	生糸	生糸	C	133	1084	A18	al18								
94	生糸	生糸	C	137	658	A18	am18								
95	生糸	生糸	C	139	595	A18	an18								
96	生糸	生糸	C	140	656	A18	ao18								
97	生糸	生糸	C	142	1122	A18	ap18								
98	生糸	生糸	C	144	145	A18	aq18								
99	生糸	生糸	C	145	145	A18	ar18								
100	生糸	生糸	C	147	1068	A18	as18								
101	生糸	生糸	C	157	1068	A18	at18								
102	生糸	生糸	C	158	145	A18	au18								
103	生糸	生糸	C	165	145	A18	av18								
104	生糸	生糸	C	169	145	A18	aw18								

第40表-8 U字形板状土製品検索表

通称名	種類	所土地点	△	種類	規格番号	実測番号	寸法	基準	通称機器	通称機器番号	機名・土色	形状のタイプ	組合せ	合体幅 (cm)	天井距離 (cm)	高さ (cm)	厚み (cm)	備考
105 北京	柱	所土地点	C	173	A18	17												
106 北京	柱	所土地点	C	179	A18	17												
107 北京	柱	所土地点	C	183	A18	18												
108 北京	柱	所土地点	C	184	A18	17												防音隔壁
109 北京	柱	所土地点	C	186	A18	17												コートル部
110 北京	柱	所土地点	C	191	A18	17												
111 北京	柱	所土地点	C	192	A18	18												
112 北京	柱	所土地点	C	193	A18	18												
113 北京	柱	所土地点	C	197	A18	18												
114 北京	柱	所土地点	C	205	A18	18												コートル部
115 北京	柱	所土地点	C	207	A18	18												外欠き部
116 北京	柱	所土地点	C	208	1114	A18	18											外欠き部
117 北京	柱	所土地点	C	214	A18	18												
118 北京	柱	所土地点	C	215	A18	18												相欠き部
119 北京	柱	所土地点	C	217	A18	18												
120 北京	柱	所土地点	C	218	A18	18												
121 北京	柱	所土地点	C	219	A18	18												
122 北京	柱	所土地点	C	221	A18	18												
123 北京	柱	所土地点	C	222	A18	18												外欠き部
124 北京	柱	所土地点	C	223	A18	18												外欠き部
125 北京	柱	所土地点	C	229	A18	18												
126 北京	柱	所土地点	C	231	A18	18												
127 北京	柱	所土地点	C	232	A18	18												
128 北京	柱	所土地点	C	238	A18	18												
129 北京	柱	所土地点	C	237	A18	18												
130 北京	柱	所土地点	C	239	1115	A18	18											
131 北京	柱	所土地点	C	240	1128	A18	18											外欠き部
132 北京	柱	所土地点	C	244	A18	18												
133 北京	柱	所土地点	C	245	A18	18												
134 北京	柱	所土地点	C	246	A18	18												
135 北京	柱	所土地点	C	253	A18	18												
136 北京	柱	所土地点	C	255	A18	18												
137 北京	柱	所土地点	C	263	A18	18												
138 北京	柱	所土地点	C	267	A18	18												
139 北京	柱	所土地点	C	268	A18	18												
140 北京	柱	所土地点	C	271	A18	18												開口部
141 北京	柱	所土地点	C	293	A18	18												
142 北京	柱	所土地点	C	298	A18	18												
143 北京	柱	所土地点	C	307	A18	18												中欠けレール
144 北京	柱	所土地点	C	308	A18	18												
145 北京	柱	所土地点	C	309	A18	18												
146 北京	柱	所土地点	C	312	A18	18												
147 北京	柱	所土地点	C	317	A18	18												
148 北京	柱	所土地点	C	325	A18	18												
149 北京	柱	所土地点	C	329	A18	18												
150 北京	柱	所土地点	C	334	A18	18												
151 北京	柱	所土地点	C	335	A18	18												
152 北京	柱	所土地点	C	336	A18	18												

第40表-10 U字形板状土製品観察表

測定No.	測定部位	地盤土成	地盤高さ	地盤形状	地盤区分		地盤・土色	地盤の特徴	部分名	全体幅 (cm)	天井距離 (cm)	高さ (cm)	深さ (cm)	備考
					地区名	地盤名								
	南北面		2	A	25	E18	井戸		A150	1.4				
	区画構造		2	A	26	E18	砂		A950	1.4				
	南北面		2	A	27	S20	E18	砂	A950	上段				
	南北面		3	A	29	B18	B18	砂	A150	上段				
	区画構造		3	A	30	—	B18	砂	A45	上段				
	南北面		3	A	31	B18	B18	砂	A45	上段				
608	175	区画構造	3	A	32	—	B18	砂	A34	上段				
	南北面		3	A	33	B18	B18	砂	A34	上段				
	南北面		3	A	34	—	B18	砂	A150	11段	20日			
	南北面		4	A	35	S22	S18	砂	A950	1.4				
	南北面		4	A	36	S23	S18	砂	A950	1.4				
	南北面		5	P	1	E18	土質		A150	1.4				
631-612	177	南北面	5	E	2	E18	土質		A135	1.4				
	南北面		5	E	3	E18	土質		A135	1.4				
	南北面		5	E	4	E18	土質		A135	1.4				
	南北面		5	E	5	E18	土質		A135	1.4				
	南北面		6	A	38	S25	S18	砂	A150	1.4				
	南北面		6	A	39	S26	S18	砂	A950	1.4				
	南北面		6	A	40	—	S18	砂	A950	上段				
	南北面		6	A	41	S25	S18	砂	A150	上段				
	南北面		6	A	44	S32	S18	砂	A150	上段				
	南北面		6	A	45	S33	S18	砂	A150	上段				
	南北面		6	A	46	S33	S18	砂	A150	上段				
	南北面		6	A	47	S34	S18	砂	A150	上段				
	南北面		6	A	48	S29	S18	砂	A1619	10段	隔離土壁下			
	南北面		6	A	49	S29	S18	砂	A150	1.4	10段			
	南北面		6	A	50	S30	S18	砂	A1619	1.4	10段			
	南北面		6	A	51	S31	S18	砂	A1619	1.4	10段			
	南北面		6	A	52	S35	S18	砂	A1619	1.4	10段			
	南北面		6	A	53	S35	S18	砂	A1619	1.4	10段			
	南北面		6	A	55	S36	S18	砂	A1619	1.4	10段			
	南北面		6	A	56	S36	S18	砂	A150	1.4	10段			
	南北面		7	E	7	D19	D19	砂	A55	1.4				
	南北面		7	E	8	D19	D19	砂	A55	1.4				
	南北面		7	E	9	D19	D19	砂	A55	1.4				
	南北面		7	E	10	D19	D19	砂	A55	1.4				
	南北面		8	R	16	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	19	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
606-2	196	南北面	8	R	20	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	21	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	22	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	23	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	24	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	25	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	26	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	27	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	28	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	29	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			
	南北面		8	R	30	E18	E18	砂	E10750	3段	10日			

第4表-11 U字形板状土製品観察表

目次No.	出土地点	地盤区分	調査区分	測定点	測定点番号	測定結果	測定部位番号	形状のタイプ	断面・寸法		底部分名	全体幅 (cm)	天井部幅 (cm)	底さ (cm)	厚み (cm)	備考
									横幅 (cm)	高さ (cm)						
201	南西	E	31	B19	1.65	1.65	E000838 上端									
202	南西	E	32	B19	1.65	1.65	E000838 中間									
203	南西	E	33	B19	1.65	1.65	E000838 下端									
204	南西	E	35	B19	1.65	1.65	E000835									
205	南西	E	41	B19	1.6	1.6	E000835	無切端								
206	南西	E	42	B19	1.65	1.65	E000830									
207	南角	E	43	B19	1.4	1.4	E000830	無切端下端								
208	南西	E	45	B19	1.5	1.5	E000830	無切端下端								
209	南西	E	46	B19	1.5	1.5	E000830	無切端下端								
210	南西	E	47	B19	1.65	1.65	E000838 上端									
211	南西	E	48	B19	1.65	1.65	E000838 中間									
212	南西	E	49	B19	1.65	1.65	E000838 下端									
213	南西	E	50	B19	1.6	1.6	E000835									
214	南西	E	51	B19	1.6	1.6	E000835									
215	南西	E	52	B19	1.6	1.6	E000835									
216	南西	E	53	B19	1.6	1.6	E000835									
217	南西	E	54	B19	1.6	1.6	E000835									
218	南西	E	55	B19	1.6	1.6	E000835									
219	南内	E	56	B19	1.6	1.6	E000835									
220	南内	E	57	B19	1.6	1.6	E000835									
221	南西	E	58	B19	1.6	1.6	E000835									
222	南西	E	59	B19	1.6	1.6	E000835									
223	南西	E	60	B19	1.6	1.6	E000835									
224	南西	E	61	B19	1.6	1.6	E000835									
225	南西	E	62	B19	1.6	1.6	E000835									
226	南内	E	63	B19	1.6	1.6	E000835									
227	南西	A	42	S38	0.38	0.38	E000835									
228	南外	A	43	S38	0.38	0.38	E000835									
229	大屋	D	13	A20	0.2	0.2	E00001									
230	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	中間								
231	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	上端								
232	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	下端								
233	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	中間								
234	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	上端								
235	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	下端								
236	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	中間								
237	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	上端								
238	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	下端								
239	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	中間								
240	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	上端								
241	大屋	E	1	B19	0.6	0.6	E00001	下端								

分 析 編

第1章 蔵屋北遺跡周辺の古環境解析

辻本裕也・辻 康男

はじめに

本節では、蔵屋北遺跡における堆積環境変遷および植生変遷について、発掘調査時に実施された自然科学分析調査成果（辻・辻本, 2006）、およびその後に蓄積された近隣遺跡の分析調査成果を総合的に捉え検討する。なお、本報告で使用する年代値は、既報（小林・辻本編, 2006）の放射性炭素年代値に基づき、 2σ の曆年較正値（cal BP）を使用する。

1 蔵屋北遺跡の堆積環境変遷

蔵屋北遺跡は、生駒山地西麓に近い氾濫原上に立地する（図1）。縄文海進時の6300～7200年前には、陸域に近い海域が広がっており、本遺跡周辺で内湾の浅い海底が広がっていた（辻ほか, 2006）。縄文時代前期中葉頃の6000～6300年前には、淀川分流路による三角州が発達し始め、潮下帯～潮間帯の干潟が広がる河口へと地形が変化した。この時期の河内湾北岸の三角州発達には、淀川分流路沿いに島状の陸化とともに進行した。縄文時代前期中葉～後葉には、門真市の普賢寺遺跡や古川遺跡、門真市の門真遺跡群付近にまで三角州が発達していた（図2：松田, 2001）。

縄文時代中期前葉頃の5300～5600年前には、本遺跡周辺の陸化が進行して、三角州平野となり河川氾濫原が広がった。この時期に本遺跡では、潮汐の影響を受ける湿地や沼沢地が形成された。蔵屋北遺跡での海成層と陸成層の境界は、T.P.-2.0 m付近で海成層の最上部が河川堆積物に

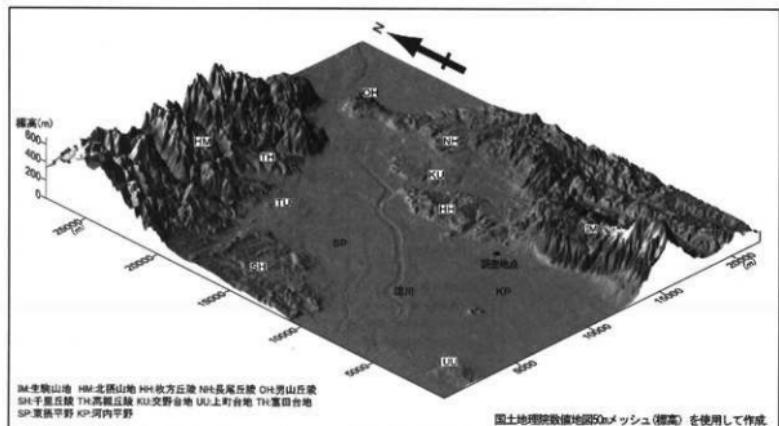


図1 遺跡位置図

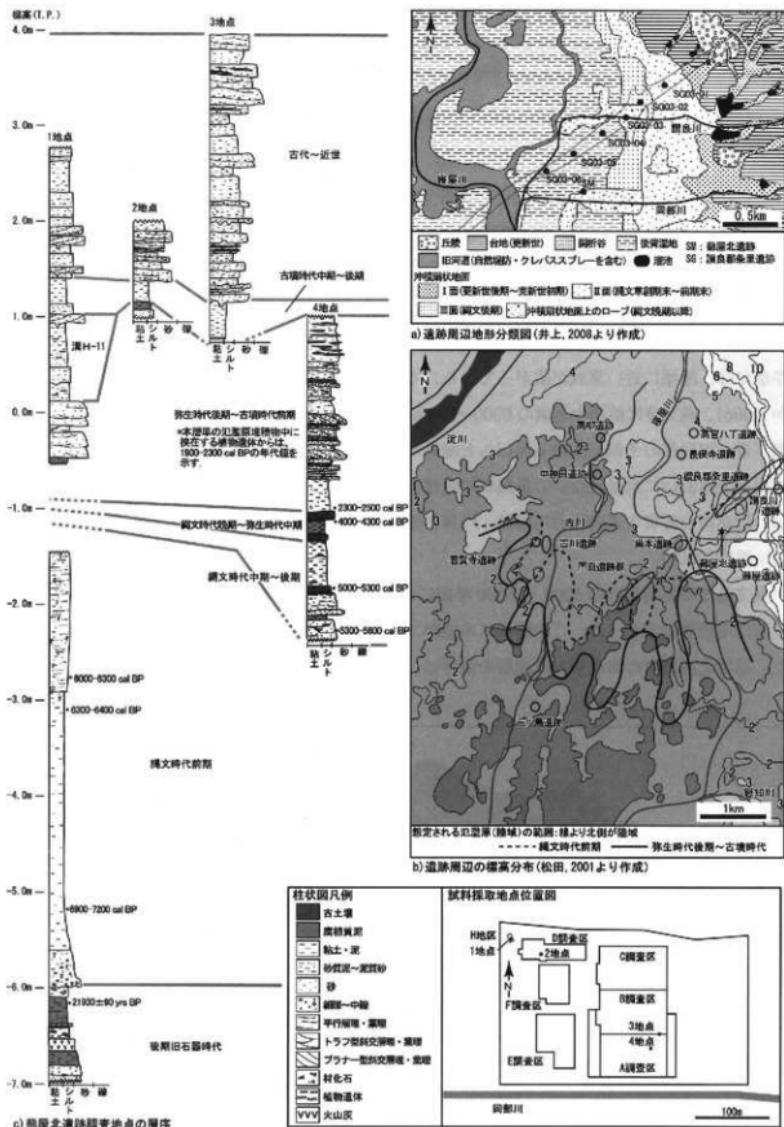


図2 萩屋北遺跡の層序と地形

よって侵食を受けている（辻・辻本,2006）。北側に隣接する讃良郡条里遺跡でも、その遺跡西半部でT.P.-2.0 m付近に海成層と陸成層の境界が存在する（井上,2007）。井上（2007・2008）では、既往の調査結果の詳細な堆積学的検討を行い、縄文時代中期前葉頃に本遺跡周辺で淀川分流路の堆積作用による細長い高まりが形成され、その東側の沖積扇状地面に挟まれた入り江状の領域に干潟が広がっていたことを明らかにした。縄文時代中期～後期に部屋北遺跡やその周辺遺跡では、淀川分流路と生駒山地西麓を流下する河川からの土砂流出の双方の影響を強く受けしており、陸域と水域の分布が複雑な様相を呈していたと推定される。

縄文時代後期前葉頃の4000～4300年前には、堆積環境が安定し、氾濫原堆積物中に土壌帯が複数発達した。この土壌発達は、縄文時代後期前葉頃～弥生時代中期まで断続的に継続した。土壌発達が進行した氾濫原領域は、縄文時代後期頃以降から人間活動の場所となった。

弥生時代前期～後期ないし終末期頃に相当する古土壤では、多量のイネ属植物珪酸体が産出する層準が確認された。土器なども一定量検出されることから、本遺跡内においては、この時期に水田が存在した可能性が高い。なお、弥生時代前期～後期頃の水田跡については、沖積扇状地面Ⅲ面からその扇端部付近を中心広く分布したことが発掘調査結果からうかがえる（図2：森本編,2009・中尾・山根編,2009）。今回の調査区に近い讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査地での分析結果（辻・辻本,2009）をふまえると、縄文時代晚期～弥生時代中期の古土壤帶は、人間によって土地利用がなされる以前に、ヨシ属などが繁茂する湿性草原であったと推定される。ここでは、地下水位が高く、多雨時に一時期水没したりするが、基本的に地表面が大気下にあり、好気的土壤環境が維持されていたと考えられる。

弥生時代後期には、堆積環境が大きく変化した。この時期には、遺跡内の広範囲にわたって流路および自然堤防堆積物が顕著に累重した。この流路・氾濫原形成は、古墳時代前期の布留式期頃まで継続した。洪水がしばしば流入するような不安定な氾濫原の堆積環境下にある弥生時代後期～古墳時代前期にも、本遺跡では人間活動が断続的に展開したことが出土土器から推察される。この時期の自然堤防形成は、北～北西に位置する砂遺跡や讃良郡条里遺跡03-6調査地でも確認された（井上,2008）。部屋北遺跡で自然堤防を発達させた流路は、讃良郡条里遺跡03-6調査地で検出された弥生時代末～古墳時代前期に活動した蛇行流路であった（井上,2008）。なお、この流路については、長保寺遺跡で検出された古墳時代の流路との関連も示唆されている（井上,2008）。

古墳時代中期～後期には、自然堤防の形成がほぼ終了し、調査区内において高燥で安定した地表環境が維持された。この自然堤防上に位置する部屋北遺跡や讃良郡条里遺跡03-6調査地では、大規模な集落が確認された。当該期の自然科学分析では、種実分析において、多量のコムギが集落域の放棄流路や溝から産出したことが特に着目される（松元ほか,2006；奥村編,2008）。最近になって、5～6世紀代におけるコムギの多量産出は、河内湖南東部の大和川分流路帯の氾濫原上に立地する池島・福万寺遺跡でも確認された（大庭編,2008）。これらの遺跡の集落跡から

は、居住集団の出自や生業にかかわる可能性のある特徴的な遺物が共通して確認された（大庭編, 2008；森本編, 2009）。集落が載る自然堤防の東側約500mには、縄文時代後期までに形成され、その後離水した沖積扇状地面が発達していた（図2）。この沖積扇状地面では、古墳時代に高燥で安定した土壤發達領域が広がっていた。また、これらの自然堤防と沖積扇状地面に挟まれた讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査地には、洪水流が頻繁に流入する不安定な後背湿地が存在した（辻・辻本, 2009）。さらに、集落が立地する自然堤防を形成した流路については、古墳時代中期以降に放棄流路化して帶状の湿地となっていた（井上, 2008）。

なお、弥生時代～古墳時代には、河内湖北東部の淀川分流路帯の三角州平野上の氾濫原において、湖水準の回復にともない後背湿地が拡大した（松田, 2001）。寝屋川現流路の西側に存在する門真遺跡群付近では、古墳時代に分流路沿いの細長い微高地間に湖沼的な湿地が広がった（松田, 2001）。蔵屋北遺跡および周辺遺跡での堆積学・地形学的成果をふまえると、高燥な自然堤防上に位置する蔵屋北遺跡では、その東方において沖積扇状地面との間に後背湿地が存在し、その南方や西方において当該期の河道や旧河道沿いに細い帶状の微高地が伸びるなか、湖沼や沼沢地の水域、地下水位が高く過湿な湿地や湿原が広がっていたと考えられる。このような地形環境勾配において、本遺跡は、分流路と山麓部の間に湾入した湖沼の最奥部に近い高燥な自然堤防上に立地していた（図2：松田, 2001）。森本（2009）は、讃良郡条里遺跡03-5・06-2調査地で検出された5～6世紀代の流路出土遺物の様相から、近接地に物資流通の結節地点となる船の接岸地点の存在を想定した。松田（2001）が示した蔵屋北遺跡・讃良郡条里遺跡周辺の古墳時代頃の陸域分布図からは、森本（2009）が想定した当該期の物流過程の蓋然性がうかがえる。上記したような当該期の古地理の傾向が把握されてきているが、より具体的な蔵屋北遺跡や讃良郡条里遺跡での古墳時代の人間活動を検討するためには、既往の全面および確認調査における層序データをふまえ、さらに詳細な復原を試みていくことが必要である。

古墳時代中期以降には、相対的に低い自然堤防南部を中心に河川氾濫堆積物による埋積が進行した。古墳時代中期～近世には、遺跡に流入した河川氾濫堆積物を母材として、調査区内の広範囲に耕作地が連続と形成された。耕作地では、洪水堆積物によって形成された微地形および水文環境変化に対応しながら、水田および畑の土地利用がなされた。また、クレバースプレーなどの洪水堆積物によって形成された微高地上では居住域も展開した。今回の自然科学分析では、図3に示すように、水田と畑で土壤微細構造が異なる可能性がうかがえた点も重要な成果である。耕作土の土壤薄片観察では、孔隙などに粘土被覆がほとんど観察されず、耕作土中において粘土の下方移動が顕著でないことから、地下水位が比較的高かったことが示唆される。A調査区で実施した古代～中世の耕作土の種実分析（松元ほか, 2006）では、水湿地生の耕作地雜草が多産しており、耕作地で湿润な地表環境が維持されたことがうかがえ、土壤薄片観察結果と調和的な傾向を示した。これらの分析結果をふまえると、点在する洪水堆積物による微高地上以外の耕作地では、古代頃以降に湿润な地表環境が維持されていたと考えられる。

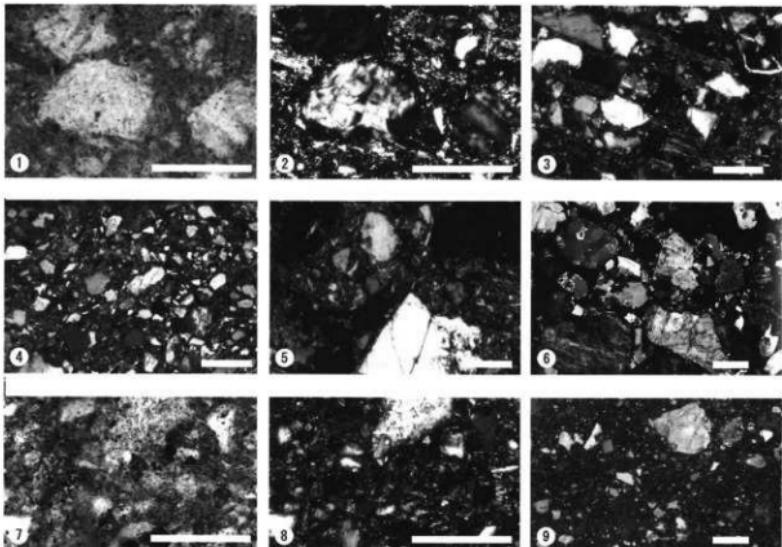


写真1 平安-鎌倉水田耕作土(スケール0.25mm):直交ポーラ
 写真3 平安-鎌倉水田耕作土(スケール0.25mm):直交ポーラ
 写真5 平安-鎌倉水田耕作土(スケール0.25mm):直交ポーラ
 写真7 古墳時代畑耕作土(スケール0.25mm):下方ポーラ
 写真9 古墳時代畑耕作土(スケール1.0mm):直交ポーラ
 写真2 平安-鎌倉水田耕作土(スケール0.25mm):直交ポーラ
 写真4 平安-鎌倉水田耕作土(スケール1.0mm):下方ポーラ
 写真6 平安-鎌倉水田耕作土(スケール1.0mm):直交ポーラ
 写真8 古墳時代畑耕作土(スケール0.25mm):下方ポーラ
 試料採取地点は、H調査区。

水田耕作土の微細構造は壁状。孔隙はチャンネルおよびバグが分布。グラントマス(b-ファブリック)は点斑状。粘土被覆はほとんど認められない。写真1-2で認められるように部分的に粒子包囲網状も存在する。また、写真3-4のように水平方向の葉理状構造も部分的に認められる。写真6は作土下部の洪水層で、写真1-5の水田作土のように粒子間の孔隙に細粒質物質が充填されていない。

畑耕作土の微細構造は壁状を基本とし、一部で亜角塊状が認められる。孔隙はチャンネルおよびバグ、面状が分布。グラントマス(b-ファブリック)は点斑状。粘土被覆は認められない。生物活動に由来する通路のベドフィーチャーが互いに交差して発達。

水田耕作土で認められる写真3-4の葉理状の構造は、畑耕作土で認められない。既往の水田耕作土の土壤微細構造(松田ほか, 2007)をふまると、この構造は、湛水下でのしきかきなどの土壤擾乱によって生じたと推測される。

図3 萩屋北遺跡の耕作土の土壤微細構造

古代以降になると、今回の調査区の南端部付近を流下していたと推測される岡部川が天井川化して、遺跡内では南から北側に傾斜する微高地(図2-aの沖積扇状地面上のロープに相当)が急速に発達した(辻・辻本, 2006)。この土砂流出は、粗粒で淘汰不良の礫質砂～砂礫で構成されており、古代以降の後背山地での森林荒廃や、台地、扇状地面などで拡大した耕作地や裸地化による人為的影響によるものと考えられる。古代から近世頃の土砂流出による新たな扇状地ロープは、現流路沿いを中心に、沖積扇状地面下部から冲積低地で発達した。萩屋北遺跡とその周辺領域では、古代以降に人為的な森林破壊と裸地化を外的要因として発達した流路の天井川化や扇状地ロープ、さらに自然堤防により、洪水性の砂礫による高まりおよび排水不良地が局地的に出現するようになった。このような地形発達により、山地斜面から冲積低地に至る地表環境は多様化・分節化した。古代以降に本地域で展開した人間集団は、高い頻度と強い強度で多様化・

分節化しながら生成・消滅していく氾濫原の微地形に対して工学的な対応をとりながら、耕作地や居住域の維持・管理を行った。現段階において当該期の人間活動にかかる遺跡形成過程の詳細を十分に検討できておらず、この点については今後の課題である。

2 萩屋北遺跡の植生変遷

部屋北遺跡における古植生変遷は、調査区A区を中心とする花粉・大型植物化石分析に基づく検討結果が存在する(辻・辻本, 2006)。その後、本遺跡近隣の讃良群条里遺跡や菴本遺跡などの発掘調査が行われ、多数の古植生情報が蓄積されてきている(井上編, 2008・辻編, 2009・森本編, 2009・中尾・山根編, 2009など)。これらの調査により、部屋北遺跡周辺の低地から山地にかけての地形発達過程に基づく、詳細な時空間スケールでの植生変遷について検討することが可能となってきたことから、ここでは部屋北遺跡周辺の植生変遷について再検討する。

(1) 後期旧石器時代

部屋北遺跡調査区で最も古い年代の古植生情報は、標高-6.3m層準の 21930 ± 90 yrsBP(未補正)の年代値を示す、低位段丘層相当層の有機質泥層で得られている(図2・4)。当時の調査区は、花粉化石群集および層相から、イネ科やカヤツリグサ科などの草本植物が生育する離水する時期を挟むする水深の浅い湿地であり、背後の山地斜面にはマツ属単維管束亞属(いわゆるゴヨウマツ類)を主とする冷温帯~亜寒帯性針葉樹が卓越する植生が存在したことが推定される(辻・辻本, 2006)。同時期の生駒山西麓の植生は、本遺跡南方の鬼虎川沿いに位置する西ノ辻遺跡第33次調査区でも確認されており、今回と同様の結果が得られている(パリノ, 1996)。また、讃良川水系に位置する讃良都条里遺跡03-1調査地では、最終氷期最寒冷期以前の2.5万年前頃に噴出した始良Tn火山灰(AT)を挟む有機質泥層の花粉化石群集(パリノほか, 2008)、西ノ辻遺跡遺跡の西側に隣接する鬼虎川遺跡では、 $19,780 \pm 130$ yrsBP(未補正)を示す泥層の花粉化石群集(古環境研究所, 1997)が得られている。これらの分析結果を踏まえると、生駒山西麓では、約2.5万年前から2.0万年前にかけてマツ属の卓越する亜寒帯~冷温帯性針葉樹からなる植生が存在し、約2.0万年前頃に気候の寒冷化など何らかの理由によりトウヒ属が卓越する植生に変化した可能性が考えられる(パリノほか, 2008)。このように後期旧石器時代の生駒山西麓には、現在と異なる植物相・植生が存在したが、その変遷様式などについては不明な点も多く、今後の課題とされる。

(2) 繩文時代前期

低位段丘相当層の上位には縄文海進期に形成された海成層が不整合で覆っている。この海成層形成期の7200~6300年前頃の調査区は、陸域に近い内湾の浅い海底に位置していたが、縄文時代前期中葉頃の6000~6300年前になると、淀川分流路による三角州の発達に伴い、潮下帯~潮間帯の干潟が広がる河口へ変化した。この時期に周辺の山地~扇状地などの陸域の植生も変化した。部屋北遺跡の花粉化石群集をみると、7200~6300年前頃の層準では温帯針葉樹と落

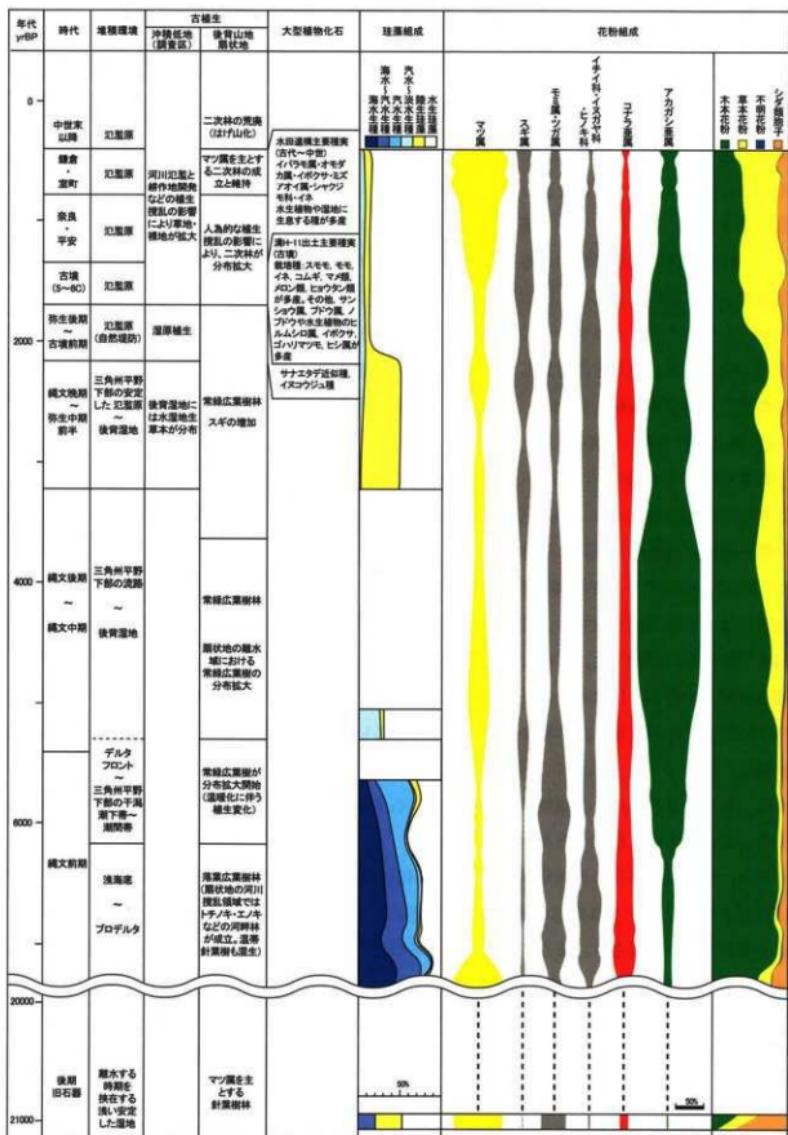


図 4 萩屋北遺跡古環境変遷図

葉広葉樹が卓越する組成を示すが、6000～6300年前の層準になると常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加傾向を示すようになる（図4）。この花粉化石群集の層位変化から、6000～6300年頃に周辺の陸域で常緑広葉樹が分布拡大開始したことが推定される。ただし、堆積環境から判断される花粉化石群集の形成過程を踏まえると、変化が生じた場所を特定することが難しい。

当時の陸域の植生については、讃良川の沖積扇状地に位置する讃良郡条里遺跡03-1調査地の成果がある。（パリノほか,2008）それによると縄文時代草創期～早期には、沖積扇状地から山地斜面の植生はコナラ亜属を主とする落葉樹林であった。当時の扇状地の流路沿いにはクマシデ属～アサダ属、ニレ属～ケヤキ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属などの河畔林が成立していた。縄文時代前期後半頃になると、常緑広葉樹のアカガシ亜属が分布拡大開始するが、沖積扇状地の植生は前時期と同様に河川擾乱の影響を受けやすい領域で、クリ、ムクノキ、クワ属、ケヤキ、トチノキ、ムクロジなどの落葉広葉樹を主体とする河畔林であり、アカガシ亜属などの常緑広葉樹は山地斜面などの安定した場所を中心に分布を拡げたことが確認されている。蒲原北遺跡の花粉化石群集の層位変化は、このような植生変化を反映していることになる。

（3）縄文時代中期～晚期

縄文時代中期前葉頃の5300～5600年前には、本遺跡周辺の陸化が進行して、二角州平野となり河川氾濫原が広がり、調査区内は潮汐の影響を受ける湿地や沼沢地が形成された。縄文時代中期～後期には淀川分流路と生駒山地西麓を流下する河川からの土砂流出の双方の影響を強く受け、陸域と水域の分布が複雑な様相を呈していたが、縄文時代後期前葉頃の4000～4300年前以降には、堆積環境が安定し、氾濫原堆積物中に土壤帯が複数発達するようになり、弥生時代中期まで断続的に継続した。このような地形変化に伴ない、縄文時代後期前葉頃以降には低地にも植生が成立するようになる。ただし、林分が発達した痕跡は確認されておらず、土壤発達期にも河川氾濫などの植生擾乱の影響を受けていた、あるいは土壤発達期間が短期間であったため、森林植生へ遷移することはなく、草地～湿地植生が卓越していたと考えられる（辻本・辻,2009）。また、当時の草地には、大型植物化石や花粉化石で産出した中生・水生植物が水文条件に応じて分布していたものと推定される。

一方、沖積低地背後の沖積扇状地から山地斜面の植生は、この時期に大きく変化する。沖積扇状地面下部に位置する讃良郡条里遺跡03-1調査地では、縄文時代中期前葉に開析と充填を繰り返す開析流路が形成され、また、開析流路からの流出した土砂は沖積低地側に新たな扇状地を発達させる地形変化が起こっている（井上編,2008）。このような地形変化が植生に与えた影響は大きく、扇状地の開析流路河岸は、氾濫の影響をほとんど受けなくなり、離水と同時に安定した土地条件に変化し植生の遷移が進行し、そのような場所を生育適地とする常緑広葉樹のイチイガシ・アラカシ・ツバネガシ近似種などのアカガシ亜属が分布を拡げる（図5）。また、開析流路からの出土砂により新たに形成された扇状地ロウブ上や、流出砂の供給源である山地斜面の崩壊地などでは、そのような場所を植生更新の適地とするモミ・ツガ・コウヤマキ・ヒノキなど

の温帯針葉樹が分布を拡げた可能性が高い（辻本・辻,2009 パリノほか,2008）。このように縄文時代前期末～縄文時代中期頃は葦屋北遺跡背後の扇状地の植生が大きく変化した時期であり、採取対象となる有用植物の分布状況が大きく変化するなど人間活動にも多少の影響を与えたことが想定される。

縄文時代中期前葉から縄文時代後期～末になると、扇状地では開析流路の充填が進行し、平坦地化する。この時期も基本的には常緑広葉樹林が成立していたが、縄文時代晚期にかけて、林分が衰退したことが、木本花粉の相対的減少傾向から推定される。この変化は地形変化に起因する変化であり、沖積扇状地面において再び開析流路が形成されていることから、扇状地～低地にかけて拡がった林分域が再び河川攪乱の影響を受けるようになり衰退したものと考えられる。このように林分域が衰退する中で、スギ属などの温帯針葉樹が分布を広げたことが推定される。上記したように温帯針葉樹が扇状地などの攪乱地を更新適地としていることから、攪乱地を中心には分布を拡げることができたものと推定される。なお、この時期の温帯針葉樹の増加傾向は、河内平野およびその周辺に位置する遺跡において普遍的に確認される傾向である。ただし、讃良川水系ではスギ属やヒノキ科、鬼虎川沿いではスギ属が増加するなど、水系によって増加する温帯性針葉樹の種類構成が異なっているようである。弥生時代以降の出土木製品の樹種構成をみると、温帯針葉樹が多用されていることが窺えることから、縄文時代晚期における温帯針葉樹の分布状況を把握することは弥生時代以降の木器制作状況を把握する上で重要な課題と認識される。

（4）弥生時代前期～中期

弥生時代前期～中期には調査区では土壤発達する領域が拡大する。植物化石の産状をみると、草本由来の化石の产出が顕著となることから、土壤発達領域を中心に草地の領域が拡大したことが推定される。同様の植生変化は、本遺跡近隣の低地に位置する讃良郡条里03-4・03-5調査地でも確認されている（辻本・辻,2009、辻・辻本,2009）。これらのことから沖積低地の広い範囲において草地領域が拡大し、継続分布していたことが推定される。この植生変化は、堆積環境が安定化していることを踏まえると、自然の攪乱ではなく、人間活動に伴う人為的植生攪乱に起因すると推定される。本時期の堆積物からは、栽培植物のイネ属由来の植物珪酸体や種実が产出するようになることを合わせ考えると、低地における耕作地開発など継続する人間活動により草地が維持されていたことが推定される。

一方、後背山地ないし扇状地の植生も本時期に変化する。花粉分析結果では、林分の主体をなしていた常緑広葉樹のアカガシ亜属が減少傾向を示すようになる。隣接する讃良郡条里03-4調査地や沖積扇状地に位置する讃良郡条里06-1-1調査地でも同様な変化が確認されており、両調査地ではアカガシ亜属とは逆相関するようにシイノキ属が増加傾向を示している（辻本・辻,2009 井上編,2008）。このことから扇状地から山地斜面にかけて成立していた常緑広葉樹林に変化が起こり、アカガシ亜属が減少し、シイノキ属類が分布拡大したことが推定される。シイノキ属に含まれるスタジイやツブライは、沿岸部などの常緑広葉樹林の主要構成要素であるが、

萌芽能力（伐採された株から萌芽更新する）が高い樹種であり、照葉二次林の構成要素でもある。弥生時代前期以降にシイノキ属が分布を拡げたことは、扇状地から山地斜面の植生に対する人為的擾乱の影響が強くなり、常緑広葉樹の二次林化が進行したことを示しているものと思われる。

以上のように弥生時代前期以降になると、山地から沖積低地の植生は人為的植生擾乱の影響を受けるようになるものの、後述する中世以降のように植生に対する擾乱の程度・頻度・強度は著しくなく、常緑広葉樹の二次林が存続できる状況にあったことが推定される。

（5）弥生時代後期～古墳時代前期

弥生時代後期～古墳時代前期の布留式期には、萩原北遺跡の調査区内の堆積環境が大きく変化し、遺跡の広範囲にわたって流路および自然堤防堆積物が顕著に累重するようになる。この堆積環境の変化は、調査区の植生に多大な影響を与え、植生擾乱の影響の強弱により、裸地化したり、退行遷移したことが推定される。

また、本時期には扇状地から山地斜面の植生も変化した。本遺跡および周辺の讃良郡条里遺跡などの花粉分析結果において、二次林の代表的な樹種であるマツ属花粉が漸増傾向を示すようになる。この変化は、弥生時代前期～中期の人為的植生擾乱の影響がより顕著となり、二次林の代表的な樹種であるマツ属が分布を拡げたことを示唆するもので、土砂流出の原因の一つであった可能性もある。本地域におけるマツ属の分布拡大については後述する。

（6）古墳時代中期以降

古墳時代中期～後期には自然堤防の形成がほぼ終了し、調査区内において高燥で安定した地表環境が維持されるようになる。本時期の堆積物の花粉化石群集では草本花粉が多産するようになり、大型植物化石においても草本植物の種類構成が多様になる（図4・5）。これらのことから、調査区一帯は草地からなる開けた場所に変化したことが推定される。

本時期の調査H地区区で検出された大溝H11からは多量の大型植物化石が抽出されている（表1）。この種類構成をみると、食用になる種実の検出数が圧倒的に多く、スモモ、モモ、イネ、コムギ、アサ、マメ類、エゴマ、メロン類、トウガル、ヒヨウタン類などの栽培のために持ち込まれた渡来種（南木, 1991）が確認される。このほか、カヤツリグサ科（スゲ属など）の一部、タデ属の一部、スズメウリ、ゴキヅル、タカサプロウ、エノコログサ属、カナムグラ、ギシギシ属、サナエタデ近似種、タデ属の一部、アカザ科、ナス科、オナモミなどの低地の植生を構成していたとみられる種類や、広葉樹のヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、クスノキ科、ハイノキ属、クマノミズキ、エゴノキ属なども確認されている（松元ほか, 2006）。このような大溝H11大型植物化石のうち、注目すべき点は有用植物が多く出土していること、特にコムギがイネより大量に産出したことである。同様のコムギの産状は、本遺跡西側に隣接する讃良郡条里遺跡03-6調査区でも確認されている（奥村編, 2009）。このことから、古墳時代中期～後期の本地域では、イネとともにムギ類も広く栽培されていたことが窺える。なお、コムギの産出は河内平野南部の池島・福万寺遺跡でも確認されており（丹野, 2008）、今後の資料蓄積によってコム

表1 大溝H-11 埋土から産出した大型植物化石

種類名	部位 状態	上段：溝地		中の層位			下段：年代	
		1層	2層	3層	4層	5層	5世紀末 ~6世紀 後半	5世紀中 後半
イスガヤ	種子	-	-	1	-	-	-	-
マンツ烈脛管束草属	球果	-	1	-	-	-	-	-
ヤシニモ	根	2	64	16	-	-	-	-
コナラ属	幼葉	-	-	1	-	-	-	-
アカシキ属	幼葉	-	1	7	1	-	-	-
コナラ属	果実	-	-	1	-	-	-	-
シイ属	葉子 花被	1	-	1	-	-	-	-
ブク科	葉被	-	2	2	-	-	-	-
ハシキ属	果被	2	30	9	-	-	-	-
ヤマグワ	種子	-	-	3	-	-	-	-
カジキ属	種子	-	1	-	-	-	-	-
クヌギ科	種子	-	4	-	-	-	-	-
木本	果被	-	-	1	-	-	-	-
スモモ	枝、葉形	13	1744	596	1	-	-	-
	鱗片	8	320	24	-	-	-	-
モモ	枝、葉形	14	1006	172	2	2	-	-
	鱗片	22	910	115	-	-	-	-
カラマツ属	枝	-	32	4	-	-	-	-
セシヨウ	枝	3	112	21	-	-	-	-
カラスザンショウ	枝	-	42	9	-	-	-	-
アカガシ属	種子	-	1	-	-	-	-	-
ブドウ属	種子	18	193	22	-	-	-	-
ノドウラ	種子	24	404	291	4	-	-	-
ブドウ科	種子	43	126	35	-	-	-	-
カツラミズキ	種子	2	66	10	-	-	-	-
ハノキ属	枝	5	21	3	-	-	-	-
エゴイモ属	種子	3	1	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	果被	2	-	-	-	-	-	-
イネ	胚乳 花被	5	115	47	-	-	-	-
エノヒロダサ属	花被	-	9	7	-	-	-	-
コニキ	胚乳 花被	1	-	-	-	-	-	-
ムギ属	胚乳 花被	28	1647	410	-	-	-	-
スマ属	胚乳 花被	-	10	-	-	-	-	-
カラタチ属	果被	1	6	2	-	-	-	-
カツラリゲサ科	果被	-	3	-	-	-	-	-
イボクサ	果被	2	9	4	-	-	-	-
カツラムグラ	種子	1	1	-	-	-	-	-
ゴハリ	種子	2	18	9	-	-	-	-
タケノコ	種子	-	2	1	-	-	-	-
タケノ科	種子	-	7	-	-	-	-	-
ギンジシ属	果被	2	2	2	-	-	-	-
サニユタニア近位種	果被	-	3	-	-	-	-	-
タケ属	果被	48	30	16	-	-	-	-
アカササゲ	種子	-	1	-	-	-	-	-
ゴハイマツモ	果被	5	5	15	-	-	-	-
キンボウゲ属	果被	-	-	1	-	-	-	-
オアツヅラフジ	枝	-	2	1	-	-	-	-
マメ属	種子 花被	1	137	45	-	-	-	-
ビシ属	果被	-	2	1	-	-	-	-
エゴマ	果被	-	1	-	-	-	-	-
ソシ属	果被	-	3	1	-	-	-	-
ナス科	種子	-	5	-	-	-	-	-
スズメリウ	種子	-	3	5	-	-	-	-
ゴキブル	種子	-	-	-	-	-	-	-
メロン属	種子	59	681	213	-	-	-	-
トウガラ	種子	-	11	-	-	-	-	-
ヒヨウタン属	果被	4	1	3	-	-	-	-
ヒヨウタン属	種子	7	787	216	1	-	-	-
オナモミ	花被	5	105	5	-	-	-	-
タカサゴロウ	果被	-	11	5	-	-	-	-
小明椎属	-	-	-	-	-	-	-	-

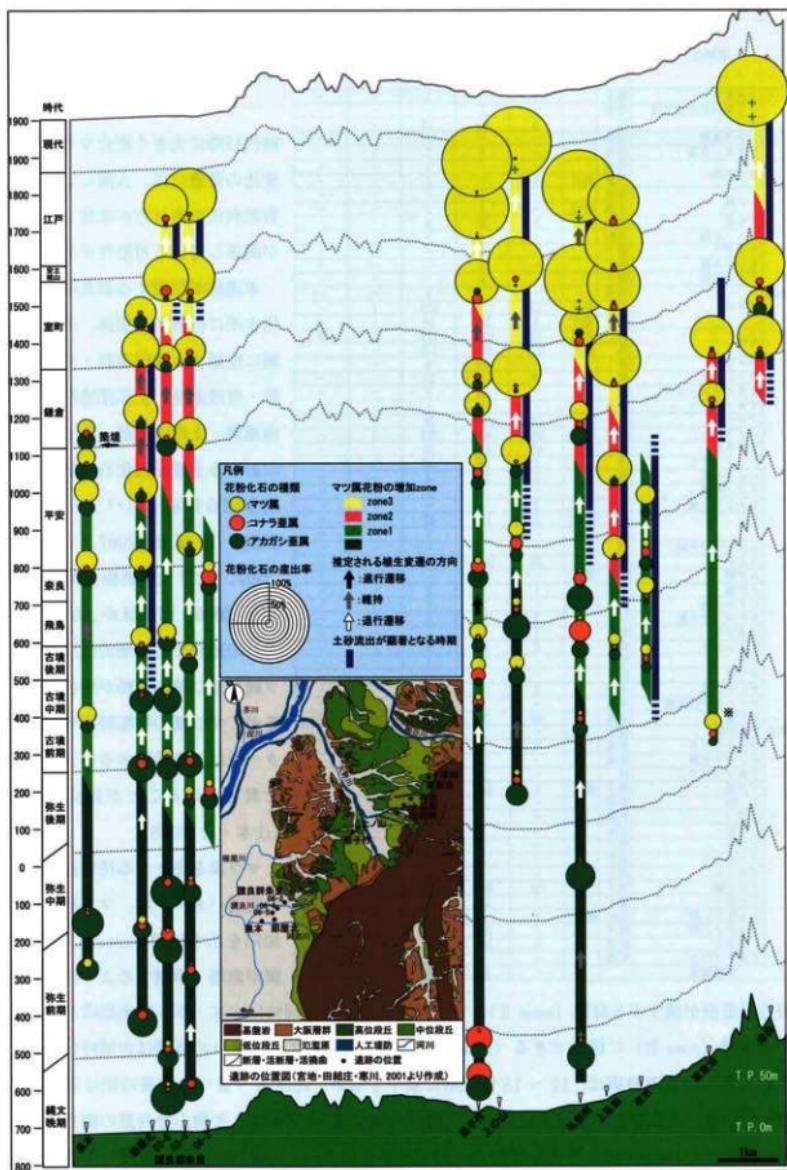
ギ栽培の可能性がある遺跡の特性について検討していくことも大切な課題と考える。

一方、周辺の森林植生は、古墳時代以降に大きく変化する。この変化の背景には、人間による山林資源利用のあり方が変化したことに関係している可能性がある。

本遺跡が位置する讚良川・岡部川水系に位置する遺跡、天野川流域に位置する津田遺跡・東倉治遺跡・有池遺跡・上私部遺跡・私部南遺跡・上の山遺跡・茄子作遺跡における主要花粉化石の層位的産状を図6に示す(パリノ, 2007・2008、辻ほか, 2007、辻ほか, 2007、山口・黒須編, 2008 田中ほか, 2006、田中ほか, 2007)。いずれの遺跡でも古墳時代以降にマツ属および草本花粉が増加しているが、マツ属の増加時期や増加パターンは、流域間あるいは地点間で異っていることが確認される(辻・辻, 2008)。

マツ属を主とする花粉化石群集の変遷パターンは、マツ属が増加傾向を示す時期(zone I)、マツ属が急増・卓越するようになり温

帶性針葉樹が減少する時期(zone II)、マツ属が卓越すると同時に木本・草本群集組成が単調になる時期(zone III)に区分できる(辻・辻, 2008)。zone Iの始まりの時期は古墳時代、zone IからIIへの変遷時期は、12～13世紀頃に集中するが、zone II～IIIへの変遷時期は流域間で異っている。上私部遺跡などが位置する天野川流域では14世紀頃、生駒山地西麓の讚良川・岡部川流域で15世紀以降に変遷しており、時期差が生じている。また、マツ属花粉の相対的産出頻度も地域間で異なり、天野川流域の遺跡ではzone II・IIIで総じて高い傾向にあることが認識



される。また、zone I のマツ属花粉の増加傾向は、天の川流域に比較して、藤屋北遺跡が位置する生駒山西麓の讃良川・岡部川流域で顕著で高いことが窺える。

以上のこと、および各遺跡の地形発達過程や発掘調査成果を踏まえると、生駒山北部では、古墳時代以降になり、人為的植生攪乱により二次林が分布を拡げたことが推定される。この古墳時代の植生に対する人為的攪乱の影響は、讃良川・岡部川水系で顕著であったことが示唆される。ただし、天野川流域でも上私部遺跡や有池遺跡では顕著であり、同一水系でもモザイク状に植生攪乱が進行したことが推定される。このような植生変化に伴い、土砂流出状況も変化した。上私部遺跡では古墳時代以降に土砂流出量が増加し、耕作地が拡大し、12～13世紀頃になると、アカガシ亜属などの常緑広葉樹や温帯針葉樹などの林分が減少し、マツ属の卓越する林分へ変化する（辻ほか,2007）。また、津田遺跡では、山地斜面の植生破壊と同調するように土砂流出量が増大することが確認されている（パリノ,2008）。このように天野川流域では12～13世紀以降に植生破壊が顕著となり、多くの遺跡において出土砂が増大することから、讃良川水系に比較して、近辺の山地斜面の荒廃が進行し、はげ山に変化する領域が拡大していたことが推定される。一方、讃良川・岡部川水系では16世紀末頃まで二次林が維持される状況にあったことが窺える。このように生駒山北部地域の古墳時代以降の植生変化は、人為的植生攪乱とその影響が及ぶ前の森林バイオマスの違いによって、時代・地点で異なっていたことが推定される。

藤屋北遺跡の古墳時代中期～後期の住居構築材には、スギ・ヒノキといった温帯針葉樹材が多用されている。また讃良都条里遺跡03-4・03-5調査地でも温帯針葉樹のほか、スダジイ・ツブラジイなどの木材が多用されている（中尾・山根編,2009・森本編,2009）。このような木材利用と対応するように、讃良都条里遺跡03-4調査地・06-1-1調査地の花粉分析結果では、温帯針葉樹やシイノキ属が減少している（辻本・辻,2008・井上編,2008）。このように藤屋北遺跡周辺では、古墳時代中期～後期になると、人間活動に伴う森林バイオマスの利用が急激に増加したことが窺える。

また、12～13世紀の植生変化が起こる以前の11世紀には、沖積低地に位置する堺本遺跡において、流路の固定を示す堤構造が構築されており、讃良都条里遺跡03-4調査地では、11世紀末に水位上昇による耕作地の放棄が確認されている。両変化の時間関係については不明であるが、これらの変化が12～13世紀の植生変化と密接に関係している可能性がある。また、成立した二次林が継続分布していたことを踏まると、12世紀以降に調査地域背後の山林利用のあり方が変化し、二次林の維持管理、すなわち里山としての管理が行われるようになった可能性がある。このことについては、今後、発掘調査成果や文献史学的成果などとの複合的検討により検討していきたい課題である。

引用文献

井上 智博,2007,5000年前の人々が見た北河内一海・川・森そしてムラー,「歴史シンポジウム

- 資料 河内湾から肥沃な平野に一北河内平野の形成を考えるー」, 寝屋川市・寝屋川市教育委員会, 1-16.
- 井上 智博, 2008, 位置と環境, 「(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第173集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 VI 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財) 大阪府文化財センター, 7-11.
- 小林 義孝・辻本 武編, 2006, 「萩原北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編-」, 大阪府教育委員会, 140p.
- 松田 順一郎・別所 秀高, 2001, 大阪府門真市中央部における完新世中頃以後の三角州と湿地の発達-門真遺跡群確認トレンチでみられた堆積相からの推測-, 「(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第61集 長尾台地区・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財) 大阪府文化財調査研究センター, 75-94.
- 松田 順一郎・辻 康男・岡村 渉, 2007, 埋没および現世水田にみられる土壤微細形態の比較-静岡市登呂遺跡の事例を中心として-, 日本国文化財科学会第24大会発表要旨集, 日本国文化科学会 166-167.
- 森本 徹 編, 2009, (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第188集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 IX (本文編) 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, (財) 大阪府文化財センター, 488p.
- 森本 徹, 2009, 総括, 「(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第188集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 IX (本文編) 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, (財) 大阪府文化財センター, 403-406.
- 松元 美由紀・辻 康男・辻本 裕也, 2006, 萩原北遺跡発掘調査に伴う大型植物遺体, 「萩原北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編-」, 大阪府教育委員会, 101-130.
- 中尾 智行・山根 航編, 2009, (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第187集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 VIII 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, (財) 大阪府文化財センター, 504p.
- 奥村 茂輝編, 2008, (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第182集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 VII 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, (財) 大阪府文化財センター, 166p.
- 大庭 重信編, 2008, 「(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第185集 東大阪市・八尾市所在 池島・福万寺遺跡6(福万寺II期地区05-1調査区) 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書」, (財) 大阪府文化財センター, 206p.
- パリノ・サーヴェイ(株), 2008, 付章第1節 44 土坑・1区開析谷埋土の自然科学分析概要, 「(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第175集 枚方市 津田遺跡 一般国道1号バイパス

- (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,91-98.
- 辻 裕司 編,2008, (財) 大阪府文化財センター調査報告書第 167 集 門真市 岩本遺跡 I 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,180.
- 井上智博編,2008, (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 173 集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 VI 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,336p.
- 古環境研究所,1997, 第 35-1 次調査の自然科学分析 2. 花粉分析.「鬼虎川遺跡第 35-1 次発掘調査報告」,(財)東大阪市文化財協会.
- 井上智博編,2008, 第 6 章 讀良郡条里遺跡の調査 (06-1-1 区). (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 176 集 寝屋川市 寝屋東遺跡、太秦遺跡、太秦古墳群、大尾遺跡、讀良郡条里遺跡、砂遺跡 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,83-123.
- 中静 透,2004, 日本の森林 / 多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ. 東海大学出版会,236p.
- パリノ・サーヴェイ (株),2007, 第 1 節 私部南遺跡の放射性炭素年代測定・植物化石分析.「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 154 集 私部南遺跡 I 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,158-180.
- 辻 康男・辻本 裕也,2006, 蔵屋北遺跡における古環境復原.「蔵屋北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編-」. 大阪府教育委員会,25-37.
- 辻 康男・北脇 達也・辻本 裕也,2006, 蔵屋北遺跡の珪藻分析.「蔵屋北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編-」, 大阪府教育委員会,39-71.
- 辻 康男・辻本 裕也,2009, 第 1 節 古環境分析.「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 188 集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 IX (本文編) 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,331-364.
- 辻 康男・辻本裕也・大嶋秀明・高橋 敦・齊藤紀行・伊藤良永・馬場健司,2007, 第 1 節 上私部遺跡の古環境解析.「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 165 集 交野市 上私部遺跡 II 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,174-204.
- パリノ・サーヴェイ (株),1996, 西ノ辻遺跡の古環境復元.「西ノ辻遺跡第 33 次発掘調査報告」,(財)東大阪市文化財協会,45-73.
- パリノ・サーヴェイ・パレオ・ラボ・古環境研究所,2008, 植物化石群集からみた各時代の古植生.「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 173 集 寝屋川市 讀良郡条里遺跡 VI 一

- 般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,249-267.
- パリノ・サーヴェイ(株),2008,付章第1節 44土坑・1区開析谷埋土の自然科学分析概要。「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第175集 枚方市 津田遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,91-98.
- 田中義文・伊藤良永・馬場健司,2007,第4節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析(2005年度)。(財)大阪府文化財センター調査報告書第155集 上の山遺跡II 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,241-267.
- 田中義文・馬場健司・辻本裕也・伊藤良永,2006,第4節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析。(財)大阪府文化財センター調査報告書第146集 東倉治遺跡II 第二京阪道路(一般国道1号)建設事業(大阪府域)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,36-47.
- 丹野研一,2008,大型植物とともに穀類等の出土について。(財)大阪府文化財センター調査報告書第185集 東大阪市・八尾市所在 池島・福万寺遺跡6(福万寺II期地区05-1調査区)一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,149-157.
- 辻 康男・田中義文・矢作健二・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司,2007,有池遺跡の自然・科学分析。「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第152集 交野市 有池遺跡I 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,637-666.
- 辻本裕也・齊藤崇人・田中義文,2006,讚良郡条里遺跡古環境分析。(財)大阪府文化財センター調査報告書 第138集 寝屋川市 讳良郡条里遺跡IV 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,104-119.
- 辻本裕也,2007,1万年の植生史—大阪湾岸地域の考古遺跡における古植生調査を基に。日本植生学会 第22回大会講演要旨集。
- 辻本裕也・辻 康男,2008,生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷。,日本花粉学会第49回大会講演要旨集,83.
- 辻本裕也・辻 康男,2009,第1節 讪良郡条里遺跡の古環境復元。(財)大阪府文化財センター調査報告書 第187集 寝屋川市 讪良郡条里遺跡VIII 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,415-443.
- 山口誠二・黒須亞希子 編,2008,第6章自然科学分析成果。(財)大阪府文化財センター調査報告書第174集 枚方市 茄子作遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,217-276.